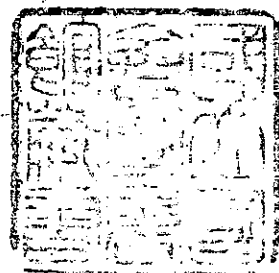




金子順一論文集

(昭和19年)





460554

送29-197

陸軍軍醫學校防疫研究報告
第1部 第41號

雨下撒布ノ基礎的考察

陸軍軍醫學校防疫研究室(部長 石井少將)

陸軍軍醫大尉 金子順一

軍事秘密

第 1 部
綜 說
分 類 392—0081
受 附 昭和 16. 8. 11

指導 陸軍軍醫少將 石 井 四 郎

目 次

緒 言	2
I 滴粒ノ落下	4
II 滴粒ノ検知	10
III 粒子ノ落下	12
III 滴粒ノ蒸發	16
V 滴粒ノ分裂	20
VI 粒 野	32
VII 雨 下 液	68
VIII 雨 下 氣 象	83
IX 雨 下 器	110
X 撒 布 器	126
XI 雨 下 用 法	131
XII 考 按	155

緒 言

各國ノ文献ニ徴スルニ雨下乃至撒布手段ハ所謂細菌戰手段中屢々説述セラレテ居リ、之ガ效果ニ關シテモ種々論ゼラレテ居ルガ、否定的ナ結論ヲ下ス者ガ多イ様デアル。元ヨリ斯カル重要ナ方面ニ對シテハ文献ハ遂ニ文献デアツテ諸外國ノ文献ハ決シテ信ヲ置クベキデハナイ。斯カル重要事項ニ對シテハ結果ガ如何ナルニセヨ必ズ自ラ實驗ヲ重ネテ判定スベキデアリ、無効ナモノデアレバ進ンデ之ヲ有效ナラシムル様努力スベク、或ハ更ニ敵國ノ此種手段ニ對スル對應策ヲ考ヘネバナラナイデアラウ。

部隊ニ於テハ斯カル見地ヨリ既ニ創立以來研究ヲ續ケ、昭和13年、雨下用法草案トシテ其ノ一端ガ示サレタ所デアル。

予ハ昭和13年秋命ゼラレテ此ノ方面ニ於ケル理論的研究ヲ擔當シ今日ニ到ツタ。此ノ間石井部隊長ノ指導ニ依リ銳意之ガ基礎實驗ヲ重ネ來ツタガ、願ミルニ淺學非才何等加フル所ノ無カツタ事ヲ甚ダ遺憾トスル。

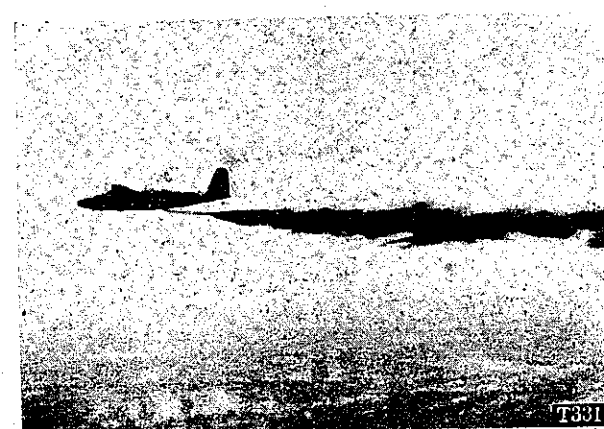
今般從來ノ成績ヲ總括シテ將來ノ參考トスベキ命ヲ受ケ、此處ニ主トシテ昭和14年以降ノ實驗考察ヲ羅列シ更ニ若干將來ニ對スル希望ヲ開陳シタガ、僅カナリトモ參考トナル所アラバ幸甚デアル。

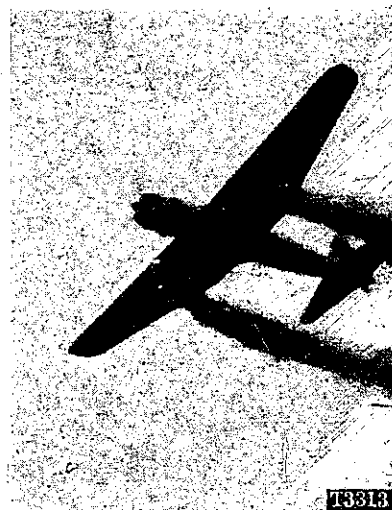
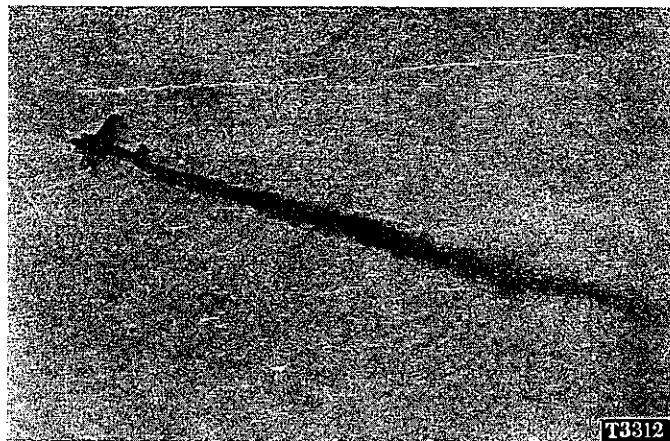
此ノ間特ニ種々ノ點ニ於テ教示ト便宜ヲ頂イタ 福森憲雄少佐、増田美保大尉ニ深ク敬意ヲ表シ、又實驗上多大ノ援助ヲ賜ツタ平澤正欣大尉、權田虎一中尉ノ諸官並ニ今村良夫、橋本榮一、

鈴木二郎、高橋 祝、横溝義男ノ諸氏ニ厚ク感謝スル次第デアル。

昭和16年3月31日

石井部隊、金 子 順 一





I 滴粒の落下

& 1

此ノ問題ハ既ニ随所デ取扱ハレテ居ルノデ殊更ニ此處デ述ベル必要モナイトハ考ヘルガ記述ノ順序トシテ簡單ニ觸レテ見ヨウ。

落下スル液滴ハ成書ニ依レバ析實狀デアルト云フ。即チ粒ガ液體デアル爲ニ壓力配分ニ從ツテ自由ニ形ヲ變ヘ得ル故デアラウ。之ニ依ツテ落下滴粒ノ抵抗ガ球ノ場合トハ異ル事ヲ考慮シテ居ル人モアルガ (J. Liznar)、吾人ハ既存ノ球ノ抵抗ノ實驗値ヲ利用スル爲ニ略近的ニ雨下滴粒ヲ球ト見做ス事トスル。

一様ナ氣流中デ之ニ對スル落下運動ヲ考ヘルト滴ニ作用スル力ハ重力、浮力及空氣抵抗デアツテ之等ハ滴ノ重心ヲ通ズル鉛直線上ニ作用スル。落下開始後一定時間ヲ經過スレバ此等ノ諸力ハ近似的ニ平衡シ所謂終末速度ヲ以テ等速落下運動ヲ呈シテ來ル。此ノ場合ノ力ヲ考ヘテ見ルト、

$$\frac{4}{3}\pi r^3(\rho - \sigma)g = C\pi r^2 \times \frac{\sigma v^2}{2} ;$$

(ρ : 滴ノ密度、 σ : 空氣ノ密度、 v : 終末速度)

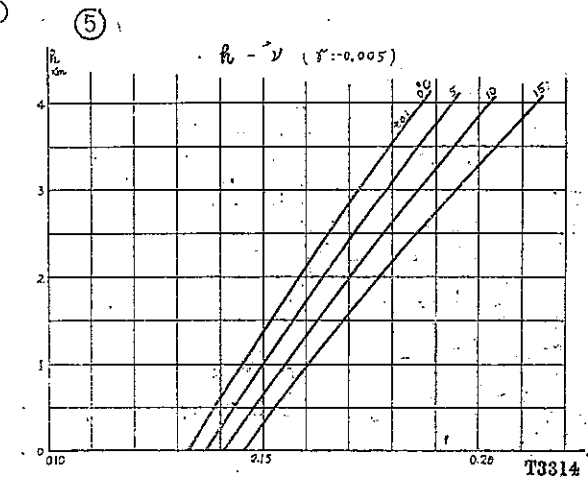
Cハ抵抗係數デアツテ相似ナ運動ニ於テハ一定デアルガ r 及空氣ノ動粘性係數 ν ニ依ツテ異ル値ヲ取ル。即チ Re ヲ Reynolds 數トスルト $C=f(Re)$ デアル。球ニ於ケル C ト Re ノ値ハ種々ナ實驗デ求メラレテ居ル。即チ上式カラ

$$v^2 = \frac{8}{3} \cdot \frac{r}{C} \cdot \frac{\rho - \sigma}{\sigma} g \quad (1)$$

シカル $Re = \frac{vd}{\nu}$ 又ハ $r = \frac{\nu Re}{2v}$ デアルカラ

$$v = \left(\frac{4}{3} \frac{\rho - \sigma}{\sigma} g \nu \right)^{\frac{1}{2}} \left(\frac{Re}{C} \right)^{\frac{1}{2}} \quad (2)$$

(1)式デハ C ハ r ノミナラズ ν ノ函數デアルカラ之カラ v ヲ求メル譯ニハニカナイ。(2)式デハ v ハ $\left(\frac{Re}{C}\right)$ ノ値ニ依ツテ求メラレルガ、 $\frac{Re}{C}$ ハ r ノミナラズ亦 ν ノ函數デモアルノデニ依ツテモ直接ニ r ト ν ノ關係ハ求メラレナイ。故ニ先ツ $\frac{Re}{C}$ ニ依ツテ v ヲ求メ之カラ $r = (\nu Re)/(2v) =$ ヨツテ更ニ r ヲ求メ之カラ r ト ν ノ關係ヲ導カネベナラナイ。 Re ハ ν ノ函數デアルガ ν ハ溫度ト壓力(及濕度)ニ依ツテ變ル。從ツテ地上ニ於テ一定ノ Re ニ應ズル ν ヲ算出シテモ之カラ高空ニ於ケル ν ヲ算出スルノハ容易デナイ。即チ粘性係數 μ ハ一般ニ $\mu = \frac{1}{3} \sigma \bar{c} l$ (σ : 氣體ノ密度、 \bar{c} : 分子ノ平均速度、 l : 分子ノ平均自由経路)ニ依ツテ示サレ之ニ依ルト溫度一定ナレバ粘度ハ壓力ニ關セズ一定デアツテ、空氣デハ $\mu = 0.1821 \times 10^{-5} \{1 + 0.00276(t - 15)\} \text{ (kg.s/m}^2\text{)}$ デ表ハサレルガ、實際ハ壓力ニ依ツテ僅ニ値ガ變ル様デアリ、 ν ノ値モ嚴密ニハ t ノミノ函數トハサレナイガ之ヲ無視シテモ誤差ハ小サイ(2-3%以下)カラ次ニ地上溫度ノ數箇ノ値ニ應ズル ν ノ値ヲ求メテ見ルト次圖ノ様デアル。(5)



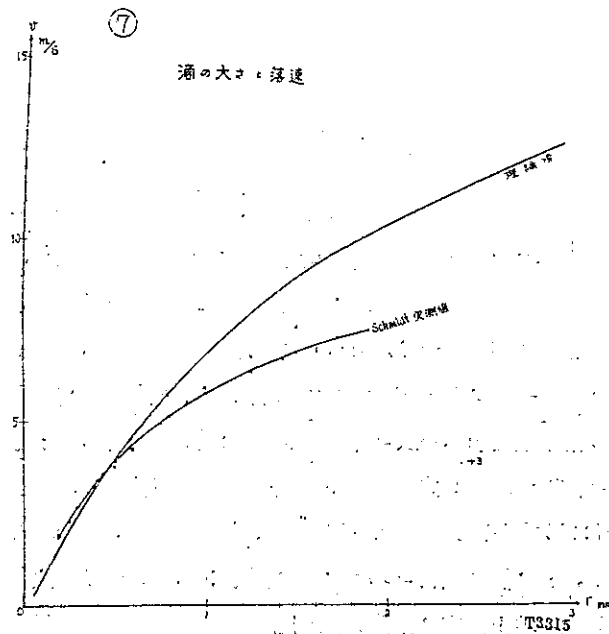
此處で15°C、760mmHg = 於ケル地上落速ヲ考ヘル。ρg=1.00 ト見做シ得ル。

又 $\nu=0.148$ トスル

$$v=54.0 \times \left(\frac{Re}{C}\right)^{\frac{1}{3}} \text{ cm/sec}$$

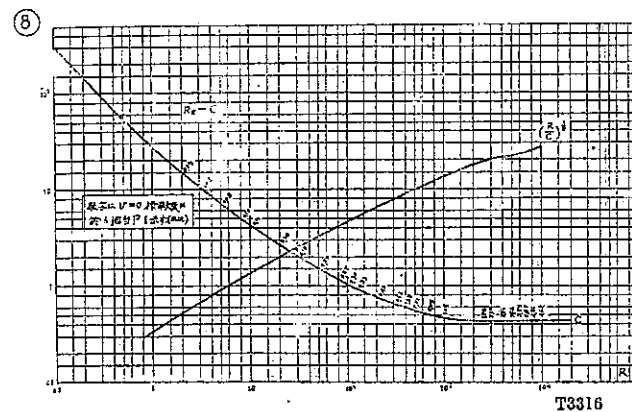
$$r = \frac{0.148 Re}{2v} \text{ cm}$$

$\frac{Re}{C}$ ノ値ハL. Schillerノ曲線(8)カラ計算スルベ(6)ノ様デアツテ、之ニ依テ求メタ r ト v ノ關係及Schmidtノ雨滴ニ就テノ實驗値、高橋喜彦氏ノ落速ノ近似式ニ依ル計算値ヲ「グラフ」ニ表ハセバ次ノ様ニナル。(7)



⑥

Re	$(Re/C)^{\frac{1}{3}}$	v_{cm}	r_{mm}
2	0.513	28	0.05
3.16	0.681	37	0.06
5	0.878	47	0.08
8.25	1.18	64	0.10
10	1.32	71	0.11
20	1.95	105	0.14
32.5	2.53	137	0.18
50	3.18	172	0.22
82	4.09	221	0.27
100	4.50	243	0.30
120	4.93	266	0.33
200	6.37	344	0.43
300	7.7	416	0.53
400	8.7	470	0.63
500	9.6	519	0.71
670	11.0	595	0.83
1000	13.1	707	1.05
2500	18.5	998	1.86
3000	19.6	1058	2.10
4000	21.5	1160	2.55
5000	23.2	1252	2.96
6000	24.7	1334	3.33
7000	26.0	1405	3.67
8500	27.7	1495	4.21
10000	29.3	1580	4.68



之ニ依ルト $r \approx 0.7 \text{ mm}$ ノ程度デハ理論値ガ實驗値ヨリモ大キナ値ヲ取ツテ來ルガ、前述ノ様、落下滴粒ガ球デハナイ事ガ此ノ邊カラ效イテ來ルモノデアラウカ。

2

今暫ク理論式ヲ措キ實驗値カラ抵抗係數ヲ求メテ見ル。即チ Re 數ヲ導入セズニ前記ノ平衡式解ケバ

$$C = \frac{1}{v^3} \times \frac{8}{3} r \times \frac{\rho - \sigma}{\sigma} g$$

準狀況ニ於テハ

$$C = 2021 \times \frac{r}{v^3}$$

之ニ依ツテ Schmidtノ値カラ Cヲ求メル
右ノ様ニナル。

3

高空ニ於ケル落速 v_h ヲ考ヘル。即チ

$$v^3 = \frac{4}{3} \frac{\rho - \sigma}{\sigma} g \nu \times \frac{Re}{C}$$

於テ標準大氣ノ變化度ヲ考ヘルト、

⑨

h	t	σg	μ	ν
0	15°	1.225	0.1779×10^{-3}	0.148
2000	2°	1.005	0.1710 "	0.174
3000	-4.5°	0.909	0.1676 "	0.188

ツテ

$$h: 2000 \quad v = 61.0 \left(\frac{Re}{C}\right)^{\frac{1}{3}}, \quad r = 0.087 \frac{Re}{v}$$

$$h: 3000 \quad v = 64.8 \left(\frac{Re}{C}\right)^{\frac{1}{3}}, \quad r = 0.094 \frac{Re}{v}$$

方 h_1 及 h_2 ニ於ケル落速ヲ次ノ様ニシテ導ク。

$$v_1^3 = \frac{4}{3} \cdot \frac{\rho}{\sigma_1} g \cdot \nu_1 \left(\frac{Re}{C}\right)$$

$$v_2^3 = \frac{4}{3} \cdot \frac{\rho}{\sigma_2} g \cdot \nu_2 \left(\frac{Re}{C}\right)$$

ニ於テ Re/C ノ同一値ニ就テ v ヲ求メルト

$$\frac{v_2^3}{v_1^3} = \frac{\sigma_1}{\sigma_2} \cdot \frac{\nu_2}{\nu_1}$$

一ノ r ニ就テ考ヘルト、

$$\frac{V_1 r_1}{\nu_1} = \frac{V_2 r_2}{\nu_2}$$

＝於テ $r_1 = r_2$ トスレバ

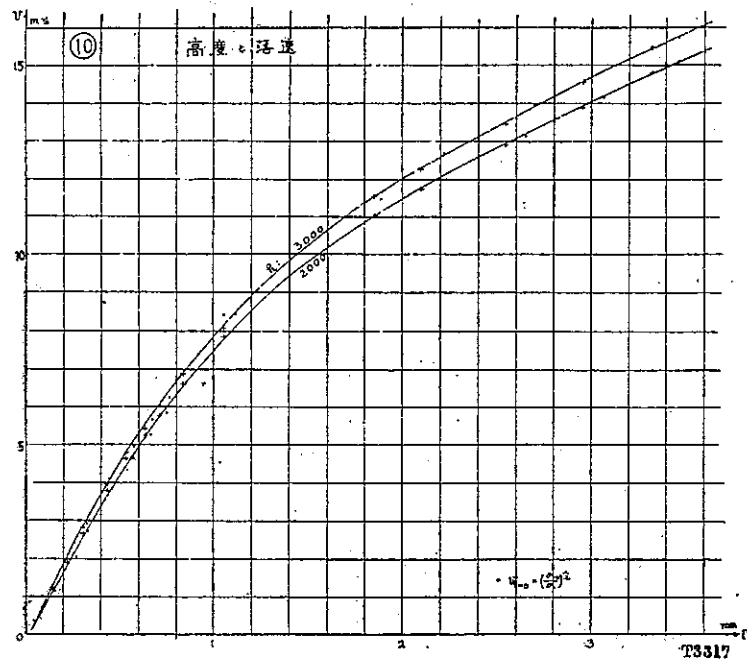
$$\frac{V_1}{V_2} = \frac{\nu_1}{\nu_2};$$

之ト前式ヨリ

$$\frac{V_2^2}{V_1^2} = \frac{\sigma_1}{\sigma_2}, \quad \text{即チ}$$

$$V_2 = V_1 \times \left(\frac{\sigma_1}{\sigma_2} \right)^{\frac{1}{2}}$$

之等ノ式ニ依ツテ得タ h : 2~3,000 ノ落速 v_h ハ次ノ様ニナル。(10)



& 4

此ノ終末速度ニ達スル時間ト其ノ間ノ落高ヲ考ヘル。滴ニ働ク力ハ

$$\frac{4}{3} \pi r_3 \rho \frac{dv}{dt} = \frac{4}{3} \pi r_3 (\rho - \sigma) g - C \pi r_2 \frac{\sigma v^2}{2};$$

$$\text{ie } \frac{dv}{dt} = \frac{\rho - \sigma}{\rho} g - \frac{3}{8} \frac{C}{r} \frac{\sigma}{\rho} v^2$$

$$= g - \frac{3}{8} \frac{C}{r} \frac{\sigma}{\rho} v^2;$$

$$\text{今 } \frac{3}{8} \frac{C}{r} \frac{\sigma}{\rho} = k \quad \text{トオケバ}$$

$$\frac{dv}{dt} + kv^2 - g = 0$$

終末状態ニ於テハ $\frac{dv}{dt} = 0$ ナル故、此ノ時ノ速度ヲ V トスレバ、

$$V = \left(\frac{g}{k} \right)^{\frac{1}{2}} \quad \text{從ツテ}$$

$$\frac{dv}{dt} = k(V^2 - v^2);$$

$$\therefore \frac{1}{2V} \log \frac{V+v}{V-v} = kt$$

$$\text{ie } \frac{V+v}{V-v} = e^{2Vkt}$$

之ヨリ

$$v = V \frac{e^{Vkt} - e^{-Vkt}}{e^{Vkt} + e^{-Vkt}}$$

$$= V \tanh(Vkt)$$

$$k = \frac{g}{V^2} \text{ナル故、}$$

$$v = V \tanh \left(\frac{gt}{V} \right);$$

終末速度デハ $\tanh \left(\frac{gt}{V} \right) = 1$; ie $t = \infty$ ノ譯デアル。

實際的ニ V ニ達スルト見做スベキ時間ヲ求メルト、 $V = 400$ 及 1000 ノ滴ニ就テ考ヘレバ

$$V = 400;$$

$$v_{t=1} = 394,$$

$$v_{t=2} = 400 (399.95);$$

$$V = 1000;$$

$$v_{t=1} = 753,$$

$$v_{t=2} = 961,$$

$$v_{t=3} = 994,$$

$$v_{t=4} = 1000 (999.2);$$

此ノ間ノ落高 η ハ

$$\frac{d\eta}{dt} = V \tanh \left(\frac{gt}{V} \right) \quad \text{ヨリ}$$

$$\eta = \frac{V^2}{g} \log \cosh \left(\frac{gt}{V} \right)$$

$$V = 400;$$

460554

$$\eta_{t=1}=273,$$

$$\eta_{t=2}=1008;$$

$$V=1000;$$

$$\eta_{t=1}=428,$$

$$\eta_{t=2}=1312,$$

$$\eta_{t=3}=2300,$$

$$\eta_{t=4}=3280;$$

之=依ツテ見ルト $V=10$ m/s ノ様ナ大滴デモ 3 秒間 23 米落下、又 $V=4$ m/s ノ稍ニ大キイノハ 1 秒間 3 米落下=依ツテ略近的= V = 達スル。從ツテ吾人ノ考ヘル様ナ高空カラノ落下ノ合=ハ雨下瞬時=終末速度=アルモノト考ヘテ差支ヘナイ。上ノ計算デハ V = 應ズル C ノ動考ヘナカツタガスル結論ヲ得ル爲=ハ其ノ必要ハ無イト考ヘル。

II 滴粒ノ檢知

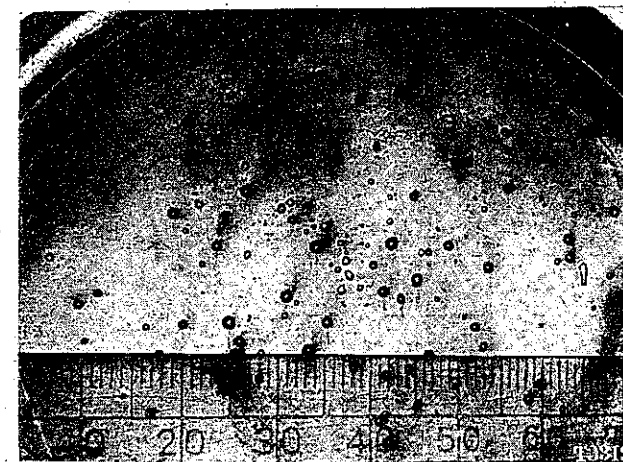
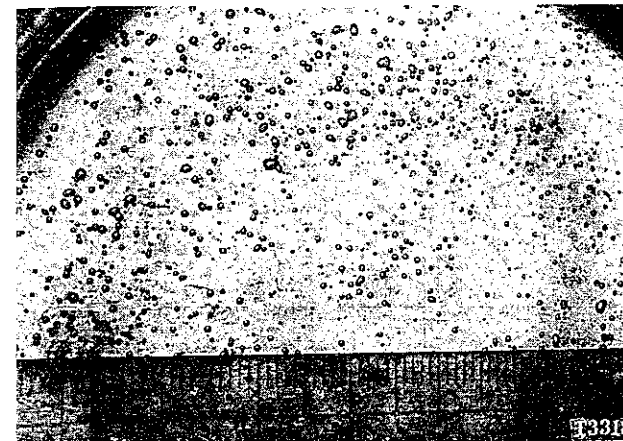
& 5

雨下研究ノ基礎トナルノハ滴粒ノ檢知デアル。落下滴粒ヲ捕捉シテ其ノ重量ヲ測定スル事ノ可能デアルガ、然モ吾人=必要ナノハ地上ノ汚染状態デアルト共=落達前=於ケル空中ノ眞ノサデアツテ之ヲ直接=測定スル野外の方法ハ無イ。

落下滴粒ハ蒸發ガ速カデアルノデ先ヅ之ヲ除外セネバナラナイ。然ル後=落附イテ滴ノ大ヲ求メル事ガ必要デアル。此ノ爲メ先ヅ室内=於ル分裂ノ實驗等=於テ用ヒラレルノハ滴ヲ油層=捕捉スル事デアル。稍ニ粘稠ナ油層面=滴ヲ落スト之ハ油中=沈下シ表面ガ直=油デ被ハリ發フ=時的=抑制スル事ガ出來ル。滴ハ次デ油底=沈下シテ靜止スルガ此ノ時ノ形ハ滴徑ト油厚及油ノ比重=依ツテ異ルガ油層ノ厚サガ最大滴徑ヨリ稍ニ大キイ程度デモ略近的=球形ヲ爲ト見做ス事ガ出來ル。

吾人ハ比較的大キイ滴ヲ取扱フノデ、油ヲ「ベトリ一皿=4~5mm厚=入レ、滴ノ沈靜ヲ待テ「エビデヤスコフ」=依リ擴大シテ壁面=投影シ此ノ時生ズル暗影像ヲ滴ノ眞形ト見做シテヲ測定スル。

油ハ量ヲ多ク用ヒルノデ「ワゼリン」ト「モビル油ノ混合物ヲ利用シ、配分ハ「ワゼリン」1、
ビル油3~5トスル。使用前混合物ヲ氣温ヨリ稍ニ温メテ置イテ滴ノ沈下ト共=粘稠度ヲ増ス様シテ居ル。嚴密=云ヘバ使用狀件=依ル差、殊=落達ノ際ノ分裂ト融合=關シ尙檢討セネバナ
ナイ。實用的=ハ數時間ハ滴徑=著シイ差ヲ生ジナイ。



& 6

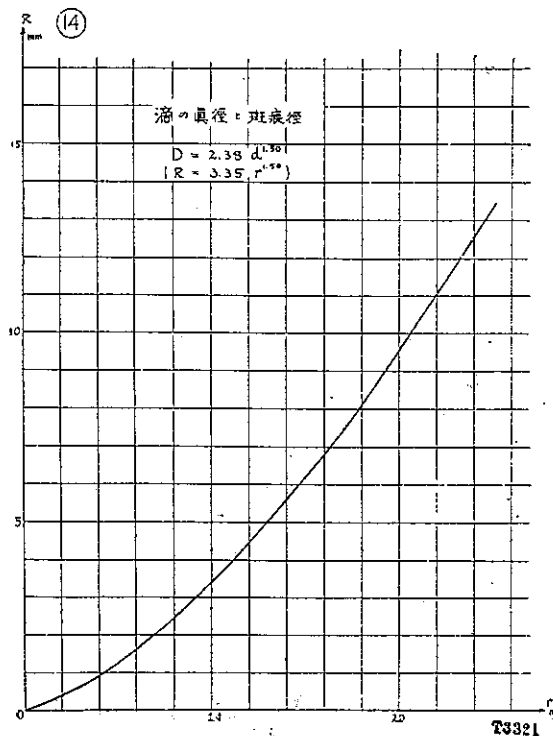
以上ノ方法ハ野外試験デハ規模的ニ不適當デア。從ツテ從來カラ使用サレ來ツタ斑痕ヲネバナラナイ。即チ雨下液ヲ着色シ落達ノ際紙上ニ斑痕ヲ印サセ此ノ斑痕ノ大サカラ滴ノ判定スル。此ノ爲ニ豫メ滴ノ大サト斑痕ノ大サヲ求メネバナラナイ。吾人ハ前ニ鈴木ニ行ツタ實驗カラ、現在檢知ニ用ヒテ居ル模造紙デハ次ノ式ガ成立スル事ヲ知ツタ。

$$D = 2.38 \times d^{1.50} \text{ (mm)}$$

斯カル實驗デハ操作中ノ滴ノ蒸發ヲ除外スルノガ容易デナイ。上式ハ垂直落達ノ場合ニテ、斯カル時ハ斑痕ハ圓形デア。一般ノ場合ニハ落速ヲ v ノ地上風速ヲ w トスルト、落達ハ $(v^2 + w^2)^{1/2}$ デアリ、又角度ハ $\alpha = \tan^{-1}(v/w)$ トナリ、斑痕ハ先細ノ橢圓形ノモノトナル。場合ニ斑痕徑トシテハ長短徑ヲ用ヒナイデ短徑ノミニ依ルガ合理的デアルト考ヘラレ。モ、之ニ關シ更ニ實驗ヲ重ネル要ガアル。

從ツテ斑痕ノ大サト滴徑トノ關係ハ室内ノ垂直落達ニ依ル水ノ場合ノミデハナク、滴ノ落達ノ狀況ノ二方面カラ更ニ檢討シテ見タイト考ヘテ居ル。故ニ從來斑痕カラ求メタ滴徑當ニ誤差ノアル事ヲ承知セネバナラナイ。

次ニ上式ニ依ル斑痕ト滴徑トノ關係ヲ示ス。(14)



& 7

問題トナル粒子ノ範圍ハ多様デ概シテ形狀ガ不規則デアツテ滴粒ノ様ニ理論的ニ考察ハ出來ナイ。子撒布ノ場合ニモ一般原則ノ通り均落速ノミデナク、落速ノ大サニ子ノ配分ガ地上濃度ヲ決定スルノ故可及的多數ノ粒子ヲ以テ之ヲ決事ガ必要デア。滴徑ノ場合ハ大テ標準トナル $Re-C$ ガ測定セラリ又實測値ノ信憑スベキモノモ求テ居ルガ、吾人ガ問題トスル粒子ハ此等ニ關シテハ全く皆無ニ近イ人ノ得テ居ル僅カノ成績モ特ニ檢討セネバナラナイ。

粒子ノ落速ノ測定ニハ空中ヲ墮下セシメル事ガ最も望マシイ事デ

III 粒子の落下

ガ粒子ノ落下状態ト落達ノ確認ガ落下距離ヲ大トナルニ從ツテ困難デアツテ現在吾人ノ有スル装置ヲ以テハ此ノ點ニ於テ大ナル精確度ヲ期待シ得ナイ。又空中ヲ實際ニ落下サセテ測定スルノデハ實驗規模ガ大トナツテ最も重要ナ多數ノ觀測ヲ不能トスル惧ガアル。從ツテ吾人ハ液中ニ於テ緩徐ニ落速ヲ測定シ之ヲ空中ニ換算スル事ヲ試ミタ。即チ運動ノ相似ヲ利用シ空中ノ落下ト略々同等ノ Re 數ヲ有スル運動ヲ起サシメ其ノ際ノ抵抗状態ヲ同等ト見做シタ。之ニ依ツテ室内ニ於テ回数ヲ多クシテ配分ノ問題ヲ解カントシタ譯デア。粒子中特ニ生物デハ其ノ運動ニ依ツテ著シク抵抗ヲ變ズル。故ニ實際ニ空中ヲ落下スル時ト液中中ヲ落下スル時トノ状態ノ差ガ知ラレネバナラナイガ前者ハ觀測不能デア。然シ僅カノ實驗デハ(蛋)生キタモノト麻痺シタモノトノ空中落達ニ著シイ差ハ認めラレナイシ。又實際ニ用フルニシテモ高空デハ殆ド麻痺状態ニアルト考ヘラレノデ此ノ點ハ尙特ニ區別シナカツタ。次ニ粒子ノ代表トシテ、蛋、大麥、粟ニ就テノ實測ヲ舉ゲル。蛋ハ使用ノ都度新シイモノヲ「クロロホルム」麻痺シテ用ヒ又穀粒ハ市販品ヲ無差別的ニ用ヒタ。特ニ穀粒デハ液中ニ於テ中ニ含有サレル空氣泡ニ依ル影響ヲ顧慮シ先ヅ「エーテル」ニ十分間振盪シテ浸シ次デ使用センドスル液中デヨク振盪シタモノヲ用ヒタ。

使用シタ液ハ「ガソリン」(時ニ局方酒精)デアツテ比重及 Seybold 粘稠計ニ依ル粘度ハ次ノ様デア(室温平均15°C)。

液
ガソリン
酒 精

μ	ρg
5.75×10^{-3}	0.753
12.0×10^{-3}	0.793

液ヲ直径40mm、長さ1200mmノ垂直硝子管ニ入レ硝子管ニ目盛りヲスル。液面ニ接シテ靜ニ粒子ヲ落スト直ニ終末状態トナルガ念ノタメ約100mm落下後測定ヲ始メル。對照ノ Re 數ヲ求メルタメノ空中落速ノ測定ハ4000mm高ノ測定場所デ電磁器ニ依ル投出装置ヲ用ヒ電鍵ヲ押スト同時ニ秒時計ヲ作動セシメ落達ノ目視ト共ニ時間ヲ測定シ此ノ間ノ平均落速ト見做ス。從ツテ此ノ方法ニ依ル落速ハ極メテ粗末ナモノニ過ギナイ。

& 8

蛋ノ場合ノ抵抗ハ其ノ肢位ト著シク關係ガアル。肢位及重量ト落速トノ關係ハ尙明デハナイ。落下中ノ體位ハ主ニ第三肢ノ位置ニ關係シテ居ル。「ガソリン」又ハ酒精中デハ時ニ肢ヲ運動シテ落達ヲ不均一ニスル。液柱ヲ各上及下半部ニ分ツテ夫々落速ヲ測ルト下半部デハ稍小サイ値ガ得ラレ。然シ空中ノ落速ニ換算スル場合特ニ考慮セネバナラヌ程度デハナイ。肢ヲ基節カラ除去シテ了フト落速ト重量トノ間ニハ稍ニ關係ヲ認め得ル。

Re 數ヲ求メルニ長サトシテ $\sqrt{\text{體長} \times \text{體高}}$ ノ平均ヲ取ルト $d = 0.237 \text{ cm}$ トナリ又空中落速 $v_a = 150$; 「ガソリン」中落速 $v_g = 3.11$; 酒精中落速 $v_a = 2.23$ デアルノデ。

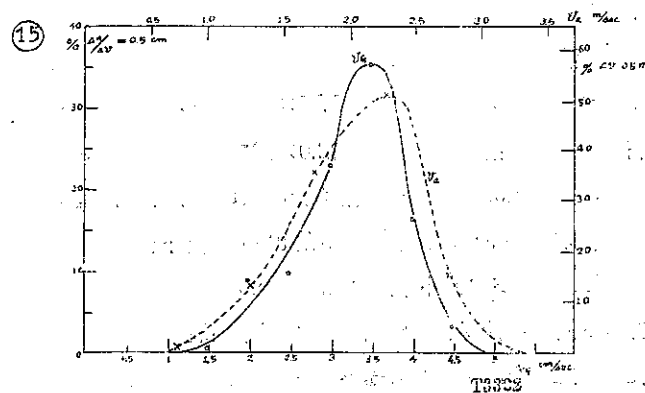
$$Re_a \approx 200,$$

$$Re_g \approx 100,$$

$$Re_A \approx 35,$$

トナリ、「ガソリン中落下ト空中落下ハ大體ニ於テ相似ト考ヘラレル。之ニ依ツテ空中落速ヲ求メルト、蛋體ノ比重ヲ1.0ト考ヘテ 157cm/sec ノ平均値ヲ得ル。之ハ空中落速ノ高サノ過ニ依ル誤差ヲ考ヘテモ稍々小サイ。($\eta = \frac{V^2}{g} \log \cosh \frac{gt}{V}$)ノ式ニ當テハメルト $V \approx 170$ 位デアリ。此ノ時空中ノ Re 數ガ「ガソリン中ノ Re 數ニ比シテ大キク抵抗ガ稍々小サイ事ヲ考慮シテ、200及100ニ應ズル球ノ抵抗ノ割合ガ適用サレルト假定スレバ $V = V_0 \times \left(\frac{1.01}{0.78} \right)^{\frac{1}{2}}$ 即チ $V = 1.19 V_0$ 。トナリ空中落速平均ハ190cm/sec ノ程度デアル事ガ推定サレル。(之ハ別ニ行ハレタ空中落大トシタ實驗値ニ一致スル。) 落速ノ分布ヲ考ヘル時ハ個々ノ場合ニ於ケル Re ノ變動ヲ考ヘバナラナイガ之ハ精度上有意義デハナイカラ全體ガ同ジ割合デ變化スルト考ヘルト落速分布ノ様ニナル。(15)

之ハ實驗數160ノ値ニ過ギナイノデ、更ニ此ノ見地カラ Re ノ等シクナル様ナ液ヲ選ンデ繰シタイ。



& 9

次ニ粒子ノ一種トシテ大麥及粟ノ落下ヲ述ベル。之ハ其自身意味ハ少イガ時ニハ混合劑トシテ、時ニハ細菌又ハ病原菌類ノ含有物トシテ問題トナル場合ガアル。何レモ市場ニ於テ購入セシタ儘無差別ニ實驗ニ供シタ。

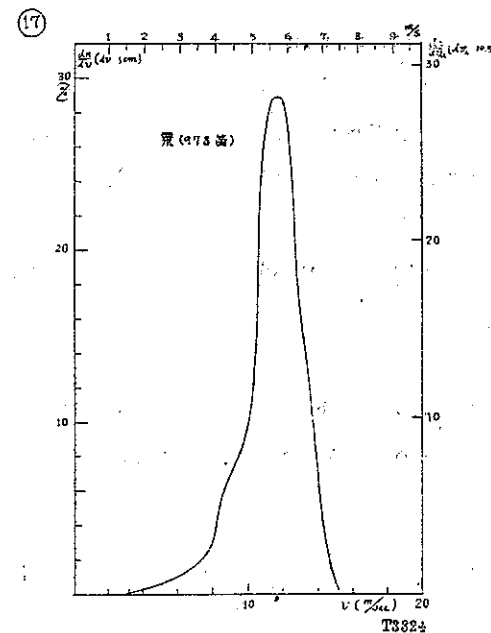
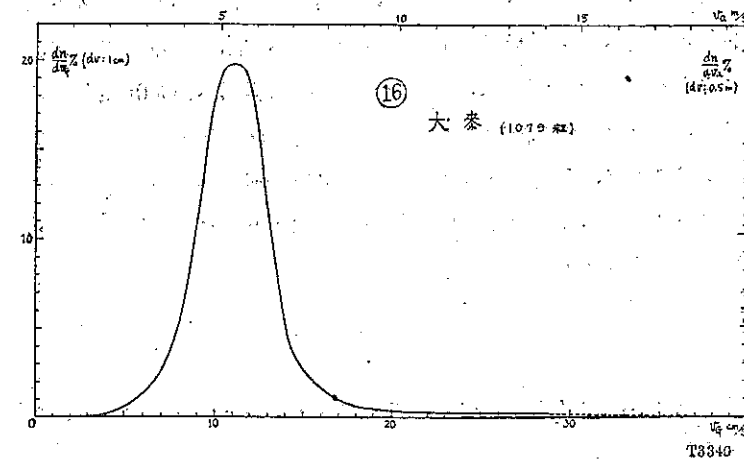
大麥480箇ニ就テ得タ平均重量ハ0.0271grデアリ。之ノ大サ(「エビデヤスコープ」ニ依リ測定)ノ平均ハ長さ0.960cm(芒ヲ含マズ)幅0.253cmデアリ。

之ヲ4m高ノ空中落下ニ依ツテ落速ヲ求メルト325.5cm/sec デ此ノ時ノ Re 數ノ平均ハ1139アル(100箇平均)。然ルニ之ヲ「ガソリン中」デ測ルト落速平均11.34cm/secデ Re 數ハ901トナリ、

ノ程度ノ差デハ殆ト相似ナ運動デアルト見做ス事ガ出來ル。(dトシテハ(長さ×幅)^{1/2}ヲ用ヒタ)。

粟ノ場合ノ平均ノ大サハ0.210×0.165デアツテ(1000箇)、重量平均ハ0.00276gr、空中落速306.7cm/secトナリ Re 數ハ770デアリガ、「ガソリン中」ノ落速ハ10.96cm/secデ Re 數ハ276トナリ稍々異ツテ居ル。故ニ此ノ場合ニハ液中ノ落速カラ「ガソリン中」ヘノ換算ハ慎重デナケレバナス。

次ニ大麥及粟ノ「ガソリン中」ノ落速ノ配分及之ヲ空中落速ニ換算シタ値ヲ示ス。粟ニ於テモ特ニ前述ノ如キ Re ノ差ニ基テ補正ハ行ハナイ。



此ノ場合注意セネバナラナイノハ4m高ノ實驗値ガ換算値ニ比シテ小サイ事デアリ。之ハ終末速度が大キイ爲ニ起ツタモノデアツテ今終末速度ヲVトスルト落高ηハ次ノ式デ表ハサレル。

$$\eta = \frac{V^2}{g} \log \cosh \frac{gt}{V};$$

今上ノ換算デ求メタVヲ之ニ入レルト、(大麥: 550、粟: 570) $t = 1.2$ デハ大麥4.6m、粟4.6mデアツテ實驗ト殆ト一致スルガ判ル。又上ノ換算デハ粒ノ比重ヲ1.0ニ取ツタノデアリガ、實際ハ之ヨリモ稍々大キイノデ空中落速ハ更ニ僅ニ大キクナル筈デアリ。

III 滴粒ノ蒸發

& 10

蒸發=對シテハ從來氣象方面=於テ雨滴ノ蒸發=就テ種々實驗セラレ居リ、當隊デハ其ノ成ヲ應用シテ居ル=過ギナイ。蓋シ此ノ方面=於テ追試スルノ豫猶ガナカツタ爲ト、該成績ガ極テ優レタモノデアルト認メタ故デアル。以下ハ之ヲ中心トシテ述ベル。

吾人ノ問題=スルノハ純水デハナイ。從ツテ蒸氣張力減少ヲ來シテ居ルノデアルガ、添加物質ノ量ガ多クナク、又膠質性ノモノヲ主トスルデアツテ、純水ノ蒸氣壓ト大差ナイ程度ナル。吾人ノ取扱フ範圍デハ常ニ煤塵ハ水デアツテ、油其ノ他ノ物質ハ極メテ例外的ニ(例ヘバ乾燥菌ノ油浮游液トシテ)扱ハレル=過ギナイ。液狀毒瓦斯ハ勿論範圍外デアルガ、「イペリット」デハ飽和空氣中ノ重量ガ630mg/m³(20°C)デアル=比シ、水蒸氣ハ18300mg/m³デアツテ、吾人ノ取扱フ範圍デ蒸發ガ大キナ役割ヲ演ジテ居ルヲ知ル。然シ乍ラ液狀毒瓦斯=於テハ蒸發ハ=有效物質ノ減少デアルガ、今問題トスル範圍デハ水分ノ蒸發ハ單ニ有效材料ノ濃縮ヲ意味ナルダケデアツテ、材料ノ總量ハ減ジナイ。但シ蒸發ハ滴粒ヲ小サクサセ風=依ル流下ヲ増大サル爲ニ地上濃度ヲ一般ニ減少スルノデアル。

& 11

氣象方面ノ研究=於テハ水滴ノ蒸發=對シテ次ノ實驗式ガ求メラレテ居ル。(高橋喜彦氏)

$$-\frac{d(r^2)}{dt} = (A + Bv)\Delta b;$$

$$A = 0.45 \times 10^{-4}$$

$$B = 0.078 \times 10^{-4}$$

$$v: \text{風速}, \Delta b: \text{飽差mmHg}, r: \text{mm}$$

此ノ式ノ實驗範圍ハ吾人ノ問題トスルヨリ相當狭イノデアルガ以下敢テ之ヲ擴張シテ吾人ノ用フル全範圍ニ及ボスコトスル、(蓋シ空中ニ於ル Δb ノ分布ハ使用セントスル各場合ニ未知ナル事ガ多イノデ之ヲ從來ノ平均式カラ求メネバナラズ、從ツテ實驗ノ範圍内ノミニ制限シテ考ルトシテモ大キナ誤差ヲ生ジテ來ル可能性ハ多イ故デアル。)

今地上ニ於ケル r mmノ粒ノ落速ヲ $v_0 = a\sqrt{r} - b$ デ現スト、 v ハ即チ前式ノ風速ニ相當スカラ、

$$-\frac{d(r^2)}{dt} = \{A + B(a\sqrt{r} - b)\}\Delta b$$

高度 h =於ル落速ハ σ ヲ空氣密度トスレバ $v_h = v_0(\sigma_0/\sigma_h)^{\frac{1}{2}}$ ト考ヘラレル。溫度=依ル落速變化ハ Δb =比シ影響ガ少イノデ除外スル。 $(\sigma_0/\sigma_h)^{\frac{1}{2}} = K_h$ トスルト、 $v_h = v_0 K_h$

$$\text{今 } \sqrt{r} = x \text{ トスルト}$$

$$-\frac{d(x^2)}{dt} = \{A + B(ax - b)K_h\}\Delta b$$

$$\text{シカル} = -dz = v_h dt$$

$$= K_h(ax - b)dt$$

故ニ

$$\frac{dz}{K_h(ax - b)} = \frac{4x^3}{A + BK_h(ax - b)} \times \frac{dx}{\Delta b};$$

$$\text{ie } \int \Delta b dz = \int \frac{4K_h x^3(ax - b)}{A + BK_h(ax - b)} dx \\ = -\frac{4}{aB} \int \frac{ax^4 - bx^3}{x + \frac{A - BbK_h}{aBK_h}} dx$$

之ヲ積分シテ

$$\int \Delta b dz = -\frac{4}{aB} \left[\frac{a}{4} x^4 - \frac{A}{3BK_h} x^3 + \frac{A}{2BK_h} \left(\frac{A - BbK_h}{aBK_h} \right) x^2 \right. \\ \left. - \frac{A}{BK_h} \left(\frac{A - BbK_h}{aBK_h} \right)^2 x + \frac{A}{BK_h} \left(\frac{A - BbK_h}{aBK_h} \right)^3 \log \left(x + \frac{A - BbK_h}{aBK_h} \right) \right]$$

此ノ場合 K_h モ勿論 z ノ函數デアルケレド之ヲ常數ト見做シタノデアツテ、假ニ高度1500ニ於ケル値ヲ用ヒテモヨイトスルト

$$K_{1500} = 1.075 \text{ トシテ、}(a = 7.37; b = 1.43)$$

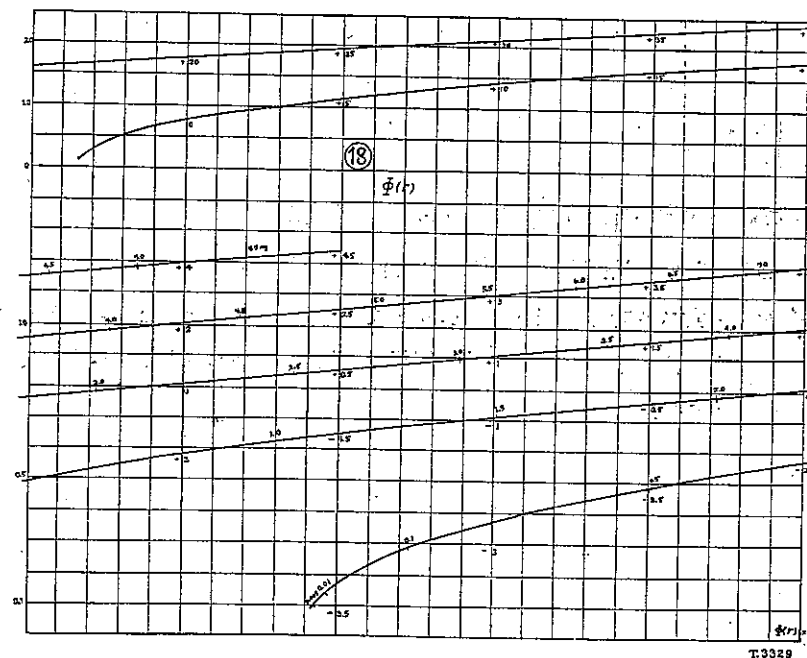
$$\int_0^z \Delta b dz = \{1.28x^4 - 1.24x^3 + .998x^2 - 1.06x + 1.35 \log_{10}(x + 0.534)\} \times 10^5$$

$$\text{今 } \int_0^z \Delta b dz = \phi(m) = \phi\left(\frac{4}{3}\pi x^6\right) \text{ トスルト}$$

$$\int_z^{z_0} \Delta b dz = \phi(m_0) - \phi(m) \\ = \phi(x_0^6) - \phi(x^6)$$

即 $\int_0^z \Delta b dz$ ヲ求メテ居レバ、任意ノ高度 $z_1 \sim z_2$ 間ニ於ル m 又ハ r ノ變化ヲ知ル事ガ出來ル。

次ニ $x (=r^{\frac{1}{2}})$ ト $\phi(m) = \phi\left(\frac{4}{3}\pi x^6\right)$ ノ關係ヲ示ス曲線ヲ表ハス。(18)



次 = Δb ノ分布ハ雨下氣象ノ項ニ記シタケレドモ、此處デハ簡單ニ、蒸發ノ影響ヲ知ル爲メノ様ナ假定ノ下ニ計算シテ見ル。

(1) 氣溫ノ高度變化:

$$t_h = t_0 - 0.0065h$$

(2) 蒸氣張力ノ高度變化: (Hann)

$$\log f_h = \log f_0 - \frac{h}{6300}$$

任意降下層 η = 於ル飽差 Δb_η ハ

$$\Delta b_\eta = f_{\max \eta} - f_\eta$$

$f_{\max \eta}$ ハ殆ド氣溫ノミノ函數デアアル。即チ $f_{\max \eta} = F(t_\eta)$ デアル。雨下高度層ノ溫度ヲ

$t_0' (= t_0 - 0.0065h)$ トスレバ $t_\eta = t_0' + 0.0065\eta$, $f_{\max \eta} = F(t_0' + 0.0065\eta)$ シカルニ

$f_\eta = f_0 \times 10^{-\frac{\eta}{6300}}$ デアル。

雨下高度層ニ於ケル濕度ヲ p_0' トスレバ $f_0' = p_0' F(t_0')$ 從ツテ $f_\eta = p_0' F(t_0') \times 10^{-\frac{\eta}{6300}}$ トナル。

故ニ

$$\Delta b_\eta = F(t_0' + 0.0065\eta) - p_0' F(t_0') \times 10^{-\frac{\eta}{6300}}$$

今 F ナル形ヲ次ノ様ニ取扱フコトスル。

$F(0) = 4.58 \text{ mmHg}$ トシテ、

$$F(t) = F(0) \times 10^{0.0284 t}$$

$$= 4.58 \times 10^{0.0284 t}$$

從ツテ

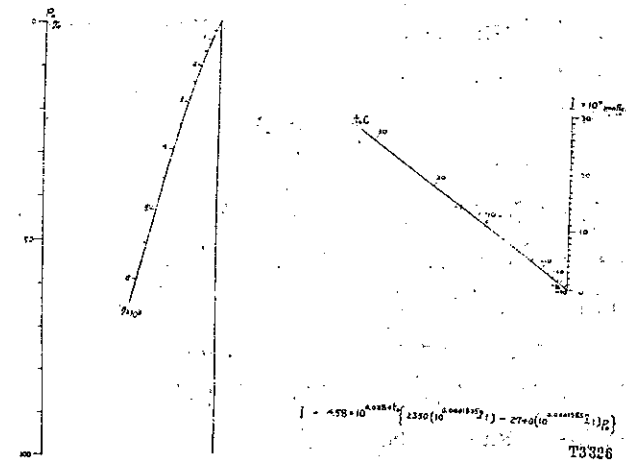
$$\begin{aligned} \Delta b_\eta &= 4.58 \times 10^{0.0284(t_0' + 0.0065\eta)} - p_0' \times 4.58 \times 10^{0.0284 t_0'} \times 10^{-\frac{\eta}{6300}} \\ &= 4.58 \times 10^{0.0284 t_0'} (10^{0.0001845\eta} - p_0' \times 10^{0.0001855\eta}) \end{aligned}$$

即チ飽差積分ヲ I トスレバ

$$\begin{aligned} I &= \int_0^\eta \Delta b_\eta d\eta \\ &= 4.58 \times 10^{0.0284 t_0'} \int_0^\eta (10^{0.0001845\eta} - p_0' \times 10^{0.0001855\eta}) d\eta \\ &= 4.58 \times 10^{0.0284 t_0'} \{ 2350 \times (10^{0.0001845\eta} - 1) - 2740 p_0' (10^{0.0001855\eta} - 1) \} \end{aligned}$$

之ヲ t_0' , p_0' 及 η = 對スル計算圖表トシテ示スト次ノ様デアアル。(19) 之ニヨツテ I ヲ知ル。前圖ト相俟ツテ任意ノ雨下最高層ノ t_0' 及 p_0' ヲ假想シテ任意ノ大サノ滴粒ノ落達時又ハ途中大サヲ求メ得ルコトナル。

(19)



然シ乍ラ以上ノ計算デ見ラレル様ニ比較的精密デナイ常數値カラ $10^{a\eta}$ 又ハ $10^{b\eta}$ ノ a 及 b ノ差ヲ出シテ來ルノハ相當大膽ニ考ヘラレル仕事デアアル。之ハムシロ後ノ地上滴野ノ濃度ノ計算ニ用ヒタ様ニ概略的ニハ次ノ様ニ求メルノガ至當デアラウ。即チ上ノ場合ハ $t_h = t_0 - 0.0065h$ トシタガ、之ハ標準大氣デアアル故ニ、地上溫度ヲ t_0 濕度ヲ p_0 トスレバ、

$$\begin{aligned} \Delta b_h &= 4.58 \times 10^{0.0284(t_0 - 0.0065h)} - p_0 \times 4.58 \times 10^{0.0284 t_0} \times 10^{-\frac{h}{6300}} \\ &= 4.58 \times \{ 10^{0.0284(t_0 - 0.0065h)} - p_0 \times 10^{0.0284 t_0 - 0.000150h} \} \\ &= 4.58 \times \{ 10^{0.0284(t_0 - 0.0065h)} - p_0 \times 10^{0.0284(t_0 - 0.0065h)} \} \\ &= 4.58 \times 10^{0.0284(t_0 - 0.0065h)} (1 - p_0) \end{aligned}$$

$T_0 = 273 + t_0$ トシ、 $10^{0.0284 T_0} = 10^{0.0284 t_0 - 7.76}$ ナル事カラ

$$\Delta b_h = 0.811 \times 10^{0.0284(T_0 - 0.0065h)} \times (1 - p_0) \times 10^{-7}$$

ヲ得ル。

勿論 Hann ノ式ハ濕度變化ガ極メテ少イコトカラ蒸氣張力ヲ溫度變化ノミニヨツテ變ルト考ヘルト $a = 0.0055$ トシテ得ラレル式デアアルカラ上ノ結果ヲ得ルノハ當然デアアル。

& 12

從來小粒ハ表面張力ニ依ル蒸氣張力ノ増加ニ依ツテ速カニ蒸發スルトサレル。半徑 R ノ滴粒ノ蒸氣張力ハ

$$B = b + \frac{2T}{R} \frac{\sigma}{\rho}$$

デアハサレル。 $t = 15^\circ \text{C}$ ヲ考ヘルト、

$$b = 12.8 \text{ mmHg} = 16450 \text{ dyne/cm}^2; T = 73.5 \text{ dyne/cm}^2; \sigma/\rho = 0.805/1000$$

デアアル故

$$B = 16450 + 0.1184 \frac{1}{R}$$

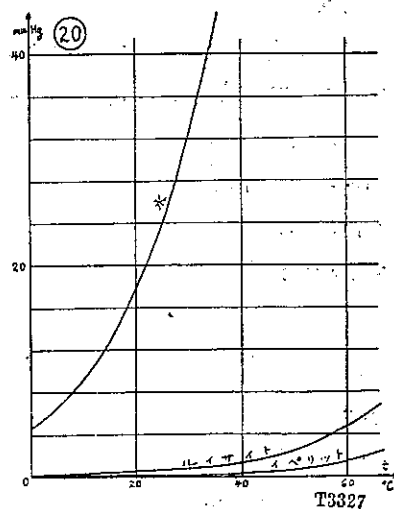
從ツテ蒸氣張力 = 1%ノ増加ヲ與ヘルRハ大凡R = 10⁻³即チ0.01mmノ程度ノモノデアルカ
吾人ノ考ヘテ居ル範圍デハ問題トハナラナイ。

& 13

初 = 雨下液ノ蒸氣張力降下ヲ無視シタガ、粒ガ濃縮サレト共ニ之ハ正當ニ考慮サルベク、
發ハ上ニ得タ値ヨリモ小トナル筈デアル。之ニ關シテハ吾人ハ何等ノ實驗値ヲ有シテ居ナイガ
現在用ヒテ居ル雨下液ニ就テ之ガ如何ナル程度ノモノデアルカ推定シテ見ル。雨下液ノ各種成
ノ「モル濃度」ハ簡單ナ物質デナイカラ知ルベキモナイガ、肉エキス「ヤ」「ペプトン」ヲ除外シ食鹽
トシテ考ヘテ見ヤウ。即チ食鹽値トシテ0.5%(重量)程度デアルト想定スル。然ルトキ之ガ全
解離シテ居ルト見做モバRaoult(1887)ノ定律ニ從ツテ、

$$\frac{p_0 - p}{p_0} = \frac{N}{N_0 + N}$$

0.5%ノ食鹽ハ上式ニ從フト $p_0 \times 0.0035$ ノ降下、例ヘバ20°Cデハ0.061mmHgノ降下ヲ起ス
デアル。之ガ濃縮サレテ10%ニモナルト0.054
即チ0.9mm程度ノ降下ヲ來ス事ニナル。即チ雨
液ヲ理想溶液ト考ヘル範圍ニ於テ蒸氣張力降下
無視シテ差支ガナイ。



& 14

之マデ吾人ハ細菌ヲ主體トスル關係カラ水ノ
發ノミヲ考ヘタ。此處デハ無關係ノ事項デハ
ガ「イペリット」ト「ルイサイト」ノ蒸氣壓ヲ文獻
ヲ拾ヒ出シテ、如何ニ蒸發ガ吾人ノ考ヘル範圍
ノミ重要デアルカヲ示摘スル。(20)

V 滴粒の分裂

& 15

雨下液ハ流出管ヲ出レバ大小無數ノ滴ニ分裂スル。此ノ機構ガ排出口ニ對シテ如何ナル位置
行ハレルガハ全ク不明デアルガ、恐ラク排出瞬時カラ若干離隔シタ所ニ到ル間ニ完了スルモノ
アラウ。從ツテ今吾人ガ滴粒ノ配分ヲ問題トスルノハ、最終分裂後ノ狀況デアツテ、此ノ時
液ノ内部運動モ存セズ、滴ハ氣流ニ對シテハ落下運動ノミヲ有スルト考ヘラレル。

分裂ノ機構ハ液ノ内部運動トニ加ハル外力及液ノ性狀即チ分裂ニ對スル抵抗性ニヨルモノ
アラウガ、從來細流ノ霧化ニツイテ考ヘラレル様ニ、液柱ノ外殻ト内部ノ亂流部分ガ對立シ、外
ガ破レテ内部ガ自己ノ運動性ニヨツテ小部分ニ分レトイフヨリハ、外力ノ作用即チ氣流ガ機

ナ亂流部分ニ直接ニ衝突シテ之ヲ分裂サセルト言フ部分ガ大キナ役割ヲ演ジテ居ルト思ハレル。

霧化器ニ於ケル燃料ノ霧化ニ於テ流量比ト相對速度ニ從ツテ滴狀、紐狀、樹枝狀、膜狀等ノ分
裂狀況が見ラレルガ、雨下器ニ於テハ雨下液全體トシテノ斯カル分裂ハ考ヘラレナイ、恐ラク氣
流ニ對スル各部分ニ於テ之等ノ狀況ガ複雑ニ組合ツテ生ズルモノデアラウ。

此ノ問題ハ後ニ述ベル様ニ特ニ超低空雨下ノ場合ニ極メテ大キナ意義ヲ有シ、分裂機構ヲ制御
シ得ル事ガ効果ニ對シテ決定的ナ重要性ヲ有スルノデアルカラ、之ハ正ニ將來ニ對スル好問題ト
シテ保留サルベキデアル。

& 16

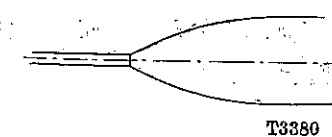
一般的ニ考察スレバ、分裂ヲ支配スル外因ハ、1) 流量比 及ビ 2) 相對速度デスリ、内因ハ
3) 密度 4) 粘性 5) 表面張力 及ビ 6) 内部運動デアル。

流量比ト相對速度ハ共ニ雨下機ノ對氣速度及空氣密度(即チ計器速度)ニ關係シ、更ニ流量比ハ
液速即チ雨下器ノ機能ニ、又相對速度ハ更ニ雨下口ノ位置ト形狀ニ關聯ヲ有スル。

流量比トハ分裂ニ關與スル空氣量ト分裂スル液量トノ比デアルガ、分裂ノ完了スル位置ガ明
ナイタメ、空氣量ヲ明確ニ定メ難イ。又風速トシテ直接液ニ作用スル氣流ノ速度ヲ採用セネバオ
ラスガ、之ハ雨下口ノ形狀ト位置ニヨツテ對氣速度トハ異リ一般ニ之ヨリ少シク大ナ誤デアルノ
デ、一概ニ論ズル事ハ出來ナイ。從ツテ當分ハ單ニ流出速度ト對氣速度ノミヲ考ヘルガ、詳細ハ
更ニ研究セネバナラナイ。

雨下口ヲ出タ液ハ分裂シテ擴散シ、次圖ノ様ニナツテ來ルケレドモ、rハ無限ニ大キナルモ
ノデナク、雨下直後ノ初期滴野ハ概ネ拋物面狀ヲ呈スル様デアル。

(21)



勿論細ク見ルト決シテ様ニ擴ガルノデハナク不
規則ナ團塊狀ヲナシテ丁度膜狀分裂トイフ様ニ機構ガ
緩慢ニ起ルノデハナイカト思ハレル場合モアリ、殊ニ
八八輕式二型ニ著明デアル。地上ニ於ケル流出ガ一様
デアル事カラ之ハ幾分氣流ノ影響ニヨルモノデアル事
ガ推定サレルガ、流出量ヲ少クスルト「プロペラ」後流

ノ影響ニヨル廻旋ハ著明デアツテモ團塊狀ニナラナイ事カラ考ヘテ、之モ分裂機構ノ一部デアル
ト想像サレル。而シ一見色素流ノ水流中擴散ノ場合ニ似タ點モアルノデ何レモ急ニ斷定ハ出來
ナイ。

從ツテ流量比計算ノ規準トシテrガ一定限度迄大キナル迄ニ分裂ガ行ハレルモノト考テ次ノ
様ニオキ得ル。

$$\text{重量流量比 } R = \frac{\pi r_m^2 V_a \rho}{Q_l \sigma}$$

(但 V_a 對氣速度、 ρ 空氣密度、 Q_l 液量、 σ 液密度)

例ヘバ、九七重式二型デハ $r_m = 1.5$, $V_a = 70.0$, $Q = 0.08$ 程度デアルカラ $R = 7$ 見當デアル。此

ノ點ニツイテハ更ニ考ヘテ見タイ。

内因トシテ液ノ物性ハ或ハ明デアルトシテモ、内部運動ノ點ニナルト全然不明デアル。亂流ノ分裂機構ニ及ボス意義ニツイテハ更ニ研究セネベナラヌ。九七式一型ニ於テ流出管ノ出口ニ近ク1cm角目30cm長ノ整流板ヲ附シタルニ滴ハ稍々細分サレル傾向ヲ認メテ居ル。

更ニ物性ノ點ニ於テ、之ガ明瞭デアル様ニ考ヘラレルガ、元來雨下液ハ一般ノ溶液ノ様ニ無造且均質デアルコトハ出来ナイ。單ニ細菌ノ均一浮游液ヲ用ヒル事ハ少ナク、他ノ目的カラ「ガラチン」、卵白、卵黃、腐敗性發臭物質等ヲ加ヘタ媒質ニ菌ヲ混和スルノデアツテ、例ヘバ「ガラチン」ヲ用ヒタ場合デモ1%程度ニ加ヘテモ状況ニヨツテ凝固シ、注入操作ニ當リ之ガ不規則ノ小塊ニ分レル事ガアリ更ニ寒天ノ稀薄ナモノニ於テモ絮狀ノ構造ヲ認メルモノガアツテ、一般雨下液ハ不均質デ或種ノ構造ヲ有スル場合ガ多イ。故ニ實際ノ雨下液ノ分裂機構上ニ於ケル物性ハ決シテ單純ナモノトハ考ヘラレナイ。

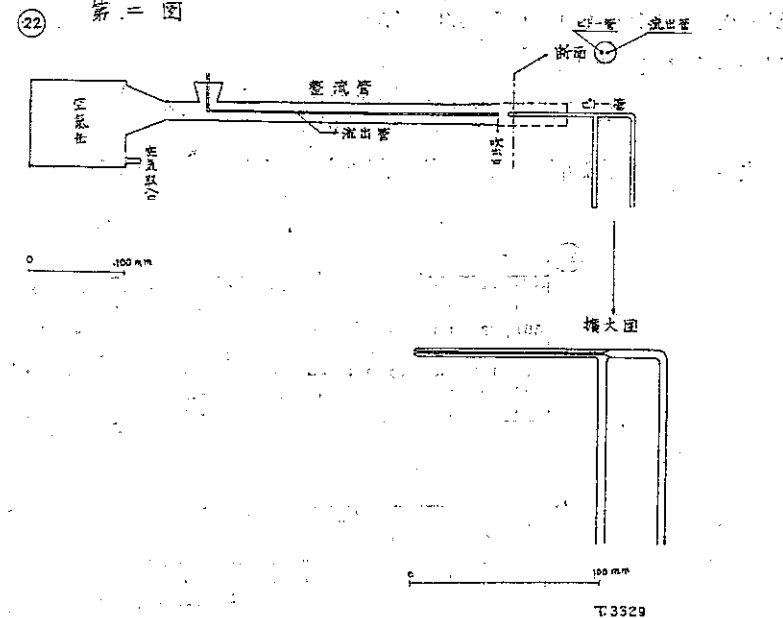
現ニ吾人ハ滴粒ノ配分ヲ求メル場合ニハ比較的單純ナ水、「ブイヨン」、「グリセリン水、稀デアル液等ヲ用ヒルガ、實際ニハ之ニ卵等ヲ加ヘルノデ稍々異ツテ居ルト考ヘテ居ル。

& 17

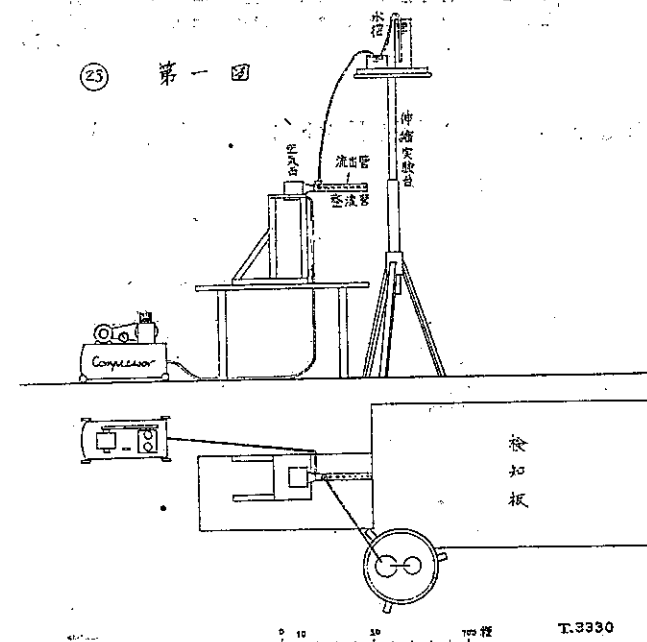
液ノ分裂ヲ取扱フ部門トシテ前述ノ様ニ氣化器ガアル。之ハ流量比(容積) $1 \sim 10 \times 10^3$ 、相對速度 $150 \sim 300 \text{ m/s}$ ノ程度デ燃料ハ $1 \sim 10 \mu$ 位ニ分裂スル。雨下器ハ勿論規模ガ全然違フシ又流量比(容積) $7 \sim 20 \times 10^3$ 、相對速度 $50 \sim 100 \text{ m/s}$ ノ程度デ液ハ $0.1 \sim 1 \text{ mm}$ 程度ニ分裂スル。(μ單位程度ノモノモ生ズルカモ知レナイガワカラナイ。)故ニ氣化器ノ分裂ノ理論ヲ其ノ儘取入レル譯ニハムカナイ。

極ク概略ノ概念ヲ得ルタメニ次圖ノ様ナ裝置デ粗略ナ實驗ヲ試ミタ。粒ハ檢知板上ニ受ケテ痕カラ眞徑ヲ判定シタ。此ノ裝置デハ氣流ハ「コンプレッサー」カラ一旦擴大室ヘ取り此處カラ吸出口ヘ導キ、豫メ壓力ト風速トノ割合ヲ「ピトー管」デ求メテオキ、又流速モ液面ト排出面ノ落差ト關係ヲ求メテオキ、實驗ニ際シテハ之ヲ測定セズニ壓力ト落差カラ求メタ。

(22) 第一圖



(23) 第一圖



用ヒタ空気口(圓筒) $r_a=10.0\text{mm}$ 液口 $\pi r^2=1.75\text{mm}$ デアル。液ハ水ヲ用ヒタ。

實驗範圍ハ $V_a=8.5; 11.7; 14.9; 19.0; 21.2; 24.3; 27.4; 30.6; 33.8; 37.0; 40.1; 43.3$ 及
 $V_l=0.29; 0.51; 0.70; 0.87; 1.03; 1.18$ デアル。以下流量比トシテ容積流量比ヲ用ヒルト之
 場合ニ次ノ様ニナル。

$$\text{容積流量比 } R = \frac{(314.16-1.75) \times V_a}{1.75 V_l} = 178 \times \frac{V_a}{V_l} \quad (24)$$

之ニヨツテ、約10秒間ニ得タ滴ノ平均徑($\bar{d} = \frac{\sum d^3 \Delta n}{\sum d^2 \Delta n}$)ヲ求メルト次ノ様ニナル。(25)

(24)

V_a/V_l	8.5	11.7	14.9	19.0	21.2	24.3	27.4	30.6	33.8	37.0	40.1	43.3
0.29	5.22	7.18	9.15	11.7	13.0	14.9	16.8	18.8	20.7	22.7	24.6	26.0
0.51	2.97	4.08	5.20	6.65	7.41	8.50	9.57	10.7	11.8	12.9	14.0	15.1
0.70	2.16	2.98	3.79	4.84	5.40	6.19	6.98	7.79	8.60	9.42	10.2	11.0
0.87	1.74	2.40	3.05	3.84	4.34	4.93	5.62	6.28	6.93	7.60	8.23	8.89
1.03	1.47	2.02	2.57	3.28	3.67	4.19	4.72	5.28	5.80	6.38	6.92	7.47
1.18	1.28	1.77	2.25	2.87	3.20	3.67	4.14	4.62	5.10	5.59	6.06	6.55

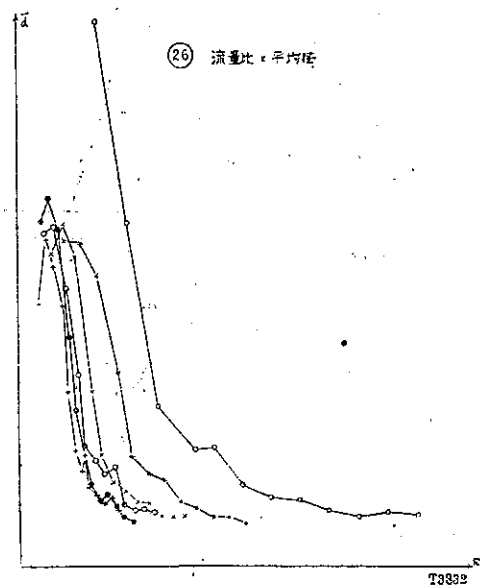
T3914

(25)

V_a/V_l	8.5	11.7	14.9	19.0	21.2	24.3	27.4	30.6	33.8	37.0	40.1	43.3
0.29	3.59	2.27	1.06	0.78	0.79	0.54	0.48	0.44	0.37	0.33	0.36	0.34
0.51	2.15	2.13	1.92	1.28	0.73	0.61	0.58	0.43	0.39	0.33	0.33	0.29
0.70	2.06	2.16	2.04	1.16	0.74	0.56	0.50	0.43	0.42	0.33	0.33	0.34
0.87	2.20	2.24	1.83	1.27	0.89	0.70	0.61	0.66	0.41	0.37	0.38	0.36
1.03	2.28	2.43	2.23	1.51	1.03	0.74	0.55	0.44	0.48	0.40	0.33	0.30
1.18	1.73	2.16	1.98	1.72	1.16	0.77	0.64	0.54	0.49	0.42	0.46	0.38

T3915

依ツテ之ヲ R, \bar{d}, v_r ニツイテノ關係ヲ見ルト次ノ様デアル。(26)(27)



即チ 1) R ノ増加ト共ニ \bar{d} ハ減少スル。

2) V_a ノ増加ト共ニ \bar{d} ハ減少スル。

3) V_w ハ餘リ影響ガナイ。同ノ R ニツイテハ V_w ガ大ニナルト \bar{d} ガ小サクナル。之ハ V_a ガ尙小サイノデ V_w ガ大キイト内部運動ガ大トナツテ \bar{d} ラ小トスルノデナйкаト思ハレル。

4) 一般ニ \bar{d} ハ雨下ノ場合ニ比シテ小サイ。

而モ R ハ大體同程度ト思ハレル範圍ニアリ更ニ V_a ハズツト小サイノデアルカラ、液ニ空氣ノ當ル狀況ガチガフノデアルト思ハレル。

即チ液口ノ大キサガ非常ニ關係シテ居ルノデアラウ。

概シテ言ヘバ此ノ様ナ小サイ實驗デハ雨下ノ場合ノ分裂ヲ模倣スルツハ無理デアルト考ヘタイ。

氣化器ノ實驗デハ $\frac{Q_a}{Q_l}$ (定量比) ガ5以上デハ殆ド \bar{d} ガ一定ニナルトイフ。此ノ場合ニモ大體同様ナ傾向ガアルガ、 V_w ニヨツテ多少チガツテ居ル。 V_a ガ相當大キクナルト恐ラク此ノ様ニナルノデナйкаト考ヘラレル。前ノ假定ニヨルト九七重式ニ型デハ $\frac{Q_a}{Q_l} = 7$ デアルノデ、若シ實際ノ雨下器ニモ之ガ適用サレルトスレバ現在ノ程度ガ既ニ限界ヲ越シテ居ルノデ Q_l ラ相當大キクスレバ或ハ \bar{d} ガ大キクナルカトモ考ヘラレル。

18

次ニ實際ノ雨下器ノ場合ニ就テ考ヘテ見ル。

此ノ場合ノ實驗方法トシテハ蒸發ノ可及的少イ様ニ100~200mノ低空デ雨下ヲ行ヒ、檢知板上ニ得タ滴粒ノ斑痕カラ滴ノ眞徑ヲ求メテ、之ヲ風向ニ從ツテ解析スルノデアル。從ツテ極メテ小イ滴ハ脱落スル惧モ充分ニアルガ、之ハ大體ニ於テ體積比ガ小サイノデ問題ニハナラナイ。

一定ノ雨下條件ニ於ル或ル雨下器ノ特性ハ結局單位時間ノ流出量ト得ラレル滴粒ノ配分ニヨツ表ハサレネバナラナイ。之ヲ相互ニ比較スルタメニハ此ノ配分ノ狀況ヲ數式ニヨツテ表ハス事考ヘネバナラナイ。現在吾人ノ有スル滴粒配分ナルモノハ、1) 審査施設及方法、2) 試驗回数等ノ關係カラ略近のナモノニ過ギナイ事ハ明デアル。故ニ此ノ數値ヲ細部ニ涉ツテ迂回執スルノ無意味デアルニ相違ナイ。從ツテ此處デハ如何ニシテ現在有スル配分値ヲ修正シテ一定ノ型式ニ數式化スルカラ考ヘル。

固體ノ粉碎ヤ氣化器ノ霧化等ノ場合ニ一般ニ粒子ノ數ノ配分ハ次ノ數式ニヨツテ表ハサレテ居

ル。

$$\frac{dn}{dr} = ar^p \exp(-br^q)$$

雨下ノ場合ノ配分曲線ニ概テ此ノ式ニヨツテ表ハサレル様デアル。故ニ逆ニ雨下ニ於テモ
ノ配分ハ此ノ一般式ニ從フモノデアルト先ツ假定シ、觀測數値ニ最モ適合スル常數値ヲ求メテ
ヨリ $\frac{dn}{dr}$ ヲ求メ、雨下ノ實際ハ斯ル $\frac{dn}{dr}$ ニ從フ滴粒ガ生ズルノデアルト見做シテモ、上述
ニ當分ノ間稍確ナ實驗ガ繰返シ行ハレル迄ハ差支ナイト信ジタイ。以下此ノ式ニ基イテ考
ル。

此ノ式ノ常數値ヲ決定スルニハ $\log\left(-\frac{dn}{dr}, \frac{1}{r^p}\right)$ 及 r^q ヲ座標トスル直交座標系ニ於テ p 及 q
種々ノ値ヲ採リ、觀測値ガ一直線ニ並ブ如キ p, q ヲ求メル。勿論完全ニ一直線上ニ配列サ
レ時ハ選點ノ又ハ平均的ニ此ノ直線ヲ決メル。此ノ時 b ハ直線ノ傾斜ヲ以テ表ハサレル。 a ハ
測總數ニ對スル常數デアルガ、 $\int dn = 100$ トシ比率ヲ以テ $\frac{dn}{dr}$ ヲ表ハスカ、又ハ $\int \pi r^2 dn = Q$
(Q :單位時間ノ流出量)トシテ決定メル。

此ノ式デハ r ハ ∞ ニナリ得ルガ、實際ニハ r ガ稍々大ニナルト $\exp(-br^q)$ ガ一般ニ微小
ツテ、特ニ一定ノ r ニ於テ $\frac{dn}{dr}$ ガ 0 ニナル様ナ式ヲ用ヒズトモ實際ニ得タ最大ノ r 迄ヲ考ヘ
此ノ式デ差支ガナイ。

滴粒配分ノ特性トシテハ 1) 平均ノ大キサ及 2) 配分ノ均一度ガ問題デアル。

平均ノ大サ \bar{r} トシテハ次ノ六種ヲ採リウル。

$$\bar{r}_1 = \frac{\sum r \Delta n}{\sum \Delta n} \quad \text{徑ノ總和、總數ガ等シイ平均}$$

$$\bar{r}_2 = \left(\frac{\sum r^2 \Delta n}{\sum \Delta n} \right)^{\frac{1}{2}} \quad \text{表面總和} \quad " \quad "$$

$$\bar{r}_3 = \left(\frac{\sum r^3 \Delta n}{\sum \Delta n} \right)^{\frac{1}{3}} \quad \text{體積總和} \quad " \quad "$$

$$\bar{r}_4 = \frac{\sum r^2 \Delta n}{\sum r \Delta n} \quad \text{表面總和、徑ノ總和} \quad " \quad "$$

$$\bar{r}_5 = \left(\frac{\sum r^3 \Delta n}{\sum r \Delta n} \right)^{\frac{1}{2}} \quad \text{體積總和、徑ノ總和} \quad " \quad "$$

$$\bar{r}_6 = \left(\frac{\sum r^3 \Delta n}{\sum r^2 \Delta n} \right) \quad \text{體積總和、表面總和} \quad " \quad "$$

雨下ノ場合ノ平均ノ大サトシテハ \bar{r}_6 即チ體積總和ト表面總和ノ等シイ平均ヲ採ルベキデアル
 $\bar{r}_1, \bar{r}_2, \bar{r}_3$ ハ粒ノ總數ハ問題ニシテ居ラナイ。

$$\frac{dn}{dr} = ar^p \exp(-br^q); \text{ 今 } r^q = R \text{ トスル}$$

$$dn = \frac{a}{q} R^{\frac{p+1}{q}} \exp(-bR) dR$$

今 R ノ變域トシテ $0 \rightarrow \infty$ ヲトル

$$\bar{r}_1^3 = \frac{1}{b^{\frac{1}{q}}} \frac{\Gamma\left(\frac{p+4}{q}\right)}{\Gamma\left(\frac{p+1}{q}\right)}$$

$$\text{又 } \bar{r}_6 = \frac{1}{b^{\frac{1}{q}}} \frac{\Gamma\left(\frac{p+4}{q}\right)}{\Gamma\left(\frac{p+3}{q}\right)}$$

更ニ數及體積ノ最大ヲ示ス徑 r_{mn} 及 r_{mv} ハ次ノ様ニナル。

$$r_{mn} = \left(\frac{p}{bq} \right)^{\frac{1}{q}}$$

$$r_{mv} = \left(\frac{p+3}{bq} \right)^{\frac{1}{q}}$$

又均一度ヲ求メルニ、先ツ散亂度ヲ f トスルト均一度 K ハ $\frac{1}{f}$ デ示サレル。之ヲ百分率デ示ス
メニ均一度 K' ヲ次ノ様ニシテ表ハス。

$$K' = 100e^{-\frac{1}{K}} = 100e^{-f}$$

此ノ場合用ヒル平均ノ大サトシテハ實際ノ粒數ト平均粒數ガ等シイ様ニ \bar{r}_1, \bar{r}_2 又ハ \bar{r}_3 ヲ使ハ
バナラナイ。此處デハ體積ノ均一度ノ意味デ \bar{r}_3 ヲ用ヒル。然ルトキハ

$$f_3 = \frac{1}{n} \int \left| \frac{r^3 - \bar{r}_3^3}{\bar{r}_3^3} \right| dn$$

實際ニ絶對値ヲ用ヒルノハ簡單デナイカラ自乗ヲ用ヒ

$$f_3^2 = \frac{1}{n} \int \left(\frac{r^3 - \bar{r}_3^3}{\bar{r}_3^3} \right)^2 dn$$

トシ之ヲ計算スルト

$$f_3^2 = \frac{\Gamma\left(\frac{p+7}{q}\right) \cdot \Gamma\left(\frac{p+1}{q}\right)}{\Gamma^2\left(\frac{p+4}{q}\right)} - 1$$

斯様ニ見地カラ從來用ヒ來ツタ雨下器ニ就テ特性式ヲ求メル。

以前ハ滴ノ直徑ヲ用ヒズシテ斑痕ノ大サ R ニヨツテ配分ヲ求メタ事ガアル。此ノ場合 $2R = 2.38$
 $\times (2r)^{1.50}$ ノ關係式ニヨツテ $\frac{dn}{dR} \cdot \frac{dR}{dr} = \frac{dn}{dr}$ ニ換算セネバナラナイ。即チ $\frac{dn}{dR} = a'R^{p'} \exp(-b'R^{q'}) =$
ツテ p', q', r' ヲ求メ。 $\frac{dn}{dr} = \frac{dn}{dR} \cdot \frac{dR}{dr}$ 及 $\frac{dR}{dr} = 5.039 \times r^{0.50} =$ ヨリ

$$\frac{dn}{dr} = a' \times \frac{(3.366)^{p'}}{5.039} \times r^{1.50p' - 0.50} \exp(-3.366^{q'} \times b' \times r^{1.50q'})$$

$$\text{即チ } a = a' \frac{(3.366)^{p'}}{5.039}; p = 1.50p' - 0.50; b = 3.366^{q'} \times b' \text{ トスレバ}$$

$$\frac{dn}{dr} = ar^p \exp(-br^q)$$

トナル。

別表ニ示ス様ナ圖計算ノ結果、特性式トシテ次ノ如キ値ヲ得ル。尙同時ニコノ特性式ノ示ス曲線ト實驗値ノ關係ヲ示シテ置ク。(但シコノ曲線ヲ畫ク場合ニ於テハ、コノ曲線ニヨル滴ノ總數ガ實際ニ獲得シタ滴ノ總數ト等シクスル様ニシタ。)((29)-(34))

$$\text{八八式(180K)} \quad \frac{dn}{dr} = a_1 r \exp(-12.15 r^{0.75})$$

$$\text{同 (110K)} \quad \frac{dn}{dr} = a_2 r^3 \exp(-9.0 r)$$

$$\text{同 (250K)} \quad \frac{dn}{dr} = a_3 r^6 \exp(-30.0 r^{0.5})$$

$$\text{九七重式一型} \quad \frac{dn}{dr} = a_4 r^7 \exp(-33.4 r^{0.5})$$

$$\text{九七重式改一型} \quad \frac{dn}{dr} = a_5 r^7 \exp(-23.3 r^{0.75})$$

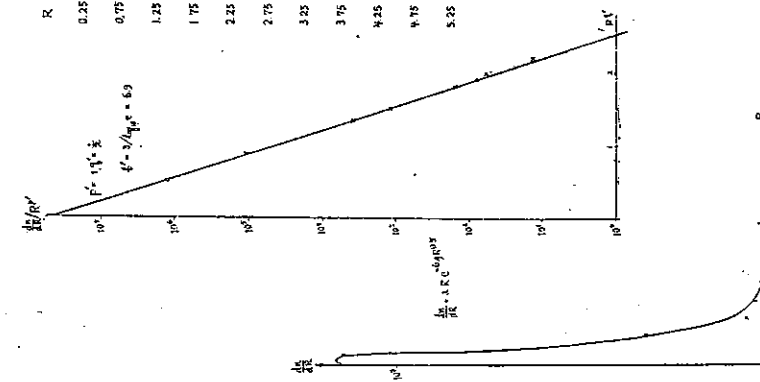
$$\text{九七重式二型} \quad \frac{dn}{dr} = a_6 r^7 \exp(-26.0 r^{0.5})$$

之ニヨツテ \bar{r}_0 , \bar{r}_{mn} , \bar{r}_{mv} , 及 f_3 ヲ求メル。(28)

(28)		P	q	b	T_0	r_{mn}	r_{mv}	f_3
	八八式(180K)	1	0.75	12.15	0.505	0.132	0.334	4.21
	同 (110K)	3	1	9.0	0.667	0.300	0.667	1.79
	同 (250K)	6	0.5	30.0	0.380	0.160	0.360	7.67
	九七重式一型	7	0.5	33.4	0.376	0.176	0.358	6.09
	同 改一型	7	0.75	23.3	0.536	0.295	0.472	1.93
	同 二型	7	0.5	26.0	0.621	0.285	0.594	6.09

T3016

(29)

別表 III
八八式(180K)

R	約数 80 130	$\frac{dn}{dr}$	$R \exp(-12.15 r^{0.75})$	$\frac{dn}{dr} - R \exp(-12.15 r^{0.75})$
0.25	11.461	1.1	1.1	0
0.75	2.500	1.1	1.1	0
1.25	1.467	1.1	1.1	0
1.75	1.239	1.1	1.1	0
2.25	1.086	1.1	1.1	0
2.75	1.000	1.1	1.1	0
3.25	0.938	1.1	1.1	0
3.75	0.886	1.1	1.1	0
4.25	0.842	1.1	1.1	0
4.75	0.804	1.1	1.1	0
5.25	0.771	1.1	1.1	0

$$\frac{dn}{dr} - R \exp(-12.15 r^{0.75})$$

$$\frac{dn}{dr} - R \exp(-12.15 r^{0.75})$$

T3016

T3034

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

T3033

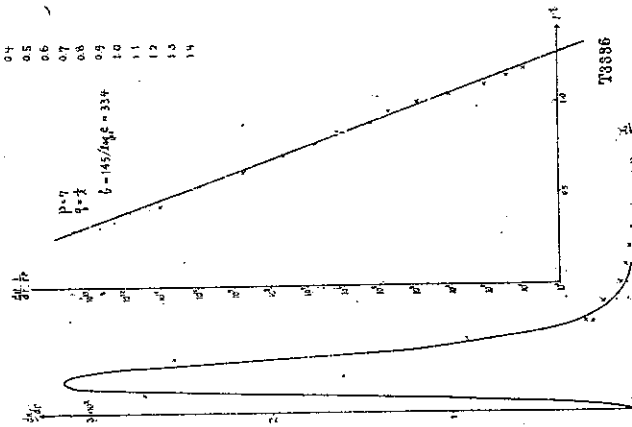
T3033

T3033

③② 九七五 I

線数 81889

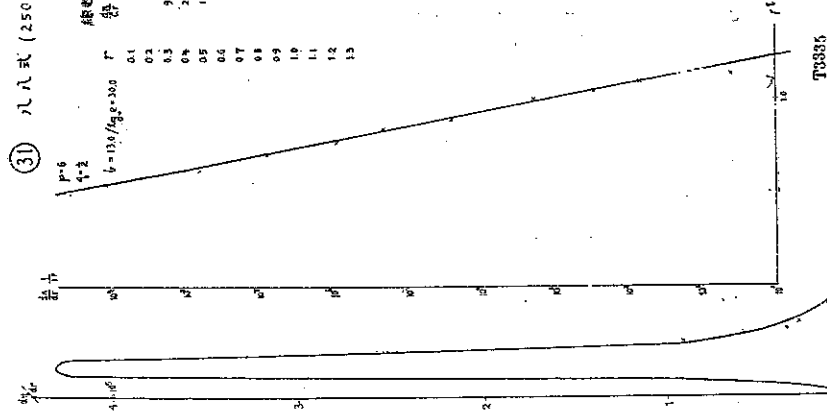
r	倍率測 算計算
0.1	27047
0.2	13902
0.3	16115
0.4	25401
0.5	7338
0.6	2647
0.7	1765
0.8	771
0.9	450
1.0	258
1.1	70
1.2	11
1.3	3
1.4	2
1.5	1



③① 九八式 (250 K)

線数 150089

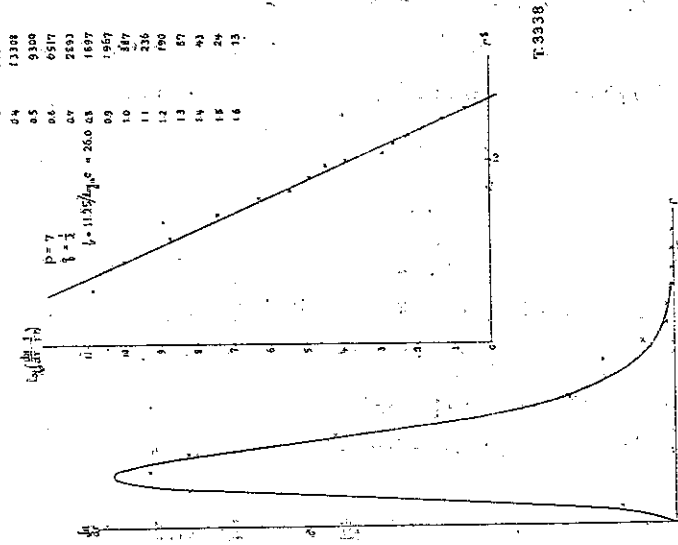
r	倍率測 算計算
0.1	116200
0.2	9138
0.3	84000
0.4	28389
0.5	12890
0.6	4435
0.7	2430
0.8	662
0.9	423
1.0	191
1.1	59
1.2	21
1.3	7
1.4	1
1.5	1



③③ 九七五 II

線数 64444

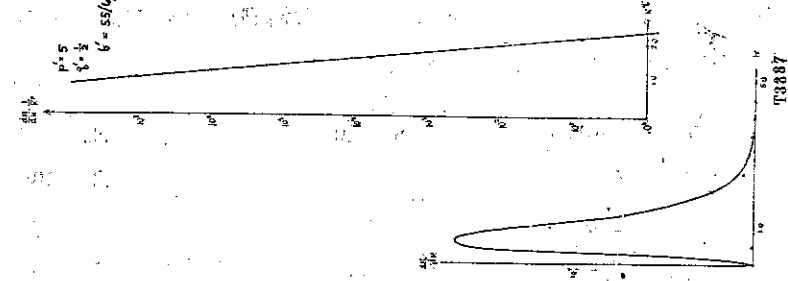
r	倍率測 算計算
0.1	1485
0.2	13382
0.3	14204
0.4	13308
0.5	9300
0.6	6517
0.7	2593
0.8	1697
0.9	959
1.0	587
1.1	336
1.2	190
1.3	87
1.4	43
1.5	24
1.6	13
1.7	5
1.8	1



③④ 九七五 I

線数 21997

R	倍率測 算計算
0.5	16250
1.0	11340
1.5	5099
2.0	2190
2.5	1423
3.0	886
3.5	506
4.0	291
4.5	178
5.0	111
5.5	62
6.0	36
6.5	21
7.0	12
7.5	7
8.0	4
8.5	2
9.0	1



aノ値ヲ求ムルニ、rノ變域ヲ $0 \rightarrow \infty$ トシ

$$\begin{aligned} Q &= \int_0^\infty \frac{4}{3} \pi r^3 dn \\ &= \int_0^\infty \frac{4}{3} \pi a r^{p+3} \exp(-br^q) dr \\ &= \frac{4}{3} \pi a \cdot \frac{1}{qb^{\frac{p+4}{q}}} \Gamma\left(\frac{p+4}{q}\right) \\ \therefore a &= Q \times \frac{3}{4\pi} \frac{qb^{\frac{p+4}{q}}}{\Gamma\left(\frac{p+4}{q}\right)} \end{aligned}$$

此ノ場合Qハ雨下液全量又ハ單位時間流出量或ハ基準滴野ノ何レヲ取ルモ差支ナイ。次ニQヲ雨下液全量トシテaヲ求メルト次ノ様ニナル。

	Qmg	a
八八式(180K)	80×10^6	6.38×10^{10}
同 (110〃)	〃	1.26×10^{10}
同 (250〃)	〃	2.74×10^{18}
九七重式一型	800×10^6	6.21×10^{20}
同 改一型	$400 \times$ 〃	1.27×10^{16}
同 改二型	$800 \times$ 〃	2.53×10^{18}

以上ノ試験ニ於テ九七重ハ對氣速度ヲ230~250Kニシテ雨下シタモノデアル。八八式ニ於テハ速度ノ影響ガ甚大デアル事ガ明デアル。

之等ノ式ノ相互ノ比較ハ更ニ他ノ條件下ニ於ルモノヲ求メテカラシタイ。シカシ高空雨下ヲ目途スルモノニアツテハrノ大ナルモノガ望マシク、而モfガ大デアレバヨイ。此ノ目的ノ爲ニハ九七重式二型ガ優レテ居ル事ガ判ル。fハ大デアル程目標脱逸量ガ減ズル譯デアルガ、現在ノ考想ニナル雨下器デハ此ノ點ニ於テ充分デナイ。

& 19

如何ニシテ滴粒ノ最大範圍ノ徑ガ決定サレルカハ明デナイ。液塊ニ運動ヲ與ヘズニ落下セシメテモ、遂ニハ一定ノ大サノ限度以下ノ滴粒ニ分裂シテ了フ。此ノ限度ハ概ネ $r=2 \sim 3\text{mm}$ ノ程度デアル。卵黄ノ様ニ或強度ヲ有スル膜ニ包マレテ居ル場合ハ約2000mノ落下迄ハ分裂ヲ免レルヲ見ルト、分裂ノ限度ハ液ノ性状ニ關係スルモノ、様ニ考ヘラレル。液塊ノ各部ノ移動ニヨツテ複雑ナ形トナリ之ニ氣流ガ當ツテ分裂スル場合ノ狀態ハ簡單ニ解ク事ハ出来ナイ。

VI 粒 野 (滴野)

& 20

粒野トハ雨下撒布セラレタ粒子ノ占ムル空間デアツテ液體雨下ヲ對照トスル場合ハ滴野トモ云

ビ特ニ最終狀態即チ地上粒野ヲ汚染地區ト稱スル事モアル。

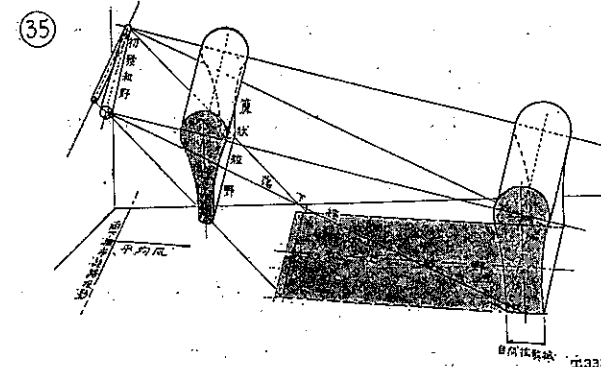
前項ニ述ベタ通り雨下器又ハ撒布器カラ抛出サレタ粒子ハ後流ノ影響ヲ受ケテ一次的ニ擴散シ所謂初發粒野ヲ形成スル。此ノ作用ハ粒子ノ落下運動ノ開始ト相俟テ左程ニ永ク繼續スル譯デハナイガ、此處ニ於テ既ニ粒子ノ大サトノ關聯ガ見ラレル。即チ初發粒野内ニ於テサヘ各粒野部分ノ粒子ノ配分ハ決シテ一様デハナイ。之ハ粒子ノ大サニ依ツテ後流作用ノ持續時間ノ差ト後流ニ依ル移動距離ノ遅レガ異ツテ來ル故デアル。

超低空ニ於テ得ラレタ各粒子ノ擴散幅ハ概ネ此ノ初發粒野ノ相貌ヲ示スモノト考ヘラレルガ、之ニ關シテハ後ニ實測値ヲ示ス。(70)

初發粒野ガ既ニ形成セラレレバ爾後粒子ハ落下運動ヲ呈スルノミノ筈デアルガ、此ノ落下経路間ニ於ケル氣流ハ決シテ一様ナモノデハナイ。粒子ハ渦流ニ從ツテ各ニ擴散シテラ落下スル譯デアル。渦流ニヨル擴散ヲ完全ニ解クノハ困難デアル。

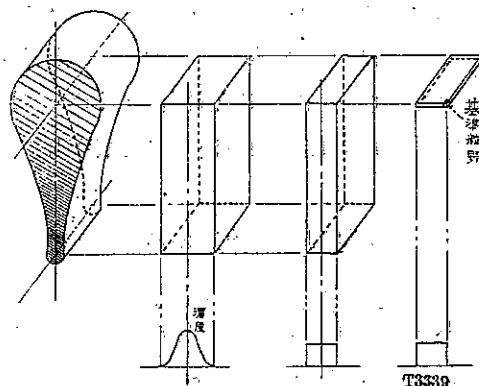
斯クテ初發粒野ハ次第ニ擴散サレツツ落下シ落速ノ大キナ粒子カラ順次ニ落達シ平均風方向ニ次第ニ排列シ遂ニ地上粒野ヲ形成スル。此ノ中間ニ於テハ大ナル粒子ハ下方ニ小ナル粒子ハ上方ニ其々固有ノ擴散幅ヲ示シテ排列シテ所謂簾狀粒野ヲ形成シテ居ル。此ノ簾狀體ハ決シテ垂直デハナク各高度ノ風力ニ應ジ屈曲シテ居ルケレドモ平均風力ヲ考ヘル時ハ之ニ對シテハ垂直ナ平面ノ兩側ニ各粒子ニ依ツテ特有ナ幅ヲ有シ水平方向ニハ厚サハ相等シイモノデアルト假想サレル。

此ノ幅ハ即チ自然擴散域デアツテ、第一ニ初發粒野形成時ノ後流ニ依リ、次デ落下空間ノ渦流ニヨツテ生ズルモノデアアルガ、初發粒野ガ一點又ハ一直線デアルト假定シタ時ニハ空間ノ風ノ構造ノミニ依存スルト想定サレル。(35)



略近的ニ各粒子ノ自然擴散域ガ平等デアツテソノ擴散域内ノ粒子ヲ中心ニ近い一定範圍ノミニ集中的ニ存シ擴散域邊緣部ニハ全然ナイト考ヘル時生ズル假想粒野ノ單位斷面柱ニ於テハ、含まレル粒子ノ狀況ハ各柱總テ均等デアツテ、之ヲ單位厚中ニ總テ存在スルト考ヘタ時ノ假想的ナ單位粒野ヲ基準粒野ト稱シ地上濃度計算ノ基準トシテ用ヒル。勿論之ハ地上濃度ノ計算ガ多數ノ條件(風力、飽差)ノ假想下ニ行フ極メテ概算ノテモノニ過ギズ點ニ於テノミ想定價值ノアル粒野デアル。(36)

36



- 1) 自然擴散ノ程度ハ地上ニ近イ程著明デアル。一般ニ高度2000m以上ノ擴散ハ少イ。
- 2) 自然擴散ハ風速ノ大キイ程、又落下經路ノ風力變化ノ大キイ程著明ニ起ル。

自然擴散ハ總ニル方向ニ起ル管デアルガ、垂直方向ノ擴散ハ結局水平擴散ヲ招來スルノデア
カラ後者ノミニ就テ考ヘレバ良イ。

粒子ノ擴散モ瓦斯ノ擴散ト同様ニ渦動擴散係數ノ觀念ヲ取入レテ考ヘル事ガ出來ルガ、何レニ
セヨ粒子ノ大サニヨル差違ヲ問題ニスルニハ之デモ解決出來ナイ。

此ノ問題ヲ極メテ單純化シテ水平ナ一方向ノミニ擴散スルモノト考ヘル。然ル時ハ擴散ヲ次ノ
様ナ問題ニ置換スル事ガ可能トナル。

擴散ノ現象ハ或ル大サノ粒子ノ多數ガ落下シテラ左右ニ任意ニ一定範圍内デ移動スル時地上
於テ生ジタ粒子數ト距離トノ關係即チ濃度分布ヲ規正スルモノデアル。此ノ場合各移動ガ全ク獨
立デアルト考ヘルト次ノ様ナ確率ノ問題ニナツテ來ル。即チ互ニ獨立ナ連續函數 x_1, x_2, \dots, x_n
ノ變域ガ夫々 a ノ範圍デアル時 $\sum_{i=1}^n x_i$ ハ次ノ確率函數ノ函數ノ形ヲ取ル。

$$\varphi(x-x, \sigma) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma} e^{-\frac{(x-x)^2}{2\sigma^2}}$$

\bar{x} ハ Σx ノ期望値デアツテ此ノ場合 \bar{x} ヲ零ト置ク事ガ出來ル。故ニ

$$\varphi(x, \sigma) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma} e^{-\frac{x^2}{2\sigma^2}}$$

之ノ時 x ヲ距離ト考ヘルト $\varphi(x, \sigma)$ ハ粒子ニ各特有ナ σ ヲ與ヘタ場合ノ自然擴散ニ依ル濃度ノ
狀況ト見做ス事ガ出來ル。 σ ハ變域ノ大サ a ニ關係シタ値デアツテ、從ツテ粒子ノ大サニヨル差
違ガ之ニ表ハサレル管デアル。 a ハ或ル粒子ニ就テモ高サノ極數デアリ、又其ノ時ノ狀況ニ依ツテ
違ツテ來ル。是ル大サノ a ニ於テハ兩者ノ移動ノ函數ガ共ニ極メテ大デアル限リ

$$\sigma_1 : \sigma_2 = (a_1 - a_1^2)^{-\frac{1}{2}} : (a_2 - a_2^2)^{-\frac{1}{2}}$$

ノ形デ與ヘラレル事ガ豫想セラレル。

& 21

自然擴散ハ落下空間ノ渦流ニ依ツテ生
ズルト云ツタガ、之ヲ確認スル材料ハ
イ。之ヲ積極的ニ證明スル爲ニハ渦流
値ト之ニ因ル粒子ノ運動ヲ説明セネバ
ラナイノデアツテ、尙將來ノ問題デア
先ツ第一ニ地上ヨリ高空ニ到ル迄ノ風
構造ガ明ニサレネベナラナイ。從ツテ
在ハ次ノ様ナ想定ノ下ニ總テヲ律セ
ナラナイ狀況デアル。即チ

粒子ノ移動ニ對スル風力變化ノ影響ヲ考ヘテ見ル。

粒子ガ一定ノ終末速度ヲ以テ一様ナ或ル空氣層ヲ落下シ、此ノ空氣層ト δw ノ關係速度ヲ有ス
ル他ノ空氣層ニ入ツタ時粒子ノ運動ハ如何ナルカラ、簡單ニ垂直運動ハ不變デアルト見做シテ水
平移動ニ就テノミ考ヘル事ニスル。即チ第一ノ空氣層ニ於ケル落下(流下)狀態ヲ基準トスルト、
此ノ時ノ問題ハ δw ノ風ヲ受ケル静止粒子ノ運動ニ換元サレル。即チ此ノ時ノ運動方程式ハ

$$m \frac{dv}{dt} = \frac{1}{2} C_x \sigma (\delta w - v)^2 A;$$

粒子ヲ球ト見做セバ

$$m = \frac{4}{3} \pi r^3 \rho;$$

$$A = \pi r^2$$

$$\therefore \frac{dv}{dt} = \frac{3}{8} C_x (\delta w - v)^2 \frac{\sigma}{\rho} \cdot \frac{1}{r}$$

C_x ハRe數ノ函數デアアルガ問題トナル範圍Re=10~500程度デハ略近的ニ次式ニ依テ表ハサ
レル。

$$(C_x - 0.39) Re = 70.0$$

$$\text{ie } C_x = 70 \times \frac{\nu}{(\delta w - v) \times 2r} + 0.39$$

$$\nu = 0.150 \text{ (20°C)}$$

$$= \frac{5.25}{(\delta w - v)r} + 0.39 \quad \text{從ツテ}$$

$$\begin{aligned} \frac{dv}{dt} &= \frac{3}{8} \left\{ \frac{5.25}{(\delta w - v)r} + 0.39 \right\} (\delta w - v)^2 \frac{\sigma}{\rho} \cdot \frac{1}{r} \\ &= 0.00253 (\delta w - v) \frac{1}{r^2} + 0.000180 (\delta w - v)^2 \frac{1}{r} \end{aligned}$$

之ヲ積分シテ

$$\frac{r^2}{0.00253} \log \frac{0.00018r(\delta w - v)}{0.00018r(\delta w - v) + 0.00253} + t = C$$

$$t = 0, v = 0;$$

$$C = \frac{r^2}{0.00253} \log \frac{0.00018r\delta w}{0.00018r\delta w + 0.00253}$$

$$0.00253 = b, \quad 0.00018r = a \quad \text{トスルト}$$

$$t = \frac{r^2}{b} \log \frac{a(\delta w - v) + b}{a(\delta w - v)} \times \frac{a\delta w}{a\delta w + b}$$

$$\text{ie } e^{\frac{b}{a\delta w + b} t} = \frac{a\delta w}{a\delta w + b} \times \frac{a(\delta w - v) + b}{a(\delta w - v)}$$

$$= \frac{a\delta w}{a\delta w + b} \left\{ 1 + \frac{b}{a(\delta w - v)} \right\}$$

陸軍軍醫學校防疫研究報告
第1部 第42號

低 空 雨 下 試 驗

加 茂 部 隊

陸軍藥劑大尉 增 田 美 保

陸軍軍醫大尉 金 子 順 一

軍 事 秘 密

第	1	部
叢		報
分 類	392-0081 502-2	
受 附	15, 6, 7	

目 次

- 1、緒 言
- 2、目 的
- 3、判 決
- 4、審 査 方 法

1、緒 言

本報告ハ昭和十四年三月二十五日ヨリ四月八日ニ至ル前後十二回ニ亙ル低空雨下試験中、此の成績良好ナルモノヲ選擇シ（第20、26、29回何レモ高度100m）此等ヨリ得タル實驗諸元ヲシ多少ノ理論的考察ヲ加味シ基本雨下諸元ヲ決定セント努メタルモノナリ。

2、目 的

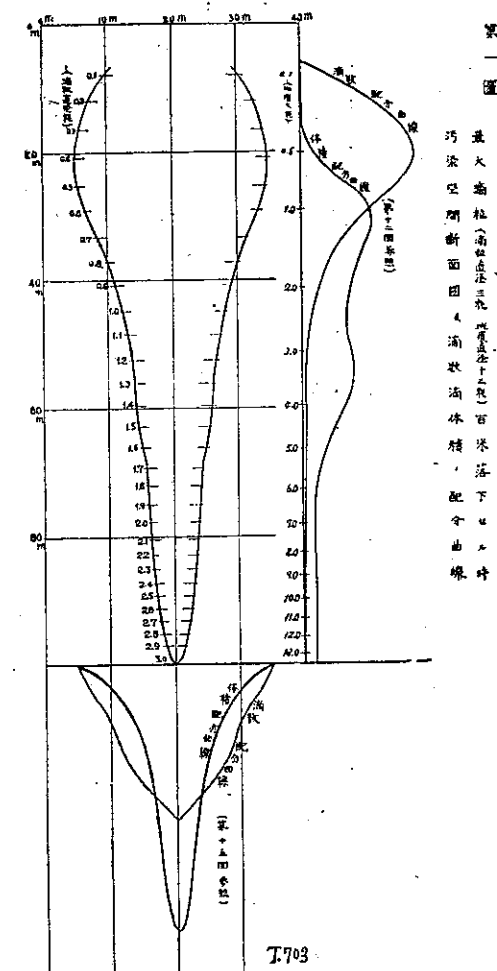
普通擬液ヲ用ヒ雨下装置1型ニヨル雨下直後ニ於ル各種大小滴粒ノ分散配列ノ狀況ヲ審査トス。

3、判 決

雨下航路ニ垂直ナル平面ニテ雨下汚染空間（最大滴粒100m落下セル時刻ニ於ル）ヲ截斷スル第1圖ノ如シ。

即チ自然水平擴散（所謂自然效力界）ハ約30mニシテ滴粒斑痕直徑0.5mm程度ノトコロ數多ク1.0mm程度ノトコロ體積最大ナリ。

而シテ滴粒分裂總數約10億ト推算スルヲ得タリ（液量70L、裝置1型、使用機88輕）



4、審 査 方 法

檢知板ハ100m 間隔4行トシ各行ニ於ル檢知板間ノ距離5m、側風或ハ風床雨下ヲ實施ス。

汚染檢知板ハ各行毎ニ取選メ、各檢知板毎ニ滴粒斑痕ノ最大、最小及10cm²中ノ斑痕ノ大小別ニヨル數ヲ計算シ審査項目ヲ次ノ二項ニ大別ス。

- (1) 汚染空間ノ形狀ニ就テノ審査
- (2) 汚染空間中ノ滴粒ノ數及體積ニ就テノ審査

(1) 汚染空間ノ形狀ニ就テ

該審査ニ當リテハ氣象諸元比較の良好ナル第20回及殆ド風床雨下ニ等シキ第29回ヲ選定セリ。

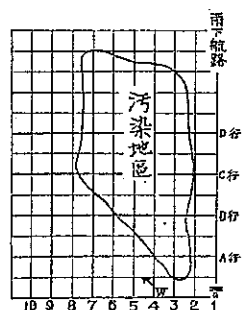
第20、26、29回ニ於ケル氣象諸元表及汚染地區ノ概略ヲ示セバ第1表及第2圖ノ如シ。

第 1 表

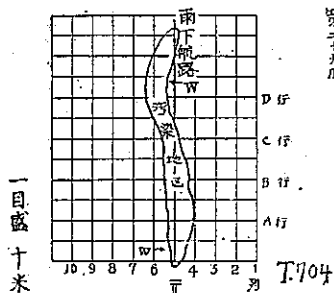
時 及 回 氣 象 諸 元	昭和 14 年 3 月 25 日 13 時 30 分	同 年 4 月 8 日 13 時 50 分	同 年 4 月 8 日 15 時 30 分
	第 20 回 (高度 100m)	第 26 回 (高度 100m)	第 29 回 (高度 100m)
流 氣	良 好	不 良	不 良
天 氣	曇	晴	晴
温 (攝 氏)	1.25	18.7	20.2
濕 度 (%)	94	27	28
氣 壓 (mm)	743.15	749.50	749.40mm
風 速 (米/秒)	2.8	1.2	0.9



第二十回



第二十六回

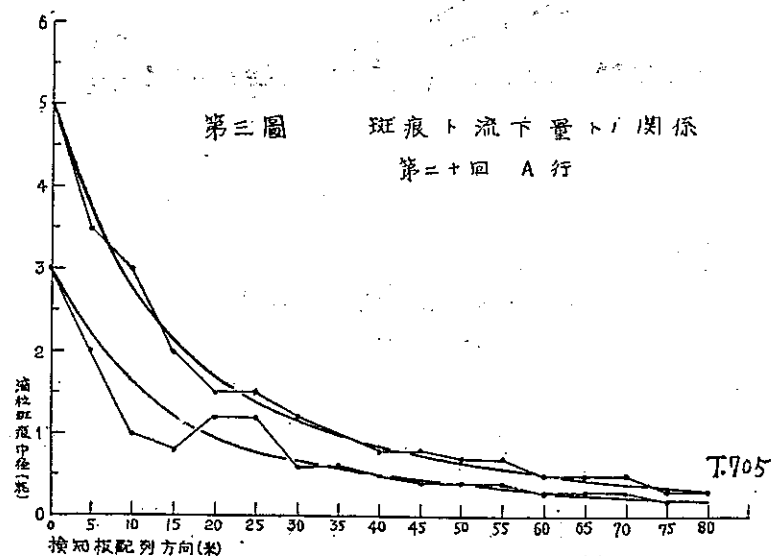


第二十九回

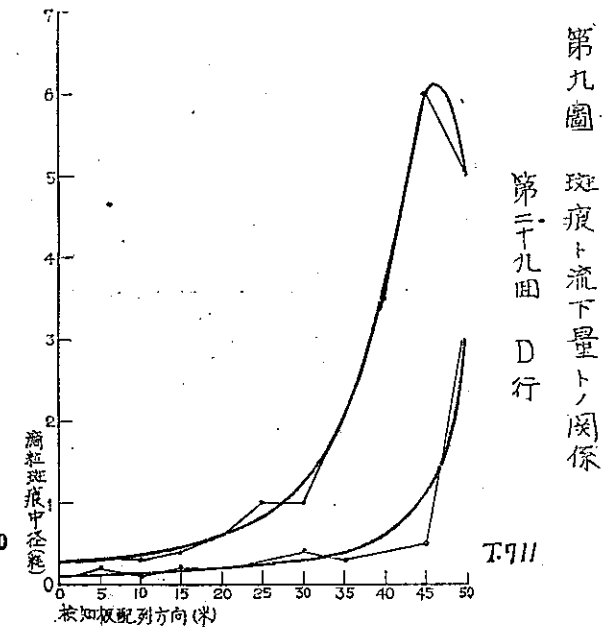
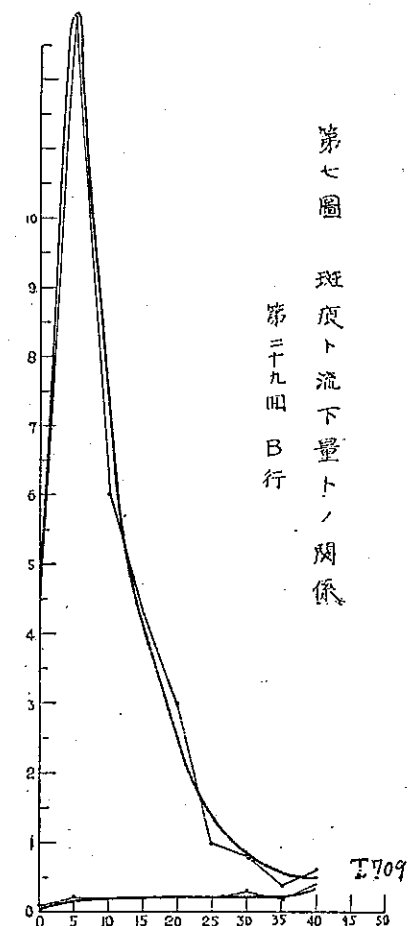
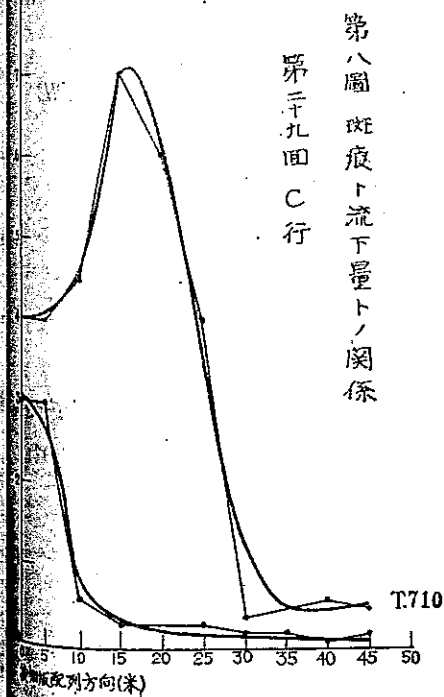
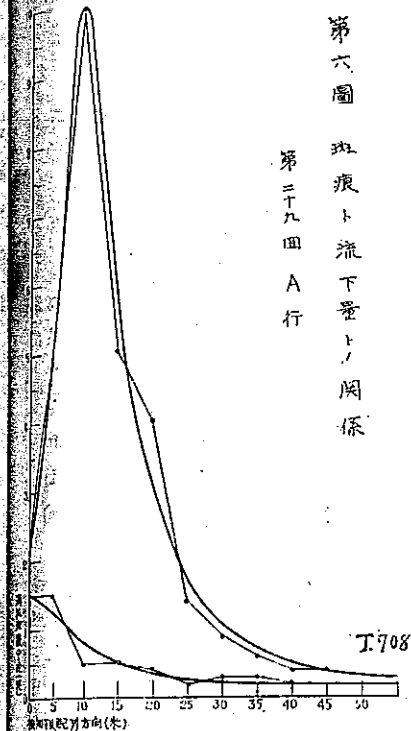
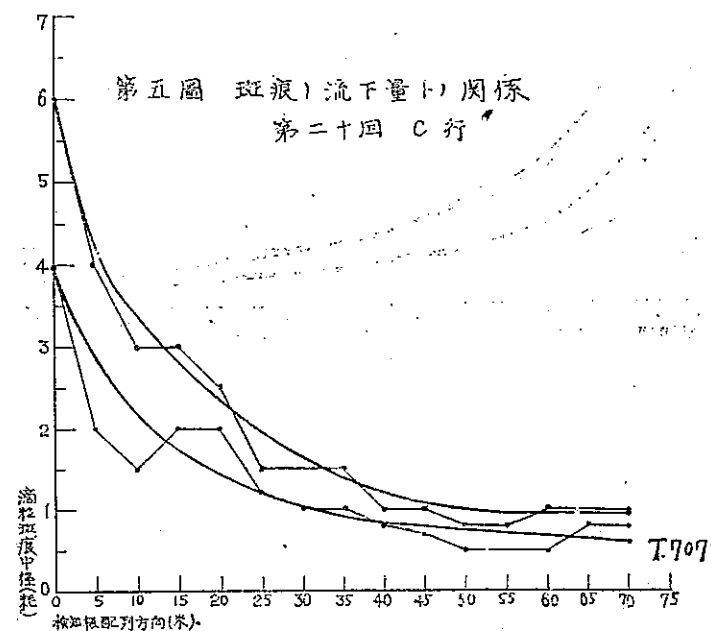
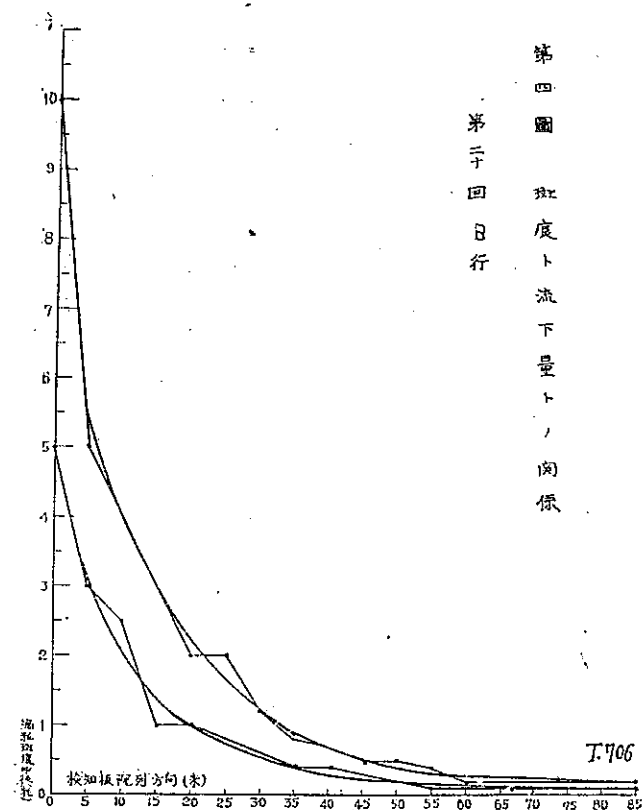
第二圖

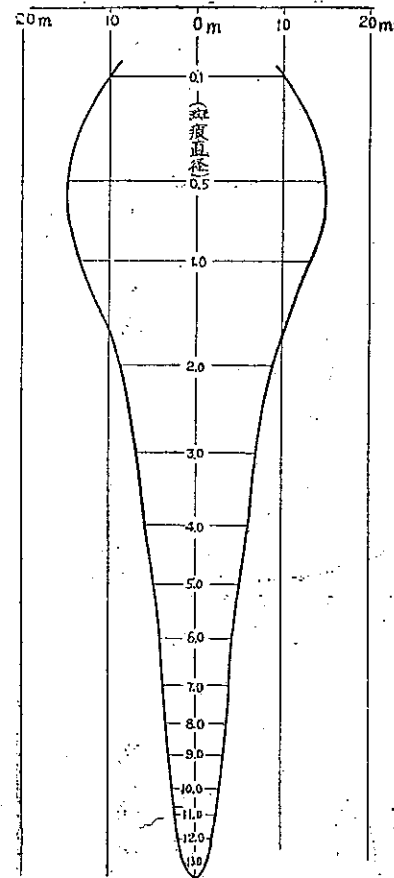
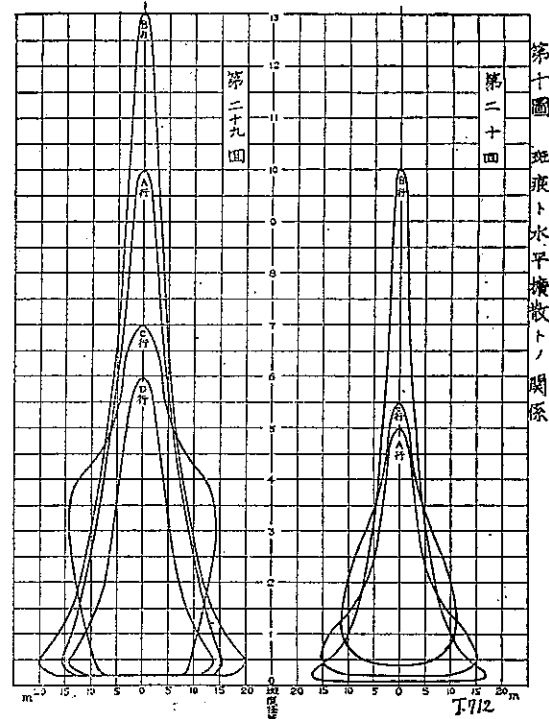
汚染地帯概略圖

各行ニ於テ行ノ方向ヲ横軸トシ斑痕ノ大サヲ縦軸ニトリ、各檢知板ノ斑痕ノ最大最小ヲ記セ
 第9圖乃至第9圖ノ如シ。等大斑痕ヲ有スル滴粒ハ落速同一ナル故風ニヨル流下量モ亦相等シキ
 ト考ヘラル即チ流出後一定ノ幅ニ擴散サレシ等大滴粒ハ其ノ幅ヲ保持シツ、落達ス。故ニ等
 大斑痕ノ落達セル各行ノ上ノ幅ヲ縦軸ノ兩側ニ等分ニ振分ケ平均型ヲツクレバ滴粒ノ斑痕ト水平
 關係ヲ得ベシ。即チ第10圖ノ如シ。此等平均型ヲ更ニ修正シ（水平擴散ヲ成ルベク小ナル如
 ノ此等曲線ノ内接的平均型ヲトル）、滴粒ノ落速ヲ考慮ニ入レ最大滴粒（滴粒ノ直徑約3mm斑痕直
 徑3mm）ノ100m落下セル場合ヲ考フレバ、雨下汚染空間ノ航路ニ垂直ナル平面ニヨル断面圖ハ第
 11圖ノ如シ。



第三圖 斑痕ト流下量トノ關係
 第二十回 A 行





(2) 汚染空間中ノ滴粒ノ數及體積ニ就テ

前記断面圖ニ於ケル滴粒ノ數ノ分布狀態及體積ノ配分狀況ヲ審査セントスルニ當リ、汚染ノ末端ニ位スル行及惡氣流ノ存スル行ヲ省略シ、第20回A B行、第26回B D行、第29回B C D行ノ成績ヲ採用セリ。此等成績表ヲ一括スレバ第2表乃至第6表ノ如シ。

第20回 第2表 滴粒配分表

A行	流下量方向 (m)																總計	%	體 積		
	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75				80	
班痕 (mm)																					
5.0~																					
4.0~	5																	5	0.1	9.350	
3.0~	15																	15	0.3	16.950	
2.0~	33	80	20	3														136	2.7	78.336	
1.0~		80	217	107	120	104												623	12.4	129.996	
0.5~							223	193	237	450	800	500						2403	47.4	124.956	
0.0~													600	600	500	70	120	1890	37.3	10.982	
總計																		5977		370.550	

第20回 第3表 滴粒配分表

流下量方向 (m)																				總計	%	體 積
B行	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80	85				
班痕 (mm)																						
9.0~																						
8.0~		5																	5			
7.0~																						
6.0~		6																	6			
5.0~		3																	3			
4.0~		2	5																7			
3.0~		2	50	17															69			
2.0~			5	21	46														72			
1.0~					153	300	300	68											821			
0.5~							164	300	160										624			
0.0~										600	130	160	160	50	30	30	20	20	1200			
總計																			2807			

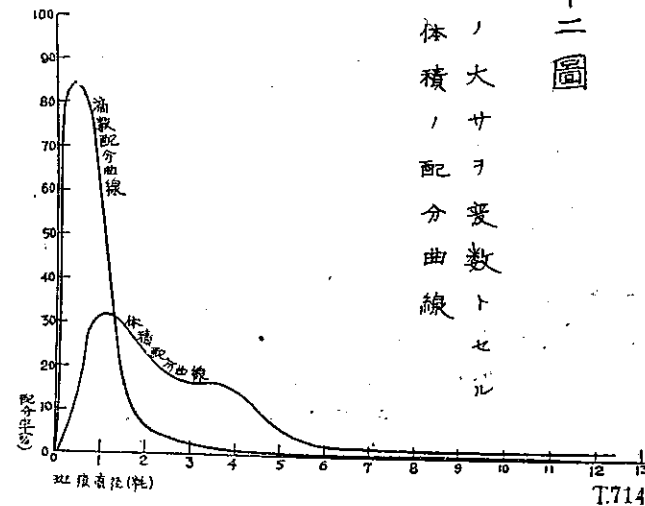
次 = 此等成績表ヨリ

- 1 大小滴粒ノ數及體積ノ配分狀況
 - 2 水平擴散方向ニ於ケル數及體積ノ配分狀況
- ヲ審査セントス。

(1) 第2表乃至第6表ノ斑痕ノ大小ニ從フ數ノ配分ノ百分率ヲ一括シテ其等ノ平均ヲツケル
 = 此ノ數ノ平均百分率ヨリ體積ノ平均百分率ヲツクレバ、滴粒ノ大サヲ變數トスル數
 積ノ配分曲線ヲ得ベシ。即チ第7表及第12圖ノ如シ。

第 7 表

斑痕 (mm)	0.0~	0.5~	1.0~	2.0~	3.0~	4.0~	5.0~	6.0~	7.0~	8.0~	9.0~
第20回 A行 (%)	37.3	47.4	12.4	2.7	0.3	0.1					
" B行 (%)	42.8	22.3	29.3	2.6	2.5	0.3	0.1	0.2		0.2	
第26回 B行 (%)	38.0	40.0	18.0	10.0	0.7	0.9	0.3	0.2		0.1	
" D行 (%)	28.2	42.3	22.0	2.9	3.6	0.2	0.5	0.2	0.2		
第29回 B行 (%)	33.5	28.4	28.5	5.8	2.1	0.7	0.4	0.2	0.1	0.1	
" C行 (%)	64.7	15.2	10.6	4.5	2.4	1.8	0.3	0.2	0.2		
" D行 (%)	31.3	44.8	16.5	3.0	3.2	1.2	0.1				
數ノ平均百分率 (%)	39.4	34.4	19.7	4.5	2.1	0.7	0.2	0.1	0.1	0.1	0.0
體積平均 (%)	1.6	12.4	28.2	18.0	16.4	10.0	3.8	3.7	3.6	4.6	



滴粒ノ大サヲ變數トセル
 數及體積ノ配分曲線
 第十二圖

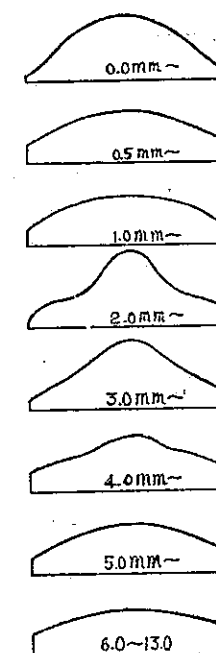
第 6 表 滴 粒 配 分 表

第29回										第29回										第29回																	
流下量方向 (m)										流下量方向 (m)										流下量方向 (m)																	
B行	0	5	10	15	20	25	30	35	40	總計	%	C行	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	總計	%	D行	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	總計	%
班痕 (mm)												班痕 (mm)													班痕 (mm)												
10.0~								2		2	0.1	7.0~													7.0~												
9.0~								1		1	0.0	6.0~													6.0~												
8.0~								3		3	0.1	5.0~													5.0~												
7.0~								3		3	0.1	4.0~													4.0~												
6.0~								4		4	0.2	3.0~													3.0~												
5.0~								1		7	0.4	2.0~													2.0~												
4.0~								8		7	0.7	1.0~													1.0~												
3.0~								30		5	2.1	0.0~													0.0~												
2.0~								3		95	5.8	0.0~													0.0~												
1.0~								36		305	28.5	0.0~													0.0~												
0.5~								2		3	28.4	0.5~													0.5~												
0.0~								21		23	28.4	0.0~													0.0~												
								33		10	33.5	0.0~													0.0~												
								5		33	33.5	0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~													0.0~												
												0.0~																									

(2) 等大斑痕ノ水平擴散方向ノ配分ヲ求ムル爲、第2表乃至第6表ニ於テ等大斑痕ノ擴散長ヲ一定トシ、各行毎ノ全量ヲ同一關係ニ置キ、此ノ同一全量ヲ變ヘルコトナク各行毎ノ配分關係ヲ修正シ、此等ノ平均曲線ヲ作り縱軸ノ兩側ニ平均ニ振分レバ第13圖ノ如シ。

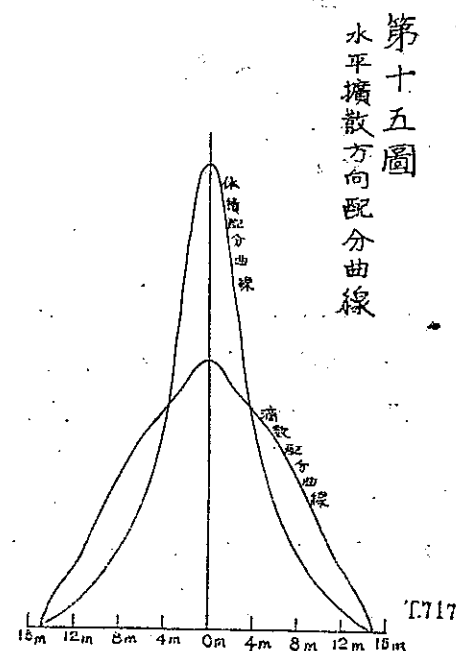
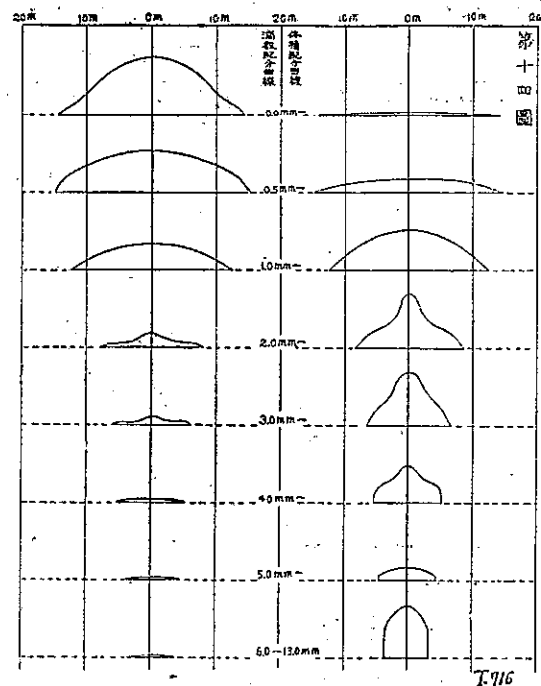
第十三圖

水滴
平粒
擴斑
散痕
方大
向小
滴別
數ニ
配ヨ
分ル
曲線



F715

第13圖ハ等大滴粒ノ水平方向ノミノ配分關係ニシテ不等大滴粒間ニ於テハ無關係ナル曲線ナリ。今茲ニ全體トシテノ相互配分關係ヲ見ルベク、第12圖ノ數ノ配分曲線ヲ參酌シ第13圖ノ曲線ヲ修正スレバ、水平方向ノ配分關係ハ勿論滴粒ノ大小間ノ配分關係ヲモ得ベシ。即チ第14圖ノ數ノ配分曲線ノ如シ。同圖體積配分曲線ハ數ノ曲線ニ體積ヲ乘ジ第12圖ノ體積配分曲線ニヨル不等大滴粒ノ配分關係ヲ考慮ニ入レ水平及滴粒ノ大小別ニヨル配分曲線ヲ畫キタルモノナリ。即チ此等二組ノ曲線ノ總和ヲ表シタル水平方向ノ數及體積ノ配分曲線ハ第15圖ノ如シ。



以上ノ結果ヲ綜合シ滴粒配分狀況ヲ畫ケバ第1圖ノ如シ。

最後ニ分裂セル滴粒ノ數ヲ概算セントシ蒸發ノ最モ少キ第20回ニ付計算セリ。

即チ第2、第3圖ニ於ケル數ノ總計 (5077及2807) ノ平均 (3942) ヲ求ムレバ、該數ハ汚染地ニ空般ヲ通ジ幅10cmノ檢知板配列方向ノ帶狀地帯ニ於テ5m毎ニ長サ10cmニ區切りタル10cm²ノ面積ニ落達セル滴ノ數ナリ。故ニ 3942×50=19710 ナル數ハ幅10cm檢知板配列方向ノ總數ナリ。故ニ流出距離ヲ500mトスレバ汚染地區ニ落達セル粒ノ總數ハ 197,100×500=985,500,000 即チ約10億ト推察スルヲ得ベシ。

又同様ニシテ此ノ時ノ體積ヲ計算スレバ 97.83Lヲ得タリ、雨下液量 70Lト比較シ略々妥當ナル數字ト見做サルベシ。

汚染地區中ノ汚染面積ハ落達セル滴ノ體積ヲ知レバ

$$S = 8.5 \times V \quad \left(\begin{array}{l} S \text{ ハ汚染地區ノ面積} \\ V \text{ ハ } S \text{ ヲ形ヅクル滴ノ體積} \end{array} \right)$$

ニヨリ直ニ計算スルヲ得ベシ。

如何トナレバ

斑痕直徑 (D) ト滴粒直徑 (d) トノ間ニハ

$$D = 2.38 \times d^{1.5}$$

ナル實驗公式アリ。(當審査班昭和14年6月ノ實驗ニヨルモノ)

又滴粒ノ體積 (V) ト直徑 (d) ノ關係ハ

$$V = \frac{4}{3} \pi \left(\frac{d}{2} \right)^3$$

ナリ。

故ニ斑痕面積ヲSトスレバ

$$S = \pi \left(\frac{D}{2} \right)^2 = \frac{\pi}{4} (2.38 \times d^{1.5})^2$$

故ニ

$$\begin{aligned} S/V &= \frac{\pi}{4} (2.38)^2 d^3 / \frac{\pi}{6} d^3 \\ &= \frac{3}{2} (2.38)^2 \\ &= 8.5 \end{aligned}$$

即チ

$$S = 8.5V$$

ナリ。

- 1、滴粒斑痕ノ直徑ハ短直徑ヲ測リ、
- 2、滴粒ノ落速ハ雨下用法草案第2圖ヲ用ヒ、
- 3、滴粒斑痕直徑ト滴粒直徑トノ關係ハ審査班ニ於ケル實驗値ヲ適用セリ。

陸軍軍醫學校防疫研究報告
第1部 第30號

PX_L 效果略算法

陸軍軍醫學校防疫研究室 (部長 石井少將)
陸軍軍醫少佐 金子 順 一

軍事秘密

第 1 部
原 稿
分類 385-8 441-9 336-41
受附 昭和 18/2/4

目 次

- 第 1 緒 言
- 第 2 用字説明
- 第 3 前提及假定
- 第 4 効果路算法
- 第 5 効果發現状況
- 第 6 既往作戦ニ於ケル變數値
- 第 7 目標地區ニ於ケル予想變數値
- 第 8 結及参考文献

第 1 緒 言

兵器ノ具備スベキ條件ノ一トシテ其ノ使用量ト之ニ依ル効果トノ關係ノ明デアル必要性ヲ考ヘネバナラヌ。

例ヘバ一定正面ノ敵陣地制壓ニ要スル彈丸數ヲ予メ算定シテ始メテ細密攻撃計畫ヲ樹立スル事ガ出來ル。

吾人ノ現有兵器中其ノ質及特性ニ於テ最モ優レタ彈種ノ一トシテノ PX ニ於テモ其ノ効果ヲ予測シ得テ、之ニ基ク製造及運用計畫ヲ策スル事ノ合理的デアルノハ論ヲ俟タヌ。

然ルニ PX ノ効果ハ其ノ直接罹患致死作用ノミヲ目途トシテモ之ヲ決定スル因子ガ複雑多岐デアルタメ、之ヲ爆彈ニヨル理學的的作用ノ如クニ取扱フ事ハ不可能デアルガ、PX ヲ兵器トシテ取扱フ以上ハ少クとも之ニ依ツテ期待サルベキ効果ヲ何等カノ手段ニ依リ或ル程度迄ハ概算シ得ル事ガ必要デアルト信スル。

幸ニシテ既往數次ニ渉ル作戦ハ此ノ種ノ問題ノ解決ニ重要ナ規準ヲ與ヘル。他方昭和十五年以來石井閣下ノ提唱ニヨル細菌戰効果ノ A B E D O 説ハ爾後ノ經テテ益々其ノ論據ヲ確立シ來ツタ。

茲ニ命ゼラレテ A B E D O 説ニ基ク PX ノ効果予想ヲ敢テ試ミタノデアルガ、希クハ大東亞戰爭ニ於ル PX ノ赫々タル成果ニ基

キ遂次斯ル考察方法ヲ進展セシメ得ン事ヲ期スルモノデアル。

第2 用字説明

○A (外因, *Auszere Bedingung*)
目標地區ニ於ル疫學的外的諸條件ヲ總括ス。敵ノ直接防疫工作(S)ヲ含ム。

○B (媒体, *Bindemittel*)
攻撃ニ用フル病原体ヲ終末對照タル人畜ニ結合セシメル媒介体又ハ媒介機序ヲ總稱スル。即チ本篇内容ニ於テハXガ之ニ相當スル。

○E (病原, *Erreger*)
病原体及其ノ状態ヲ云フ。一般的ニハ

$$E = f(m, v, r, \mu)$$

ヲ表ハサレル。即チ「メダイレ」説(石井：昭和八年)デアツテ、 m ：量、 v ：毒力、 r ：抵抗力、 μ ：媒質ヲ意味スル。本篇ニ於テハ第3～前提4[°]ノ通り、 m ハ $P \times 1, 0$ ニ含マレル P 菌量、 μ ハ $P \times$ ノ体組織ニ相當シテ居ルカラ待ニ $E = f(v, r)$ ト考ヘテモ良イ。

○D (内因, *Disposition*)

當該疫病ニ對スル終末對照ノ罹患素因ノ總括デアラウ。敵ノ間接的防疫工作トシテノ予防接種ノ效果ヲ包含スル。但本篇ニ於テハ密接度、住居條件等ノ内第一次感染ニ關與スル部分ハDニ含マシメ、營養疲勞等ノ内第二次流行ニ影響スル部分ハAニ入レテ考ヘテ居ル。

○O (運用, *Operation*)

運用ノ總括。方法ノミナラズ運用器材ノ條件、及又ハEノ運用間自然損耗ヲ來ス因子ヲ含ミ、之ガタメ運用時ノ氣象交感ヲモ考慮スル。(疫學的意義ニ於ケル氣象ハ當然Aニ含マレル。

○彈種係數

攻撃彈種ノ單位量ニ於ル $D \times E$ ヲ云フ。

○運用係數

彈種係數ニ O ヲ乘ジタモノ。

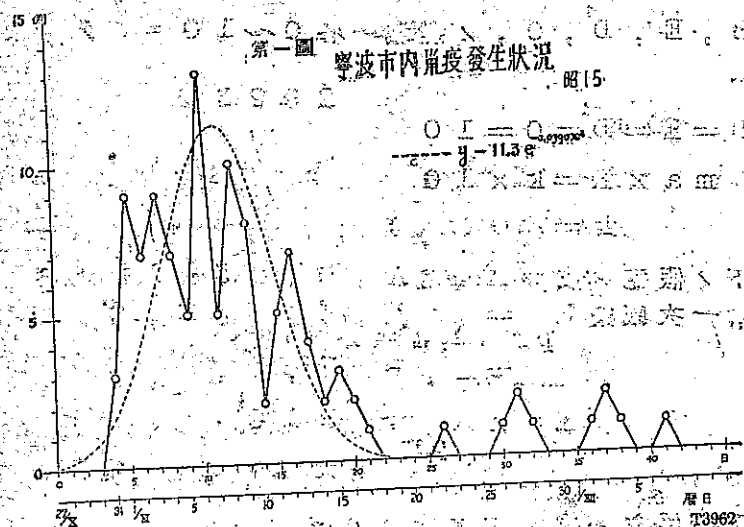
上記2係數ハ何レモ努力改良ニ依ツテ増加セシメ得ルガ、A及Dハ敵地及敵ノ状況デアツテ目標及時期ニ依リ、自ラ一定シ之ヲ任意ニ變更シ得スモノデアル。

第3 前提及假定

- 前提1[°] 一定條件ニ於ケル效果ハ使用兵器量ニ比例ス。
前提2[°] 效果ハ第一次感染ト第二次流行トヨリ成ル。
前提3[°] 效果ハA, B, E, D, Oノ函數ナリ。
前提4[°] 本篇ニ於テ述ベル效果トハ $P \times 1, 0$ ニ對スルモノトス。(前提1[°]参照)

説 明

- 1) 條件ノ相等シイ數多ノ目標ニ同一條件ノ攻撃ヲ併施スレバ各目標ニ於ケル效果ハ何レモ相等シト考ヘル。此ノ時全效果ヲ綜合的ニ考慮スレバ前提1[°]ハ明ニ成立スル。之ヲ擴張シテ一目標ニ對シ異ル種々ノ量ヲ使用スル場合ニ效果ハ使用量ニ比例スルモノトスル。
2) 第一次感染トハ使用シタ $P \times$ ニ依ル直接效果デアルト解釋シ、之ニ依テ感染獸ヲ生ジ之ニ附着シタ在來ノ X ガ毒化アレテ發揮スル效果ハ第二次流行ニ算入スル。實際的ニ兩者ノ限界ヲ區別スルノハ困難デアルトシテ概念的ニ2[°]ハ成立スル。即チ使用 $P \times$ ノ感染獸保持日數ト潛伏期間ヲ加ヘタ時期内ノ效果ノ大部分ヲ第一次感染ト考ヘ第二次流行曲線ト初發點ヲ攻撃時ニ一致セシメル事ニ依テ該期間内ニ理論上發生スル少數ヲ同期間發生數カラ除去スル。昭和十五年寧波戰例ニ於ケル第一次感染發現狀況ヲ例示スレバ第一圖ノ様デアラウ。



3) 効果ヲ支配スル無疫ノ因子ヲ A, B, E, D, O ノ範疇ニ分ツテ然ル後個々ヲ検討スル所ニ石井説ノ簡明性ヲ存スル。尤ヨリ細菌戦ノ効果ノ真證ハ他ニ更ニ精神的經濟的ナ恐慌ヲ招来スルニ在ルジ、吾人ハ先ヅ直接罹患致死効果ヲ大ナラシムル様ニ努力スル事ニ依ツテ任務ヲ完遂シ得ルモノデアル。従ツテ本篇ニ於ケル効果トハ單ニ罹患致死効果ヲ意味スル。

4) 前提1°ニ基キ效果(R)ハ使用量ニ比例スル故、先ヅ PX ノ基本量トシテ1,000ヲ選定シ之ニ依ル基本效果ヲ求メ、使用量 X 疋ノトキハ效果ハ $X \cdot R$ デアルト見做ス。本篇ニ於ケル效果トハ此ノ基本效果即チ1,000疋ノ效果ヲ指ス。

1° $PX1,000$ 疋ノ最大效果ハ第一次感染1,000名、第二次流行ヲ含ム全效果ハ其ノ200倍ナリ。即チ1,000疋ノ最大效果ハ罹患200,000名ナリ。

2° 效果ハ A, B, E, D, O ヲ變數トスル時次ノ如ク表ハテル。

$$R = f(A, B, E, D, O)$$

$$= k \cdot A \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O$$

A, B, E, D^{-1}, O ノ變域ハ各 $0 \sim 10$ ニシテ、最大效果ニ於テハ

$$A = B = E = D = O = 10$$

$$\text{i.e. } \max R = k \times 10^5$$

$$\therefore k = 2.0 \text{ (名)}$$

但以下ノ假定ノ成立ノキニ $A = 0.05 \sim 10$ トス

$$3^{\circ} \text{ 第一次感染 } R_{pr} = f(B, E, D, O)$$

$$= k' \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O$$

$$\max R_{pr} = k' \times 10^4$$

$$\therefore k' = 0.1 \text{ (名)}$$

4° 流行係數ハ次ノ如ク表ハサル。

$$Cep = \psi(A)$$

$$= k'' \cdot A$$

$$\max Cep = k'' \times 10$$

$$\therefore k'' = 2.0$$

5° 2°~4°ニ依リ次ノ關係アリ。

$$R = R_{pr} \times Cep$$

$$= k' \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \times k'' \cdot A$$

$$k = k' \cdot k''$$

$$k = 0.1 \cdot 2.0 = 0.2 \text{ (名)}$$

$$\therefore R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

$$R = 0.2 \cdot B \cdot E \cdot D^{-1} \cdot O \cdot A$$

攻 撃 目 標	P X Kg	効 果			I . O k g 換 算 値	
		一 次	二 次	三 次	R p r	O e p
15.6.4. 農 業	0.005	8	607		1600	123000
15.6.4. 農 業	0.010	12	2424		1200	343600
15.10.4. 海 軍	8.0	219	9060		26	1,159
15.10.2 海 軍	2.0	104	1450		52	777
16.1.4. 海 軍	1.0	310	2500		194	1,756
17.8.1. 海 軍	0.131	42	9210		321	2,550
17.8.2. 海 軍	0.131	42	9210		321	2,550

2) f 形 = 隠シテハ其ニ研究ヲ要スルデアラウガ。前提及
1° 今最ニ簡便ニ表現シ得ルモノトシテ 2° ノ形ヲ用ヒル。
各要素ハ効果表現ニ最モ都合良シト考ヘラレル理想限ヲ
10トシ、最モ都合良シト考ヘラレル場合ヲ0トスル。但
DハD⁻¹ノ値ヲ0~10トスルガ方ガ便デアル。從ツテ以下
ノ数値ヲ述ベル場合ニハ一般ニD⁻¹ノ値ヲ意味スル。

此ノ形ノ意味スル所ハ任意ノ一要素ガ0ナレバ効果ノ皆
無トナル事デアルガ、3° 以下ノ成立ノタメニハ (a + A)
B・E・D・0ノ形トスルカ、或ハAノ領域ヲ0.05~
10トセネバナラヌガ茲デハ後者ヲ採ツタ。即B=E=D⁻¹
=0=0, A=0, 0.5ガ最モ少値デアル。

3) R_{pr}ニ於テAノ領域ニ屬スル因子ガ作用スルデアラウ
ガ、計算ノ便宜上ニ次流行ニ關係スル因子ハ總テAニ包含
サセ、第一次感度ニ關係スル内外因ハ總テDニ含有サセル。
從ツテ茲ニ云フA及D⁻¹ニハ同シ因子ヲ含ム可能性ガアル。
然シR_{pr}ガ大キクレバO_{ep}ガ小ナクナツテ全効果ニ影響
少ナク、O_{ep}ノ大トナル事ハR_{pr}ノ小タイ事ヲ相殺スルノ
デ、求ムル結果ガRデアレバ新ル錯亂ヲ問題トスル必要ハ
ナシ。

第4 効果略算法

假定2°、3°及4°ニ依リ第一次感度及全効果、從ツ
テ第二次流行度(R - R_{pr})ヲ算出スル。

此ノ計算ニ終局ナラシメルタメニ計算圖表ヲ提示スル
(第一圖)此ノ圖表ノ使用法ハ口ニ記シタ。

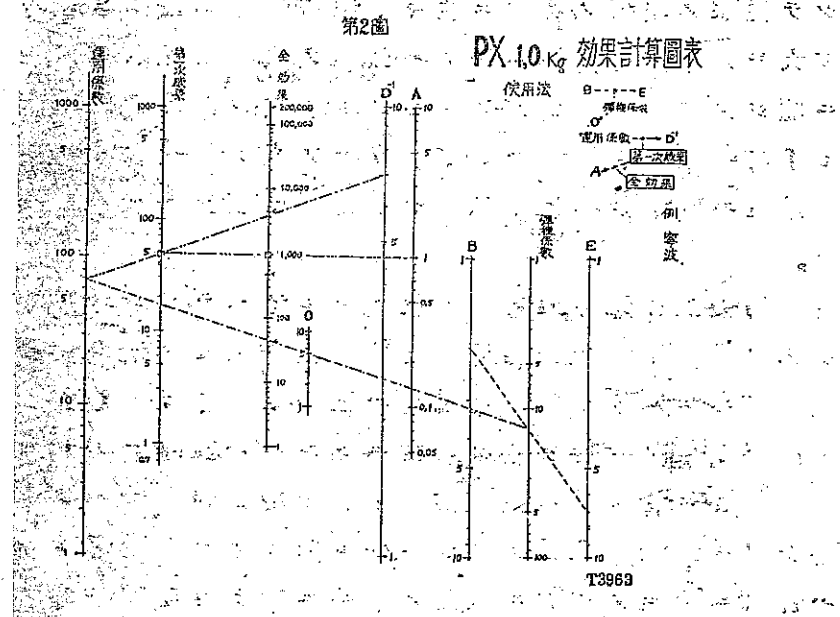
15.6.4. 農 業	0.005	8	607		1600	123000	76,9
15.6.4. 農 業	0.010	12	2424		1200	343600	203,0
15.10.4. 海 軍	8.0	219	9060		26	1,159	44,2
15.10.2 海 軍	2.0	104	1450		52	777	14,9
16.1.4. 海 軍	1.0	310	2500		194	1,756	9,1
17.8.1. 海 軍	0.131	42	9210		321	2,550	70,3
17.8.2. 海 軍	0.131	42	9210		321	2,550	70,3

此處デ各變數ノ常用値ニ就テ説明スル。

主として從來ノ流行ノ程度ニ基キ、流行始期ニ使用スレバ最も効果ガ大キク、流行間期ニ於テハ目標ノ氣象及從來ノ流行終熄状態ニ應ジテ多少ノ効果ガアルモノト想定シテAノ値ヲ定メル。最も「都合悪キ」場合ハ0, 0.5デアツテ第一次流行ニ止マリ、普通ニハ0, 5~2, 0トシ、地區ニ依テハ5, 0程度迄トスル。

敵ノ直接防疫工作ガ絶大ノ効ヲ收メルト考ヘラレバ0, 0
5~0, 1ノ程度トナル。即チ直接防疫工作ノミニ依ツテハ之
ヲ如何ニ完璧ニスルトモ第一次感染ハ防止シ得ナイ。(之ヲ逆
ニ考ヘル時ハ、敵ノ攻撃ヲ全ク無効ニスルニハ友軍ノD⁻¹ヲ絶
大ナラシメ、Aニ含マレル直接防疫工作ヲ絶對強化スルノミデ
ハ不完全ナル。即チB及Cガ如何ニ優レタリトモ0ヲ零トスレ
バ効果ハ皆無ニナルノデアル故此ノ意味ニ於テモ防空防諜ノ積
極化ガ大キナ効ガアル。)

從來ノ流行ヲ第一次感染ト第二次流行ニ區分スル事ハ容易デ
ハズ。何レノ流行ニ於テモ元來ハ僅數ノ患鼠又ハ患者ニ基キ
後年ノ流行ヲ總テ第二次流行ト見做ス事モ出來ル。又多
クノ自然流行ニ於ケル第一次感染ハ獸疫デアルト考ヘラレル。
1900年 San Francisco ノ例ニ於テ一支那人患者ニ初
見ナル様ニ見ユル流行モ其ノ前ニ鼠ペスト」ガ潛行シテ居ツタ
コト見做サレテ居ル。(Hampton: Plague in the
U. S., publ. Health Rep. 55, 1143; 1940年) 蓋シ
一地區ニ於テ「ペスト患者ガ新タニ移入セラレル事ハ稀デア
ラズ。從ツテCepノ想定ニハ流行ノ稍々初期ニ於ル人例ヲ Rpr
ト考ヘルカ或ハ新京ペスト」ノ例ノ如ク初メニ某病院内ニ集簇シ



用法、次ノ計算ト同等ナル。

全效果
第一 天感染後
運用係致
彈類係致

テ生ジタ致例ヲ取ルカデアアルガ、何レモ吾人ノ意味ニ於テノ第一
次感染トハ断定シ得ヌ。即チ自然ニ於ケル人—鼠ノ關係ガ此
ノ問題ヲ複雜ニシテ居リ、又自然ニ於テハ決シテP Xガ鼠ベス
ト1以外カラ忽然ト大数ニ現ハレル事ヲナイデアアル。茲ニ於
テCepノ確證ナ據點ハ既往ノ經驗以外ニハ求メ得ナイ。然シ作
ラAノ判定ニ當ツテハ既往ノ流行記録ヲ參照スル事ハ絕對必要
デアアル。即チ從來大流行ノアツタ場所、特ニ夫ガ持續シタ場所
ハソノ流行ノ大小ニ應ジテ多少ノ「ベスト」要因ガアル譯デア
アル。大流行ノ地デハAハ大キク、小タイ流行シカ起ラヌ土地デハ之
ガ小タイト考ヘルノガ至當デアアル。

從來流行記録ノ無イ個所ニ於ケルAノ判定ニハ特ニ慎重ナル
ヲ要スルガ、之ニ關シテハ第7ヲ觸レ。

Aヲ各因子ニ分解シテ流行ノ本質ヲ確カメ、之ヲ應用シテ細
菌戰ノ至大効果ヲ求メル事モ今後吾人ノ責務デアアル。

B

P Xヲ直接秤量スルノガ容易デナイ爲ニP X量トシテ原X量
ヲ表示サレル場合ガアル事ヲ考慮シテ次ノ様ニ表ハス。

$B = \text{毒化生存率} \times \text{仕上率} \times \text{有効率} \times 10$ (使用時)
即チ毒化生存率 $= 1 - (\text{自然損耗率} + \text{毒化損耗率})$ 、
仕上率 $= \text{保菌率}$ (ニ從來ノ毒化率)、有効率 $= \text{保菌X中感染能}$
保持率デアアル。

從來ノ諸資料ヲ綜合スレバ大量生産時ノ最大値ハ5.0ノ程
度デアラウ。一般ニ仕上完了後5~10日位デハBハ1~3ト
見做スベキデアアル。使用時ノ氣象ニ依ルP Xノ有効生命ノ伸縮
ハ0ニ含メテ考ヘル。

P Xニ含マレルP菌ノ質ニ關スルモノデアアルガ所謂Infect
ivityヲBノ有効率ニ含メテ考ヘルハBハ毒化ニ使用サレ

タ原菌株ノ質ヲ以テ代表サセ得ル。使用時ノ氣象ガP X体内ノ
菌ヲ適ニ變性セシメ様ナ狀況ガアレバBノ有効率トハ離レテB
ヲ減少セシムベキデアラウ。

現在使用セラレルP菌デハB $= 7, 0 \sim 8, 0$ ト定メル。

光天的及後天的ノ個人的及集團的免疫度、終末對照ノ生
活條件ヲ考慮シ、一般ニ6, 0~8, 0ヲ基準トスル。特別ナ
營養不及、疲勞蓄積等ノ條件ガアレバ1~2増加シ、後方基地
ニ於テ一般狀況良好ナ生活ヲ行フ場合ハ1~2減少、更ニ特異
的予防處理ノ施テラ場合ハ1~2ヲ減ズル。但如何ニ體質強
健デアリ、完全免疫ガ行ハレタ場合デモ一般ニ $D^{-1} = 0$ トナル
事ハ考ヘラレナイ。

0

使用P Xヲ終末對照ニ到達セシメル能率ニ相當スル。

謀略的使用ニ於テ終末對照ニ近迫シテ用ヒ得ル場合ヲ10トス
ル。一般ニ

$0 = \text{運用難易度} \times \text{運用間生存率} \times \text{有効濃度形成能率} \times \text{到達能}$
率 $\times 10$

運用間生存率ハ器材ノ機能不全ニ依ツテ致死又ハ無効化セラ
レヌ部分ヲ云ヒ、有効濃度形成能率ハ最少有効濃度(假ニ10
四 $\frac{1}{100}$ トス)ヲ形成スル面積ト使用量ヲ以テ一樣ニ有効濃度ヲ構
成シ得ル計算上ノ面積トノ比、到達能率ハ目標捕捉及爾後ノ
到達難易性ヲ意味スル。

P Xノ移動能ハ一夜30米ノ程度ニ過ぎ(貴室院)故ニ初
發感染惹起ノタメニハ必ず最終對照ヲ含ム地域ニ命中セシメル
必要ガアル。又着地後目標ノ狀況ニ依テ無効果スル部分ノ多少
ヲ考慮セオバナラナイ。例ヘバ日中灼熱シタ補装又ハ屋根ニ落

テ、或ハ水上ニ落選シ、時ニハ滞ニ圖マレタ交通ノナイ土地ニ落テルモノハ恐ラク遠ニ無効化スルデアラウシ、地上ニ落選シタモノガ高床住居内ヘ侵入シ難イ事モアラウ。地上運用又ハ謀略的使用ニ於テハ状況ガ有利デアル事ガ多イ。

上式ニ依ル0ノ算出例ハ次ノ様デアル。

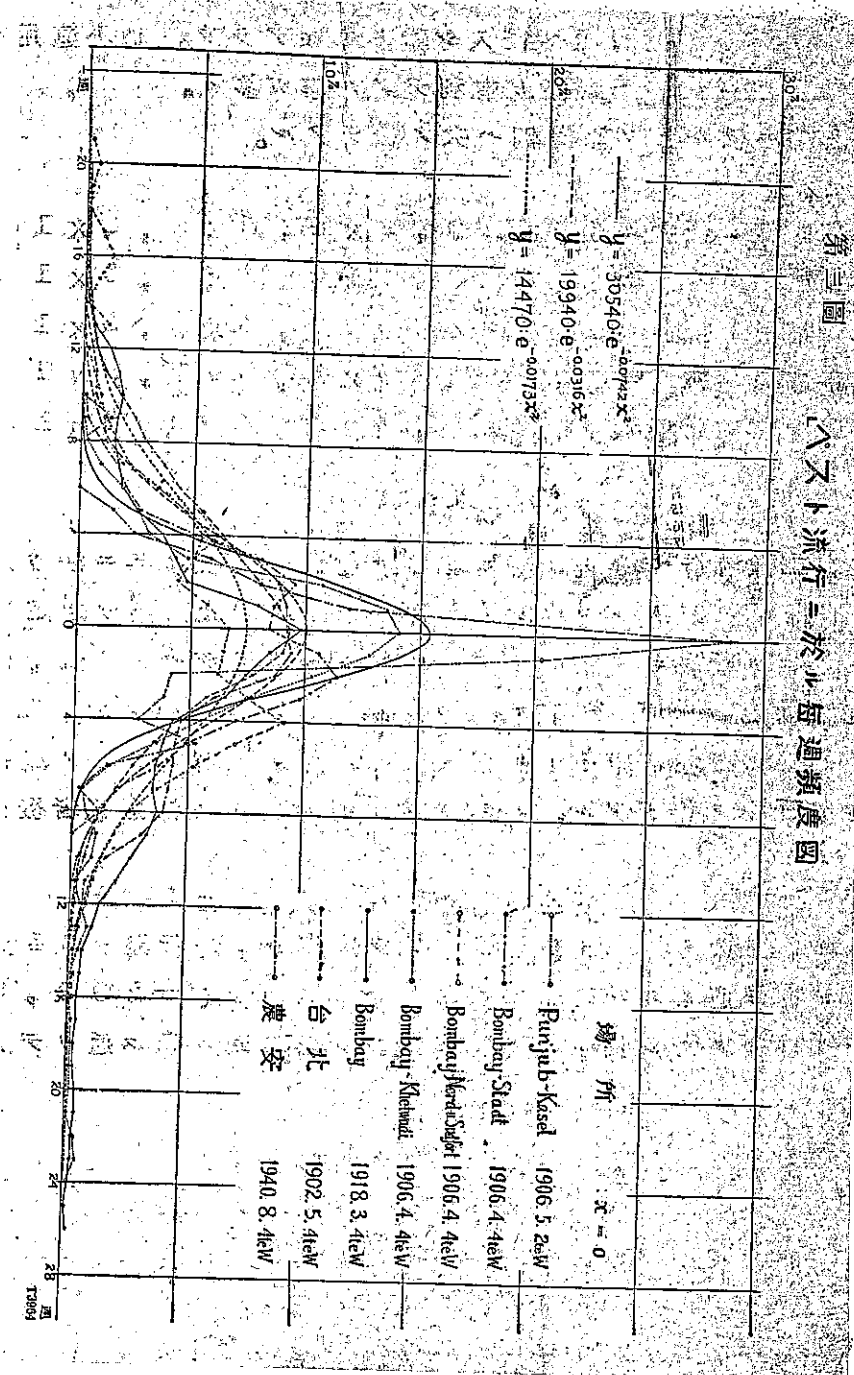
0市街・低撥=0,9×0,9×0,8×0,8×10=5,2
 0市街・高撥=1,0×0,8×0,2×0,5×10=0,8
 0市街・爆撃=1,0×0,5×0,8×0,8×10=3,2
 0市街・謀略=1,0×1,0×1,0×1,0×10=10,0
 0野戦・低撥=0,9×0,9×0,8×0,5×10=3,2

第5 効果發現状況

第二次流行ニ導入シ得タ場合ハ通常ハ爾後多年ニ涉リ大小ノ流行ヲ繼續スルデアラウ。然レ前提ニ基イテ最大効果ヲ限定スル場合ニ全効果ヲ段次ニ分割スル事ハ必ズシモ容易デハナイ故、効果ハ使用直後發現シ一同ノ流行ニヨツテ終結スルト假想スル。此ノ時流行ノ形ハ確率曲線ノ型デアルト見做ス。茲ニ從來ノ二三ノ流行例ヲ示セバ第三圖ノ様デアル。今次二次流行ニ於ケル毎週患者發生數ヲ

$$y = A e^{-b^2 x^2} \quad (x: \text{週})$$

トシ、流行ノ始終ヲ $y \leq 0$, 7ヲ規定シ、流行期ヲ24週, 36週及ビ48週トスル時、全數199,000 (=200,000-1,000)ノ毎週發生數ハ第三圖及ビ第二表ニ示ス通りデアル。



第=表 $y = A e^{-b^2 x^2}$ $\int_{-\infty}^{\infty} = 199,000$

X	A=30540 $b=0.0712$		A=10940 $b=0.0116$		A=14770 $b=0.0173$	
	y	%	y	%	y	%
0	30540	15.4	10940	10.0	14770	7.4
1	28350	14.2	9320	8.7	14500	7.2
2	22700	11.4	7590	8.4	13790	6.9
3	15660	7.8	5090	7.5	12650	6.3
4	9310	4.6	3050	4.0	11200	5.6
5	4775	2.4	1950	4.5	9580	4.0
6	2415	1.2	1240	3.2	7920	3.9
7	1300	0.6	820	2.1	6340	3.1
8	658	0.3	540	1.2	4890	2.4
9	344	0.2	353	0.7	3630	1.6
10	183	0.1	247	0.2	2570	1.2
11	95	0.0	167	0.2	1820	0.9
12	50	0.0	109	0.1	1220	0.6
13	26	0.0	75	0.0	850	0.4
14	14	0.0	50	0.0	590	0.2
15	7	0.0	33	0.0	400	0.1
16	4	0.0	22	0.0	280	0.0
17	2	0.0	15	0.0	190	0.0
18	1	0.0	10	0.0	130	0.0
19	0.5	0.0	7	0.0	90	0.0
20	0.3	0.0	5	0.0	60	0.0
21	0.1	0.0	3	0.0	40	0.0
22	0.1	0.0	2	0.0	25	0.0
23	0.0	0.0	1	0.0	15	0.0
24	0.0	0.0	0.5	0.0	10	0.0
25	0.0	0.0	0.3	0.0	7	0.0

T965

註:

$$\text{全数 } Y = 2A \int_0^{\infty} e^{-b^2 x^2} dx$$

$$= \frac{A}{b} \sqrt{\pi} = 199,000$$

$$\therefore A = \frac{b}{\sqrt{\pi}} \times 199,000$$

又

$$y = A e^{-b^2 x_t^2} \leq 0.7 \quad (x_t = \pm 12, \pm 18, \pm 24)$$

$$\therefore \frac{b}{\sqrt{\pi}} \times 199,000 \cdot e^{-b^2 x_t^2} = 0.7$$

$$\log \frac{199,000}{0.7 \sqrt{\pi}} + \log b \leq b^2 x_t^2$$

ヨリ b を求め、之ヨリ A の値を定む。

第一次感染 = 感染シテ 罹病ヲ計算ヲ行ハ

$$Y_{pr} = 500 (x = 1000)$$

$$x = \pm 2 = \text{於テ } Y \leq 0.7$$

トヨケバ第三回中 = 示ス第一次感染曲線ヲ得ル。

以下ハ $x = \pm 18 = \pm 12 \leq 0.7$ ノ形、即チ最大効果ノ流行期 36 週ノ形 = 就テ得タ小タイ流行 = モアテハマル。然ルトキハ第二次流行發生ノ場合

$$y_N = A_N e^{-0.0316x^2}$$

$$A_N = 19,940 \times \frac{N}{199,000}$$

ト置キ、 $y \leq 0$ 、7ヲ以テ同様ニ流行ノ始終トスル。然ル時ハ
Nト流行期間d(=2x_t)ノ關係ハ第四圖ノ通りデアリ、Nノ
二三ノ値ニ對スル發生曲線ハ第五圖ノ様ニナル。第二次流行
ノ始ハ第一次感染ノ始、即チ感染時ニ一致セシメル故第一次感
染期間ノ實際發生數ハ兩者ノ和トナルガ、此ノ時期ニハ第二次
流行ノ數ハ尙微少デアルカラ曲線ノ形ハ第五圖ニ見ル通り大差
ハナイ。

註：

Nトdノ關係ヲ求メル場合ニ $b^2 = 0.0316$ トオイタ故ニ
d=0ニ於テモ Nハ0ニナラナイ。即チ

$$N = \int = \frac{A}{b} \sqrt{\pi}$$

$$\therefore A \approx 0.10 N$$

$$y = A \cdot e^{-0.0316 x_t^2}$$

$$= 0.10N \cdot e^{-0.0316 \left(\frac{d}{2}\right)^2} = 0.7$$

$$\text{i.e. } x_t = \frac{d}{2} = 0 \quad \text{ニ於テ}$$

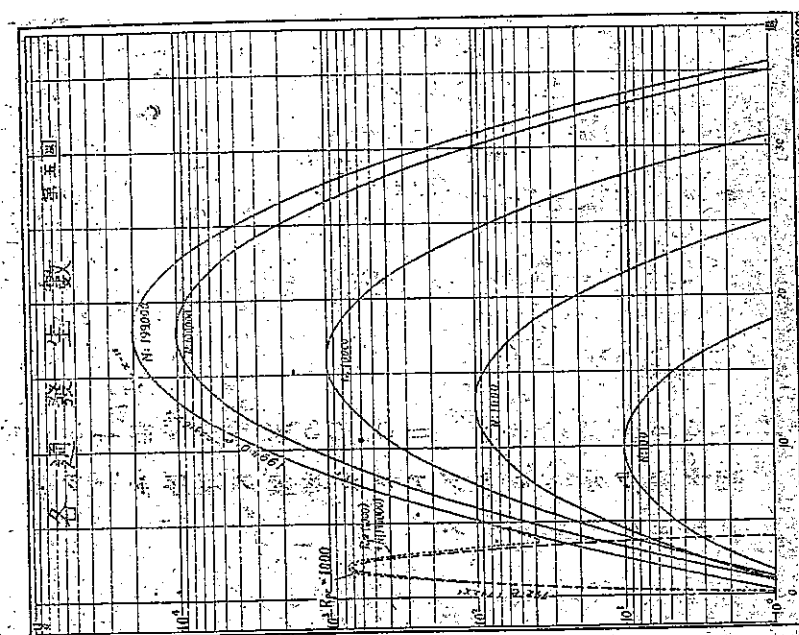
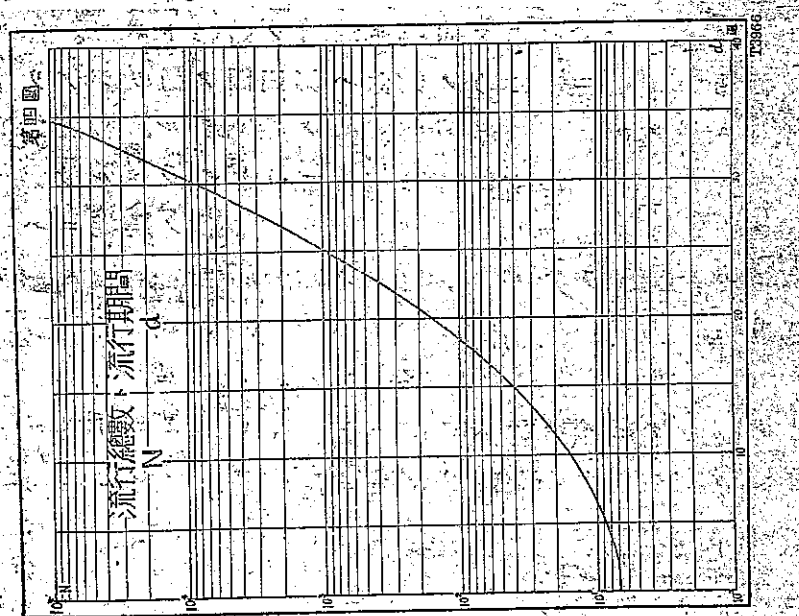
$$N_{d=0} = 7,0$$

之ハNノ値ニ無關係ニ $b^2 = 0.0316$ ナル同一値ヲ用タル
事ガ不適切ナ事ヲ示スモノデアルガ考察ノ順序トシテ先ヅ不問
トスル。簡單ニ修正スルニハ

$$N = N - 7.0 \quad \text{トシ}$$

$$A = 0.10 N$$

ヲ用フルガヨイ。



第6 既往作戰ニ於ケル變數值

第一表及第4 = 依フテ既往作戰ヲ解析スルハ第三表 = 見ル
變數値ヲ得ル

B 四 O ノ 値 ノ 推 定 ニ 就 テ ノ 理 由 ハ 各 作 戦 ノ 状 況 ヲ 詳 記 ス
ル 事 ニ ナ ル ノ デ 省 略 ス ル 。 細 部 ハ 各 作 戦 詳 報 ヲ 細 密 ニ 参 照 サ
ス。

第三表 既往作戰標幟

區 分	B	E	O	D-1	Rpr	A	R
農 安	8.0	8.0	9.0	9.0	518 (1600)	8.0	82900 (123000)
農・大	8.0	8.0	9.0	9.0	518 (1200)	8.0	82900 (243600)
儲 縣	1.5	7.0	4.0	7.0	29 (26)	2.0	1175 (1159)
寧 波	2.0	7.0	5.0	7.0	49 (52)	1.0	980 (777)
常 德	3.0	8.0	5.0	7.0	84 (194)	1.0	1680 (1756)
廣・廣・玉	6.0	8.0	9.0	7.5	324 (321)	3.0	19430 (22550)

() 内 第一表ノ値

第7 目標地區ニ於ケル予想變數値

第2及第4ニ從ヒテ變數値ヲ予想スル。B、Eノ決定ニ大ナル困難ガナシ。Oハ作戰ノ困難ヲ考慮シ、且目標ニヨリ用法ノ異ル事ニ留意シテ判定スル。D⁻¹ハ各地區ニ於ケル生活狀況ニ基イテ決定スル。

最も重大ナルゾハAノ予想デアル。從來ノ流行ノ程度ノ明瞭ナル場所ニ就テハ其ノ大小ニ從ツテ判定シ、流行前驅期又ハ初期ニ於テ最大値ヲ與ヘル。

從來流行記録ノナシ場所ニ就テハ先ヅ流行ガ起リ得ルカ否カヲ判定シ、更ニ起リ得ル流行ノ程度ヲ推定セネバナラナイ。即チ該地區ノ氣象的生物的狀況ヲ他ノ流行既知ノ場所ト比較シテ流行ノ成否、流行期及其ノ程度ヲ判定類推スル。然シ流行ノ程度ニ到ツテハ極メテ判定困難デアル。

此處ニ各種資料ヲ綜合シテ予想變數値表及之ニヨルPXノ効果ノ一案ヲ提示スル。(第4表)又特ニAニ關聯シテ各地流行期推定圖ヲ示ス。(第6圖)第6圖ハ發生頻度デハナク發生數ヲモ示ス如クシタタメ一定ノ基準ニ據ラズニ描イテア

第4表(1) 變數値推定表

地區	北	東	西	南	大
A	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

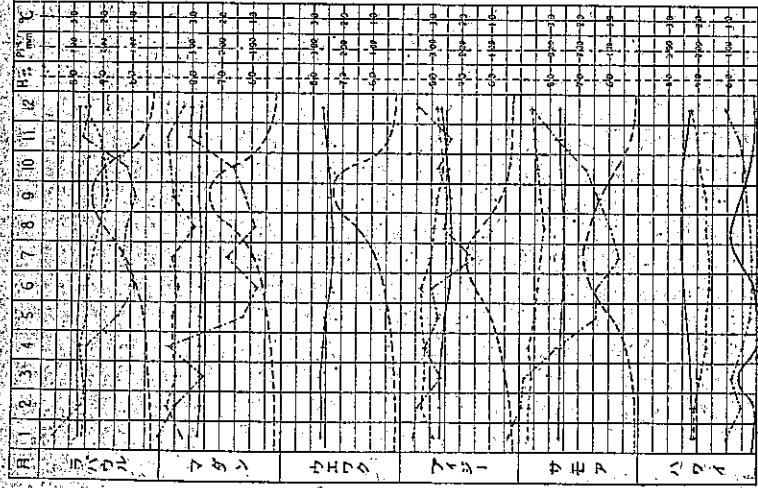
最大、最小

第4表(2) 變數値推定表

地區	北	東	西	南	大
A	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

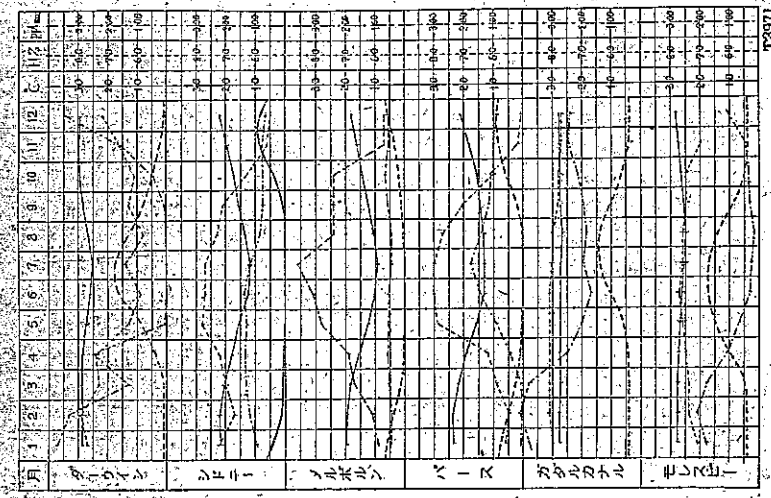
第4表(3) 變數値推定表

地區	北	東	西	南	大
A	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



第1図

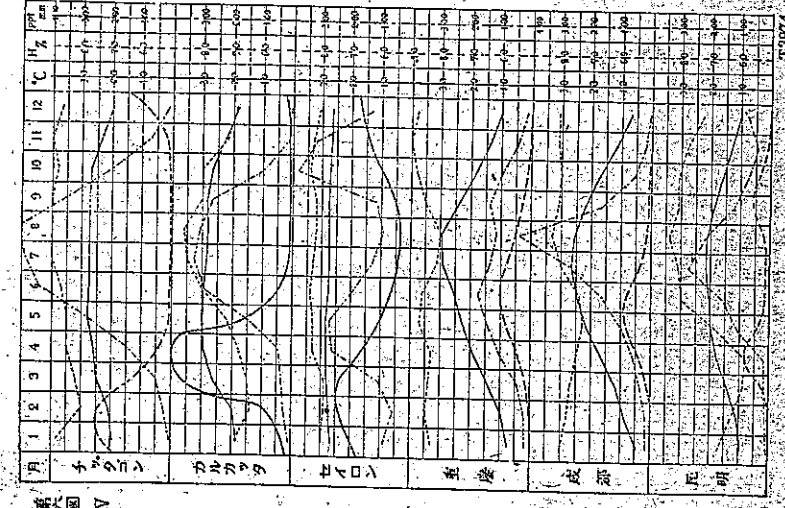
T3972



第2図

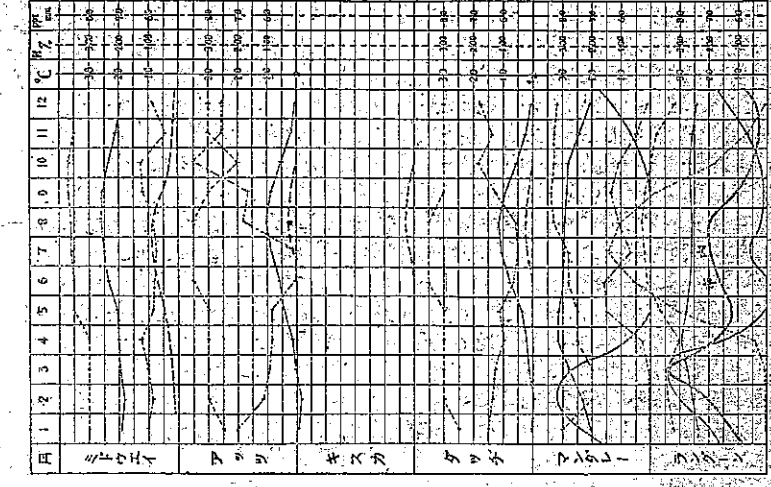
T3971

第1図 記録 推定



第3図

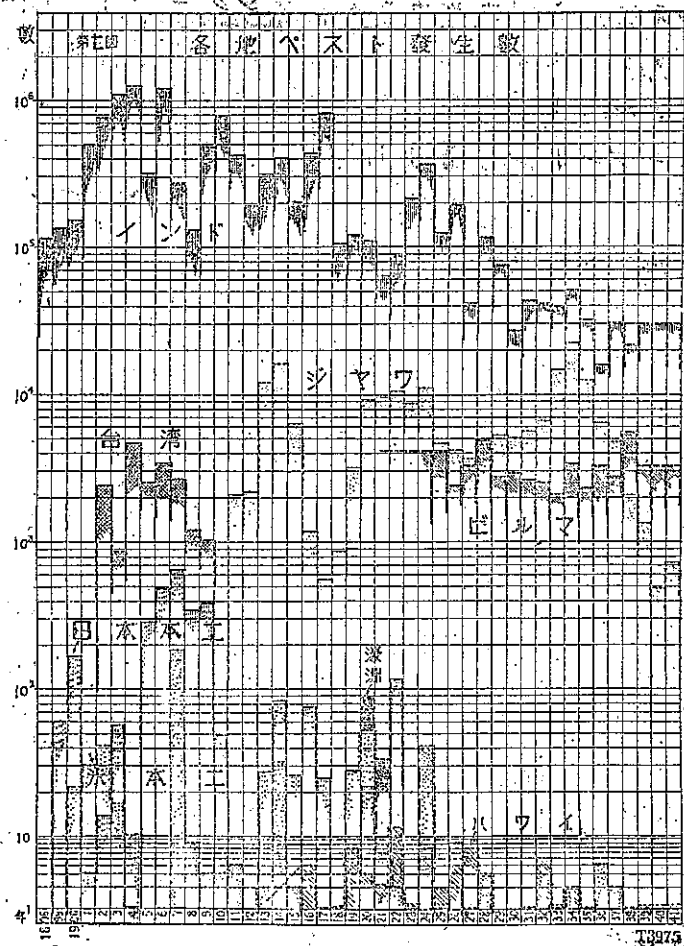
T3974



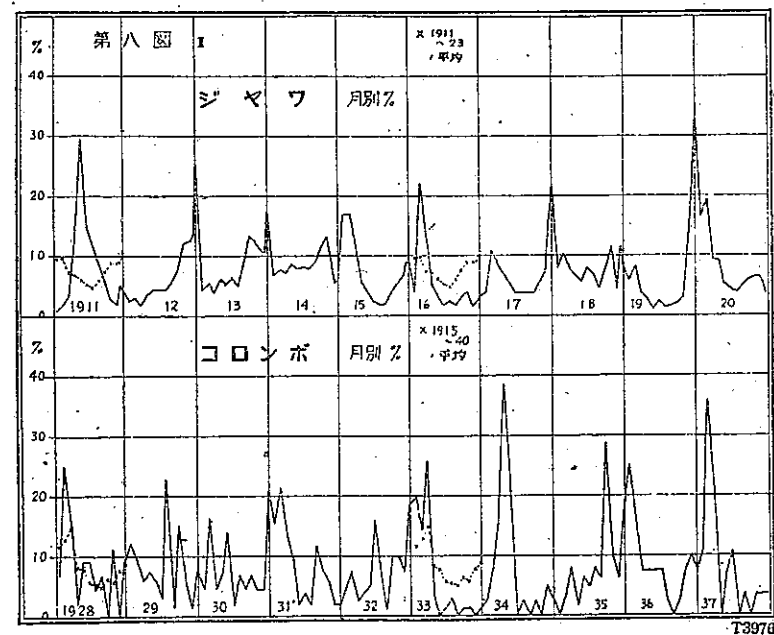
第4図

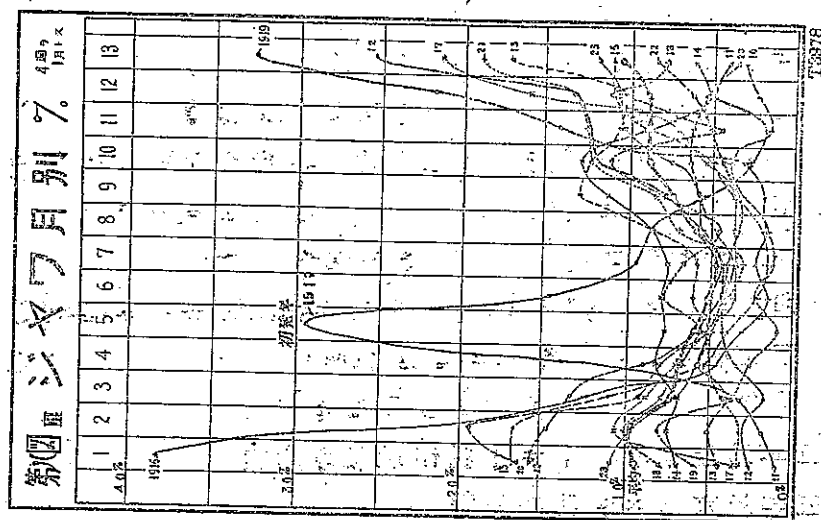
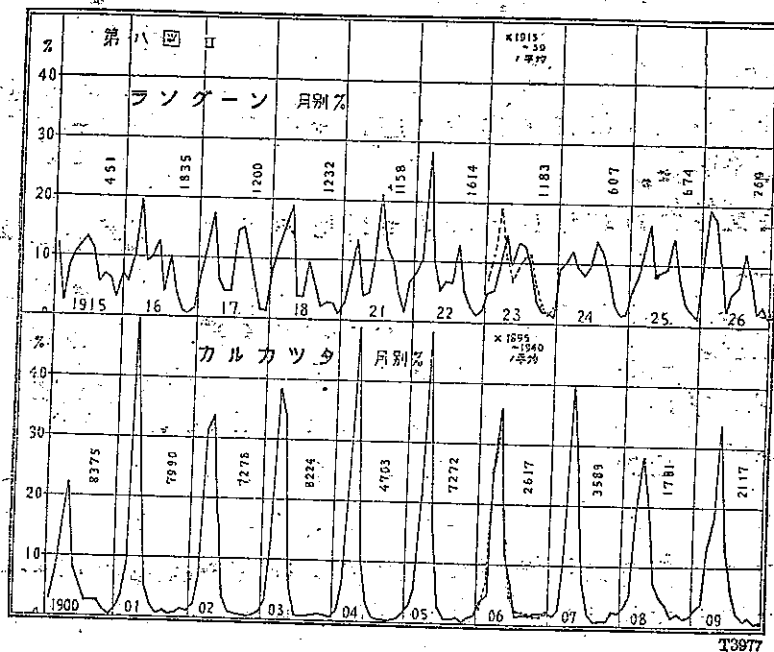
T3973

次ニ參考トシテ近年ニ於ル各地「ペスト」年別發生圖ヲ掲グ
ダ（第七圖）



尤ヨリ前記數値ノ判定規準ハ記錄ノ明カナ地ノ平均統計ニ準
據スルモノデアラフデ、使用時ノ狀況ガ平均カラ偏倚スルホ下
適合性ハ不良ニナルデアラウ。然ルニ從來ノ記錄ニ依リテ年中
流行ノ持續スル地デハ最大發生月ハ移動シ易イガ（例シヤム
コロンボ）著シイ流行期ノアル地デハ山ト谷ノ配置月別ハ概ネ
一定シテ居ル（例カルカッタ、ラングーン）特ニ興味アルノ
ハ「シヤム」ノ初發年1911年ノ曲線ガ他ノ年ト懸絶シテ居
ル事デアル。之ヲ1911年ノ狀態ガ著シク偏シテ居タ事ニ歸
スルベキデハナク（當年ノ諸元ヲ得ラヌデ確言ハ留保スルガ）
斯ル年中流行ノアル土地デハ攻撃ニ依ツテ隨時効果ヲ得ル事ノ
一證ト見做シタロ。





第 8 結 及 参 考 文 献

結

茲ニ石井説ニ基キ既往ノ作戰ノ經驗ヲ參照シテP Xノ効果ノ計算法ヲ提示シ、

更ニ同法ヲ予想目標地區ニ於テモ應用スベク推理ノ擴張ヲ行フタ。

之ニ依レバP X 1,0 丘ノ効果ハ次ノ様デアル。

第一次感染	最少	11名(北太冬)
	最大	168名(西南太、ニギ)
全効果	最少	11名(北太冬)
	最大	11,200名(ビ12月)

斯ル推定ガ如何ニ實際ニ即應スルカ、如何ニ改良スベキカ、大東亞戰ニ於ル今後ノ効果ノ檢討ニ俟タネバナラヌガ、茲ニ將察シタ程度ヲ遙ニ渡越スル大効果ヲ以テ上記推定ヲ根底カラ再檢討スベキ歟ヲ來ラン事ヲ希ツテ止マヌ。

主要参考文献

- 淺見：「ホ」號作戰効果情報 (昭10.11)
- 石井：特殊戰原則 (昭15.12)
- 金子：甲「フ」目標調査 (防研報告第1部第45號)
- 貴賓院、高安：印度及南海方面敵狀判斷(昭10.9)
- 田中：新醫學兵器ノ完成 (昭16.4)
- 内藤：印度ニ於ル傳染病史概要(南防業報丙第44號)
- 〃〃：昭17.11 廣量「ベス」流行ニ於ル死者數ヲ推定計算 (昭10.11)

昭和十五年乃至十七年「ホ」號作戰戰鬥詳報

昭和十五年新京ベス防疫詳報

陸軍軍醫學校防疫研究報告
第2部 第791號

しろねすみヨリ分離セル「ゲルトネル」菌ノ菌型

陸軍軍醫學校防疫研究室 (部長 石井少將)

陸軍軍醫少佐 淺見 淳
同 金 子 順一
丸 山 正 夫



第 2 部
原 著
分 類 434—8 381—3
受附 昭和 19. 1. 17

陸軍軍醫學校防疫研究報告
第1部 第63號

X. cheopis ノ落下狀態ノ撮影

陸軍軍醫學校防疫研究室(部長 石井少將)

陸軍軍醫少佐 金子 順一

矢田 博

軍事秘密

第 1 部
原 著
分類
385-1
385-8
受附 昭和 19224

1.	緒	言
2.	材料，撮影方法	
3.	寫	眞
4.	寫眞ニ就テノ落下状態ノ考察	
5.	結	言

1. 緒 言

著者ノ一人金子⁽¹⁾ハ X. cheopis ノ落速ヲ測定スル場合ニ，空中ノ落下ヲ液中ノ落下ニ置換シテ同程度ノ Re 数ヲ得ル様ニシ，液中落速カラ空中落速ヲ推算シタ。

小酒井⁽²⁾ハ最近 X. cheopis ノ各種ノ状況ノモノヲ實際ニ空中ニ落シテ其ノ假想的抵抗係数ノ分布ヲ求メ，且其等ノ体ノ大イテ終末速度トノ相關ガ著シクナイ事ヲ認メテ居ル。

余等ハ此ノ種ノ落下問題ヲ解明スル一助トシテ落下中ノ X. cheopis ノ運動ヲ主トシテ流体抵抗ノ立場カラ撮影セント試ミ，空中落下ハ撮影對照トシテ不適當デアル事ヲ認メ，再ビ液中落下ヲ採用スルコトヲシタ。即チ寫眞記錄ヲ目的トスルナラバ其ノ落下ヲ撮影後ノ過焦點面内ニ制限シ，然モ一般ニ速度ガ相當ニ遅イ事ヲ望ミシイカラデアル。從フテ落下運動ヲ二次元的ニ分解シテ觀察スルノデアルガ，Cheopis ノ体構上横方向ノ撮影ノミガ先ヅ可能デアル。

當時北海道帝大佐伯⁽³⁾ガ泡ノ運動ヲ似タ方法デ撮影シテ發表シテ居ル。同様ナ方法ハ從來カラ各方面デ利用サレテ居ルモノ、様デアルガ，Cheopis ノ落下問題ノ解明ニ資セントスル余等ノ意圖ヲ先ヅ述ベテ，之ガ將來更ニ重要ナ解決ヲ與ヘ得ルカモシレス事ヲ指摘スルニ止メタイ。

撮影ノ器材，方法等尙多大ノ研究スベキ問題ヲ殘シテ居ルガ，余等ハ最初ノ試ミトシテ得タ寫眞ヲ先ヅ提示シ（尙甚ダ不満足ナモノデハアルガ）若干ノ考察ヲ加ヘントスルモノデアル。

2. 材料 撮影方法

撮影材料ハ當研究室デ飼育サレタ *X. cheopis* デ、村國少佐、小酒井中尉ノ好意ニ依リ特ニ一々測定値ヲ附シテ分與サレタモノデアル。

落下液ハ「キシロール」ヲ用ヒタ。之ニカルト Re ハ約100ノ程度デアル。液ニハ「アルミニウム」粉末ヲ適當ニ混シテアル。

落下槽ハ硝子板(約200×60)ヲ2.0mm 間隔ニ對置固定シタモノデ、硝子板ニハ予メ目盛ヲ記入シ最後ノ印畫ノ擴大度判定ニ資シタ。液中落速ハ中央部ノ100mmヲ通過スルニ要スル時間デ測定スル。

撮影機ニハ顯微鏡寫眞撮影用ノ「カビネ」型暗箱ヲ用ヒ、
「レンズ」ハ「マイクロズム」(80mm, F. 4.5)ヲ使用シ、絞りF6, 3~8トシ、水平固定及追跡撮影スル。照明ハ撮影方向ノ左右45° 同高ニ750 W 電球二個ヲ適當ニ集光シテ使用、背景ニハ黒紙ヲ用ヒタ。

露出ハ固定撮影デ約 $\frac{1}{10}$ 秒、追跡撮影ニハ $\frac{1}{5}$ 秒ノ程度デアル。

予メ計測サレタ *Cheopis* 一匹ヅツ落下槽内ニ落シ、適當ナ場所ヲ通過スルモノヲ撮影スル。

適當ニ引延サレタ印畫ニ就イテ液ノ動き(「アルミニウム」粉末ノ動き)ヲ觀察スル。

3. 寫 眞

敘例ヲ提示スル。

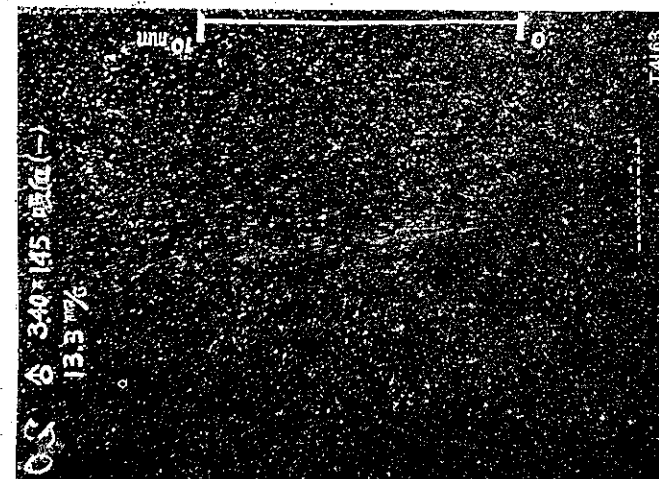
寫眞内ニ記入サレタ字號ハ

体長×体高 mm, 吸血ノ有無, 液中落速 mm/s デアル

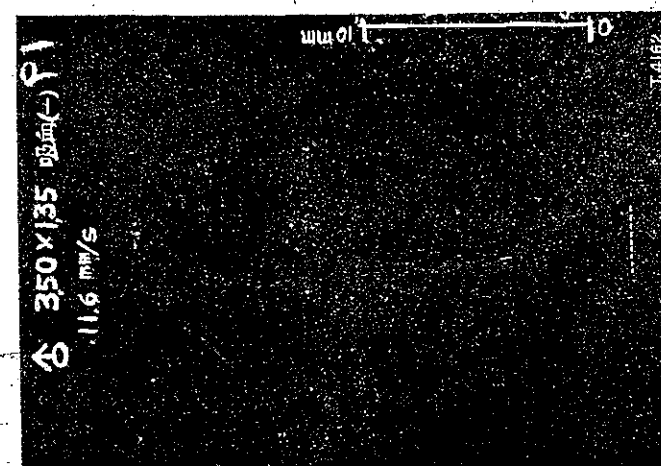
尚-----ハ体長ニ相當スル長サ, —————ハ落下ノ方向, -----ハ最終位置ノ兩側ニ生ジタ渦ノ中心ヲ連ネル方向ヲ示ス。

寫眞ハ總テ垂直ヲ規正シテアルノデ, —————ノ傾キハ落下経路ノ傾キヲ示ス。

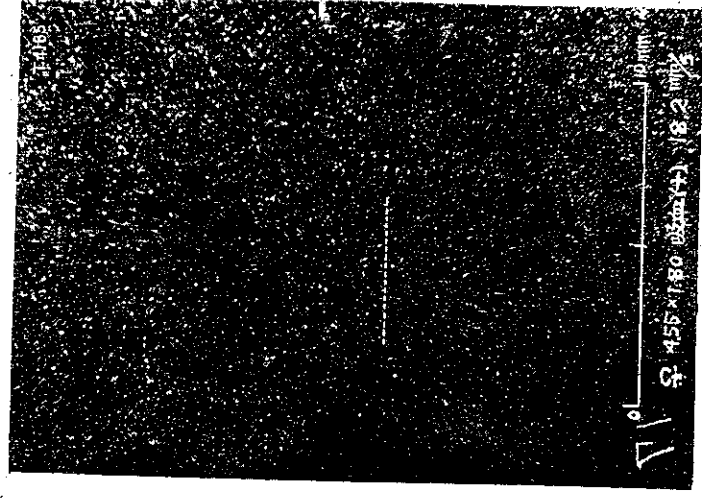
寫眞第2



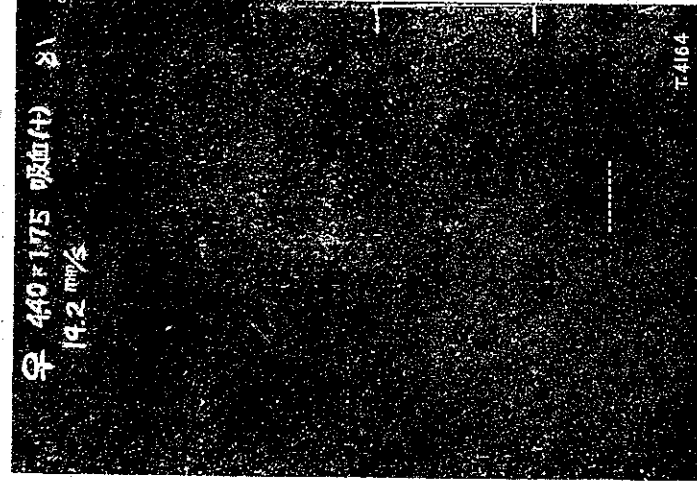
寫眞第1



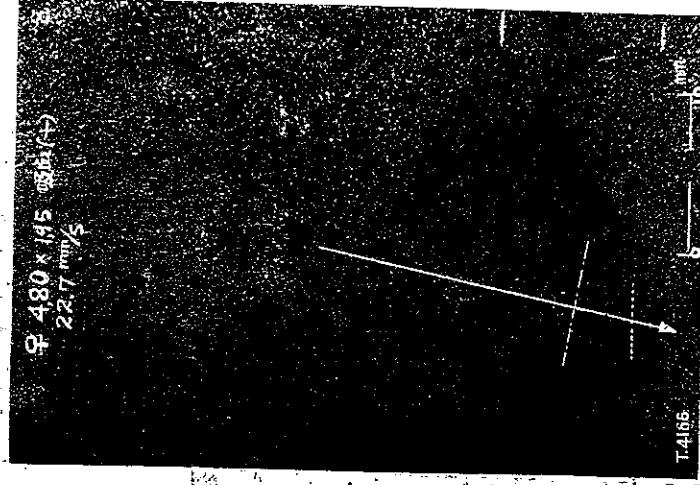
寫真第 4



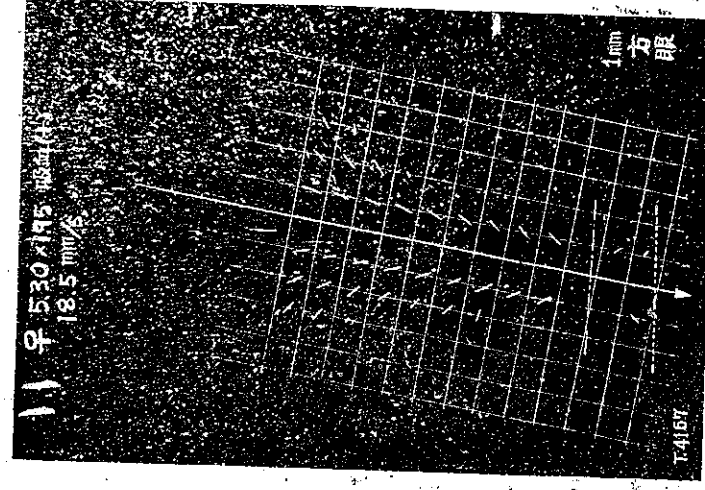
寫真第 3

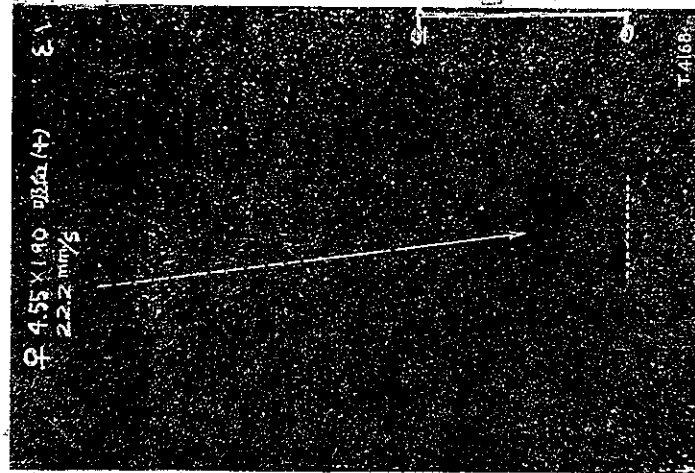
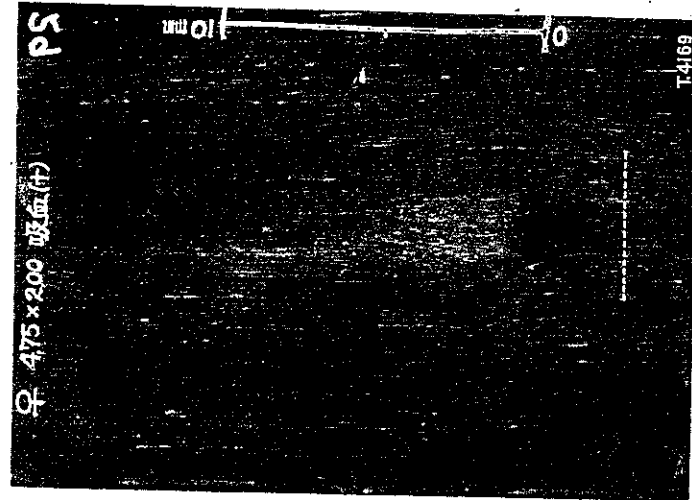


寫真第 5



寫真第 6





4. 寫眞ニ就テノ落下狀態ノ考察

寫眞ニ見ル如ク、落下ニ伴フ液ノ渦動ハ体ノ大小トハ余リ關係ハナイ様デアリ、且範圍モ大キクナイ。

落下ハ必ズ背面ヲ下ニシ頭部ノ方向ニ偏ル略々垂直ナ経路ニ依ル。経路ニ沿フ粒子ノ動キト之ニ流入スル弱イ動キノ他ニハ著シイ渦動ハ認めラレズ、落下体ノ左右ニ輕微ナ廻轉ヲ認メルニ過ギナイ。

♂、♀ノ差ハナイ。即チ落速ノ差ニヨル質的及量的ナ差ハ此ノ方法デハ認めラレズ。

落下体ノ左右ニ於ケル弱イ廻轉ノ中心ノ距離ハ落下体ノ長サヨリモ小タイ。中心ヲ結ブ方向ト落下方向トハ垂直デハナイガ、恐ラクハ落下体ノ長軸ノ方向ニ一致スルモノデハナイカト考ヘラレル。

寫眞第一乃至六ニ見ル様ニ、経路ノ左右ニアル之ニ流入スル動キノ角度ハ、落下経路ノ前側(頭側)ニ於テ僅カニ大キイ(寫眞第六ニハ之ヲ線デ示シタ)。之ハ何レノ場合ニモ當テハマルガ稀ニハ寫眞第七ノ様ニ不規ノモノガ見ラレタ。然シ大体ニ於テハ経路ニ對シ左右對稱ト云ヘル。

経路ニ殘ル比較的直線的ナ速イ運動ヲ示ス部分ノ幅ハ体長トハ無關係デ、殆ド一定ノ様デアル。(1.5~2.0mmノ程度)之ハ恐ラク落下体ノ抵抗ノ主体ヲナス渦動ヲ示スモノデアツテ、落速ガ主トシテ体重ノヨニ依ツテ異ル事ヲ推定セシメル。落下槽ノ幅ハCheopisノ幅ニ比ベテ相當ニ大キイノデ此ノ狀態ガ一般的ノモノデアルト考ヘラレル。

此ノ狀況ハ追跡撮影ニ依ツテ明カデアル。寫眞第八ニ見ル様ニ、落下体ノ後ノ渦動ノ範圍ハ其ノ長サヨリ著シク小タイ。之ハcheopisノ体構ガ流線型斷面ヲ有スルガ脚ノ附着部ガ不規ナ形ヲ示ス事ト想ヒ合セテ、Cheopisノ落下抵抗ガ主トシテ脚ニ依ルモノデアル事ヲ再ビ想像セシメル。

余等ガ第一回ノ試ミトシテ得タ寫眞ハ尙之等ノ事ヲ確實ニ証明スルニハ不充分デアル。然シ此種ノ方法ヲ更ニ研究シタナラバ問題ヲ解明ガ出來ル様ナ寫眞ヲ得ラレル事ハ確實デアル事ヲ示スニハ充分デアルト信ズル。

5. 結 言

- 1.) 余等ハX.cheopis ノ落下状態ヲ寫眞記録シテ其ノ落速問題ヲ解明スル事ヲ試ミ、得タル寫眞ヲ提示シテ若干ノ補足的説明ヲ加ヘル事ガ出来タ。
- 2.) 落下ノ際ノ流体ノ動キハ性別、体ノ大キサトハ關係ガナイ様ニ認メラレル。
- 3.) 落下抵抗ガ主トシテ脚ニ依存スル事ヲ推定セシメル。

附記。 以上提示シタ寫眞ハ當研究室寫眞班員一同ノ協力ニ依ルモノデアル。

文 獻

1. 金子 加茂部隊航空班研究月報(防研報告1部61號ニ引用)
2. 小酒井 X.cheopis ノ落速(防研報告1部66號)
3. 佐 伯 寫眞化學 昭19, 2月號

陸軍軍醫學校防疫研究報告
第1部 第62號

滴粒ニヨル紙上班痕ニ就テ

陸軍軍醫學校防疫研究室(部長石井少將)

陸軍軍醫少佐 金子 順一

陸軍軍醫中尉 小酒井 望

軍 事 秘 密

第 1 部
原 著
分 類 392-0081
受附 昭和 1927

目次

1. 緒言
2. 實驗方法
3. 實驗結果
4. 實驗結果ノ檢討
5. 結言

1 緒言

著者ノ一人金子(1)ハ會テ雨下撒布ノ考察ヲ行フニ當リ首題ノ論ヲ鈴木(2)ノ實驗ニ求メタ。即チ斑痕徑Dト滴粒徑dノ間ハ

$$D = 2, 3 \text{ 或 } 1, 5 d \quad (\text{耗})$$

ル關係ガ成立スル。

余等ノ求メ得々範圍ニ於テハ此ノ種ノ問題ニ對シテハ上記鈴木ノ成績ガ唯一ノ參考資料デアル。紙上ニ落達スル雨粒ノ形成メカニ斑痕ヲ取扱フタ資料トシテハ昔時瓦斯雨下ニ聯關シテ研究所供ノ他デ行ブレタ實驗成績ガアルガ、滴ノ形成機構ニ盡入ヲ得テアレテ居ラヌメカ斑痕ノ致的解釋ハ行ハレテ居ラヌメ此ノ場合ノ參考トハナラナイ。

茲ニ余等ハ本篇以下一連ノ實驗ニ基イテ特殊ノ目的ニ對シテ滴分裂ノ問題ヲ研究スル意圖ノ下ニ先ツ滴粒ノ形成メカニ斑痕ノ大カニ就テ若干ノ實驗ヲ行ツタ。斑痕ノ形成機構ニ就テノ要求ハ余等ノ目的トスル所デハナイヲ、極メテ粗素カ實驗デアリタルガ更ニ續行スベキ實驗ノ基礎トナルヲ成績ヲ得ルニ留メ、以下之ニ就テ要點ヲ報告スル。

2. 實驗方法

直徑約4mmの時計皿ノ上面ヲ煤ス被ヒ、毛細ビベット」デ太
小種々ノ滴ヲ作ツテ其ノ上ニ載セル。

液ハ「フクシン」其ノ他ノ水溶性色素デ適當ニ蒸溜水ヲ着
色シタモノデアル。着色ニハ色素ノ酒精溶液ヲ使用スルコト
ヲ避ケタ。

先ヅ滴粒ノ重量ヲ測リ、之ヲ低倍率顯微鏡ノ下デ硫酸銅溶
液通過光線ノ照射ニヨリ接眼測微計デ滴ノ見掛ケノ直徑ヲ求
メ、之ニヨリ重量カラ算出シタ滴ノ眞徑ト見掛ケノ直徑ノ關
係ヲ求メル(實驗第一)液ノ比重ハ1.00トシタ

次デ任意ノ見掛ケノ直徑ヲ有スル滴ヲ紙上ニ落シテ出来タ
斑痕ノ大サヲ水平ニ紙ヲ置イタ場合(實驗第二)及ビ紙面ヲ
傾斜セタ場合(實驗第三)ニ就テ測定スル。

紙ハ當研究室ニ於テ稍々太量ニ入手シ得タ葉半紙デアツテ
額合同種ノ用紙ヲ使用スルモノトスル。紙ノ表(布目ノナイ
面)ヲ上ニシテ一張ヲツケ床上ニ水平ニ置ク。第三實驗ニ
於テハ所定ノ傾斜ヲ與ヘタ板上ニオク。

滴管ヲ滴粒ヲ煤皿上ニ載セ、先ヅソノ見掛ケノ直徑ヲ測リ
表デ一定高度カラ手早ク紙上ニ落ス。此ノ時ニ特殊ノ裝置ヲ
用ヒズニ手先ノ迅速ヲ運動ニ依ツテ滴粒ヲ空中ニ放出殘置シ
滴ノ自由落下ヲ起サセル。煤皿ヲ下側方ヘ迅速ニ動かカヌ
皿ノ運動以外ニ手先ノ運動ニヨル空氣ノ擾亂ガ存スル理デア
ラズ。滴ノ幾分太キニ加減ヲ爲サル事ニナルガ、此ノ影響ヲ無
視スル。

落下高度ハ實驗第二ニ於テハ 0.5 1.0 2.0 及ビ 3.
5米 デアリ。實驗第三ニ於テハ 1.0 及ビ 3.5米、傾斜角ハ
30° 45° 及ビ 60° ノ三種トシタ。此ノ場合ノ落下高
度ハ紙面ノ中央カラ測ル。

斑痕ノ測定ニハ液ノ滲ミ及ビ「トバツチリ」現象ニヨル誤
失ヲ可及的除外スル様ニ注意シ、水平紙面ノ場合(第二實驗)

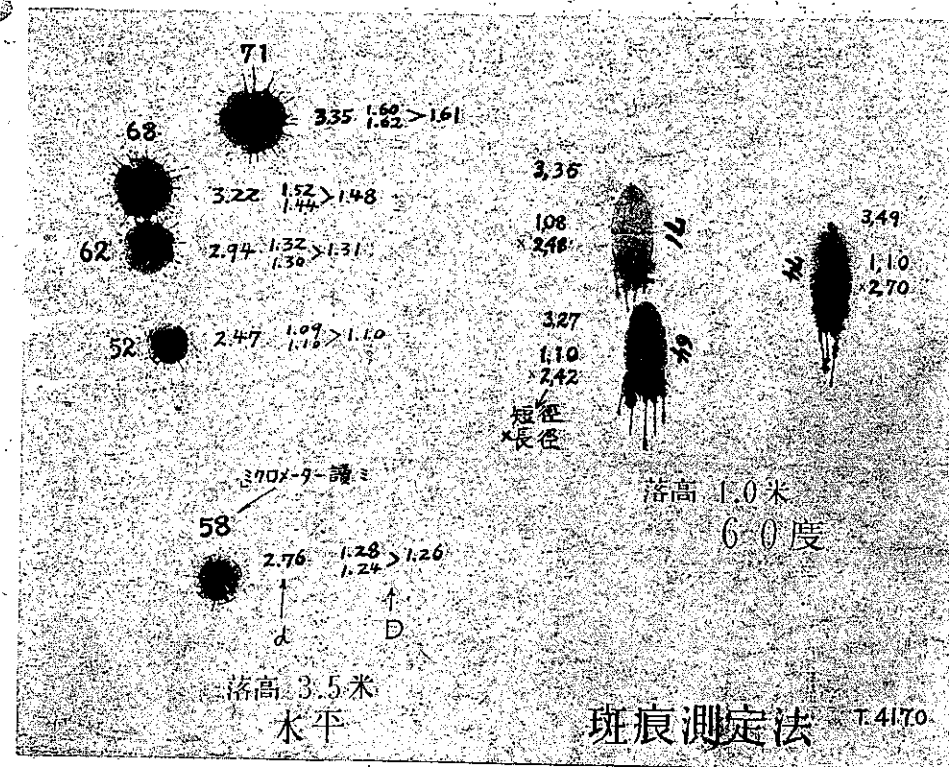
ハハ概ネ直角ヲ二方向ノ直徑ヲ平均シ、傾斜紙面ノ場合(第三
實驗)ニハ長短徑ヲ各別ニ測定シタ。

第三實驗ノ場合斑痕ノ上半縁ハ滑ラカデアルガ下半ガ著シク
細裂又ハ垂長スルノデ豫メ之ヲ修正シタ想像線ヲ描イテ之ヲ測
定スル。(第一圖)

測定ハ斑痕ハ0, 1耗迄、滴徑ハ測微計目盛リ1(=1/193
mm)迄トスル。

實驗成績ヲマツメル場合ノ平均値ノ算出ニハ Chauvenet
ノ方法ニヨル異常値ノ摘出除外ヲ行ヒ、又算式ハ便宜ノタメ總
計ノ10耗ヲ單位トシタ。

第 1 圖



3 實驗結果

(1) 實驗第一

室温 12°C , 湿度 75% 液温 $10, 0^{\circ}\text{C}$

授眼測微計ノ讀ミカラ算定シタ滴粒ノ見掛けノ徑 D ト重量カ
ヲ算定シタ假想眞徑 d ノ間ノ關係カラ

$$D = d^p$$

ナル實驗式ヲ算定シ、常數 p ノ求メルニ

$$p = 1.020 \pm 0.0035$$

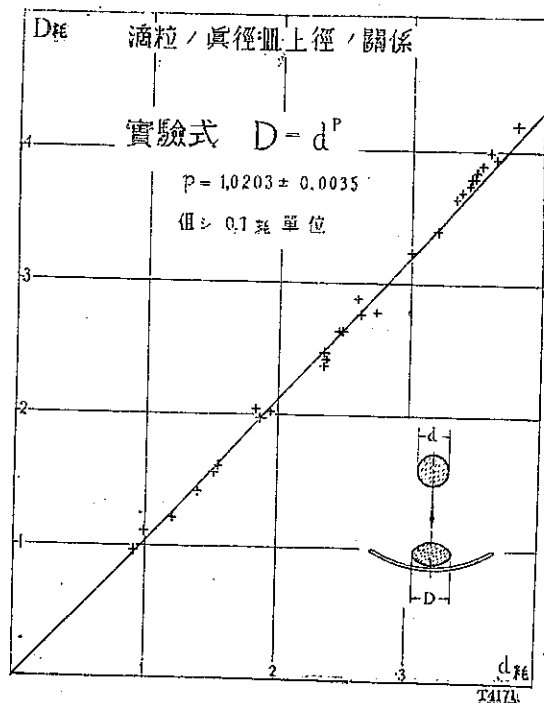
ヲ得タ。(第2圖)

以下ノ實驗ニ於テハ從ツテ

$$D = d^{1.020}$$

ニ依リ D カラ d ノ算出シタ。

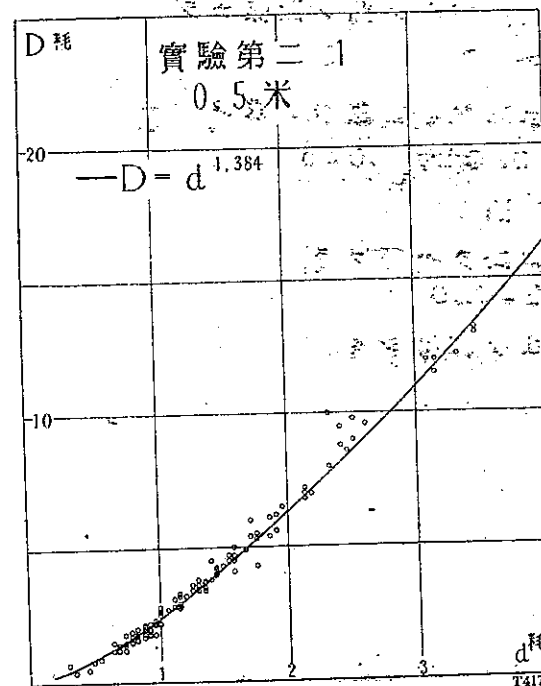
第 2 圖



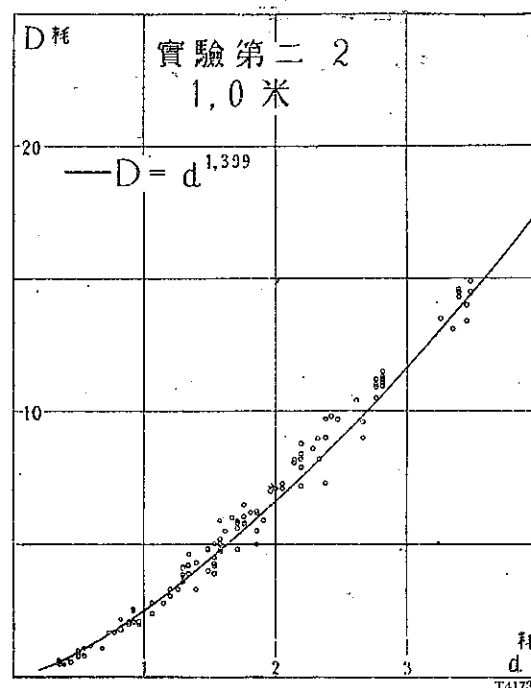
(2) 實驗第二

成紋ノ第3圖乃至第6圖ニ示ス通りデアル。

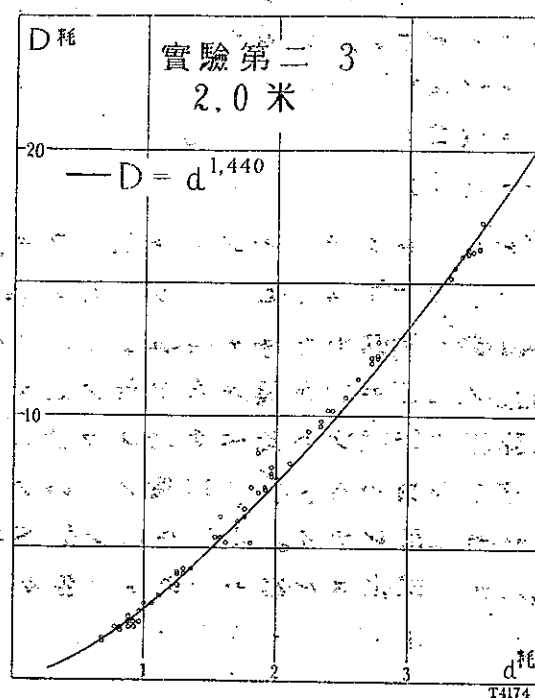
第 4 圖



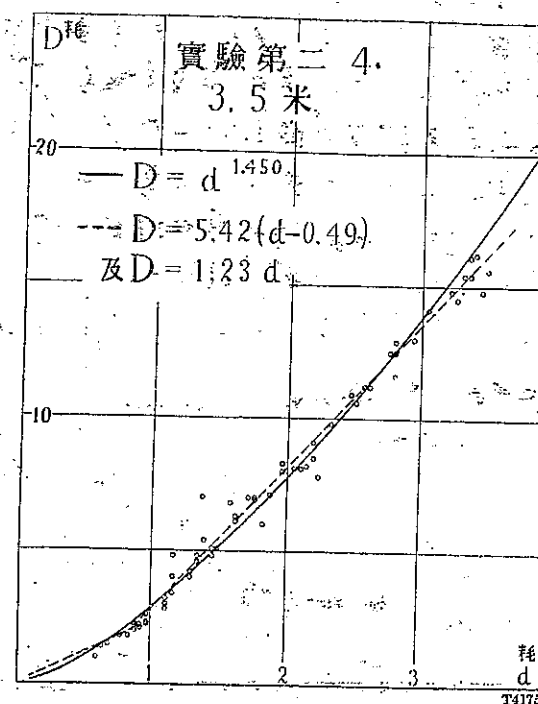
第 3 圖



第 5 圖



第 6 圖



茲ニ成績ヲ表ハスニ用ヒタ實驗式ノ形ニツイテ述ベルト、眞徑 d ナル箇ニヨリテ形成サレル斑痕徑 D ハ

$$D = A d \quad \dots\dots(1)$$

$$D = d^2 \quad \dots\dots(2)$$

$$D = 0(d - d_0) \quad \dots\dots(3)$$

ナル如キ三種ノ式ノ何レカニヨリテ表ハサレル様デアル。(1)ノ形式ハ $\log D = \log A + B \log d$ ナル形ノ観測方程式ニ導イテ D 及 d ノ観測値ヲ代入シ之ヨリ標準方程式ヲ作爲スルヲ解キ得ルガ。各高度ノ観測ニ於テ異ル A ヲ得テ之ヲ比較スル事ガ困難トナリ、又計算ノ繁雜ヲニ比ベテ求メテ散式(1)ノ直接ノ利用價値ガ少ナキ(理由ハ4・實驗結果ノ檢討ノ項ニ明カデアラウ)タメニ茲デハ採用シナイ。本項ニ於テ述ベルノ實驗成績ダカデアツテ之ヲ數式化スル事ハ少クモ各々ノ實驗

單獨デハ意味ガ少イノデアアルガ、一ツノ實驗區ヲ見ニ角ト、
ツタ形ノ式ヲ提示シテオキタイトノ希望ニ基イテ數式化スルノ
ニ過ギナイデアアル。從ツテ余等ハ(2)又ハ(3)ノ形式ヲ選
ベキデアラウ。(2)式ハ計算ハ容易デアアルガ、各々ノ圖ニ示
タ様ニ適合度ハ決シテ良好デハナイ。第6圖ニ示シタ様ニ(3)
ノ形式ガ良ク實驗ニ適合スル。然シ之ハ明ラカニ2個ノ式ヲ必
要トスル不便ガアリ、又C及ビd。ノ各々ガ各實驗區ニヨリテ
異ツテ得ラレルタメ比較ニハ不便デアアル。上記各形式ニ就テハ
次項ヲ再ビ觸レタイ。

茲デ(2)式ニ基イテ得タルノ値ヲ一表ニシテ示ス。

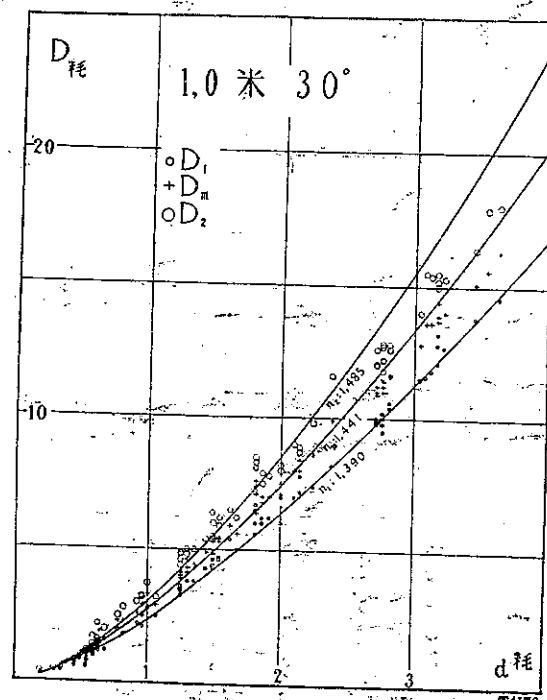
D = d n	
落 高 (m)	n
0.5	1,384±0.0031
1.0	1,399±0.0052
2.0	1,440±0.0018
3.5	1,450±0.0035

(3) 實ニ第 三
斑痕ノ短徑、長徑及ビ其等ノ平均ヲ夫々 D_1 、 D_2 及ビ D_m
トシタ。成績ハ第7圖乃至第 8圖ノ様デアアル。此ノ場合ニ
 $D = d n$
トシテ、nヲ求メタ。之ハ各圖ニ記シタ通りデアアルガ一括スレ
バ次表ノ様ニナル。

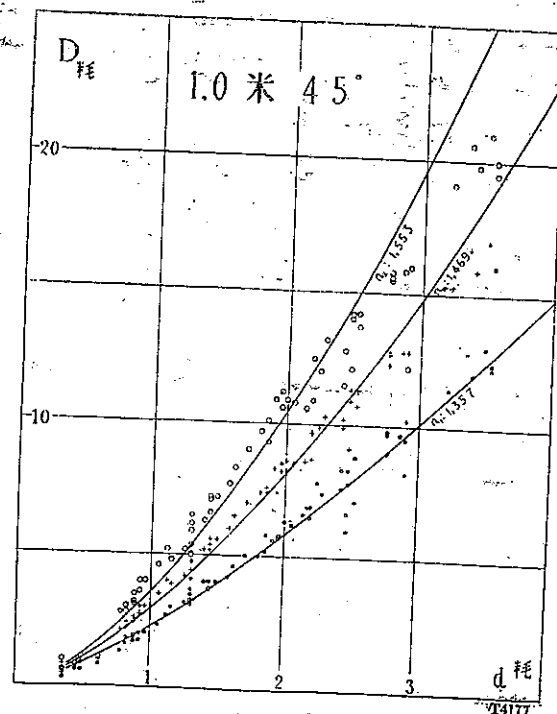
落 高 (m)	傾 角	n_1	n_m	n_2
1.0	30°	1390±00035	1441±00033	1485±00052
	45°	1357±00038	1489±00067	1553±00067
	60°	1315±00043	1502±00046	1630±00055
3.5	30°	1434±00036	1469±00029	1500±00035
	45°	1415±00033	1503±00051	1555±00070
	60°	1362±00035	1513±00064	1611±00092

上表ニ明カナ様ニ n_1 ハ傾角ノ増加ト共ニ減少スルガ n_2 ハ若シテ増加シ、從ツテ n_m モ増ス。

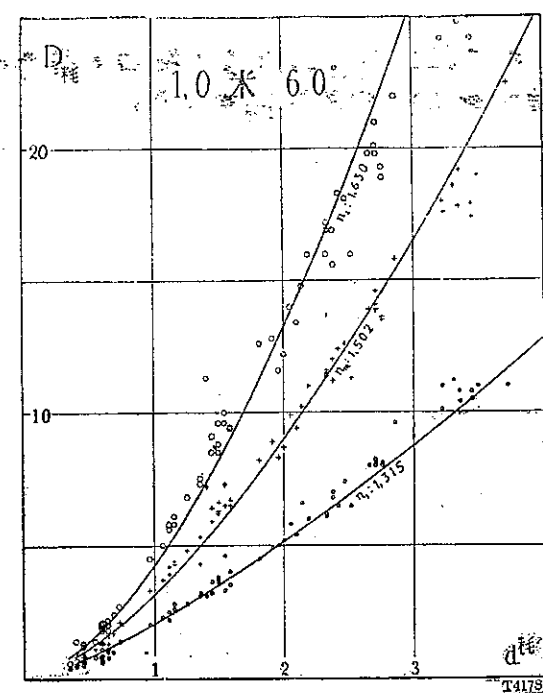
第 7 圖



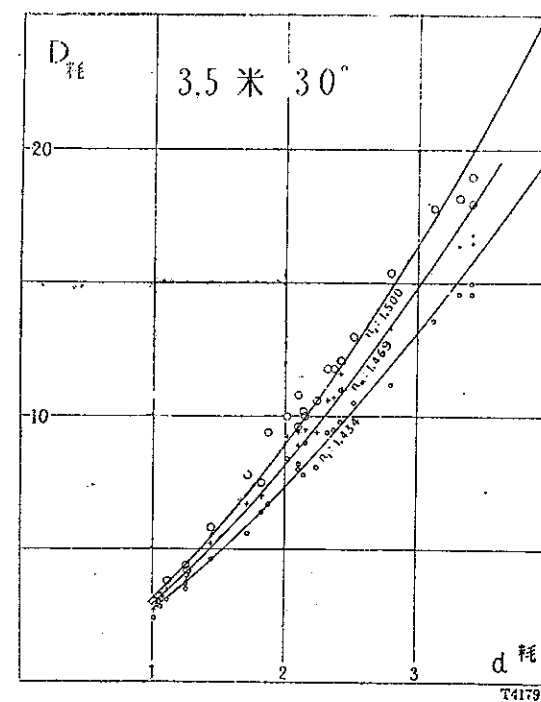
第 8 圖



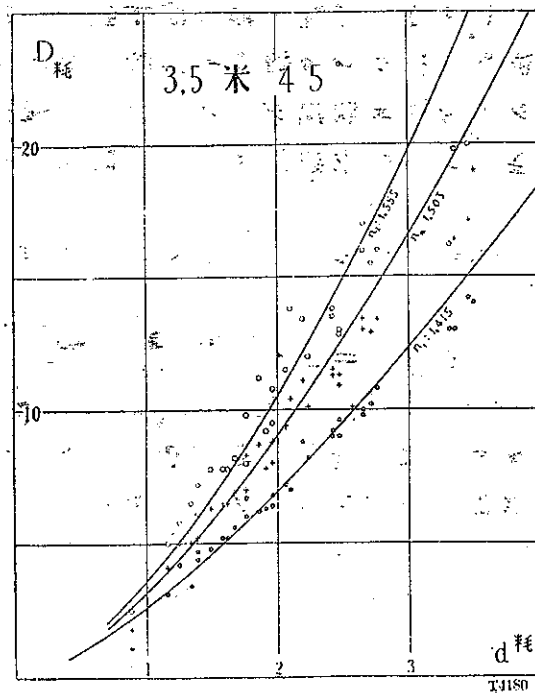
第 9 圖



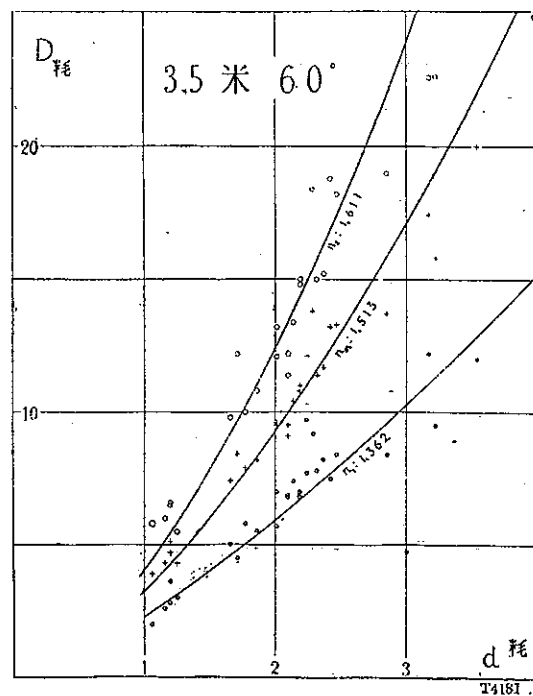
第 10 圖



第 11 圖



第 12 圖



4 實驗結果ノ檢討

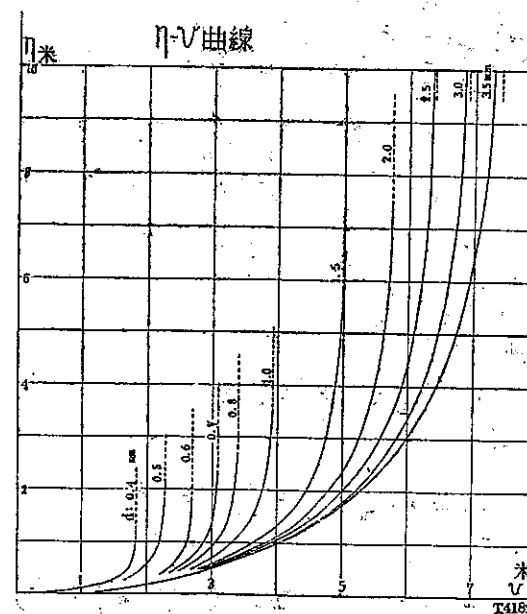
(イ) 滴粒ノ終末落下速度ニ於ケル斑痕ノ大サ
實驗第一ニ依ツテ得ラレタ結果ハ滴粒ノアルモノガ未ダ終末落下
速度ニ達シテ居ラス狀況デアルノデ、一般的ニ使用シラルタメ
之ヲ整理シテ終末速度ニ於ケル關係ヲ求メテオクベキデア
ル。

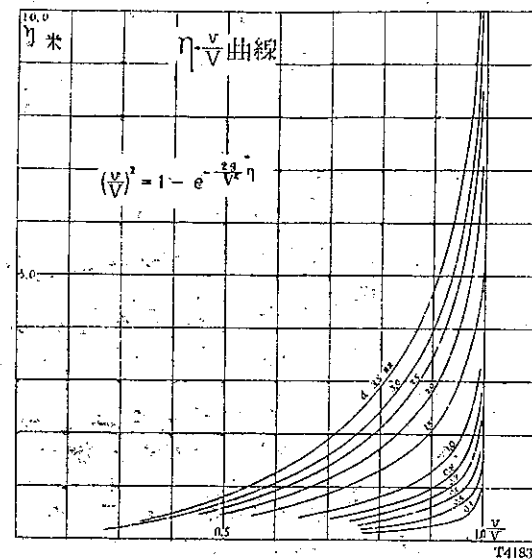
今滴粒ノ終末速度トシテシニミツトノ雨滴ノ落速ヲ用ヒ、

$$\left(\frac{V}{V_0}\right) = 1 - e^{-\frac{V^2}{V_0^2}}$$

ナル關係ニリ終末速度 V ト落高 h ニ於ケル滴ノ落速 V_0 ノ關係ヲ
求ムルニ第 13 乃至 14 圖ノ様デアル。

第 13 圖





貨口第一ノ各貨口區ニ於テ $\frac{D}{d}$ ノ値ヲ求メ、之ヲ 0, 2 耗毎平均シテ得タ値ト該貨口區ニ於ケル落高ニ應ジタ各階級代表粒ノ $\frac{V}{V_t}$ ノ例ハ第 15 圖ノ様ニ排列シテ圖上ニ於テ $\frac{V}{V_t} = 1$ ナル場合ニ $\frac{D}{d}$ ノ取ルべき値ヲ推定スルト第 16 圖ニ示ス様ニナル。

之カラ再ビ各級ニ於ケル D ノ値ヲ求メ之ヲ終末速度ニ於ケル値ト見做シタ。(之ヲ D_t トスル)

斯クテ求メタ d ト D_t ノ關係ヲ數式化スル場合ニ前項デ述べタ様ナ三種ノ基簡式ヲ考ヘウル。之ヲ最少自乗法ニヨツテ解キバ次ノ三種ノ式ヲ得ル。

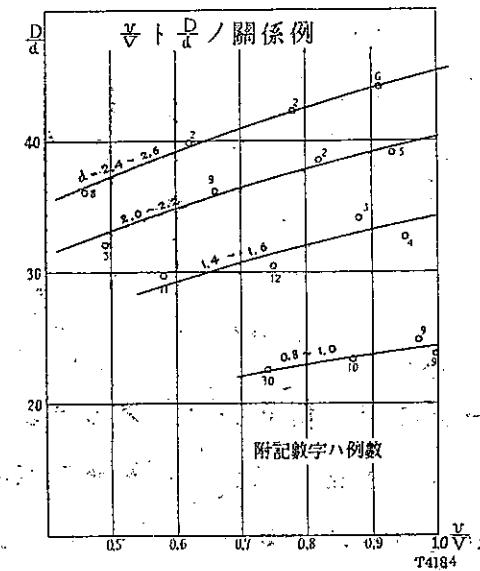
$$D_t = 0,996 d^{1,450}$$

$$D_t = d^{1,454}$$

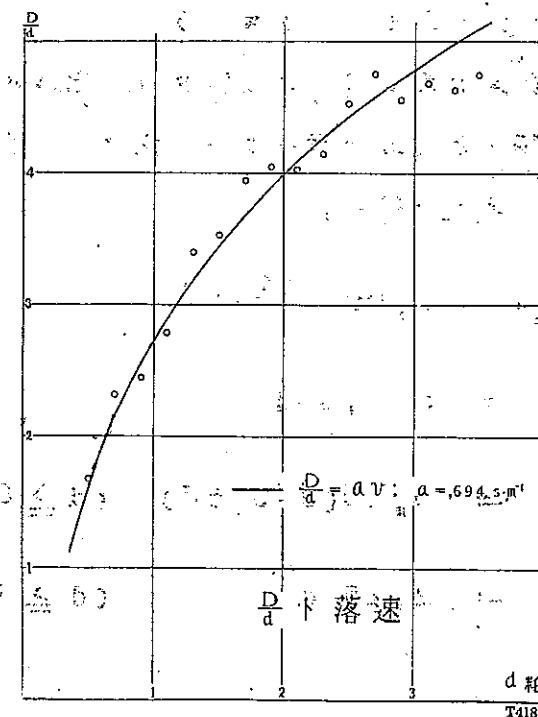
$$D = 5,69(d-5,53) \quad (d \geq 8,88)$$

$$= 2,15 d \quad (d \geq 8,88)$$

第 15 圖



第 16 圖

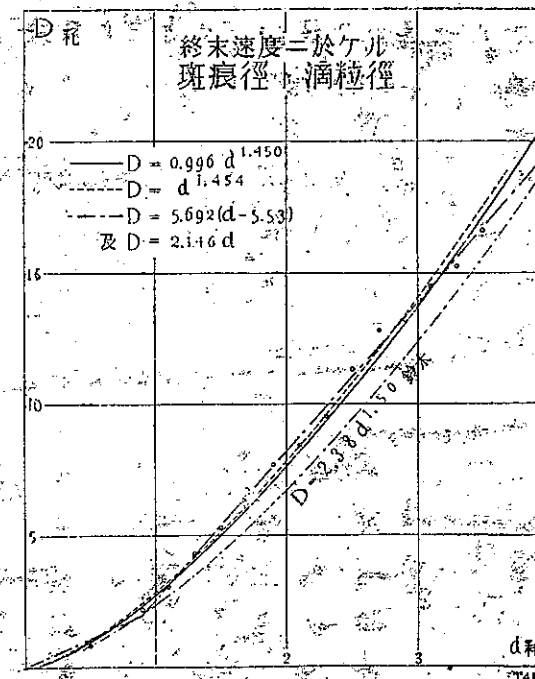


之ハ第17圖ニ示ス通りデアル。圖ニ於テハ鈴木ノ式ヲ附記シタ。

之等ノ式ノ適合度ヲ檢スルニ、簡單ノタメ實點ノ曲線ノ兩側分布ヲ符號變化ニヨツテ求メル方法(例ヘバ 戸森：最少自乗法第181頁)ニ依ル時ハ次表ノ結果ヲ得ル。

	符號變化ノ確率數	實際ノ變化數
D_{t_1}	8.5 ± 1.2	4
D_{t_2}	8.0 ± 1.3	4
D_{t_3}	8.5 ± 1.1	10

第 17 圖



上表ニ明カナ様ニ D_{t_3} ガ最もヨク適合スルノデ以後ハ此ノ
數式ニ從フニトスル。

此ノ式カラ D ト d ナ逆ニシテ次式ヲ導キウル。

$$d = 0.176D + 5.53 \quad (d \geq 8.88)$$

$$d = 0.466D \quad (d \leq 8.88)$$

更ニ上圖ニ見ル如ク鈴木ノ式ハ余等ノ求メタモノニ比シ小ナ
イ D ノ値ヲ與ヘル。之ハ主トシテ用ヒタ紙質ノ相違ニ基クモノ
ニ如ク考ヘルノデアアルガ、之ハ今後余等ノ試験ニ於テ同質ノ紙
ヲ用ヒル限リ特ニ確認スルヲ要セヌモノデアラウ。

(ロ) 傾斜面上ニ於ケル斑痕

前項實驗第三ニ於テ得ラシタ結果ハ重要デアアル。實際ニ同種
ノ斑痕ノ得ラレルノハ滴粒ガ垂直デナイ運動ヲシテ水平紙面ニ
落達スル場合ガ多イガ、又特殊ノ實驗ニ於テハ紙面ヲ傾斜セシ
メル事モアリ得ル。

從來橢圓斑痕ハ長短徑ノ平均即チ D_m ナ以テソノ大サトシ
タ場合ガ多イ。余等ハ茲ニ特ニ此ノ問題ノ解決ヲ希望シタ理由
ハ(1)ノ文獻ニ述ベタ様ナモノデアアルガ果シテ從來ノ方法ハ
不完全デアアル場合ノ多イコトヲ示シ得タ。從來 D_m ナ用フル
到ツタ理由ハ詳デハナイ。斑痕ノ面積ガ滴粒ヲ表ハスモノト考
ヘテ行ナラバ此ノ平均ハ相乘平均デアアルベキデアアル。之ヲ
相加平均トスレバ面積ヲ考ヘル場合ノ該差ヲ0, 1, 0.2及
0.3トシタ場合ニ許容サルベキ長短徑比ハ最大1, 87
2, 23及 2, 80トナリ傾斜角60°程度デモ該差ハ
0.2以下デアアル。然シ乍ラ余等ノ結果デハ斯ル考察ハ一般的
行ハル難イモノデアアル事ヲ示シタ。即チ $(D_m)^2$ ト D^2 ノ
比ハ常ニ $(D_1 \times D_2)$ ト D^2 ノ比ヨリ大デアリ。更ニ此ノ比

ハ常ニ1ニ等リ大デアアル。

他方余等ノ成績ヲ n ノ値ヲ以テ觀察スルナラバ、 n ハ常ニ
 $n_m > n > n_1$ デアルガ、其等ノ間ノ差ハ前項實驗第三ノ
表ニ見ル如ク $n_m - n$ ハ $n - n_1$ ニ比シ概ネ大デアアル
ニシテ次表ノ様デアアル。

n	傾角	$n_m - n$	$n - n_1$
1.0 米	30°	0.042	0.009
	45°	0.070	0.042
	60°	0.103	0.084
3.5 米	30°	0.019	0.016
	45°	0.053	0.035
	60°	0.064	0.088

之ヲ要スルニ n_m 及 n_1 モ之ヲ n ノ代値トシテ得メフデア
アルガ、測定ノ簡便サヲ想ヘバ從來ノ如ク D_m ナ用フルヨリ D_1
ヲ用フル方ガ遙ニ有利デアルト考ヘラレル。

$$(ハ) \quad \frac{D}{d} \quad \text{ト落達}$$

滴粒ニ至ル斑痕形成ノ機構ハ尤ヨリ複雑ナ問題デアアルガ
第6圖ニ記シタ $\frac{D}{d}$ ト d ノ關係ニ就テ若干補足スレバ、斑痕ハ
滴ノ分子ガ紙面土ヲ流レルタメニ生スルモノデアツテ、紙面ノ
摩擦ニヨリテ速度ガ零トナルニテ擴大シラルト考ヘルト、
滴ノ落達時ヲ自由表面ニ於ケル分子ノ速度ハ落達ノ速度ニ等シ
イト考ヘラレル。從ツテ滴ノ擴大度即チ $\frac{D}{d}$ ハ滴ノ落達速度

ニ比例スルモノトモ考ヘラレル。茲ニ於テ第16圖ニ於テ、 $\frac{D}{a} = \frac{v}{c}$ トシテ適當ニ a ヲ選ンデミルト之ノ式ガ成立スル様ニ見
 ンル。又 a ノ大キナ場合ニ若干 $\frac{D}{a}$ ガ小タクナルノハ飛散シテ紙面上
 ニ連續シタ斑痕ヲ作ラヌ部分ガ増スタストモ考ヘラレル。然シ斯
 クノ如キ考ヘ方ハ斑痕形成ノ機構ニ對シテ本質的ナ説明ニナルモ
 ノトハ考ヘテ居ナイ。

5. 結 言

- 1) 紙上ニ落達スル滴粒ニ依ツテ生スル斑痕ノ大サニ關シテ實
 験シ、終末落下速度ノ滴粒ノ直徑 d ト其ノ形成スル斑痕ノ直
 徑 D ノ間ニ

$$D = 5.69 \cdot \left(\frac{d}{a} - 5.53 \right) \quad \left(\frac{d}{a} \geq 8.88 \right)$$

$$D = 2.15 \quad \left(\frac{d}{a} < 8.88 \right)$$

(但 D, d 共ニ 0.1 mmヲ單
 位トス)

ノ關係ノ存スベキ事ヲ確カメタ。

- 2) 更ニ傾斜面上ニ落達スル場合ノ斑痕ニ就テ實験シ短徑 D_1
 ハ傾角ト共ニ減少スルガ、長徑 D_2 及平均徑 D_m ノ何レ
 モ d ノ之ト共ニ増大シ、實際ノ測定ニ於テハ D_m ヲ用ヒルヨ
 リモ D_1 ノミヲ用ヒタ方ガ有利ナル事ヲ結論シ得タ。
- 3) 又 $\frac{D}{a}$ ノ比ガ滴ノ落達 v ト比例シテ變化スル事ヲ認メタ。

文 獻

- 1) 金子：雨下撒布ノ基礎的考察，防研報告，第1巻第41號
- 2) 鈴木：(前報ニ引用)

陸軍軍醫學校防疫研究報告

第1部 第 81 號

X. 高空飛布ニ於ケル算定地上濃度

陸軍軍醫學校防疫研究室(部長 石井少將)

陸軍軍醫少佐 金子 順一

陸軍軍醫中尉 小酒井 望

軍事秘密

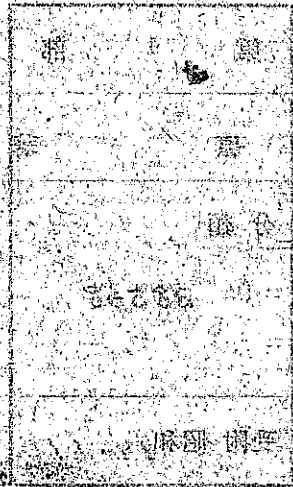
第 1 部
原 著
分 類 385.58
受附 昭和19.6.16

台灣與中國海軍軍艦

第 3 章 第 1 節

第一章 總論

一、前言



內 容

- 1.0.0 研究ノ目的
- 2.0.0 判 決
- 3.0.0 参照文獻
- 4.0.0 本件ニ關スル從來ノ知見概要
- 5.0.0 詳 細
- 5.1.0 前 提
- 5.1.1 前提事項
- 5.1.2 要項採用理由
- 5.2.0 算定方法
- 5.2.1.0 基礎諸元
- 5.2.1.1 Xノ落選分布
- 5.2.1.2 自然擴散量
- 5.2.1.3 風 力
- 5.2.1.4 散布方法
- 5.2.2.0 算定ノ方法
- 5.2.2.1 假想分布能
- 5.2.2.2 實際ノ計算法
- 5.3.0 算定結果
- 5.3.1 $W=0$ ノ場合
- 5.3.2 $W=5$ ノ場合
- 5.3.3 $W=10$ ノ場合
- 5.4.0 算定結果ノ考察

1.0.0 研究ノ目的

X 撒布、特ニ高空撒布ニ於ケル地上濃度ハ之ヲ野外試験的ニ決定スルコト至難ナリ。而シテ X 撒布ノ成果ハ高空並ニ落下空間ノ氣象交感ト相並ンデ X ノ地上濃度ニ左右アル。

本研究ハ X ノ落速分布ノ實測値ヲ用ヒ妥當ナルベキ前提ノ下ニ高空撒布ニ於ケル地上濃度ヲ計算シ、以テ一地區ニ墾スル X ノ所要量ヲ算定シ、將來高空運用ノ採ルベキ方法ニ關スル提命ヲ得ントス。

2.0.0 判 決

1. 一般ニ X ノ 50000 米以上ノ撒布ニ於テハ地上ニ毎平方米 10 箇以上ノ有効噴霧帯ヲ形成センガ爲、一般ニ於ケル撒布量 100 班程度以上ナルヲ要ス。
2. 高度 1000 米程度以下ニテハ前記ハ 10 班程度ニテ足ル。
3. 即チ X ノ高々度運用ハ低空噴射器ノ形式ニ依ルヲ有利トス。

3.0.0 参考文献

- (1) 金子：雨下撒布ノ基礎的考察，防研報告，第1部 41號
- (2) 同：PXノ効果計算法，同上，第1部 63號
- (3) 小酒井：Xノ空中落速ニ就テ，同上，第1部 66號
- (4) 鈴木、高橋：撒布器ノ研究，防研報 731部報
航空要研究月誌 第20～25號

4.0.0 本件ニ關スル從來ノ知見概要

本件ニ關シ之ヲ野外試験ニ依ラテ決定スル事ノ至難ナル爲、實際ニ X ノ撒布シテ地上濃度ヲ測定セル例ハ皆無ナリ。

之ヲ計算ニ依リ求ムル事ハ一ノ容易ナル手要ナルモ從來 X ノ落速ニ關スル精確ナル實測値ヲ缺如セル爲、之ノ點ニ於テモ特ニ信頼ニベキ資料ナシ。

金子⁽¹⁾ハ地上濃度ノ算定ニ當リ X ノ液中落下速度ヨリ指定セル空中落速ヲ用ヒタルモ、當時 X ノ地上濃度ノ有効限界尙明カナラザリシ爲、其ノ結果ニ就テ檢討シアラズ。又此ノ場合 X ノ自然擴

散器ヲ大ナル雨下滴粒ト同一ニ取扱ヘル事妥當ナラザルベシ。

然ルニ金子⁽²⁾ハ各種資料ヨリ X ノ地上濃度ノ有効限界トシテ毎平方米 10 箇ナル事ヲ推論セリ。斯ル見地ヨリ本件ヲ再檢討シ、特ニ高々度運用ノ限度ヲ認識スベキ事重要ナリ。

小酒井⁽³⁾ハ最近曾研究ニ於テ X ノ落速分布ノ概キ信憑ニベキ實測値ヲ得タリ。茲ニ該結果ヲ應用シ本件ヲ解明シ得ルニ到ル。

地上濃度算定ニ最モ重要ナル意義ヲ有スル自然擴散器ニ關シ金子⁽¹⁾ノ假定ヲ更ニ用フルハ前記ノ如ク適當ナラズ。又之ニ關スル鈴木、高橋⁽⁴⁾ノ室内實驗ノ結果ハ直チニ此處ニ應用シ得ベキ性質ノモノニアラズ。即チ茲ニ再ビ X ノ落速ニ近キ滴粒ノ擴散ノ狀況ヨリ適宜ノ前提ヲ提出使用セザルヲ得ズ。本研究ノ主目的ガ高々度撒布ノ可能性ノ概略ヲ把握セントスルニ在ル限リ此ノ點ハ寬容ナルベシ。

5.0.0 詳 細

5.1.0 前 提

5.1.1. 前提事項

1. X ノ空中落速分布ハ地上ニ於テ次式ニ依ル

$$\frac{dn}{dx} = Ax^7 \exp(-7.766 x) \quad (\text{小酒井})$$

$$\text{但シ } x = V_0 - 0.75 \quad (\text{m/s})$$

2. X ノ自然擴散ハ次ニ依ル

α. 自然擴散器徑 B ハ撒布高度 H ニ比例ス

β. B ハ落速 V ニ反比例ス

γ. 撒布 X ハ該管自然擴散器内ニ平等ニ分布ス

δ. $H:1000\text{m} \quad V_0:1.80 \frac{\text{m}}{\text{s}}$ ニ於テ $B=450\text{m}$ ナリ

即チ

$$B_n = 450 \cdot \frac{H}{1000} \cdot \frac{1.80}{V_n} \quad (m)$$

5.1.2 要項採用理由

要項1. = 於テ常數A. ヲ存置セシハ小酒井ノ原式ガ分布頻度ヲ求メテA=25(100ナル値ヲ與ヘタルニ反シ茲ニハ撒布總數ヲ規正シdnヲ管筒數ヲ以テ表ハランガ爲ナリ。

金子⁽¹⁾ハ自然擴散層ノ概念ヲ導入シ當時研究ノ主参照タリシ落速毎秒4米程度ノ微粒ニ妥當ナル如ク雨下高度1000米以上ニテハ自然擴散層徑Dハ一定ニシテ之ヲ1000米トシ。内D'=500米ナル自然擴散半域ニ平等ニ分布セル假想粒野ヲ用ヒタリ。本假定ハ當時既ニXノ地上濃度算定ニ於テ記サセタル通りXノ如キ落速小ナルモノニハ不適當ナリ。

茲ニ於テ昭和14乃至15年噴發時ノ石井部隊ニ於テ行ヒタル高空雨下ノ成績ヲ參照シ。V₀ = 1.50~2.00 (m/s)程度ノモノニ於テハBハHニ比例シ。且Hガ1000米程度ニテハB=300~550米ナル結果ヲ得タリ。之ノ結果ヲ適當ニ整理シ要項2ヲ置ケリ。

又自然擴散層内ニ平等分布圖ヲ假定スルヲ避ケ。前記Bハ平等層ト見做スベキ値ヲ採レリ。

尤ヨリ要項2. ハ全ク經驗的ニシテ何等理論的根據ヲ有セズ。將來更ニ確實ナル數値ノ得ラルル事アラバ直チニ改良スベシ。但シ差管ツテ本件ノ見當ヲ定スルニハ差支ナカルベシ。

要項2. = 茲レバ。地上濃度ハ撒布高度ノ自乘並ニ風力ニ反比例スルモノト略言シ得。

5.2.0 算定方法

5.2.1.0 基礎諸元

5.2.1.1. Xノ落速分布

撒布X總數2.500x10⁶ (≒1.0班)ニ就キ地上濃度ヲ求ムル爲。小酒井式ニ於テ。

$$A \pm 6.540 \times 10^9$$

即チ

$$\frac{dn}{dV} = 6.540 \times 10^9 (V_0 - 0.75)^7 \exp[-7.766(V_0 - 0.75)]$$

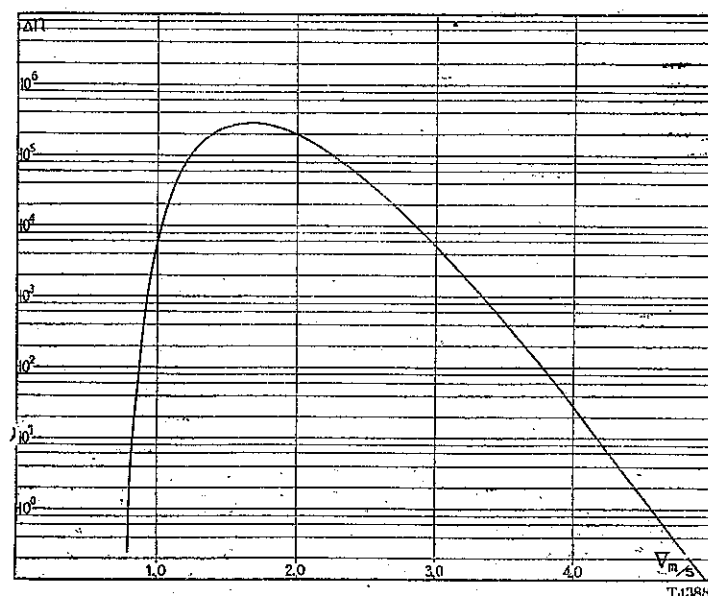
本式ニ於テ△V=0.10トセル場合ノ△nハ第一表及第1圖ニ示ス如シ。但シ落速ハ總テ地上落速ニテ表ハシ。又例ヘバV=1.5ニ相當スル數ハV=1.45ト1.55トノ間ノモノナリ。

第一表 落速別管筒數

V	△n	V	△n
0.8	0.000003	2.6	0.280
0.9	0.0035	2.7	0.187
1.0	0.0573	2.8	0.122
		2.9	0.0779
1.1	0.278	3.0	0.0493
1.2	0.742		
1.3	1.394	3.1	0.0309
1.4	2.059	3.2	0.0190
1.5	2.582	3.3	0.0115
		3.4	0.0069
1.6	2.850	3.5	0.0041
1.7	2.860		
1.8	2.641	3.6	0.0025
1.9	2.356	3.7	0.0014
2.0	1.987	3.8	0.0008
		3.9	0.0005
2.1	1.500	4.0	0.0003
2.2	1.135		
2.3	0.832	4.1	0.0002
2.4	0.593	4.2	0.0002
2.5	0.413		

單位 10⁵ 箇

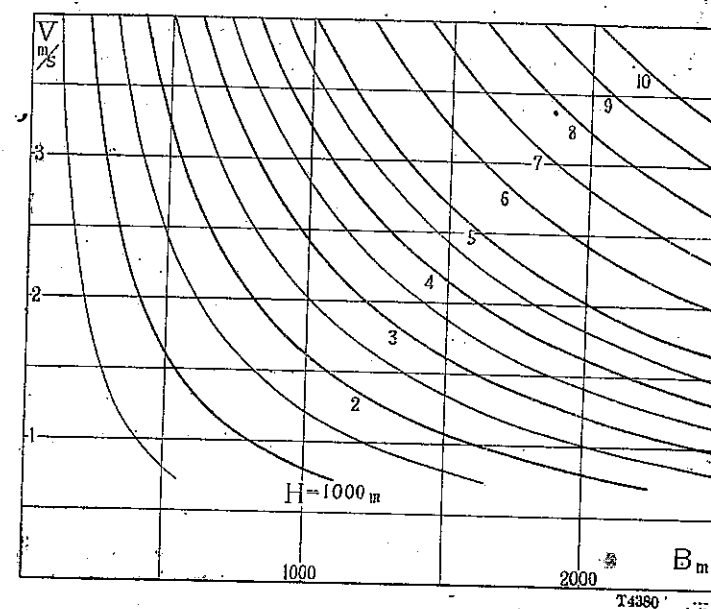
第1圖 落速分布 (簡)



5.2.1.2 自然擴散圖

5.1.1 前提事項2. = 差ク織布高 H , 落速 V_0 , 擴散徑 B ノ關係ハ第2圖ニ示ス如シ。

第2圖 自然擴散圖



5.2.1.3 風 力

風力分布ノ假定ヲ複雜トスルモ其ノ結果ヲ直チニ實地ニ即應セシメ得ザルヲ以テ、茲ニハ織布高 H 層ヨリ地上ニ到ル平均風力ヲ假定シ、各高度層ノ風力ハ該平均風力ニ等シキモノトス。
又計算ノ簡略化ノ爲、茲ニ云フ風力トハ「有効風力」ヲ意味スルモノトス。即チ某高度ニ於ケル實風力ヲ w_h , 空氣密度ヲ ρ_h トスルトキ、有効風力 W_h ヲ次ノ如クニ表ハス。

$$W_h = w_h \times (\rho_0 / \rho_h)^{\frac{1}{2}}$$

之ニ依リ $V_h = V_0$ トシテ計算シ得。以下ニ於テハ

$$\bar{W} = 0, 5, 10 \text{ (m/s)}$$

ノ三種ヲ考フ

5.2.1.4. 撒布方法

一般ニ航空機ヨリ直接撒布スル場合ハ、機速 V_G 、撒布經過時間 T ナル時撒布總量 N ハ先ヅ $V_G \times T$ ナル距離ニ撒布セラル。爾後 $N / (V_G \times T)$ ナル單位粒野ヲ飛行方向ニ集成セル粒野ヲ形成ス。之ニ反シ投下彈ニ依ル撒布ハ噴射點ニ於ケル點的粒野ヲ初發スルモノト見做シ得。

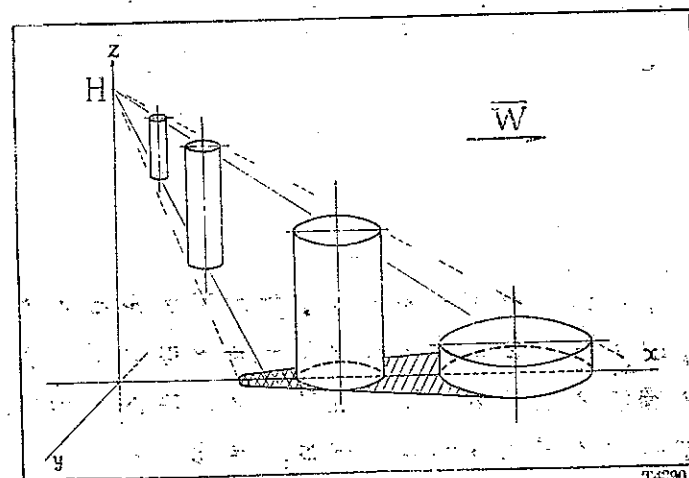
然ルニ撒布距離長 $V_G \times T$ ハ通常 100 米程度ニシテ高度 1000 米以上ニテ若干ノ距離アル場合ハ X ノ流下擴散距離ニ比シ之ヲ略近的ニ無視シ得ベシ。從テ以下ニ於テハ點撒布ノ場合ニ就テノミ算定スルモ、線撒布ノ場合ニ在リテモ著差ナキモノト考フルコトヲ得。

5.2.2.0 算定ノ方法

5.2.2.1 假想分布錐

風力ハ撒布高度 H ヨリ地上迄一様ニ \bar{W} ナルヲ以テ、同一落速 V ノモノハ水平ナル圓板上ニ一様ニ分布シ、次ニ圓板ノ徑ヲ大ナラシメツツ愈ニ自然擴散圓ニ近シテ落速ス。前記ニ依リ、任意ノ經過時間ニ於テ撒布 X ノ占ムル空間ノ形狀ハ新ル水平圓板ガ垂直ニ並列シテ生ズル圓柱ナリ。圖 3 圖ニ說明セル如シ。

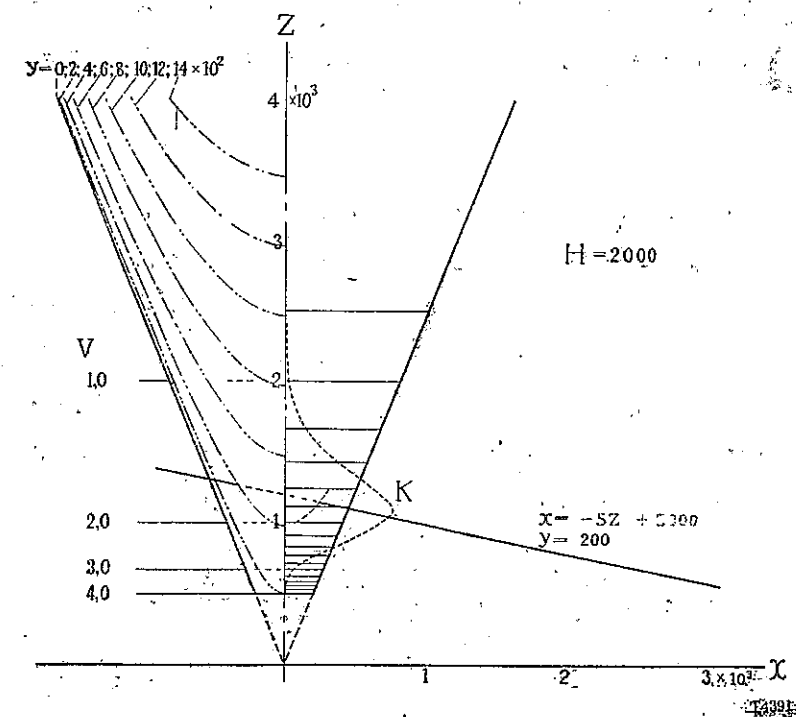
第3圖 粒野說明圖



此ノ圓柱粒野ハ平均風力方向ニ移動シ、最ニ落速大ナル圓板落速セバ之ヨリ落速小ナル圓板ハ落速ニ應ジテ大ナル徑ヲ成シツツ落速落速シテ風力方向ニ流下重疊シ故ニ末續ガリノ地上粒野ヲ形成ス。

今茲一軸ニ時間ヲ添テ各落速 V ノ落速時間ニ相當スル Z ノ位置ニ落速時自然擴散圓大ノ水平圓板ヲ置キ之ヲ順次連結セバ第4圖ノ如キ倒立截頭圓錐ヲ得。之ヲ假想分布錐ト稱セントス。

第4圖 假想分布錐



撒布高度 H 、平均風力 \bar{W} ナルトキ、落速 V ナルモノノ落速時間 $T = H / V$ 、流下距離 $S = \bar{W} \times H / V$ ナルヲ以テ V_1 及 V_2 ニ相當スルモノノ圓板ノ位置 $Z = T$ 及 T_2 ノ間隔 $\Delta Z = T_1 - T_2$ ハ其等ノ流下距離ノ差 $\Delta S = S_1 - S_2$ ニ比例ス。

平均風力方向、即チ流下方向ヲ X -軸、之ニ直角ナル方向ヲ

Y-軸トセバ假想分布錐ハ原點ヲ頂トスル倒立圓錐ニシテ其ノ錐面ハ次式ニ依リ表ハサル

$$\frac{x^2+y^2}{\frac{1}{4}B^2} - \frac{z^2}{(\frac{H}{V})^2} = 0$$

$$\text{故ニ } B = \frac{1.90}{1000} \cdot 450 \cdot \frac{H}{V}$$

$$\text{即チ } x^2+y^2-0.164z^2=0$$

地上散野ヲ形成スル粒ノ落下距離ト自然擴散額トノ關係ヲ考慮セバ、任意ノ點 $x=S$ 、 $y=0$ ニ於ケル地上散野ハ

$$x = -\bar{W}z + S$$

$$y = 0$$

ナル直線ヲ假想分布錐ヲ通過スル部分ノ圓板濃度ヲ逐次集積セバモノト成ル。此ノ直線ト錐体トノ交點ニ於テハ

$$z = \frac{\bar{W}S \pm \sqrt{0.164(S^2 + \bar{W}^2)}}{\bar{W}^2 - 0.164}$$

トナル。之ヲ Z_1 及 Z_2 トス

假想分布錐内ニ於ケル空間濃度、即チ前記ノ圓板濃度 K ハ次ノ如シ

$$z = \frac{H}{V} : dz = -\frac{H}{V^2} dv$$

$$K = \Delta n / \left\{ \pi \left(\frac{B}{2} \right)^2 \frac{H}{V} dv \right\}$$

$$= 1.277 \times 10^{10} \cdot H^{-2} V (V-0.75)^7 \exp\{-7.766(V-0.75)\}$$

$$= 1.277 \times 10^{10} \cdot H \cdot z^{-4} \left(\frac{H}{z} - 0.75 \right) \exp\left\{-7.766 \left(\frac{H}{z} - 0.75 \right)\right\}$$

從ツテ地上濃度 C ハ

$$C = 1.277 \times 10^{10} \cdot H \int_{Z_1}^{Z_2} z^{-4} \left(\frac{H}{z} - 0.75 \right) \exp\left\{-7.766 \left(\frac{H}{z} - 0.75 \right)\right\} dz$$

ヲ表ハサル。然ルニ此ノ積分値ヲ求ムル事容易ナラザルヲ以テ、茲ニハ次ニ示ス如キ階級別計算ヲ行フ

5.2.2.2. 實際ノ計算法

撒布高 ΔV 別ニ空間濃度 $\Delta V=0.10$ ノ階級毎ニ求メ5.2.2.1

ノ Z_1 及 Z_2 ニ相當スル區間ニ於テ之ノ濃度ヲ積算ス。之ノ場合空間濃度 K ハ截頭圓錐ノ体積式ヨリ

$$K = 12 \Delta n / \{ \pi (z'^2 - z''^2) (B'^2 + B'B'' + B''^2) \}$$

$$= 4.615 \Delta n / (z'^3 - z''^3)$$

ニ依リ求ム

某 Δn 層 Z_1 ト Z_2 トノ間ニ相當スル ΔC ハ該層ニ依ル地上濃度 C ノ増分 ΔC ハ

$$\Delta C = 4.615 \Delta n / (z'^2 + z'z'' + z''^2)$$

$$\approx 1.538 \Delta n / Z_m^2$$

トス。但シ Z' 及 Z'' ハ該層ノ上下限ニシテ、 Z_m ハ Z' ト Z'' トノ平均トス

Z_1 又ハ Z_2 ガ某層ノ上下限内ニ在ルヲ以テ

$$\Delta C = \Delta C \frac{Z_1 - Z''}{Z_1 - Z''} \quad \Delta C = \Delta C \frac{Z_1 - Z_2}{Z_1 - Z''}$$

卜 又

本計算 = 投テハ S、ノ 100 ~ 500 米毎 = . 又 c、ノ
100 ~ 200 米毎 = Kヲ求メタリ

計算ノ限界ハ $V=0.9 \sim 4.0$ (m/s) トス 從ツテ Z
又ハ Z_2 ガ本限界相當値以外ニ在ルトキハ該限界値以外ノ Z ノ値
ニ依ツテ地上機巧ヲ増加セザルモノトス

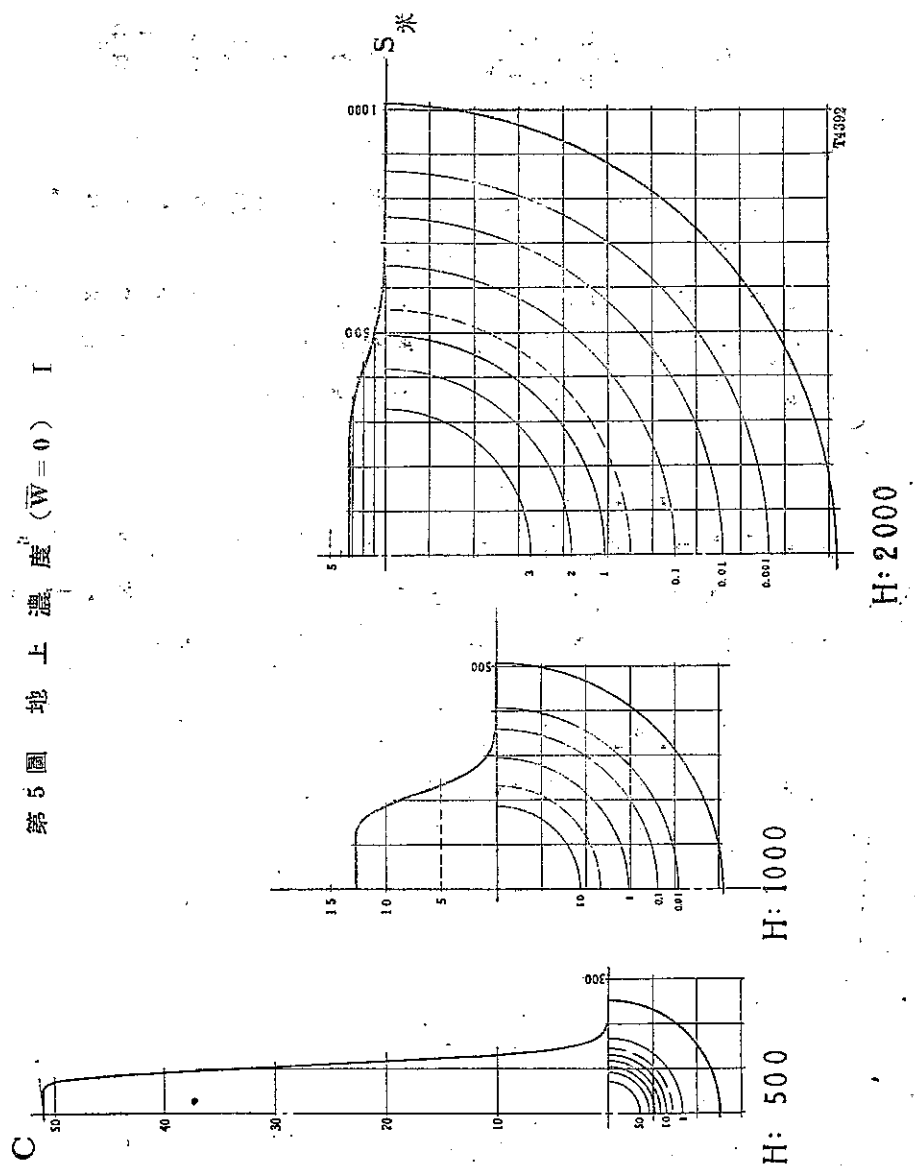
5.3.0 算定結果

次 = 示ス $x = y = c$, $z = 0$ ナル平均風力方向ノ直線 = 沿スル毎
平方米X箇数及 $x - y$ 平面上ノ濃度分布型ニシテ、一部ニ於テハ
 $x = 8$, $z = 0$ ナル直線 = 沿フ濃度ヲモ表ハス

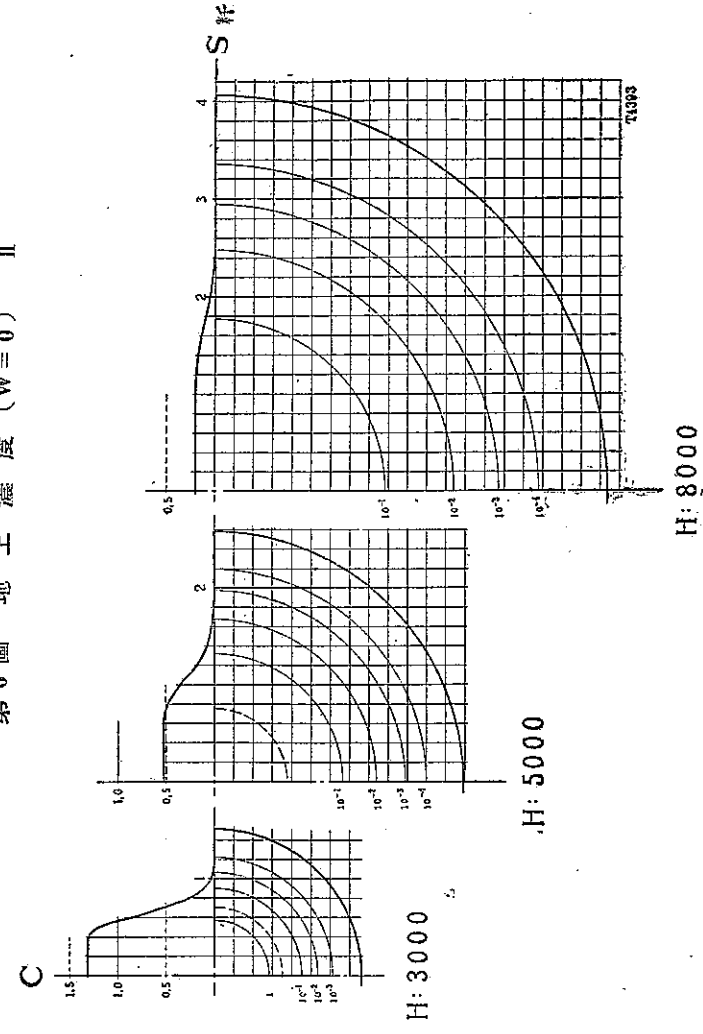
5.3.1. $\overline{W} = 0$ の場合

此ノトキ、地上對野ハ最布點直下、前ニ原點ヲ中心トスル圓ヲ

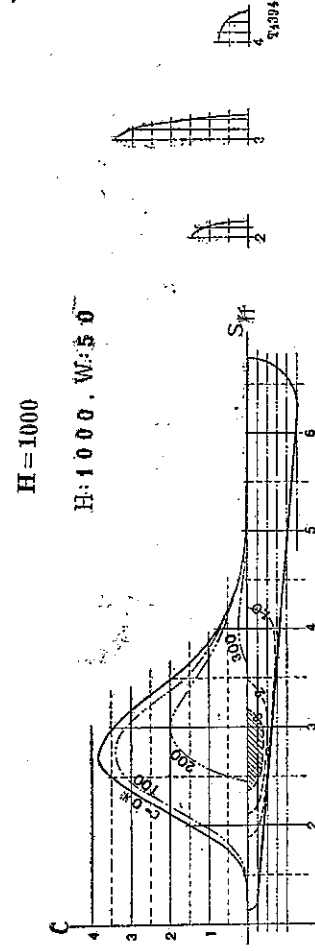
73



第6圖 地上濃度 ($\bar{W}=0$) II

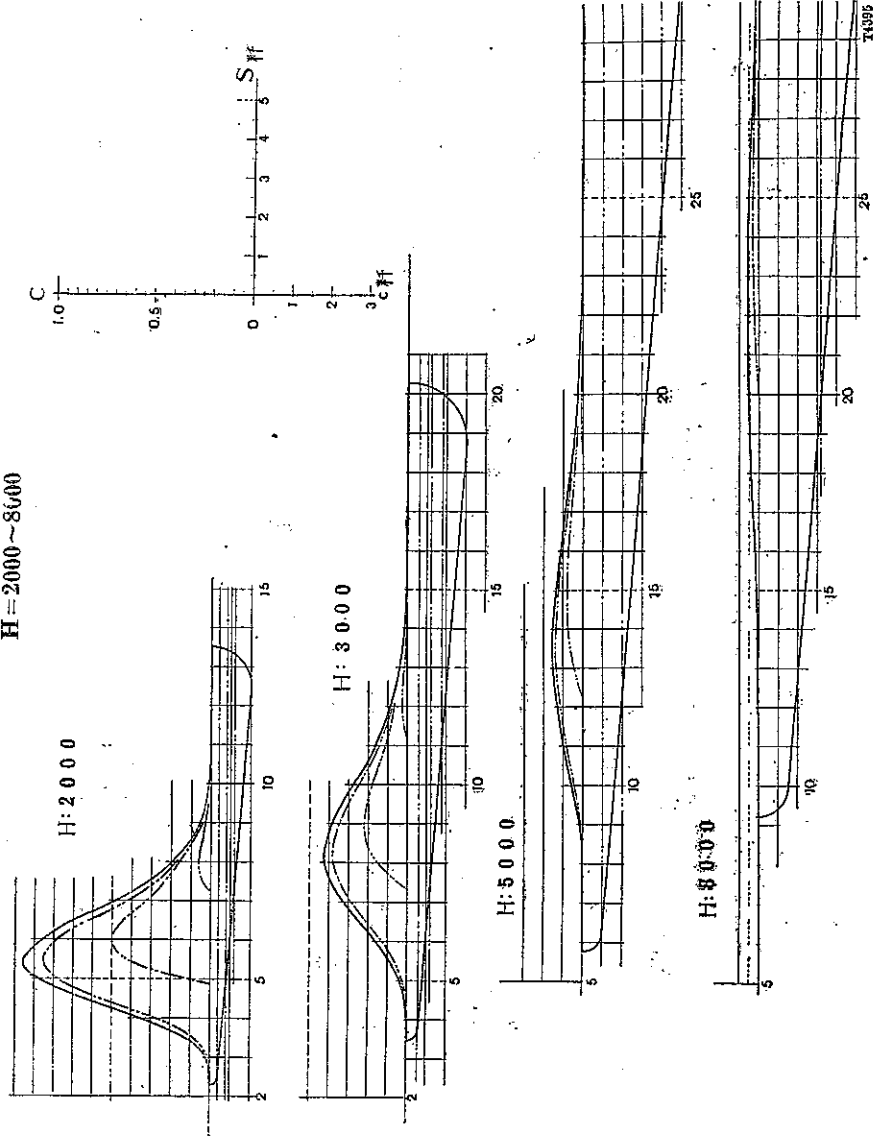


第7圖 地上濃度 ($\bar{W}=5.0$)



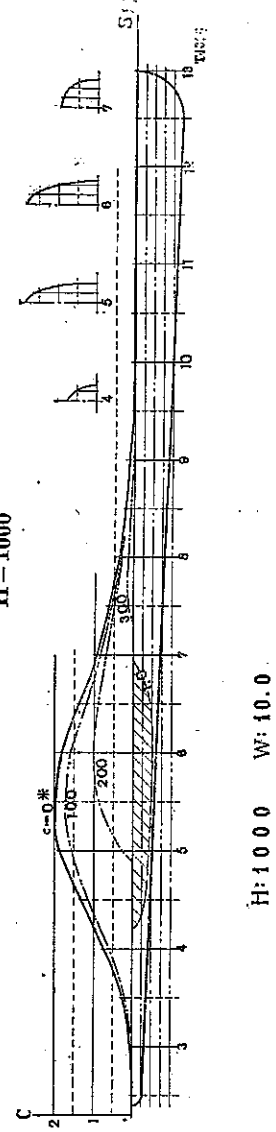
第8圖 地上濃度 ($\bar{W}=5.0$)

$H=2000 \sim 8000$

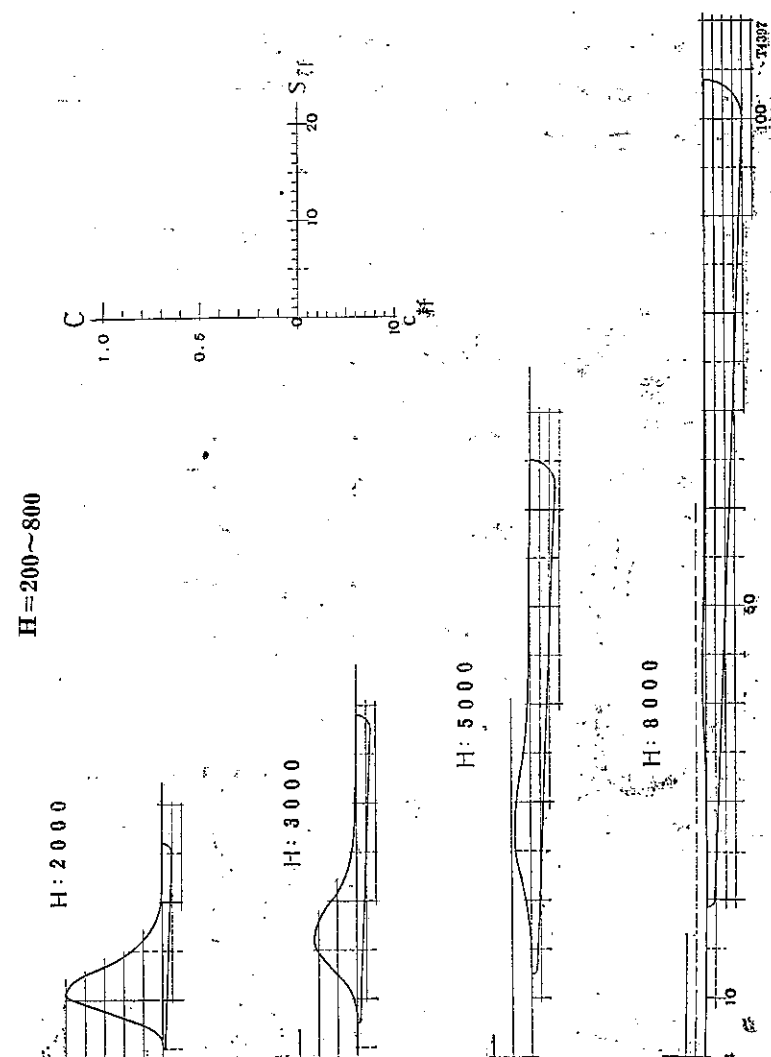


第9圖 地上濃度 ($\bar{W}=10.0$)

$H=1000$



第10圖 地上濃度 ($\bar{W}=10.0$)



5.4.0 算定結果の考察

5.3.0 = 示す算定値 = 於て各條件 = 同ズル地上濃度の最大値
ヲ表示セバ第三表ノ如シ

第三表 最大地上濃度の算定値 (毎平方メートル値)

$\frac{W}{H}$ 米/秒	0	5	10
1000	12.3	3.9	2.0
2000	3.3	1.0	0.5
3000	1.3	0.4	0.2
5000	0.5	0.2	0.08
8000	0.2	0.06	0.03

今X濃布 = 於ケル最少有効濃度ヲ毎平方メートル10値トシ前記各場
ニ於テ最大濃度ヲ最少有効濃度ニ選セシメルニ要スルX量(庇)
ヲ算定セバ第三表ノ如シ 但シ0.1庇以上ハ切上グ

第三表 有効濃布最少所要量 (庇)

$\frac{W}{H}$ 米/秒	0	5	10
1000	1	3	6
2000	4	11	21
3000	8	24	45
5000	20	65	125
8000	50	167	320

W=0ナルガ如キ場ハ實際ニハ極メテ稀ニシテ毎分5米/秒以
上ニ殊ニH>5000ニ於テハ10米/秒以上ナリト爲フベキナ
リ 從ツテ5000米以上ヨリスル濃布ニ於テハ一目標ニ對スル

散布所要量ハ通常100疋以上タルベシ

X散布ノ實施容易ナルベキ規模ト之ガ効果ノ發現狀況ヲ考慮スルトキ、新ル大量ヲ以テスル全城被覆ニ比シ、比較的少量ヲ以テスル有効散布地帯ノ點在的形成的ガ爲ニ有利ナリ。又、之ガ爲ニハ低空噴射機ノ形式ヲ採ルベキモノナリ。即チ高度1000米以下ノ高度ニテ作働スル場合ニハ一日ニ數回ニテ通常10疋以下ニテ充分ナル有効散布ヲ形成シ得。又少量單位量ノ着陸噴射機ヲ以テスル運用亦有利ナルベシ。

以上ハ地上機ヨリスル着陸ナルモ他方航空機等ニ收納スル間ノXノ保存ガ良好ニ行ハレタリトスル場合ニ於テ落下空面ノ氣象交感ハ高々直接散布ニ於テ最も著シク、落下機ヲ以テスル時ノ經過時間ノ至短ナル點ヨリ之ニ對スル疑慮ヲ全ク要セズ。之亦前記見解ニ一致スル所ナリ。

陸軍軍醫學校防疫研究報告

第1部 第82號

火藥力ニ依ル液ノ飛散狀況

陸軍軍醫學校防疫研究室

軍事秘密

第1部
原 著
分類
392-0065
受附 昭和19.7.1

五、六、七、八、九

[illegible]

1. The first group of people who are not in the majority are the people who are not in the majority.

11-11-68

聯
 上
 廣
 卷
 國
 講
 合
 家
 立
 結
 一
 五
 年
 生
 爲
 人
 味
 即
 南
 堂

目次

- 1.0.0 研究ノ目的
- 2.0.0 判 決
- 3.0.0 參 照 文 獻
- 4.0.0 本件研究ニ關スル從來ノ知見経緯概要
- 5.0.0 詳 細
 - 5.1.0 實驗方法
 - 5.2.0 實驗成績
 - 5.3.0 實驗成績ノ檢討
- 6.0.0 將來ノ意圖

1.0.0. 研究ノ目的

火藥力ヲ以テ液体ヲ霧化セントスル研究ニ於テ、容器又ハ彈ニ裝填スル場合ノ火藥ノ位置及此ト液ノ霧散狀況トノ關係ノ關係圖ヲ寫眞記錄ニ依リ把握シ、將來霧化彈ノ採ルべき形式ヲ判定セシメトス。

2.0.0. 判 決

2. 嚢化ノ爲メ機藥ハ中心管内及彈頭内裝填ヲ併用スルヲ要ス

3.0.0. 參照文獻

附研第二科：昭和十九年四月「土」號第一回野外試驗要報

第 19.5. 二科試 要報 第一號

4.0.0. 本件研究ニ關スル從來ノ知見經緯概要
本件研究ニ關シテハ從來全ク知見ナシト稱シ得。

既往石井部隊ニ於テ研究セラレタル各種ノ特殊投下彈ノ中、齒液撒布ヲ目的トセルモノニ在リテハ初期ニ於テ地上着發ノ型式ヲ採ルモノアリシモ（「イ」彈、「ロ」彈）、遂次空中噴射ノ型式ニ移行セリ。例ヘバ「ウジ」彈、改良「ウジ」彈、「ウ」彈等ノ如シ。

然ルニ低空噴射ハ之ヲ要スルニ「雨下」ノ範疇ニ屬シ、比較的大ナル滴粒ニ依ル地上汚染ヲ目途トス。低空撒布彈ノ噴射高度ノ規正ハ或ハ氣壓信管、或ハ時計式又ハ火道式時限信管ニ依ルニ之ガ精密ナル精度保持ハ容易ナラズ。然レドモ地上汚染ノ場合ニハ落速比較的大ニシテ低空風力ニ依ル目標逸脱少キヲ以テ噴射高度ノ偏倚ハ大ナル障礙タラズ。

他方近時最モ注目スベキモノトシテ經氣道攻撃アリ。此ノ場合ニ於テハ實際的ニ落下ヲ認メザルガ如キ微細ナル滴粒ヲ形成スルヲ要ス。之ガ爲ニハ空中噴射ノ型式ハ不合適ナリ。

「イ」、「ロ」彈ハ着發式ナレドモ地上汚染ヲ主目的トシテ着集セラレタル如ク、齒嚙形成能力殆ドナシ。更ニ之等ハ地上靜止破裂ヲ中心トシテ研究ヲ進メラレタルモノノ如ク、大ナル存速ニ對スル對策ナシ。

茲ニ於テ再ビ火藥ニ依ル齒嚙嚙化ノ基礎研究ニ還元セザルベカラズ。嚙化ニ關スル研究ノ第一ハ金子、小酒井ニ依ル滴粒徑ト斑痕徑ノ關係測定（防研報告第1部62號）ナレドモ、本件ニ直接關係ナシ。

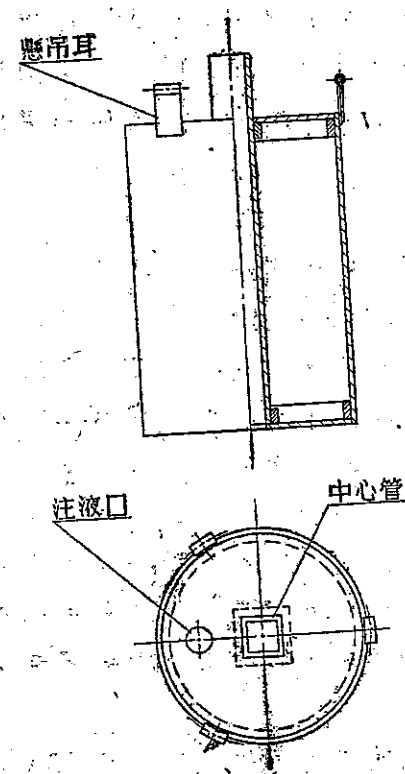
余等ハ昭和十九年四月新潟ニ於テ本件ニ關スル試験ヲ行ヒタリ防研二科試要報第1號參照。本試験ノ報告ハ本篇ノ他粒子ノ大サニ關スル研究ヲ含ムモノナレド之ニ就テハ後報ス。

5.0.0. 詳細

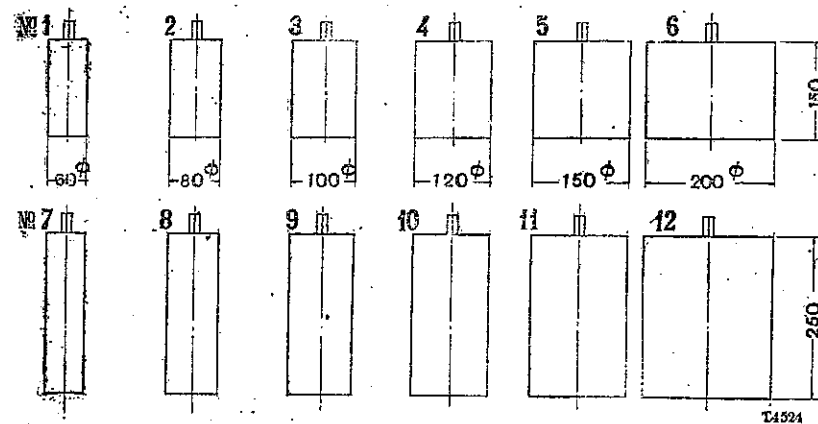
5.1.0. 實驗方法

試口容器ハ「耗透明セルロイド」板ヨリ成ル圓筒ニシテ概長第圖ニ示ス如ク中心管ヲ備フ。容器ハ第1乃至12號ニ區分スノ寸法圖解第二圖ニ如シ。

第一圖 I 試口容器略圖



第一圖Ⅱ 試口容器寸法略圖



容器ハ三又ニ依リ地上約2米ニ懸吊ス。

容器ニハ色素水溶液ヲ充滿ス。注液口ハ特ニ閉鎖スルコトナシ。

装薬ニハ九七式導爆索ヲ使用ス。装薬位置ハ周圍廻巻、中心挿入、底面密着及此等ノ組合セトシ。概要第三圖ニ示スガ如シ之等ノ中「中」、「中半」、「中2」ニ於テハ容器ノ縦長ニ依リ索長ヲ自ラ規定サルルモ、「周」、「底」ニ於テハ種々ノ長ヲ用フ。「底」ニ於テ容器徑小ナルトキハ索ハ二重巻トス。

點火方式ハ寫眞記録ニ便ナラシムル爲約 $\frac{1}{2}$ 秒ノ延期ヲ附スル爲第四圖ニ示スガ如キ方式トス。即チ「

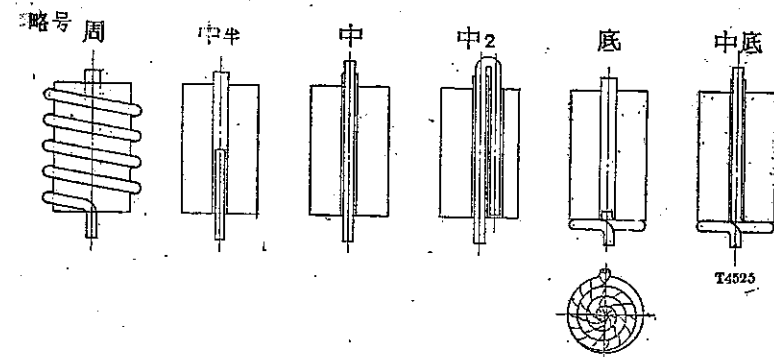
電氣門管～遅燃導火索～雷管～導爆索

トス。(延期電氣管入手シ得ザリシニ依ル。)

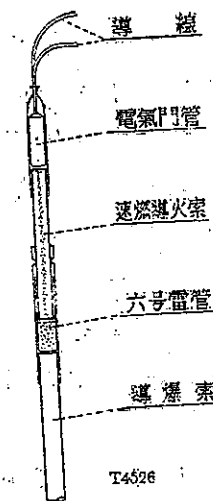
同時ニ生ゼル滴粒徑測定ノ爲ノ検知場ヲ設定セルモ之ニ關シテハ後報ニ譲ル。

寫眞機ハSine-Kodak Special 「レンズ」ハSine-Kodak Telephoto F 4.5 31n.ヲ用ニ64駒取トシ、所要畫面ヲ逐一引伸シテ観測ス。

第二圖 装薬略圖



第三圖 點火方式圖



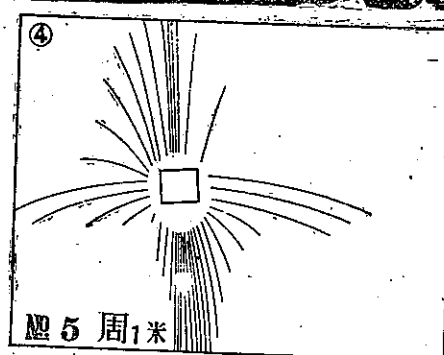
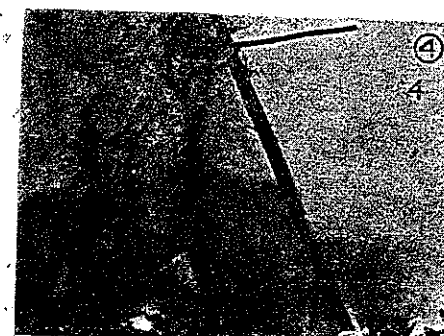
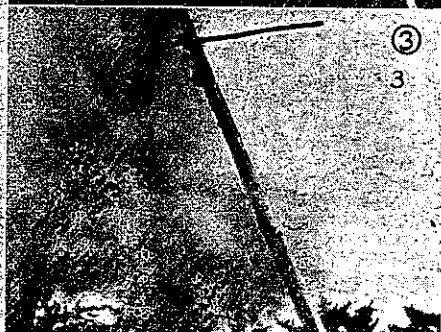
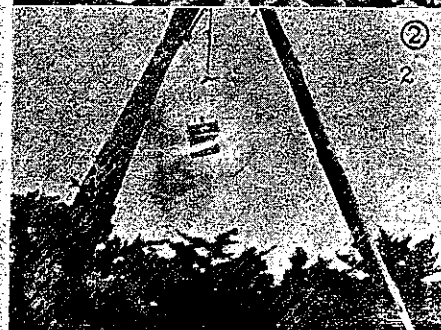
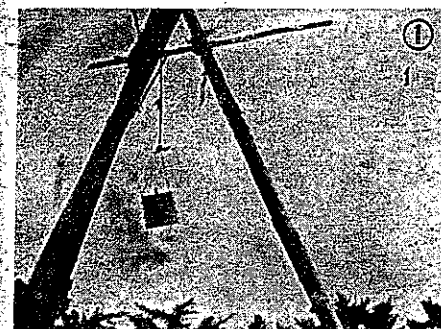
5.2.0. 實驗成績

實驗成績ヲ概括スレバ次ノ如シ。

- 1) 「周」ハ主トシテ上下方向。一部水平方向ノ飛散ヲ生ズ。
- 2) 「中」ハ主トシテ水平方向。一部上下方向ノ飛散ヲ生シ。徑ノ増大ト共ニ上下方向ノ飛散著シ。
- 3) 「中半」ハ「中」ト大差ナキモ上方飛散緩ナリ。
- 4) 「底」ハ主トシテ上方。一部水平方向ノ飛散ヲ生ズ。上方飛散ノ速度緩ナリ。
- 5) 「周」+「中」ハ上下飛散ヲ増加スルノ他1), 2)ニ同ジ。
- 6) 「中」+「底」ハ主トシテ上方。一部水平方向ノ飛散ヲ生シ。上方飛散速カナリ。

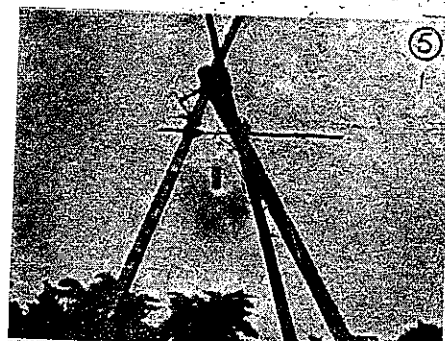
得タル寫眞ノ一部ヲ示スニ寫眞第一乃至 ノ如シ
尙飛散狀況ヲ略示セバ第五圖乃至十七圖ノ如シ。寫眞ニ記セル
1, 2, ---- 等ハ $\frac{1}{64}$, $\frac{2}{64}$ ---- 等ノ時間(秒)ヲ示ス。

寫眞第1~4, 第四圖 5號, 周 1米



T4527

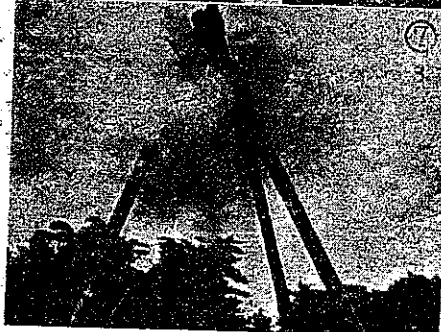
寫真第5~7, 第五圖 I號, 中2



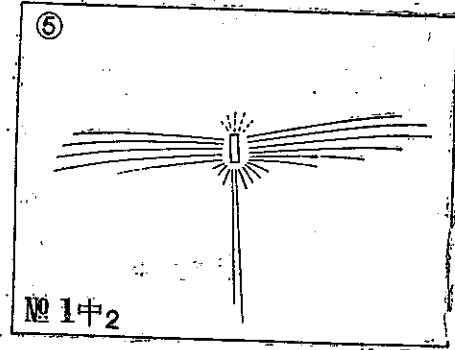
⑤



⑥



⑦

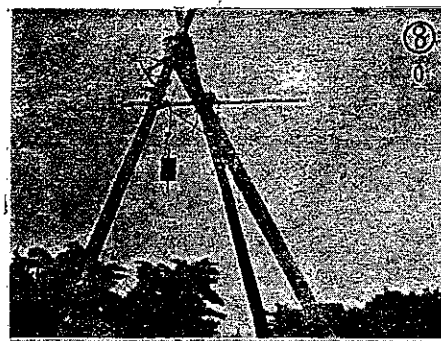


⑤

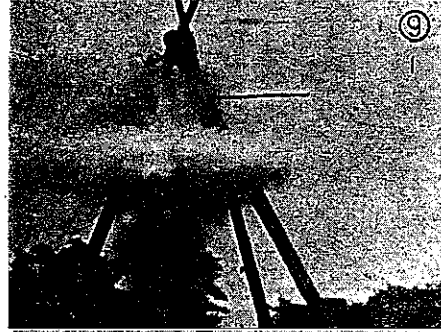
№1中2

T4528

寫真第8~11, 第六圖



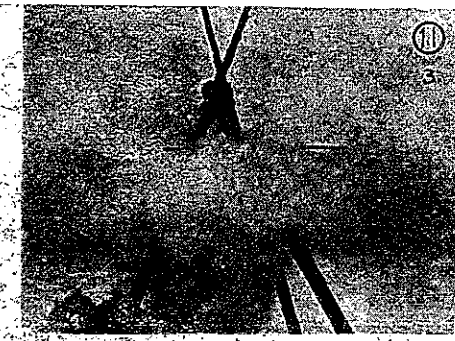
⑧



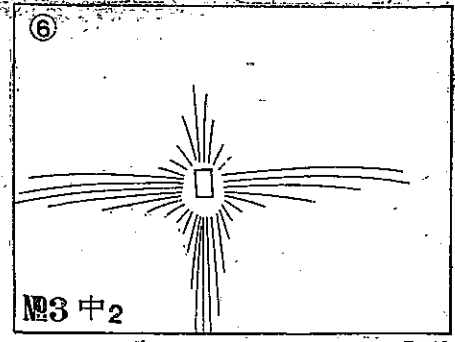
⑨



⑩



⑪

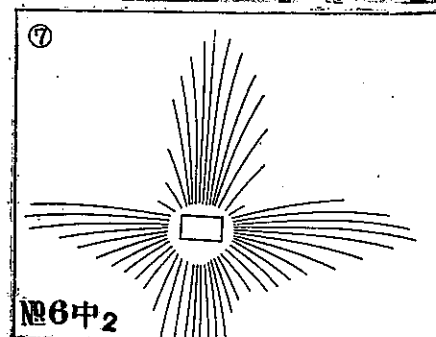
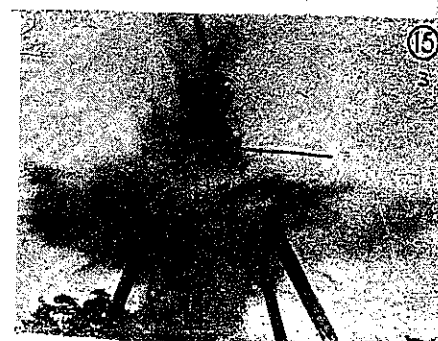
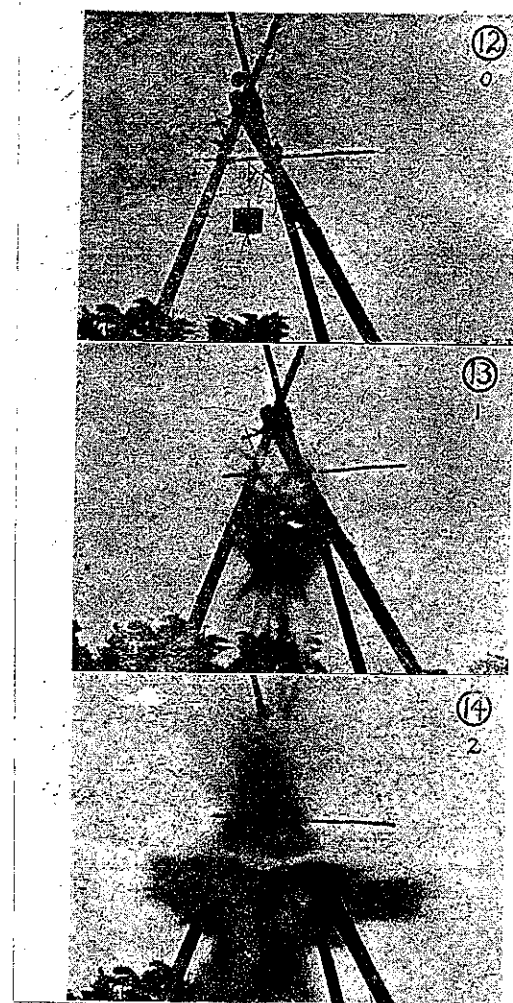


⑥

№3中2

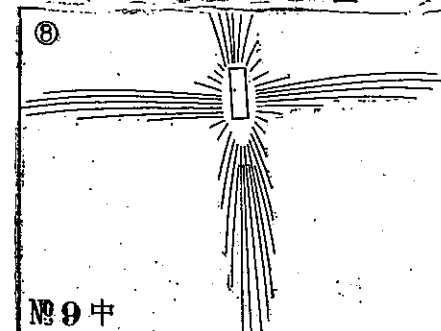
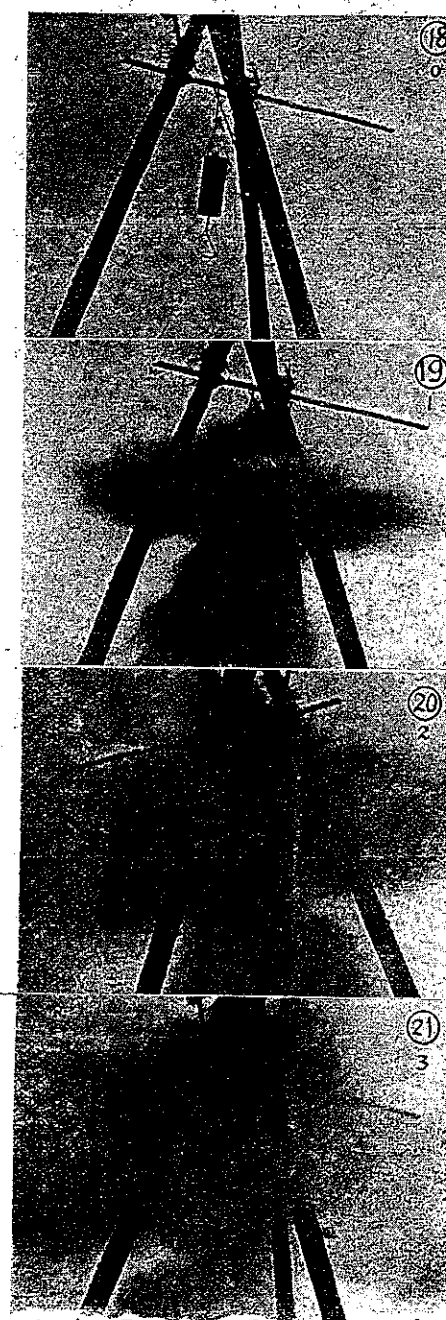
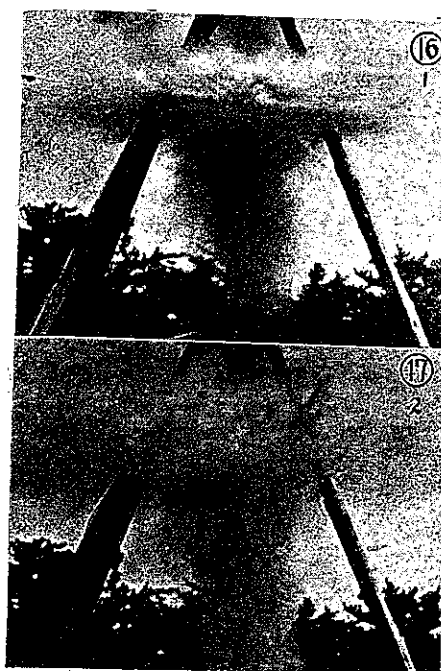
T4529

29



№6中2

T4530



№9中

寫真第22~24，第九圖 11號，中

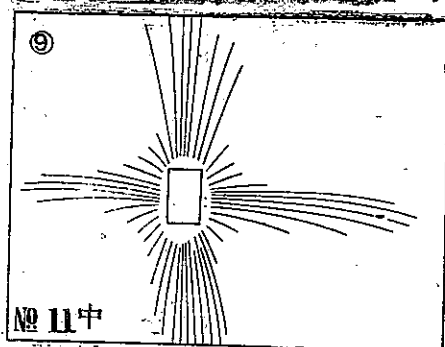
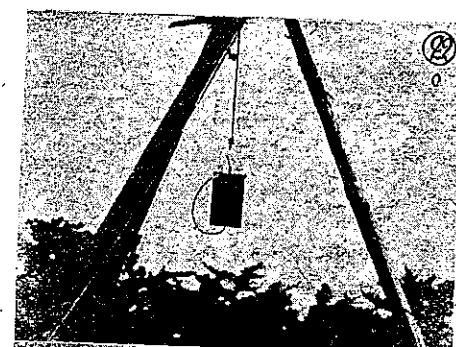


圖 11 中

T4532

寫真第25~28，第十圖 12號，中

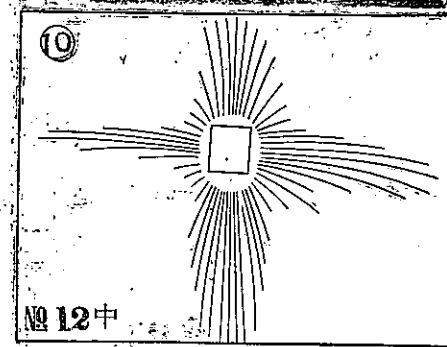
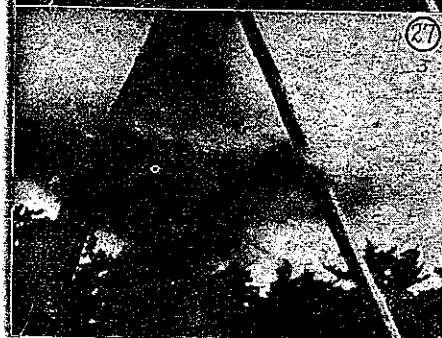
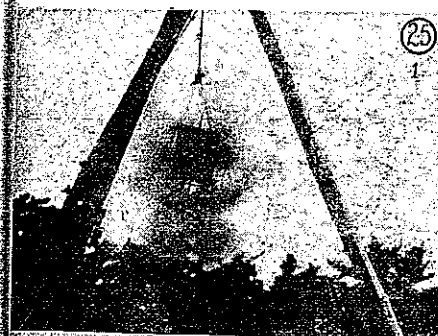
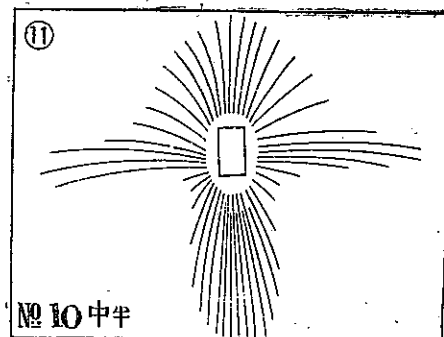
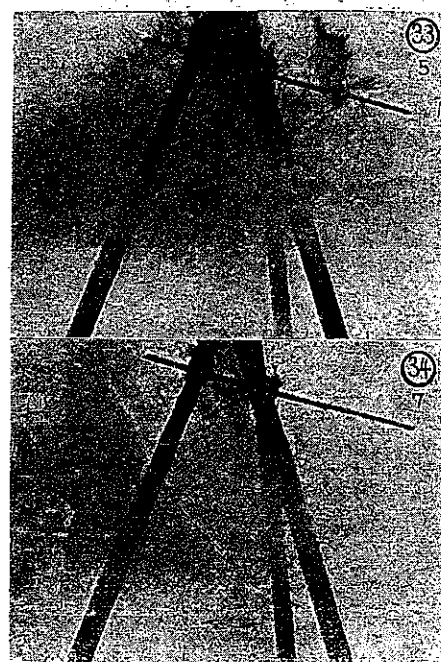
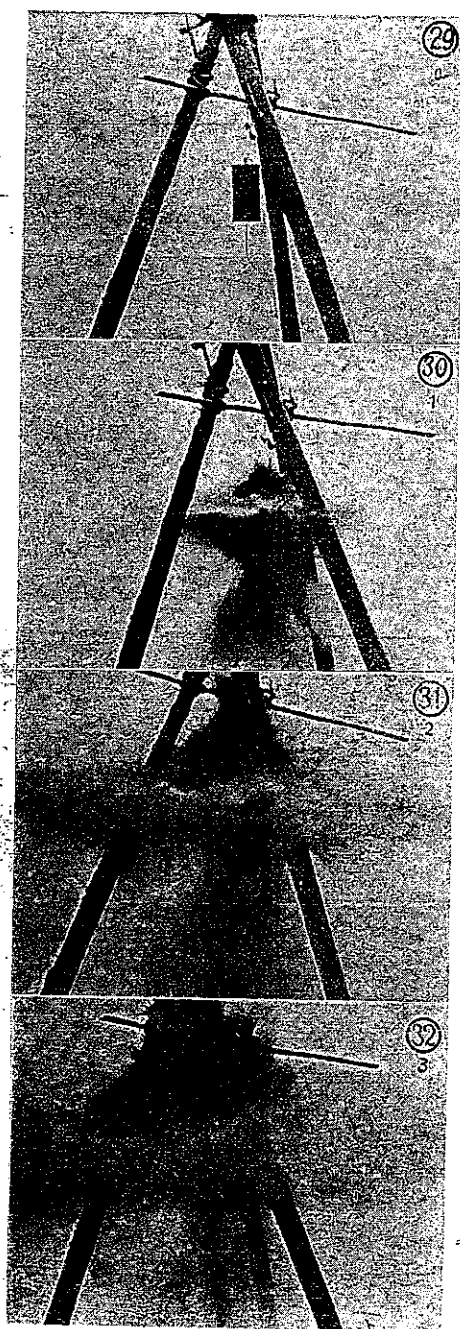


圖 12 中

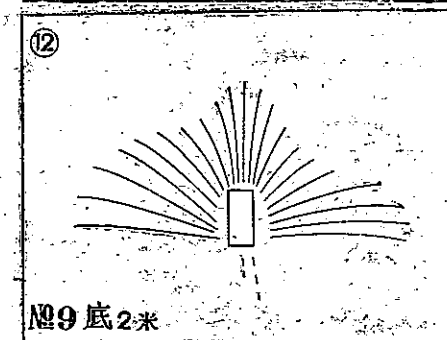
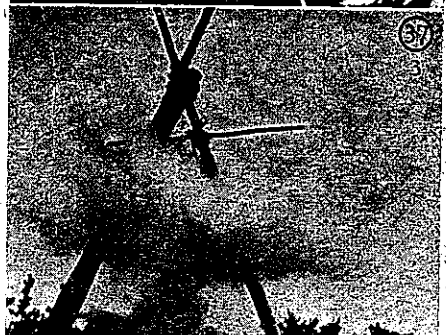
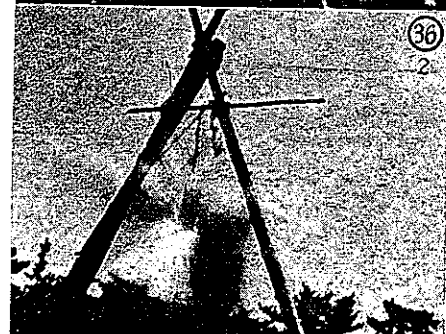
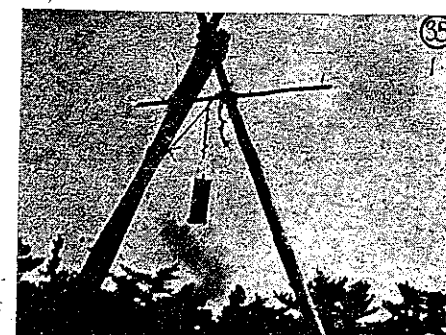
T4533

寫真第29~34, 第十一圖 10號, 中半



T4534

寫真第35~38, 第十二圖 9號, 底2米



T4535

寫真第 39 ~ 46 , 第十三圖 12 號 , 底 2 米

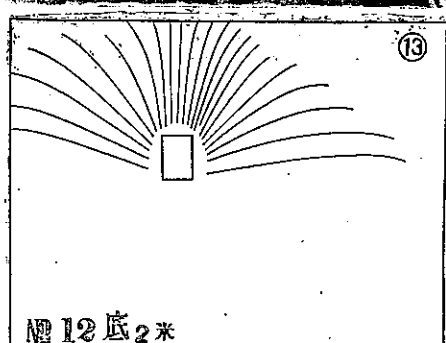
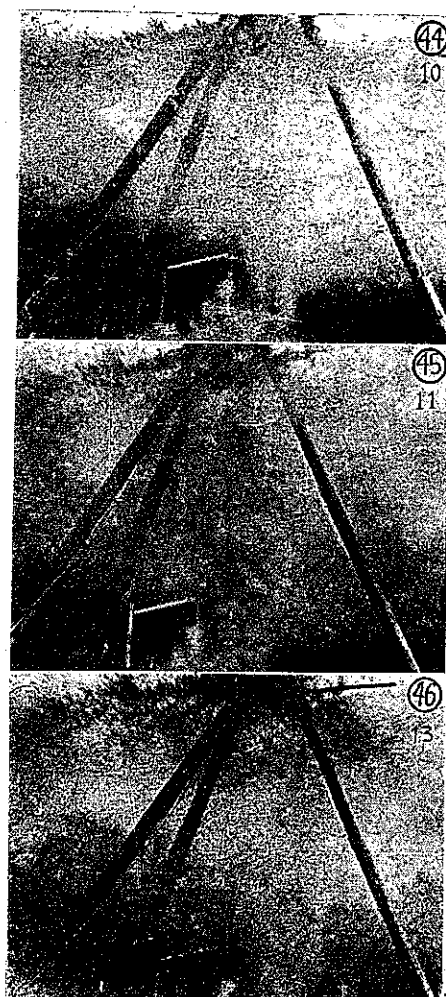
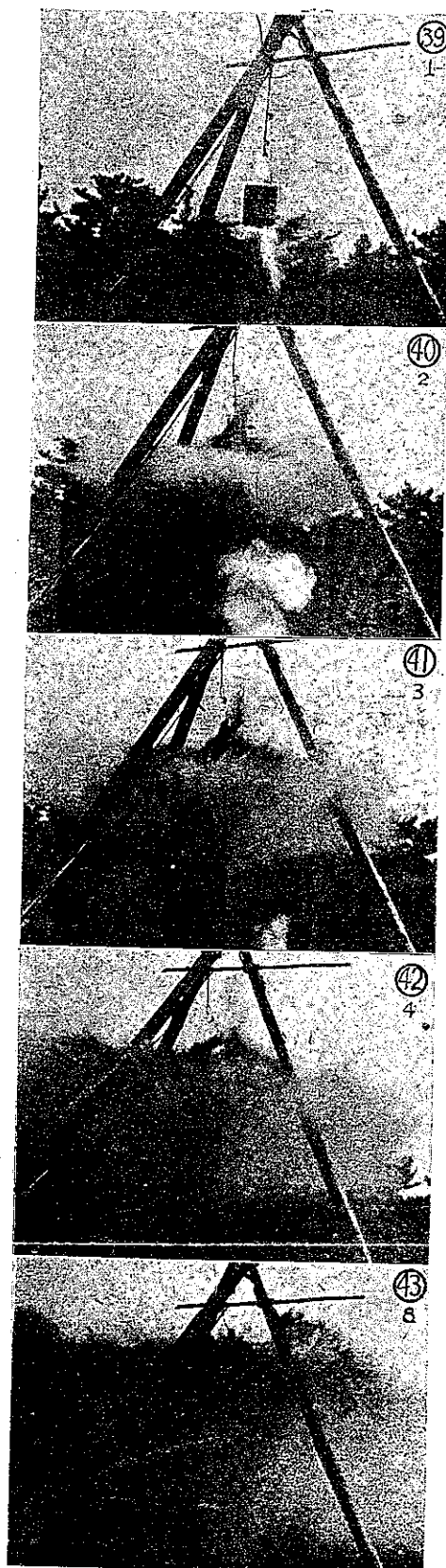


圖 12 底 2 米

T4536

寫真第 47 ~ 50 , 第十四圖 2 號 , 中底 1 米

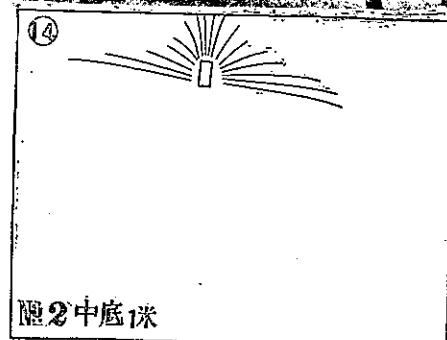
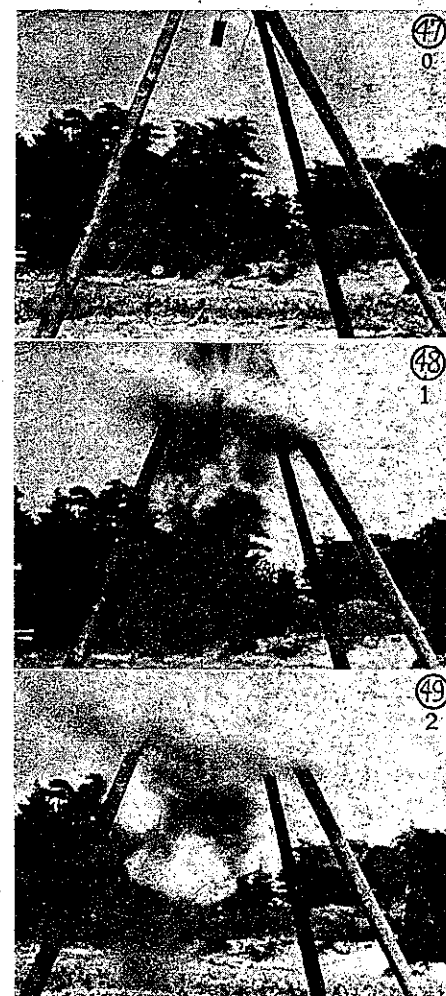
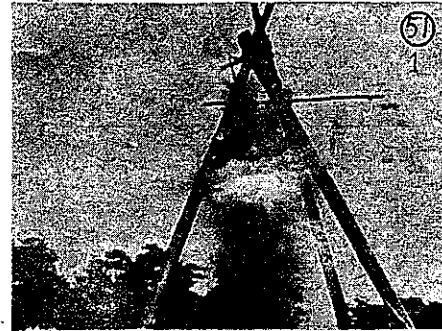


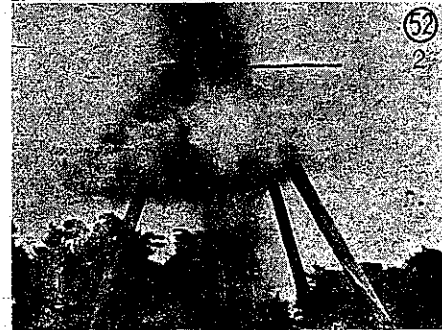
圖 2 中底 1 米

T4537

寫真第51~53，第十五圖 6號，中底2米



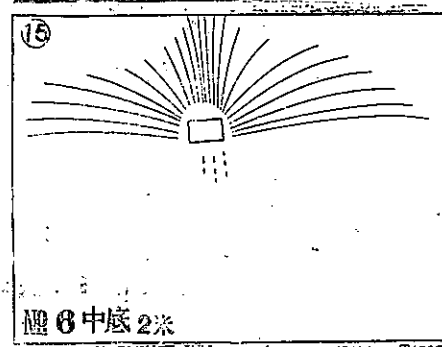
51



52



53

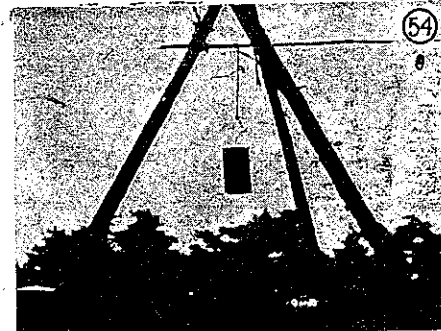


15

圖6中底2米

T4589

寫真第54~57，第十六圖 11號，中底2米



54



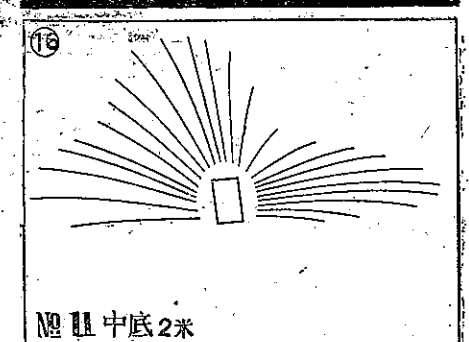
55



56



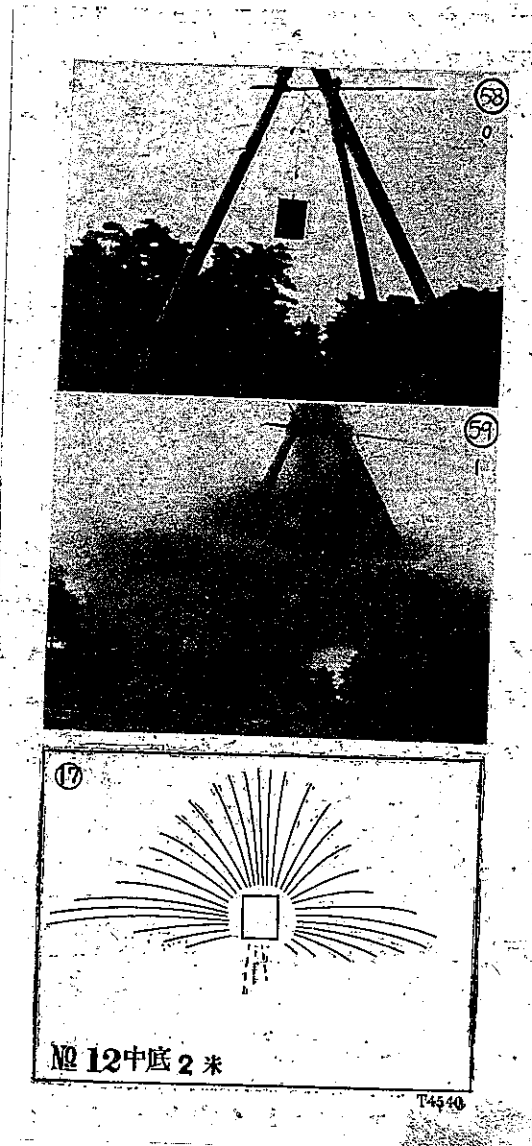
57



16

圖11中底2米

T4589



5.3.0. 貨物成敗の検討

本貨物ニ使用セル容器ハ上下面ヲ平面トシ、ソノ圓筒接着部ニ特ニ著シキ補強法ヲ施シアラズ。大ナル一様ノ内壓ニ對シテハ先ヅ上下面ノ脱離スル虞充分ニ存ス。本貨物ニ於テ殊ニ上下方向ノ飛散ヲ認ムル事著シキ點ハ新ル容器ノ缺陷ニ起因スルコトアルベキヲ疑ハシム。

然ルニ使用セル火薬ノ爆速著大ニシテ、且容器ハ當ニ必ズ粉碎セラルタルニヨリ密スルニ。生ゼル内壓ハ容器材質ノ何レノ方向ノ強度ヲモ越ニ超越スル程度ナルベキヲ以テ、上下面ニ存スル弱點ハ殆ト問題トナラズ。着火瞬間ニシテ全部分ガ同時ニ粉碎ラルモノト考フベシ。即チ本貨物ハ容器ノ形状、強度ニ依ル制限ヲ受タルコトナク單ニ火薬位置及量ト液ノ飛散ノ關係ヲ端的ニ表ハスモノト云フベシ。

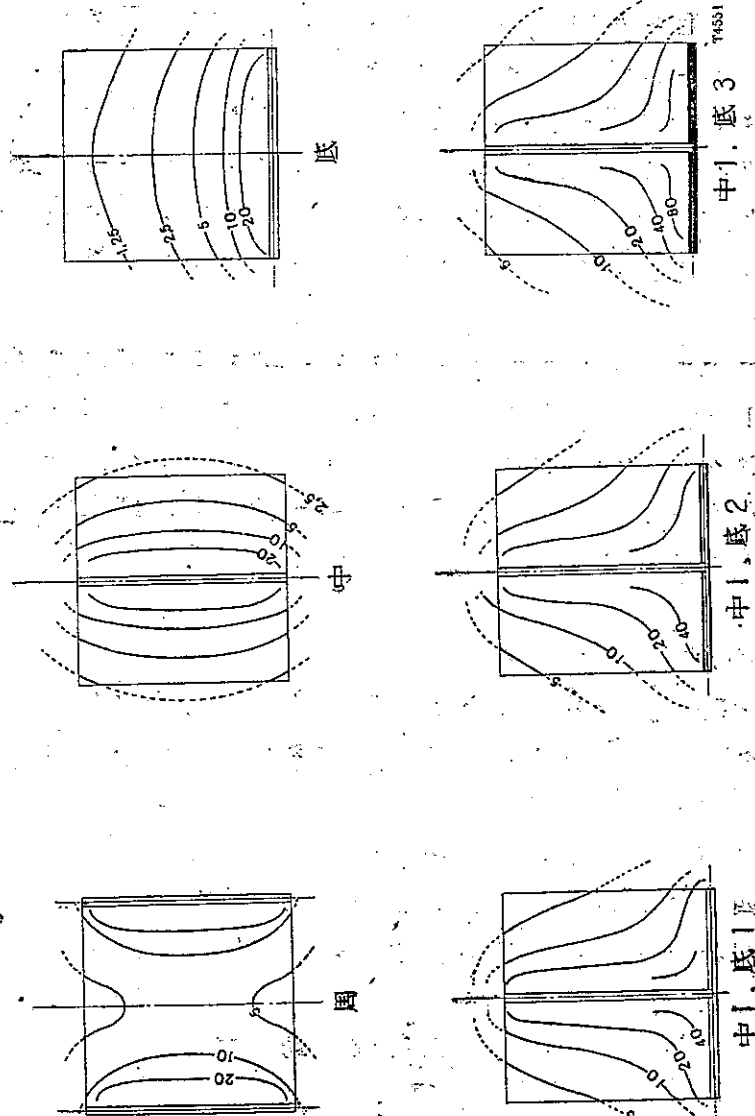
今火薬ノ微差 dQ ニ依リ、之ヨリ距離 D ナル點ニ爆發瞬間ニ於テ $\frac{KdQ}{D^2}$ ナル爆壓ヲ及スモノト假定ス。問題ヲ二次元ニ限定シ、裝藥位置ヲ單位長ノ線ト考ヘ、容器ノ縦及横ヲ各ト單位長ニ等シトスル場合、裝藥位置ニ依ル内壓ノ狀況ヲ求ムルニ、 $K=1$ ナルモノ、内壓等壓線ハ第十八圖ノ如クナル。例ヘバ「中」ニ於テハ (x, y) ノ壓ハ

$$\frac{KdQ}{D^2} = \frac{K}{x} \tan^{-1} \frac{y}{x} + \tan^{-1} \frac{1-y}{x}$$

ナリ。

第十八圖ニ於テハ「中」+「底」ノ場合ニ「底」藥ノ強度ヲ「中」ニ比シ、1, 2, 及3倍ナル組合セヲ示ス。」

第十八圖 壓力分布圖



液ノ飛散ガ假ニ斯ル等壓線ニ直角ノ方向ニ起リ。任意ノ點ノ液部分ノ飛散速度ハ該點ノ壓力勾配ノ大キテニ關係スルモノトセバ第十八圖ヲ以テ前記各飛散狀況ノ概要ヲ推定シ得ベシ。但シ「周」及「底」ニ於テハ實際ハ裝藥ハ線狀ナラズシテ點狀トナリ該點ヲ中心トシテ生ズル圓形等壓線ヲ合成セル壓力配分ヲ生ジ。該點間隙ヨリ外方ニ飛散シ得ル如クナル。

特ニ着層スベキハ實際ノ投下ニ於ケル着發時ノ存速ナリ。本件ニ於ケル如ク液ノ飛散ニ依リテ筒壁ヲ形成セントスル場合。炸藥ハ液ノ微粒子化ニ必要ナル爆壓ヲ生ズルノミナラズ。液ノ各部分ニ於ケル上向速度ヲ少クトモ存速ニ依ル下向速度ヨリ大ナラシムルヲ要ス。

全般的ニ云ハバ「周」。「中」ニ依リテハ斯ル上向速度ヲ賦與シ得ズ。「底」ニ依リ頂部即チ彈尾部壓力勾配ヲ以テ存速ニ拮抗スルヲ要ス。然ルニ彈ノ形狀ニ依リテ明カナル如ク。微粒子化ニ最モ有效ナルハ「中」ナリ。本目的ノ彈ニハ從ツテ彈頭裝填ト中心管内裝填ヲ併用スル事心要ナリ。

6.0.0. 將來ノ意圖

本件ニ關スル研究ニ於テハ實際ノ彈型及ビ實用材質ヲ以テ以テスル模型試験タルト本實驗ノ如キ基礎試験タルトヲ問ハズ爆壓ヲ實際ニ測定シテ其ノ數値ヲ基トシテ研究ヲ進展セシムルヲ要アリ。特ニ壓電現象ノ應用ニ關シ準備セントス。

昭和十九年四月ノ野外試験ニ於テ若干測定シ得タル火藥量ト粒子ノ大イテノ關係ニ就テハ別達ニ報告ス。

助手 三 浦 助 忠

$$\frac{\frac{b}{a}}{\frac{a\delta w+b}{a\delta w} e^{\frac{b}{r^2}t}-1} = \delta w - v$$

$$= \delta w - \frac{ds}{dt}; \quad \text{積分シテ}$$

$$\left[-\frac{\frac{b}{a}}{\frac{b}{r^2}} \times \left\{ \frac{b}{r^2}t - \log \left(\frac{a\delta w+b}{a\delta w} e^{\frac{b}{r^2}t} - 1 \right) \right\} \right]_0^t = |\delta w t| - s$$

$$S = \left(\delta w + \frac{b}{a} \right) t - \frac{r^2}{a} \log \left(\frac{a\delta w+b}{a\delta w} e^{\frac{b}{r^2}t} - 1 \right)$$

$$= \left(\delta w + \frac{b}{a} \right) t - \frac{r^2}{a} \log \left(\frac{e^{\frac{b}{r^2}t} - \frac{a\delta w}{a\delta w+b}}{1 - \frac{a\delta w}{a\delta w+b}} \right)$$

$$= \left(\delta w + \frac{1}{r} 14.1 \right) t - 12800r \log_{10} \left(\frac{10^{\frac{1}{r^2} 0.00110t} - \frac{\delta w}{\delta w + 14.1 \frac{1}{r}}}{1 - \frac{\delta w}{\delta w + 14.1 \frac{1}{r}}} \right)$$

此ノ場合 r ノ値ノミヲ mm 単位デ表ストスレバ

$$S = \left(\delta w + 14.1 \frac{1}{r} \right) t - 1280r \log_{10} \left\{ \frac{10^{0.110 \frac{t}{r^2}} - \frac{\delta w}{\delta w + 14.1 \frac{1}{r}}}{1 - \frac{\delta w}{\delta w + 14.1 \frac{1}{r}}} \right\}$$

此ノ時、滴粒ノ落下ニ於テ述ベタ通り極メテ短イ。時間ノ内ニ $v \rightarrow \delta w$ トナルノデアルカラ s 計算上ハ t ノ大キナ値ニ對シテモ一々行フノ必要ハナイ。即チ $t=t_c$ デ $v=\delta w$ ト見做スト

$$S_t = S_{t_c} + \delta w(t - t_c)$$

トナル故デアル。

此ノ場合 $v \rightarrow \delta w$ ト見做ス限度ニ就テハ種々ト考ヘラレルガ、上ノ計算ノ精確度カラ考ヘ大體 $(\delta w - v) = 0.005 \times \delta w$ 程度ガ適當ト考ヘラレル。從ツテ

$$\delta w - v = \frac{\frac{b}{a}}{\frac{a\delta w+b}{a\delta w} e^{\frac{b}{r^2}t}-1}$$

$$= 0.005\delta w, \quad \text{即チ}$$

$$\frac{0.11}{r^2}t = \log_{10} \frac{W+282}{W+1.41} \quad (W: \text{m/s})$$

$$t = 9.1r^2 \log_{10} \frac{W+282}{W+1.41}$$

例ヘバ $r=0.25\text{mm}$, $W=10$ トスルト $t_c=0.8$, $r=1.0$, $w=1$ トスレバ $t_c=18.8$ デアル。

此ノ水平移動差ヲ前ノ擴散ノ考ニ取入レテ見ヨウ。

大氣中ノ渦動ハ所謂風ノ息又ハ氣流ノ惡サト云フ點ニ現レテ來ル。氣流ノ惡サハ即チ飛行狀態ニ對シテ影響スル程度デアリ、狀況ニ依テ變化ガ著シイ事ハ良ク經驗サレル所デアルガ、之ガ渦流ト量的ニ如何ナル關係ガアルカ尙明デハナイ。「ダインズ風壓計ノ急廻轉ノ記録デハ風ノ息ガヨク表ハサレル。自由大氣中デモ風ノ索ノ張力ニヨツテ記録サレテ居ル。之ヲ擴散ノ考ニ用ヒルニハ所謂風ノ息ト稱セラレル比較の大キナ風速差デハナクテ、之ヲ構成シテ居ル小サイ凹凸ノ値ヲ考ヘネバナラナイ。大キナ息ハ週期ガ30秒程度ノモノデアルガ、小サナノハ1秒位デアル。然シ最大振幅ハ大キナモノノ程度カラ此ノ1/10位デアル様ニ思ハレル。此ノ振幅ハ風速ト共ニ増加シ高サト共ニ減少スル事ガ示サレテ居ル。斯様ナ考ヲ綜合シテ次ノ様ナ假定ヲ導入シテ見ル事ガ出來ル。

$$\delta w = 0.1\bar{w},$$

$$\delta H = 1.0w;$$

然ル時前記ノ t_c ノ限度ハ次ノ様デアル。

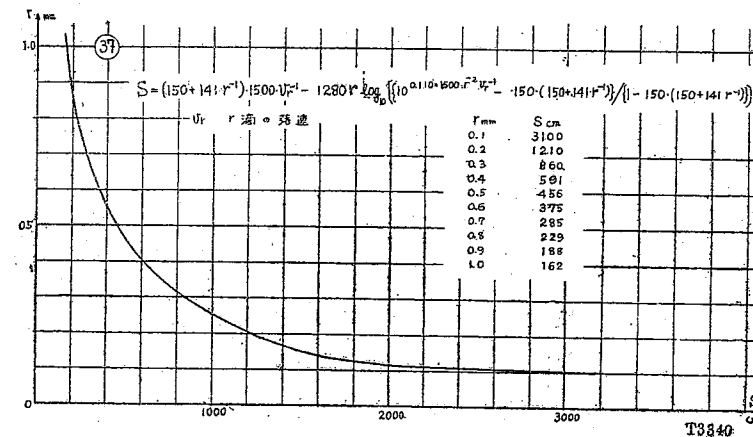
$$t_c = \frac{\delta H}{V_r}$$

V ハ粒子ノ落速ヲ示ス。

今 $\bar{w}=1500$, トスルト、 $\delta w=150$, 及 $\delta H=1500$ デアル。從ツテ

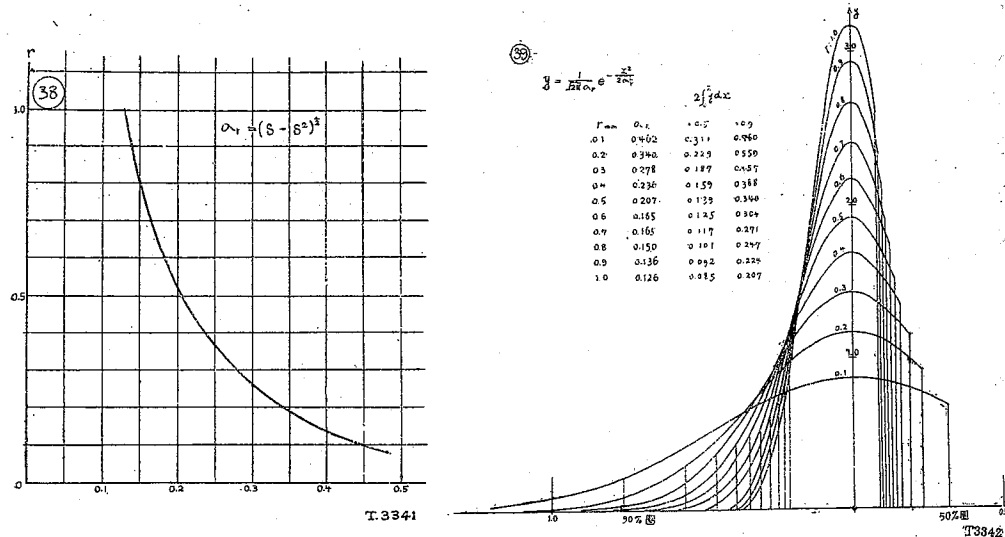
$$S = \left(150 + 14.1 \frac{1}{r} \right) \frac{1500}{V_r} - 1280r \log_{10} \left\{ \frac{10^{0.110 \frac{1500}{r^2 V_r}} - \frac{150}{150 + 14.1 \frac{1}{r}}}{1 - \frac{150}{150 + 14.1 \frac{1}{r}}} \right\}$$

此ノ式ニヨツテ $r=0.1 \sim 1.0$ ノ S ラ計算スレバ次圖ノ様デアル。(37)



此處で再び前ノ確率 = 立戻ル。 σ ノ取方 = 關シテハ擴散現象ガ純確率ノデハナイカラ特ニ
ヘラレルモノデハナイガ、此處 = 任意ノ標準ヲ假定シ之ヲ基トシテ r ノ大サ = 依ル σ ノ差ヲ
メ、後 = 此ノ標準ノ σ ガ何ノ程度ノモノデアルカヲ考ヘテ見ヤウ。

今 $\sigma_r = (S \times 10^{-4} - S^2 \times 10^{-8})^{\frac{1}{2}}$ ト假定スルト次ノ様ニナリ、之ニ依ツテ $y_r = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma_r} e^{-\frac{x^2}{2\sigma_r^2}}$ ヲ計
算シ、 $\int_{-\infty}^{\infty} y dx = 0.9$ 及 0.5 = 於ケル x ヲ求メル。(38)(39)



上ノ計算ニ用ヒタ假定デハ移動ノ回数 N ハ極メテ大キイモノデハナクテ次ニ依ツテ與ヘラレ
居ル。

$$N = \frac{H}{\delta H}$$

例ヘバ $H = 4 \times 10^6$ デアルト $N = 266$ デアル。從ツテ x ノ移動シ得ル最大限ハ $\pm N \times S_r$ デアル。
之ヲ上ノ計算ノ式ノ積分ニ於テ $Y = \int_{-\infty}^{\infty} y dx = 0.99$ デアル距離 = 想定スルト $x = 2.58\sigma$ デ與ヘ
レル。之ハ勿論各大サノ粒子ノ $N \times S_r$ ノ値 = 比例スルモノデハナイ。即チ σ ヲ求メル時ノ假
定ガ異ルカラデアル。假ニ $r = 0.5$ ノモノノ $H = 2 \times 10^6$ ノ擴散圈ヲ1215mトシ之ヲ $x_{0.5} = 2.58 \times \sigma_{0.5}$

r	0.90 區	0.99 區
0.1	1724	2692
0.2	1268	1982
0.3	1036	1620
0.4	880	1375
0.5	771	1215
0.6	690	1080
0.7	615	962
0.8	560	874
0.9	508	793
1.0	470	734

T3910

相當スルモノトスル。然ル時ハ各粒子ノ0.99及0.90ノ範圍ハ次ノ
デアル。(40)

以上ハ自然擴散ヲ風速ノ異ル層ノ粒子ノ移動ノ集合ト見做シテ解
カントシタモノデアルガ實際ノ擴散ヲ何ノ程度ニ説キ得ルカハ全
疑問デアル。殊ニ σ ノ選定法ハ全然推量ニ過ギナイ。將來 r ト擴
散ノ關係及渦流ノ狀況ヲ詳ニ調査シテ(之ハ恐ラク不可能ニ近イ程
困難性ヲ有スルガ)此ノ方面ノ解釋ヲ少シデモ附ケタイト思フ。

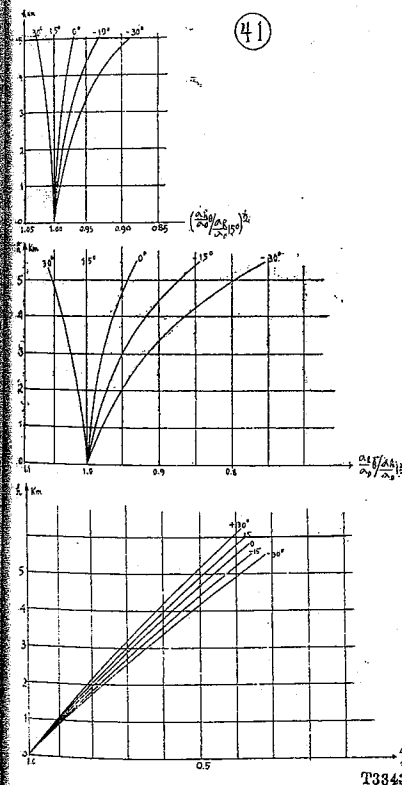
& 22

地上滴野ノ濃度ハ雨下撒布用法ニ於テ最重要ナ問題デアル。之ヲ直ニ實驗的ニ決定スル事ハ
極メテ困難デアリ、只ニ其ノ實驗規模ノ大ナルノミデナク結果ニ及ボス個々ノ因子ノ交感ガ極
メテ複雑デアルノ僅回ノ成績カラ直チニ全般ヲ推論セントスル場合ニハ相當ニ危險デアル事ガ
考ヘラレル。

現在ニ於テハ全般ノ問題ニ對シ尙僅カニ理論上カラ導ク程度デ満足セネバナラナイガ、上記ニ
明ナ様ニ正確ナ理論ノ根據ニ乏シイノデアルカラ得テ結論モ極メテ概略的ナモノデアル。地上濃
度ヲ導クニ當ツテ置ク假定ガ多イノデ、之等ヲツツツ解明シテユク事ニ今後努メナケレバナラ
ヌ。

次ニ示ス略近ノ濃度計算ニ當ツテハ特ニ記ス場合ノ他ハ次ノ想定ニ從ツテ居ル。

- 1) 落下徑路ノ空氣ハ標準大氣デアル。
- 2) 粒子ノ落速ハ空氣密度ノ $\frac{1}{2}$ 乗ニ逆比例スル。
- 3) 自然擴散圈ハ高度2000以上カラノ場合ハ直徑1000mノ圓デアツテ粒子ノ大サニハ關係シ
ナイ。此ノ圓内ノ外側半部ハ稀薄デアツテ、半径250m以內ニハ一様ニ配分サレ其ノ外側ニハ存在シ
ナイト考ヘル。



- 4) 風速分布ハ $w = \text{const} = 10 \text{ m/s}$ 及 $w\sigma = \text{const}$,
 $w_0 = 10 \text{ m/s}$ ノ場合ヲ考ヘ風向ハ一様デアルトスル。

- 5) 濕度 = ヨル空氣密度ノ變化ヲ除外スル。
(一般ニ $\sigma = 0.125 \times \frac{288}{T} \times \frac{B - 0.378pf}{760}$ デ表ハサ
レ、蒸氣壓 = 依ル項 $0.378pf$ ハ 30°C 、100%ノ様ナ
場合デモ7.0ノ程度デ B ニ比シテ無視シ得ル。又標準
大氣ノ密度ヲ規準トスルト T_0 ノ値ニ依ル σ ノ値
ノ變化ハ次ノ様デアツテ $h: 5000$ ニ於テ風速ハ20%
程度流下距離ハ10%程度ノ差ヲ生ズル。)(41)

& 23

雨下撒布實施間飛行速度 F ガ排出時 T 間内ニ一様デ
アリ、流出量ガ一様デアルト考ヘル。然ル時ハ初發
滴野ハ長サ $F \times T$ 幅自然擴散半域 N 單位厚ノ立方
體ヲナス。從ツテ基準滴野ノ濃度ハ $A \times (FTN)^{-1}$
デ表ハサレル。(Aハ全排出量)此ノ時各大イサノ
粒ノ體積配分 $f(r)$ デ表ハセバ或ル大イサ r_1 ノ粒
ノ占ムル濃度ハ $A \times (FTN)^{-1} \times f(r_1)$ デアル。

今高度 h ニ於ケル r_n ノ大サノ粒ノ落速ヲ v_{nh} 風

速ヲ w_h トスルト高度 h = 於テ高度層 Δh 落下スル間ノ流下距離 ΔS ハ

$$\Delta S = \frac{\Delta h}{v_{nh}} w_h$$

故ニ r_n 及 r_{n+1} ノ粒ハ地上ニ到ル間ニ各々

$$S_n = \sum_{h=0}^h \frac{\Delta h}{v_{nh}} w_h$$

$$S_{n+1} = \sum_{h=0}^h \frac{\Delta h}{v_{n+1,h}} w_h$$

流下スル。 r_n 及 r_{n+1} ノ差ヲ小サク取レバ r_n ト r_{n+1} 間ノ粒ハ地上ニ於テ S_n ト S_{n+1} 間ノ單位幅ノ滴野ヲ作り、此ノ濃度ハ一様デアツテ

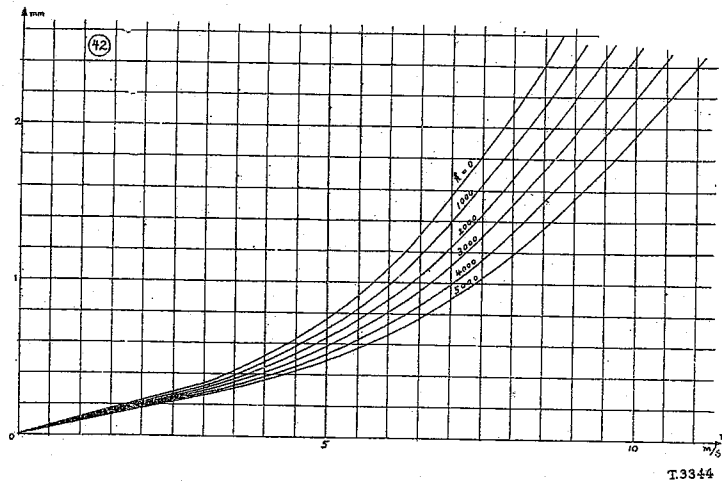
$$A \times (FTN)^{-1} \times f(r_n) \times \phi(r, \Delta b, h) \times (S_{n+1} - S_n)^{-1}$$

デアル。但 $\phi(r, \Delta b, h)$ ハ粒ノ蒸發ニ依テ基ク減量ヲ表ハシテ居ルガ、蒸發ニ依テ有効量ノ變ヲ來サナイモノデハ

$$A \times (FTN)^{-1} \times f(r_n) \times (S_{n+1} - S_n)^{-1}$$

デアリ、此ノ場合蒸發ニ依ツテ r ノ變化スルモノデハ S ヲ求メル時ニ v_r ヲ r 、 Δb 及 h ノ函數シテ計算スル。

此ノ計算ヲ積分式トシテ計算スルノハ r ガ變化セヌ時ニハ可能デアルガ Δb ガ入ツテ來ルトハ、式ニ逐次計算シテユク方ガ簡單デアツテ、此ノ場合 Δh ハ小サク取ルホド精度ハヨイガ、次ハ之ヲ 500m トシテ居ル。後ニ積分値ト比較シテ若干補正ヲ行フガ、蒸發理論ガ概略的ナモノアルノデ補正ハ餘リ精密ニ行フ必要ハナイ。



蒸發ノ無い場合ヲ考ヘルト

$$\Delta S_h = w_h \times \frac{\Delta h}{v_h}$$

$$w_h = w_0 \times \frac{\sigma_0}{\sigma_h} \text{ノ場合}$$

& 24

先ヅ滴粒ノ場合ヲ考ヘル。

高度 h = 於ル落速

ハ v_0 = 比シテ

$$v_h = v_0 (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-2.126}$$

デ示サレル。 v_0 トシ

Schmidt ノ値ヲ用ヒ

ト之ハ左ノ様ニナル

(42)

$$\Delta S_h = \frac{w_0}{v_0} (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-2.126} \Delta h;$$

$$S_h = \int_0^h (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-2.126} dh$$

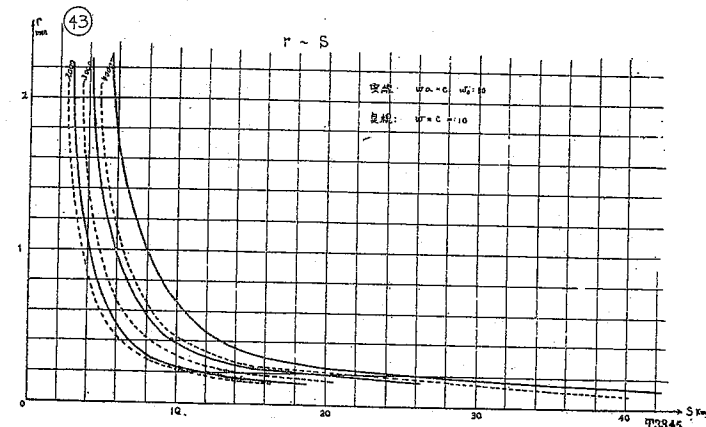
$$= \frac{w_0}{v_0} \times 0.393 \left\{ (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-1.126} - 1 \right\} \times 10^5$$

$w = \text{const}$ ノ場合

$$\Delta S_h = \frac{w_c}{v_0} (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-2.126} \Delta h;$$

$$S_h = \frac{w_c}{v_0} \times 0.140 \left\{ 1 - (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{3.126} \right\} \times 10^5$$

$w_0 = w_c = 10.0$ トスルト此ノ流下距離ハ次圖ノ様デアル。(43)



蒸發スル滴ノ流下距離ヲ出スタメ此處デハ次ノ様ニスル。

蒸發ノ式ニ於テ Δb ノ分布ヲ蒸氣張力式 $f_h = f_0 \times 10^{-\frac{h}{6.300}}$ カラ求メ、地上溫度 T_0 地上濕度 p_0 トスレバ

$$\Delta b_h = 0.811 \times 10^{0.0284(T_0 - 0.006h)} \times (1 - p_0) \times 10^{-7};$$

今 $T_0 = 288$, $p_0 = 0.60$ トシ、

$$\delta t = \frac{\delta h}{v_h} \text{ニ於テ } \delta h = 500 \text{ トスレバ}$$

$$-\delta r = \frac{1}{2r} \left\{ 1107 \times \frac{(1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{2.126}}{v_0} + 0.192 \right\} \times 10^{-(1 + 0.160 \times 10^{-3} h)}$$

ヲ得ル。但 v_0 ハ高度 h = 於ル r ノ大サノ滴ノ地上ニ於ル落速デアル。

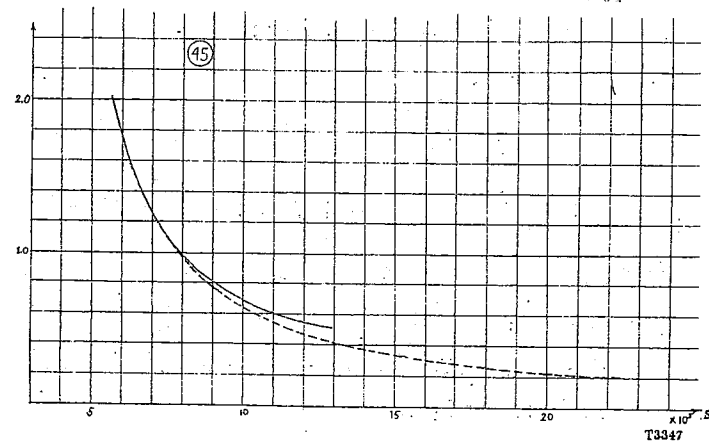
δh ガ大キイノデ h ト $h - \delta h$ 間ノ落下時間ヲ求メタ $r_h - \delta h$ = ヲツテ補正シ再ビ $r'_h - \delta h$ ヲ求メネバナラナイガ、略近算デアルカラ w ハ $\frac{1}{2}(w_h + w_{h-\delta h})$ ヲ用ヒ、又落速ヲ r_h ト $r_{h-\delta h}$ = 相當スル値ノ平均ヲ取り、其以上ノ補正ヲ行ハナイ。即チ

$$\Delta S_{11} = w_0 \times m (1 - 0.266 \times 10^{-4} h)^{-4.255} \times m \left\{ \frac{(1 - 0.266 \times 10^{-4} h)^{2.126}}{v_0} \right\} \delta h$$

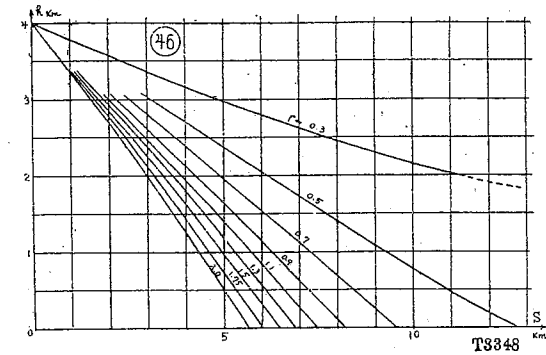
今 $w_0 = w_c = 10.0$ トシテ計算ヲ行フト次ノ様ニナル。

Y	r	4000	3500	3000	2500	2000	1500	1000	500	0
2.0	δ_s	2.00	1.998	1.996	1.994	1.990	1.987	1.982	1.976	1.969
	δ_{sc}	771	753	733	713	695	676	666	644	
1.75	δ_s	1.75	1.748	1.746	1.743	1.739	1.735	1.729	1.723	1.715
	δ_{sc}	817	799	780	758	741	721	705	687	
1.5	δ_s	1.50	1.498	1.494	1.490	1.485	1.480	1.474	1.466	1.456
	δ_{sc}	876	857	837	814	795	776	763	740	
1.4	δ_s	1.40	1.397	1.394	1.390	1.385	1.380	1.373	1.364	1.353
	δ_{sc}	892	873	853	830	810	791	777	754	
1.3	δ_s	1.30	1.297	1.294	1.290	1.284	1.279	1.270	1.261	1.248
	δ_{sc}	934	914	892	868	848	828	814	790	
1.2	δ_s	1.20	1.197	1.193	1.188	1.182	1.177	1.168	1.158	1.144
	δ_{sc}	966	945	922	897	877	856	842	819	
1.1	δ_s	1.10	1.096	1.092	1.087	1.080	1.073	1.063	1.051	1.037
	δ_{sc}	1005	984	961	935	914	893	880	857	
1.0	δ_s	1.00	0.996	0.991	0.985	0.978	0.970	0.959	0.945	0.928
	δ_{sc}	1048	1027	1003	978	958	938	926	903	
0.9	δ_s	0.90	0.896	0.890	0.883	0.875	0.866	0.853	0.837	0.817
	δ_{sc}	1106	1084	1061	1034	1015	995	985	964	
0.8	δ_s	0.80	0.795	0.788	0.780	0.771	0.760	0.744	0.726	0.702
	δ_{sc}	1175	1155	1131	1101	1082	1068	1061	1041	
0.7	δ_s	0.70	0.694	0.686	0.677	0.665	0.652	0.633	0.611	0.581
	δ_{sc}	1265	1246	1218	1194	1177	1165	1164	1150	
0.6	δ_s	0.60	0.592	0.583	0.571	0.557	0.540	0.516	0.486	0.446
	δ_{sc}	1382	1361	1341	1324	1315	1310	1319	1338	
0.5	δ_s	0.50	0.490	0.478	0.463	0.442	0.419	0.385	0.337	0.271
	δ_{sc}	1544	1538	1520	1515	1512	1567	1669	1890	
0.4	δ_s	0.40	0.386	0.369	0.347	0.318	0.281	0.220	0.152	0.066
	δ_{sc}	1805	1822	1850	1910	2042	2362	3883	5883	
0.3	δ_s	0.30	0.280	0.252	0.212	0.147	0.073	0.019	0.013	0.013
	δ_{sc}	2330	2475	2796	3598	4230	4230	4230	4230	
0.2	δ_s	0.20	0.161	0.087	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003
	δ_{sc}	3773	3235	2125	1664	1647	1645	1645	1645	
	δ_{sc}	2555	2451	2355	2255	2155	2055	1955	1855	

T3346



T3347



T3348

即チ此ノ條件デ求メタ各々サノ粒
ノ流下距離ハ次表ノ様デアロ。(47)

此ノ略近算ハ例ヘバ $r=2.0$ デハ
蒸發=依ル影響ハ殆ドナイノデア
ルガ S ハ5651(4625)トナルノ=前ノ積
分デ求メタ蒸發ノナイ場合ハ5700
(4700)トナルノデ、此ノ計算デハ S
ガ小サク出ル事ガ判ル。從ツテ之ト
積分=依ツテ求メタ式ヲ比較出來ナ
イ。故ニ此ノ略近算=ヨツテ蒸發ノ
ナイ場合ヲ求メルト(48)ノ様ニナツ
テ來ル。

蒸發=依ツテ有効量ノ減少ヲ來サザル場合即チ吾人ノ問題トスル
雨下ノ場合=在テハ蒸發ハ流下距離ヲ大ニスルノミデアルガ、實際
= r ガ0ニナルトハ考ヘラレナイ。即チ表面被膜ノ問題ヤ蒸氣壓低
下ヲ除外シテモ簡單ニ蒸發殘渣量ガアルノデアルカラ、初量ノ $\frac{1}{x}$ =
ナル迄ハ水ノ場合ト同様デアリ爾後ハ變化シナイト考ヘル。 x ハ從
來用ヒタモノデハ10程度デアルカラ $r \rightarrow 0.465r$ 。ヲ限界トシテ流下距
離ヲ求メルト(49)ノ様デアル。

Y	S	S _c
2.0	5651	4625
1.75	6102	5105
1.5	6442	5260
1.4	6652	5437
1.3	6878	5617
1.2	7124	5831
1.1	7429	6096
1.0	7781	6376
0.9	8244	6755
0.8	8814	7280
0.7	9609	7960
0.6	10740	8775
0.5	12775	10605
0.4	500m以下消失	
0.3	1500m "	
0.2	3000m "	

T3311

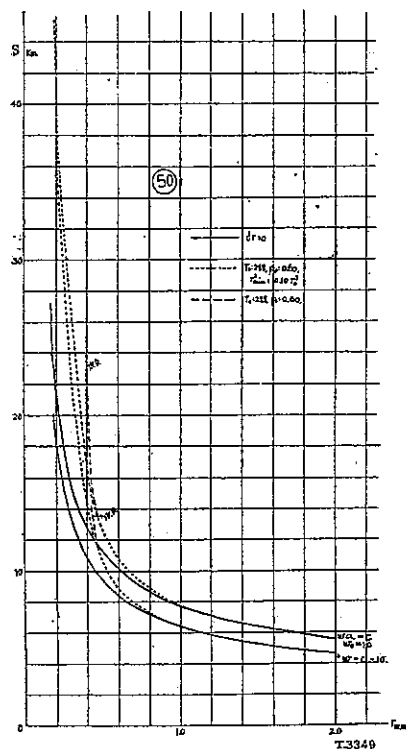
Y	S	S _c
2.0	5540	4620
1.75	5882	5030
1.6	6155	5190
1.5	6417	5250
1.4	6618	5420
1.3	6835	5595
1.2	7072	5795
1.1	7356	6025
1.0	7681	6285
0.9	8097	6625
0.8	8598	7045
0.7	9269	7585
0.6	10110	8275
0.5	11249	9200
0.4	13020	10665
0.3	16401	13480
0.2	24350	19930

T3312

(蒸發ナシ)

Y	S	S _c
2.0	5651	4625
1.75	6102	5105
1.5	6442	5260
1.4	6652	5437
1.3	6878	5617
1.2	7124	5831
1.1	7429	6096
1.0	7781	6376
0.9	8244	6755
0.8	8814	7280
0.7	9609	7860
0.6	10740	8775
0.5	12740	10605
0.4	17602	14762
0.3	27790	23411
0.2	48840	40686

T3313



基準滴野=依ル地上濃度ヲ求ムル=九七重式二
型=於ケル實驗式ヲ應用スル。

雨下液量 800 L, T=10, FT=800 トスル。然
ル時基準滴野内液量ハ

$$800 \times \frac{1}{800 \times 500 \times \pi (250)^2} = 1.60 \text{ cc}$$

トナル。九七重式二型デハ

$$\frac{dn}{dr} = Ar^7 \exp(-26.0r^{\frac{1}{2}})$$

$$\Delta v_{mg} = \frac{4}{3} \pi A \int_0^{\infty} r^{10} \exp(-26.0r^{\frac{1}{2}}) dr = 1000$$

トスルト

$$A = \frac{3}{4} \frac{1000 \times 26^{22}}{\pi \Gamma(22)} \quad \text{デアルカラ}$$

1000mgノ總數ハ

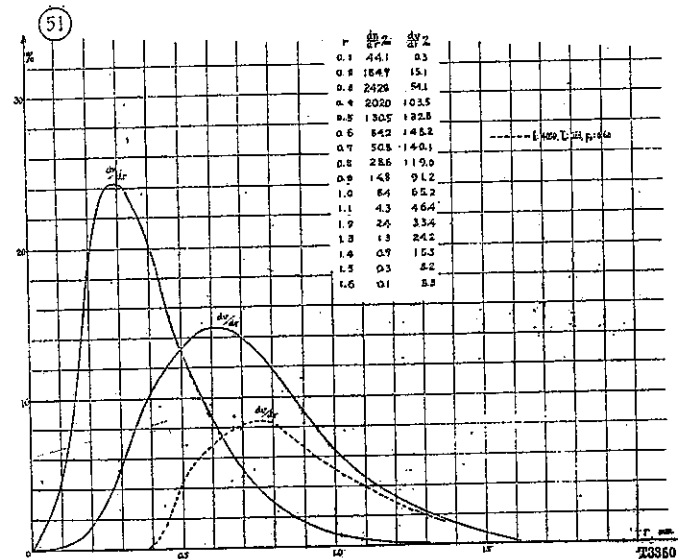
$$\Delta n = \int_0^{\infty} Ar^7 \exp(-26.0r^{\frac{1}{2}}) dr$$

$$= \frac{A}{26^{16}} \Gamma(16)$$

$$= 15609$$

(從ツテ全量800 Lハ125億箇=分裂スルコト=ナル。)

之=就テ基準滴野内ノ各大サノ粒ノ状況ヲ求メルト次ノ様デアル。(51)



前記各場合=於ル $S_n - S_{n+1}$ ハ次表ノ様デアル。(52)

r	dr=0 w w_c	dln r=0 w w_c	dln r=0.447 w w_c
1.6	173 130	175 133	
1.5	162 120	165 122	
1.4	201 170	210 177	
1.3	217 175	226 180	
1.2	297 200	246 214	全
1.1	284 230	305 289	
1.0	325 260	352 280	
0.9	416 340	456 379	左
0.8	501 420	570 525	
0.7	571 540	799 680	
0.6	841 690	1131 819	
0.5	1139 925	2039 1880	
0.4	1771 1415	- -	4827 4157
0.3	4481 2765	- -	10197 8649
0.2	7950 6500	- -	21049 17275

T3917

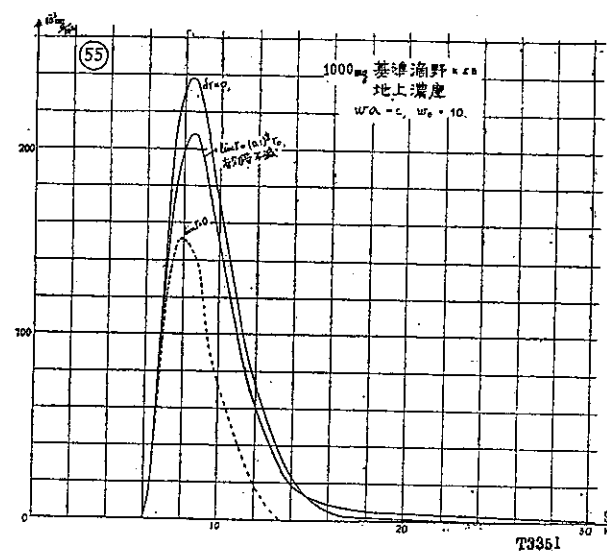
r	r'	Q	Q'
1.6	1.57	3.3	3.1
1.5	1.46	8.2	7.6
1.4	1.35	13.5	13.8
1.3	1.25	24.2	21.3
1.2	1.15	33.4	29.1
1.1	1.04	46.4	39.0
1.0	0.93	65.2	53.5
0.9	0.82	91.2	68.3
0.8	0.70	119.0	82.8
0.7	0.58	140.1	82.6
0.6	0.45	148.2	69.7
0.5	0.27	132.8	45.2
0.4	0	103.5	21
0.3	0	54.1	0
0.2	0	15.1	0

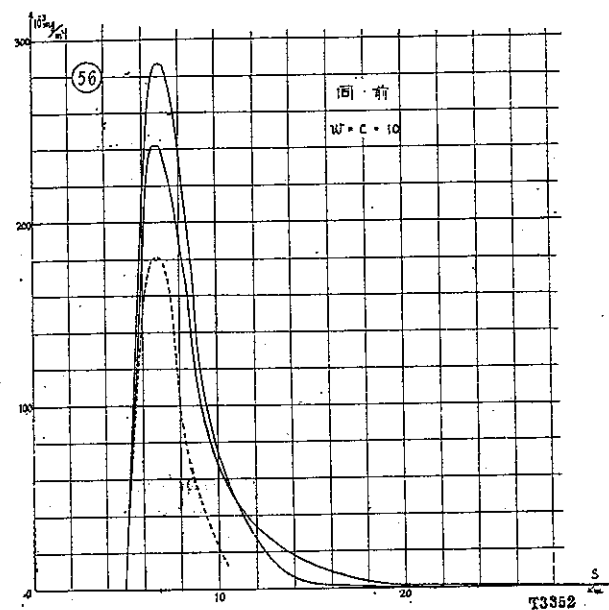
T3918

之=依ツテ基準滴野=依ル地上濃度ヲ計算スル=、蒸發
=依テ有効物質質量ガ減少スルト考ヘル場合 $r_1 \rightarrow r_1'$, $r_2 \rightarrow r_2'$
デアル時 $Q_1' = Q_1 \times \left\{ \frac{1}{2} \left(\frac{r_1'}{r_1} + \frac{r_2'}{r_2} \right) \right\}^3$ トシテ求メル。然ル時
ハ蒸發=依ルQノ變化ハ(53)ノ通デアル。

r	w = c			w = c		
	dr=0	dln r=0.447	dln r=0	dr=0	dln r=0.447	dln r=0
1.6	0.019	0.015	0.018	0.015	0.025	0.023
1.5	0.051	0.030	0.045	0.068	0.067	0.061
1.4	0.077	0.074	0.066	0.091	0.088	0.078
1.3	0.112	0.107	0.094	0.138	0.134	0.118
1.2	0.141	0.136	0.118	0.167	0.156	0.136
1.1	0.163	0.152	0.128	0.202	0.175	0.147
1.0	0.200	0.185	0.152	0.250	0.233	0.191
0.9	0.219	0.200	0.150	0.268	0.241	0.170
0.8	0.238	0.208	0.145	0.284	0.227	0.158
0.7	0.267	0.176	0.104	0.260	0.204	0.172
0.6	0.176	0.133	0.062	0.215	0.182	0.085
0.5	0.117	0.065	0.022	0.144	0.073	0.025
0.4	0.059	0.022	-	0.073	0.025	-
0.3	0.011	0.005	-	0.020	0.008	-
0.2	0.002	0.001	-	0.002	0.001	-

T3919





上記ノ如キ基準滴野ノ集合ヨリ成ル地上滴野ノ全濃度ヲ求メル。地上ニ於ケル基準滴野ノ濃度線ヲ得タ時ハ流下距離ヲ示ス軸上ニ集成長ヲ採ルト之ト之ニ相當スル曲線トノ間ノ面積ガ一定ノ濃度ニ相當スル。即チ流下距離 x ニ相當スル基準濃度ヲ $f(x)$ 、集成長ヲ Δx トスルト、流下距離 x_1 ニ於ケル集成濃度 Y ハ $Y = \int_{x_1-\Delta x}^{x_1} f(x) dx$ デ表ハサレル。勿論集成滴野ノ流下距離ノ原点ハ基準滴野曲線ノ原点ト一致シテ居ル。

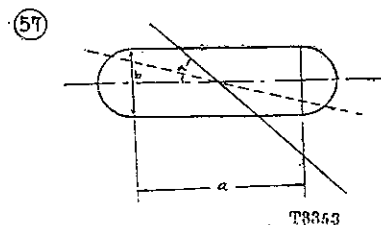
集成長 Δx ハ自然擴散圈ト集成方向即チ雨下経路ト風向ノ爲ス角度ニ依ツテ異ル。正側風及風床ノ場合ニハ簡單ノタメ自然擴散圈ヲ $500 \times 1300 \text{ m}^2$ ノ矩形ト想定シ集成長 $\Delta x = 500$ (1300 トシ基準滴野ノ濃度ヲ $800 L \times (5001 \times 300)^{-1} = 1331 \text{ mg}$ トシテモヨイガ、一般ニハ次ノ様ニ Δx ノ同一ノ風向角ノ場合デモ中心線カラノ距離ニ依ツテ異ル。今風向角ヲ α 流出距離 a 等濃度擴散半径ヲ b デ表ハスト、中心線上ノ集成長ハ

$$\Delta x_c = b \operatorname{cosec} \alpha; \quad (b \cot \alpha \leq a)$$

$$\text{又ハ} \quad = \{a + \sqrt{a^2 - (a^2 - b^2) \operatorname{cosec}^2 \alpha}\} \cos \alpha; \quad (b \cot \alpha > a)$$

此ノ場合ノ基準滴野内濃度ハ 1600 mg デアル。(57)

次ニ風床及正側風ノ場合ニ就キ矩形擴散圈ニ於テ地上集成濃度ヲ求メルト (58)~(62) ノ様ニナル。



③

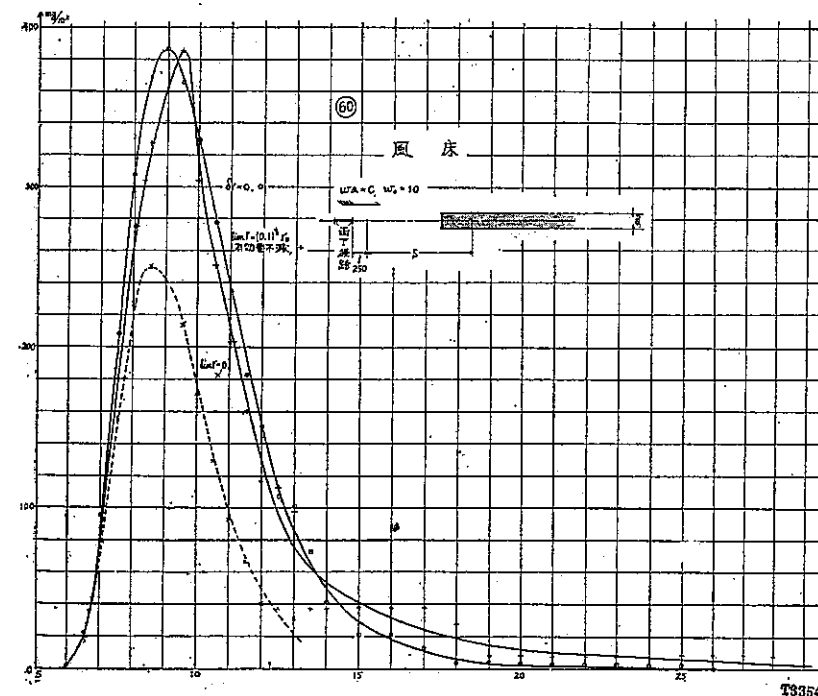
S Km	W=C=10			W=C=2455 h		
	$f(x)$	Δx	Δx^2	$f(x)$	Δx	Δx^2
5.0	0	0	0	0	0	0
5.5	0	0	0	46.6	0.5	0.25
6.0	3.1	0	0	152.7	0.5	0.25
6.5	23.6	21.2	19.4	291.2	0.5	0.25
7.0	98.4	90.0	79.8	371.0	0.5	0.25
7.5	209.9	101.0	155.6	380.0	0.5	0.25
8.0	306.4	277.4	228.3	396.7	0.5	0.25
8.5	358.7	325.3	253.9	366.0	0.5	0.25
9.0	386.6	342.9	242.4	320.0	0.5	0.25
9.5	367.0	384.8	214.6	209.9	0.5	0.25
10.0	329.6	286.3	171.1	137.7	0.5	0.25
10.5	277.5	250.5	130.2	126.3	0.5	0.25
11.0	234.8	203.9	99.5	94.7	0.5	0.25
11.5	183.1	160.0	66.9	62.7	0.5	0.25
12.0	150.6	116.0	40.2	43.3	0.5	0.25
12.5	106.0	112.5	38.1	43.3	0.5	0.25
13.0	100.8	99.7	51.7	43.3	0.5	0.25
13.5	72.1	38.1	0	43.3	0.5	0.25
14.0	40.7	38.1	0	43.3	0.5	0.25
15.0	20.8	38.1	0	37.2	0.5	0.25
16.0	20.8	38.1	0	11.8	0.5	0.25
17.0	12.8	38.1	0	10.4	0.5	0.25
18.0	3.5	29.0	0	10.4	0.5	0.25
19.0	3.1	8.7	0	10.4	0.5	0.25
20.0	3.1	8.7	0	10.4	0.5	0.25
21.0	3.1	8.7	0	10.4	0.5	0.25
22.0	3.1	8.7	0	10.4	0.5	0.25
23.0	3.1	8.7	0	10.4	0.5	0.25
24.0	3.1	8.7	0	6.5	0.5	0.25
25.0	1.7	8.7	0	1.7	0.5	0.25
26.0	0	8.7	0	1.7	0.5	0.25

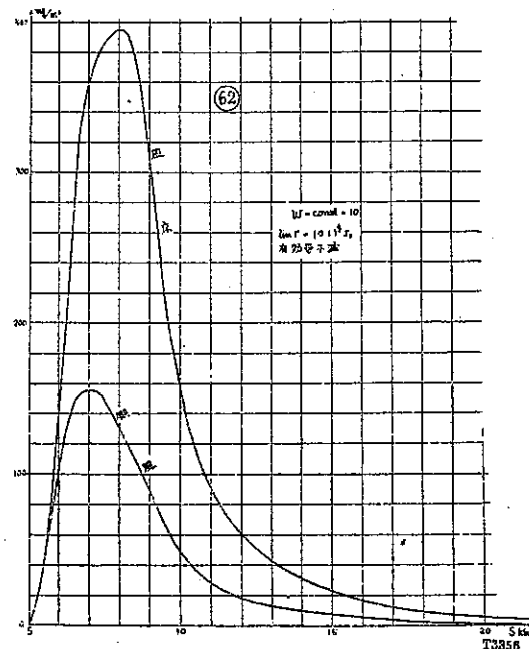
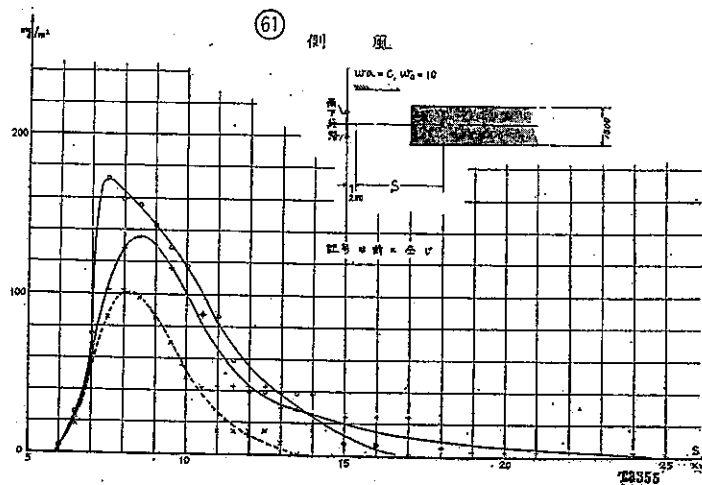
T3920

⑤9

S Km	W=C=10			W=C=2455 h		
	$f(x)$	Δx	Δx^2	$f(x)$	Δx	Δx^2
5.0	0	0	0	0	0	0
5.5	0	0	0	46.6	0.5	0.25
6.0	3.7	0	0	105.5	0.5	0.25
6.5	25.7	21.2	19.4	149.0	0.5	0.25
7.0	74.9	68.7	60.5	156.0	0.5	0.25
7.5	171.5	101.6	85.8	144.3	0.5	0.25
8.0	160.0	129.0	100.7	131.6	0.5	0.25
8.5	156.0	156.0	98.4	121.4	0.5	0.25
9.0	143.0	150.7	86.5	88.6	0.5	0.25
9.5	129.0	117.1	69.3	49.6	0.5	0.25
10.0	117.1	93.8	47.8	48.6	0.5	0.25
10.5	86.6	87.2	41.3	48.6	0.5	0.25
11.0	85.8	43.3	14.6	23.4	0.5	0.25
11.5	58.7	43.3	14.6	16.6	0.5	0.25
12.0	39.3	43.3	14.6	16.6	0.5	0.25
12.5	39.3	43.3	14.6	16.6	0.5	0.25
13.0	39.3	30.5	8.1	16.6	0.5	0.25
13.5	59.5	30.5	0	16.6	0.5	0.25
14.0	8.0	14.6	0	16.6	0.5	0.25
15.0	8.0	14.6	0	10.1	0.5	0.25
16.0	8.0	14.6	0	4.0	0.5	0.25
17.0	0.1	14.6	0	4.0	0.5	0.25
18.0	0.1	5.6	0	4.0	0.5	0.25
19.0	0.1	3.3	0	4.0	0.5	0.25
20.0	0.1	3.3	0	4.0	0.5	0.25
21.0	0.1	3.3	0	4.0	0.5	0.25

T3921





以上ノ結果ハ単機 800 L ノ場合デア
ル。編隊ノ場合ニハ各機ニ依ル地上滴
野ガ重合シテ來ル譯デアツテ、邊緣部
ヲ除キ一般ニハ單機ノ場合ニ機數ヲ乗
ジタ濃度トナル。

又上ノ場合ニハ液全體ヲ有効物質ト
考ヘ、又蒸發ニ依ツテ有効物質ガ減少
セヌトシタ時ニハ初ノ液量全部ヲ有効
物質ト考ヘテ計算シタノデア。若シ
液全體ガ有効物質デア時ニハ $\delta r = 0$
及 $\lim r = 0$ ノ場合ノ濃度ガ適用サレ
ル。然シ蒸發ニ依ツテ有効物質ノ減少
シナイ場合トハ一般ニハ有効物質ノ水溶
液若ハ水浮游液デアノデ、此ノ場合
最初ノ濃度ヲ K トスルト、 $\delta r = 0$ 及
 $\lim r = 0.465r_0$ ノ場合ノ地上濃度ニ

其ノママ K ヲ乗ズレバ實際ノ濃度ガ得ラレル。

例ヘバ上例ノ單機 800 L ノ場合ニ最大濃度地帯トシテ初液量 360 mg/m^2 程度トサレルガ K ヲ 0.1
トスルト地上濃度ハ 35 mg/m^2 程度ニ過ギナイ。

上ノ計算ハ總テ $h = 4000$ ノ場合デアツテ、高度ノ小サイ時ハ略近的ニ高度ニ逆比例シテ増加ス
ルモノト考ヘテ差支ナイ。

又風速ニ逆比例シテ増加スルト見做シ得ルガ假定ノ如ク h ; 2000 以上デノ増加ノ限界ハ基準滴野
ノ濃度デアリ 140 mg/m^2 程度デア。2000 以下ニナルト自然擴散圈ノ縮少ニヨツテ更ニ最大濃
度ハ増加シ得ル。從ツテ上記デ考ヘタ以上ノ濃度ヲ得ルタメニ高度低下ノ許サレヌ場合ニハ一
方ハ機數ノ増加、他方ニハ單位時間流出量及濃度 K ノ増加ニ依ラネバナラナイ。

& 25

上例ノ九七重式二型ニ於ケル地上滴野ノ滴數ヲ求メルニハ全ク同様ニ計算シ蒸發ヲ單ニ流下距
離ノ増加ニ對應サセレバヨイ。

次ニハ同様 $T_0 288$, $p_0 0.60$; $h = 4000$; $\lim r = 0.465r_0$ ニ於ケル地上ノ滴數ヲ求メル。((63)~
(66))

基準滴野ニ依リ地上ノ滴數

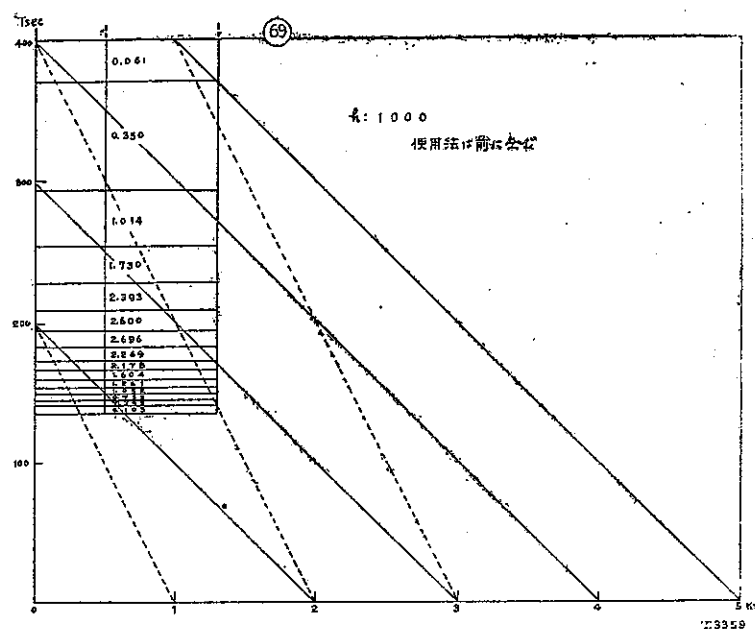
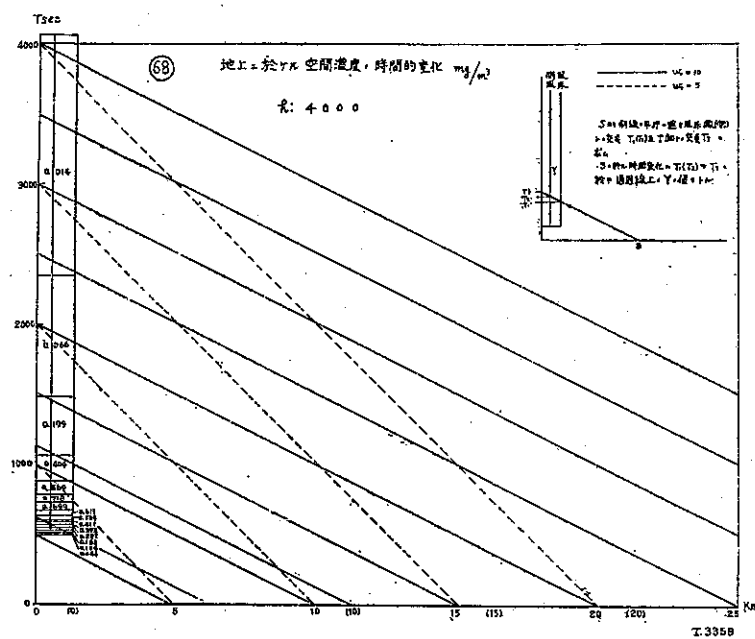
r_0	$N\%$	N	W/C N/m^2	W/C N/m^2
1.6	0.1	6.6	0.004	0.005
1.5	0.3	19.7	0.119	0.161
1.4	0.7	45.9	0.216	0.259
1.3	1.5	85.5	0.377	0.454
1.2	2.4	157.3	0.640	0.735
1.1	4.3	288.4	0.947	1.088
1.0	8.4	550.8	1.565	1.967
0.9	14.8	970.7	2.129	2.561
0.8	28.6	1875.7	3.291	3.575
0.7	50.8	3331.6	4.191	4.900
0.6	84.2	5522.3	4.882	6.776
0.5	130.5	8598.8	4.206	4.677
0.4	202.0	15248.2	2.745	3.194
0.3	242.8	15924.0	1.563	1.841
0.2	184.7	12113.5	0.576	0.701

T3922

地上滴野ノ滴數 $W/C = C$ 風速

r_0	1.60	1.50	1.40	1.30	1.20	1.10	1.00	0.90	0.80	0.70	0.60	0.50	0.40	0.30	0.20	Σ
5.0	157	144	135	125	115	104	93.9	83.2	72.0	59.0	45.5	32.7	21.0	11.4	0.9	0
6.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	39
6.5	6.6	127	131	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	234
7.0	6.6	157	159	85.3	76.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	455
7.5	0	85	459	853	1573	2884	5508	9707	18757	33316	55223	85988	152482	242800	360000	1533
8.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1533
8.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2579
9.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3740
9.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6785
10.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8054
10.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7091
11.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5032
11.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5494
12.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5467
12.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5116
13.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4317
14.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3439
15.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3431
16.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3431
17.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3431
18.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3006
19.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2032
20.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2032
25.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2032
30.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	747

T3923



& 27

地上粒野ノ代表トシテ「ケオビス」=關スル計算ヲ行フ。流出時間平均1.4秒デ FT=90m デアルガ、スカル落速2m/s程度ノモノノ自然擴散ヲ如何=見積ルベキカ全ク不明デアル。假=滴野ノ計算デ想定シタ様=平等擴散徑 $r=250\text{m}$ トスルト假想初發粒野ハ $500 \times 600\text{m}^2$ =ナル。(此ノ自然擴散ハ經驗的=實際ヨリ餘程小サイ)

又前=行ツタ液中落速分布カラ空中落速ノ分布ヲ次ノ様ニ推算スル。

v_0 m/s	%
0.5~1.0	0.9
1.0~1.5	11.9
1.5~2.0	30.7
2.0~2.5	43.4
2.5~3.0	12.8
3.0~3.5	0.4

今撒布總量 2×10^6 トスル基準粒野デハ 6.667 トナル。之デハ全ク Δb 分布ナドハ影響ガナク、又落速モ精密デハナイノデ落速ハ總テ v_0 ヲ用ヒル。

前ト同様 = $w\sigma = C$ デ $w_0 = 10$ トスルト、 $\bar{w} = 12.3$ トナルガ、之ト $\bar{w} = 5.0$ = 就テ求メテ見ヤウ。

基準粒野内ノ量ハ v_0 別ニ次ノ様ニナル。

v_0	$N(6.667)$
0.5~1.0	0.059
1.0~1.5	0.793
1.5~2.0	2.046
2.0~2.5	2.890
2.5~3.0	0.852
3.0~3.5	0.027

基準粒野=依ル地上濃度ハ次ノ様デアル。

(75)

$h: 4000, w_1: 12.5, w_2: 5.0$

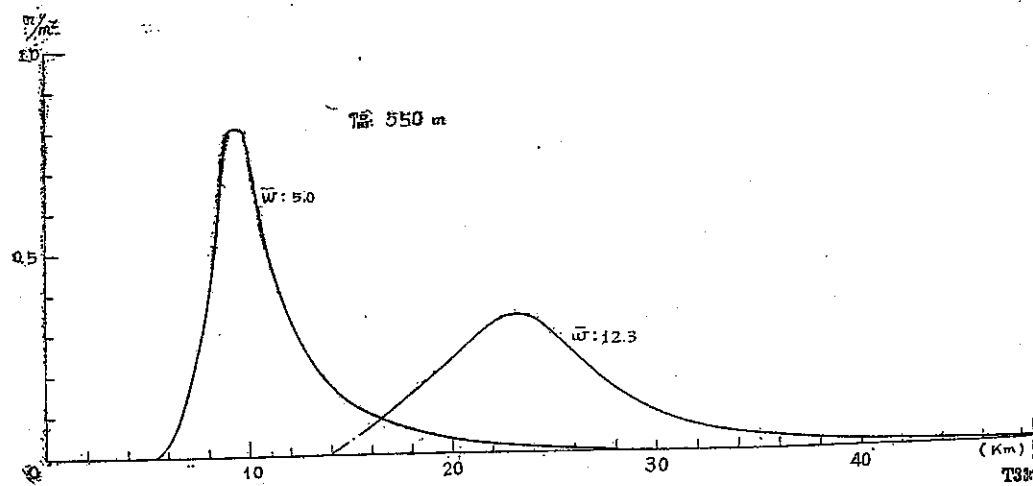
v_0	T	$W_1 T$	dS	n/m^2	$W_2 T$	dS	n/m^2
3.5	1143	14060	2340	0.000012	5715	950	0.000028
3.0	1533	18400	3280	0.0000260	6665	1335	0.000638
2.5	1690	19680	4920	0.000588	8000	2000	0.001445
2.0	2000	24600	8200	0.000248	10000	3335	0.000614
1.5	2667	32800	16400	0.000048	13335	6665	0.000119
1.0	4000	49200	49200	0.000001	20000	20000	0.000003
0.5	8000	98400			40000		

T3925

集成長ハ方向ニ拘ラズ550mトスル地上濃度ハ次ノ様ニナル。

⑦⑦ $n:4000, \bar{w} = 12.3 \text{ m/s}$		$n:4000, \bar{w} = 5.0 \text{ m/s}$	
s_{Km}	$n/(1000m)^2$	s_{Km}	$n/(1000m)^2$
14	720	5	0
16	111000	6	7980
18	143000	7	156000
20	248000	8	352000
22	326000	9	795000
24	326000	10	795000
26	137000	12	338000
28	137000	14	65400
30	137000	16	65400
40	26400	18	65400
50	14700	20	65400
60	550	30	1660
70	550	40	1660
80	550	50	0
90	550		
100	0		
$N = 2000000$		$(N:2000000)$	

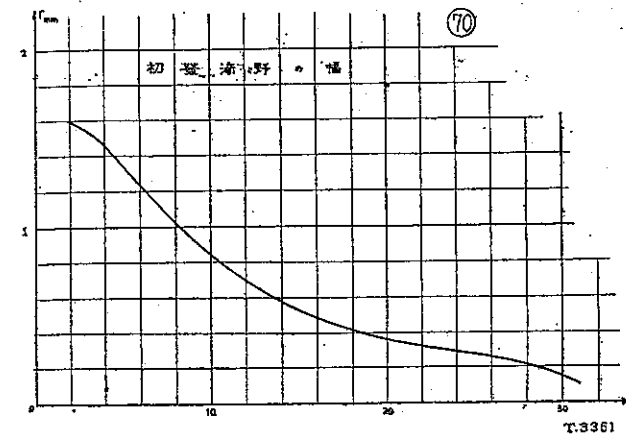
T392c



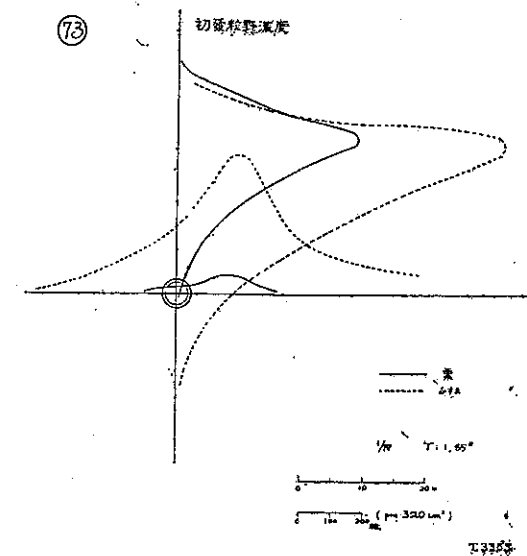
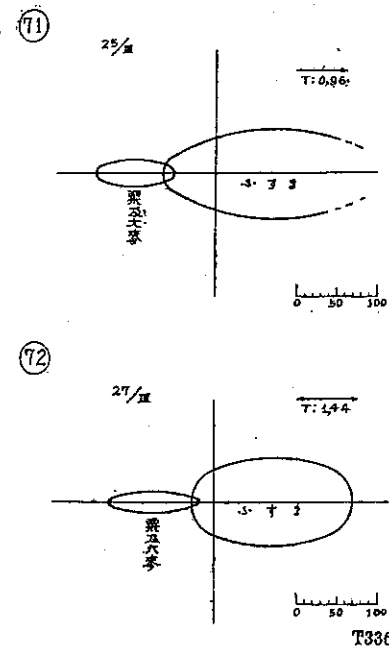
& 28

以上ハ滴野粒ニ粒野ニ對スル計算上ノ考察デアツタ。此處デ吾人ノ行ツタ基礎的試験ノ數例示シテ此ノ章ヲ終リタイ。

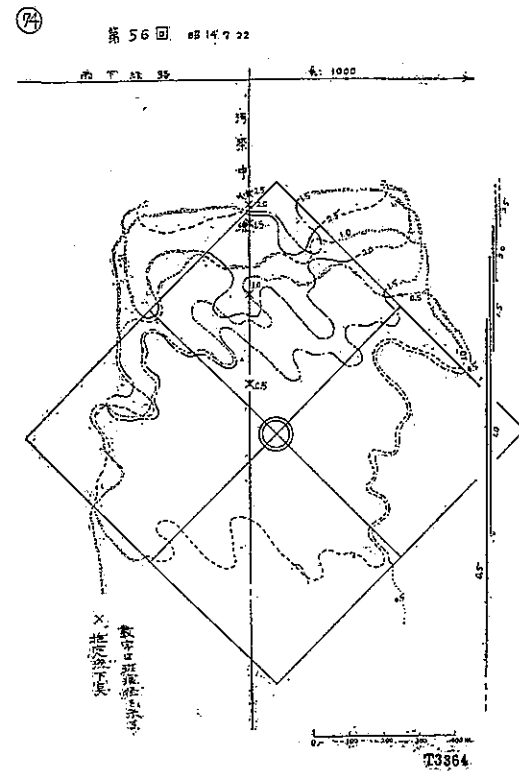
初發滴野ノ各大サノ滴ノ占ムル幅ハ其ノ儘デハ知リ得ナイ。此處デハ $h=100$ ニ於テ落下速ニ於ル擴散ガ無視サレルモノトシ、得タル地上ノ滴ノ分布カラ次ノ平均値ヲ得テ居ル。(5回均) (70)



九七輕式翼下撒布器ニ依ル大麥、粟及ふすまノ初發粒野幅ノ狀態(100m撒布ニ依ル)ハ次ノ様ナル。(等量混合物ヲ用ヒ全量80kgトス)流出時間平均1.4秒デFT=90mトナル。



前ノ地上滴野ノ計算デハ地上ノ滴野ノ配置ガ一様ニ變化スル様ニ考ヘタガ、實際ハ流出量ノ
化ト氣流ノ狀況、分裂機構ノ狀況ニ伴ツテ極メテ複雑ナ滴野ヲ呈スルモノデアツテ、次ニ其ノ
班ヲ示スタメニ滴ノ班痕ノ大サニ依ル地上滴野帯ノ一例ヲ示ス。(74)

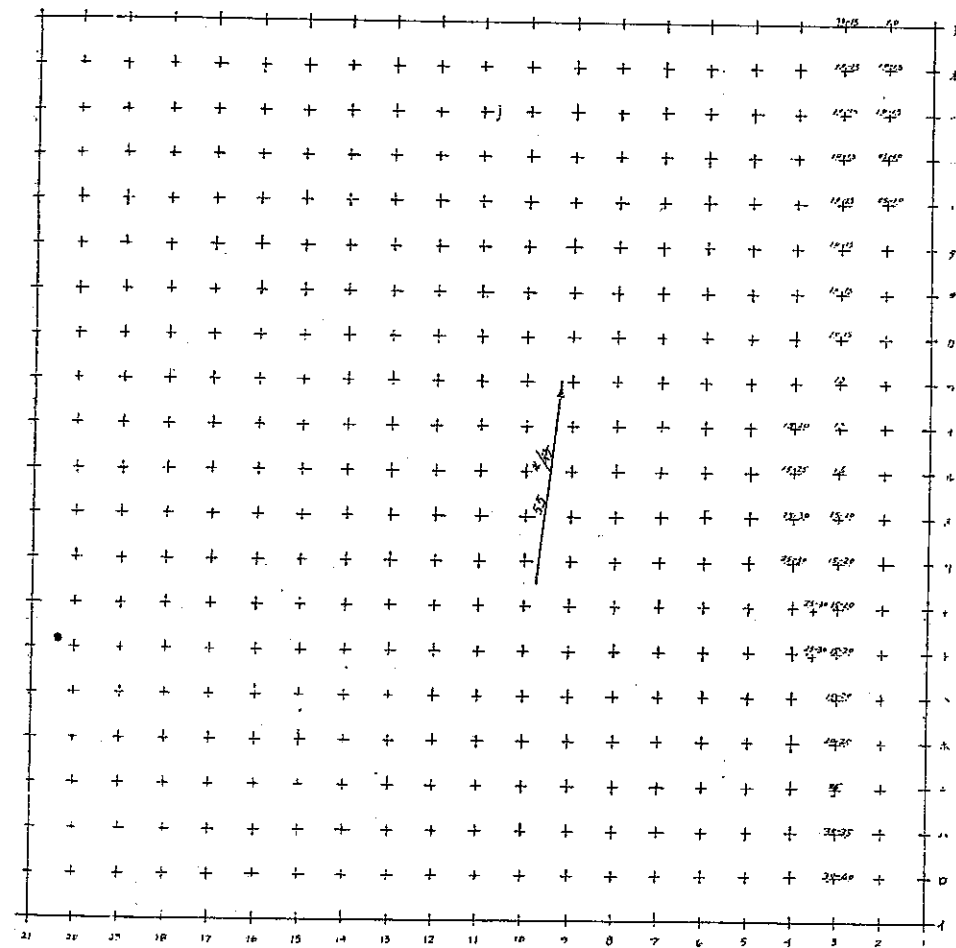


雨 下 成 績 圖 1:5000

第16回 昭和14年1月11日 15時30分

H:1000.

(メチレンブルー水溶液)



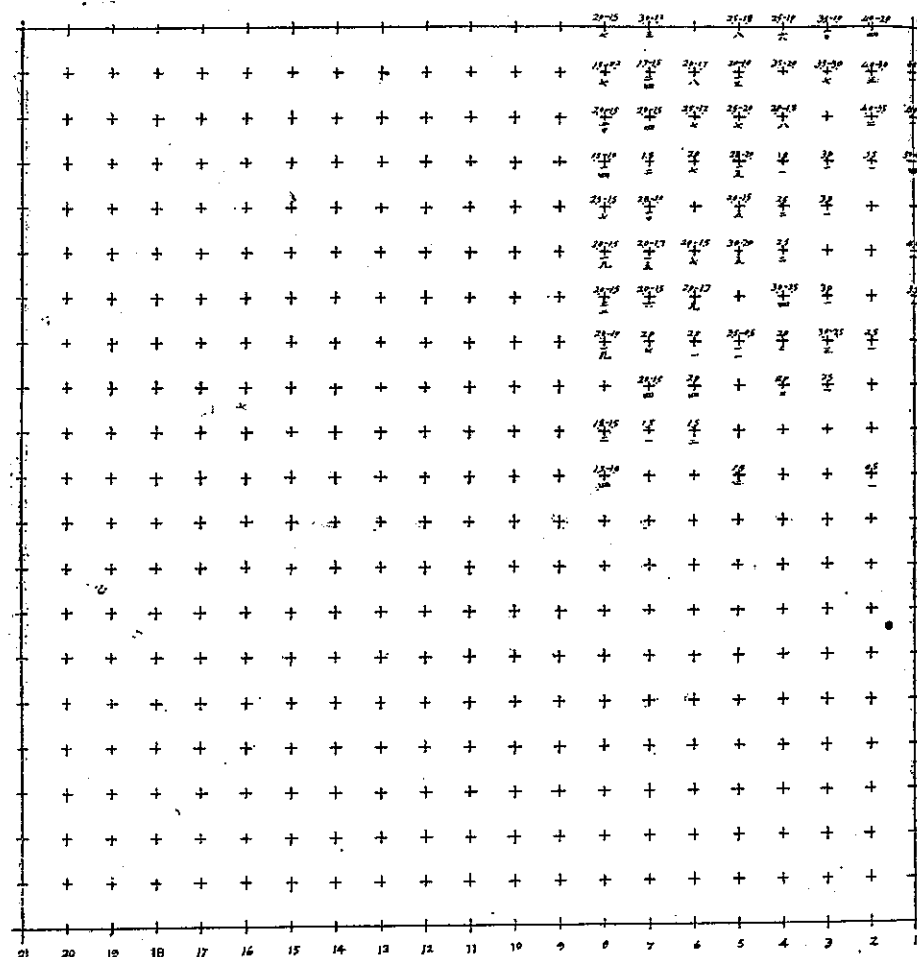
T. 33 35

雨下成績圖 1:5000

第42回 昭和14年6月10日 11時³⁰/₅₄分

H:2000, 雲 to 17.1°C, P:69%, B:738.1 mmHg

(メチレンブルー水溶液)

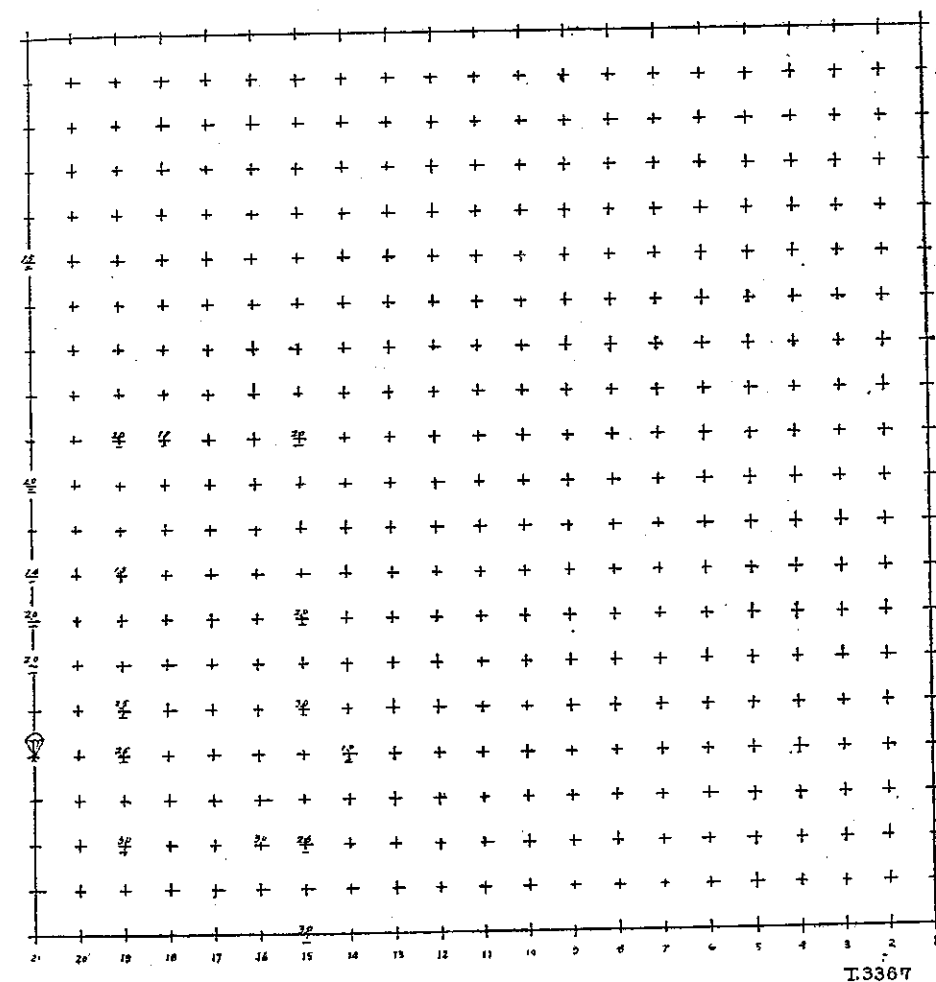


雨下成績圖 1:5000

第46回 昭和14年6月14日 16時³⁵/₁₀分

H:2500, 雲後雨 to 24.0°C, P:67%, B:738.6 mmHg

(メチレンブルー水溶液)

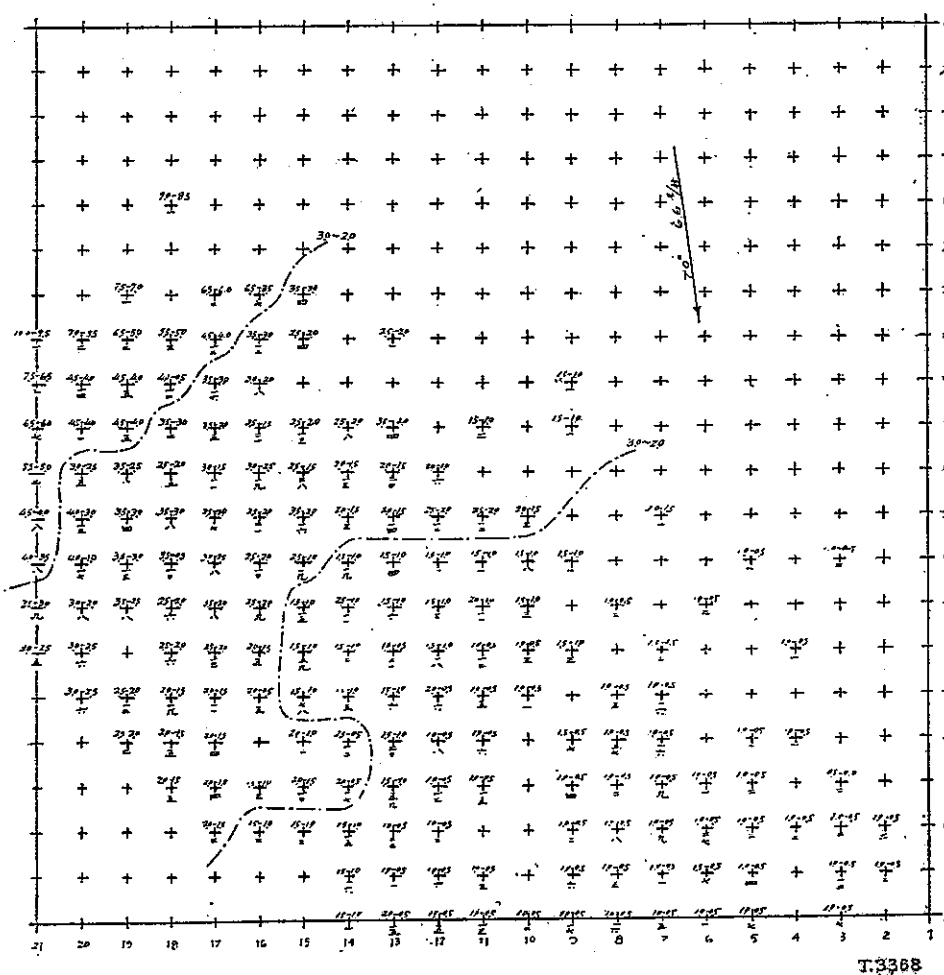


雨 下 成 績 圖 1:5000

第54回 昭和14年7月22日 15時 $\frac{14}{5}$ 分

H:1000, 曇 to 22.0°C, P: 79%, B: 743.4 mmHg

(全卵 オーラミン着色)

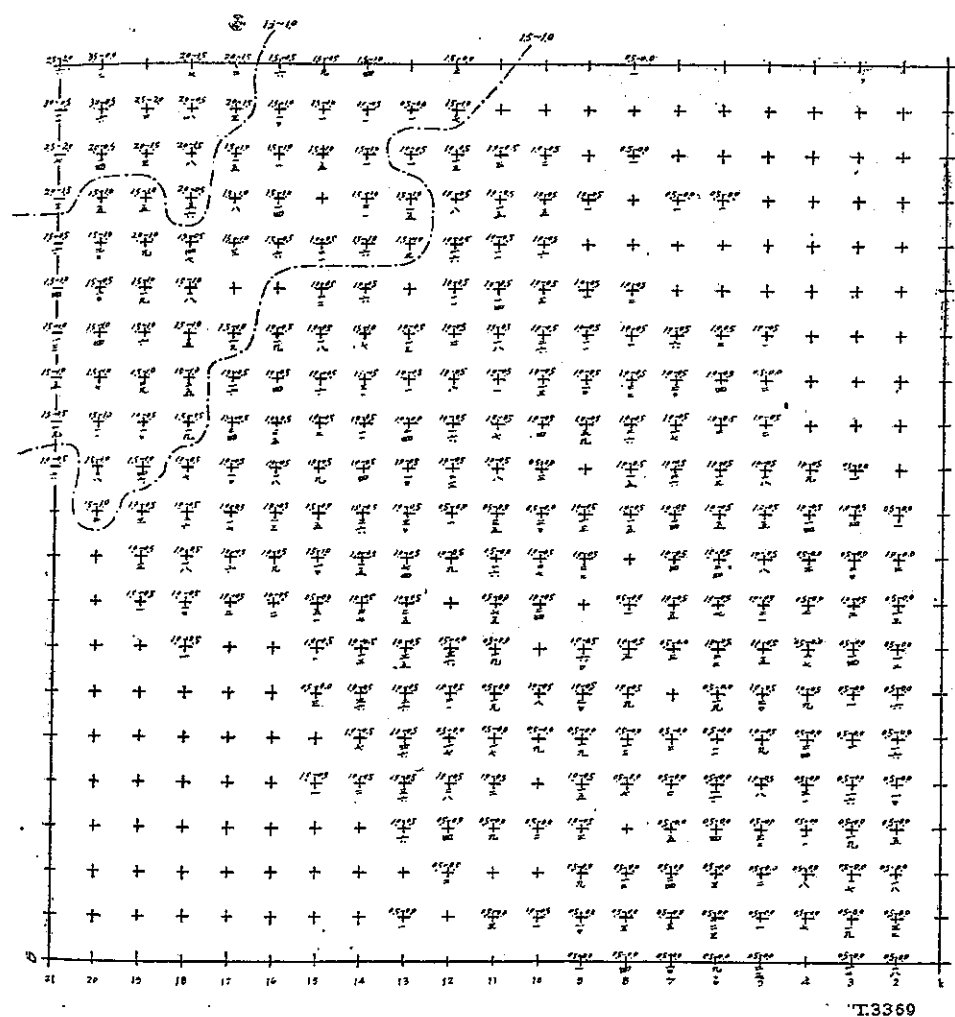


雨 下 成 績 圖 1:5000

第55回 昭和14年7月22日 15時55分
16時08分

H:1000, 曇 to 22.3°C, P: 81%, B: 743.2 mmHg

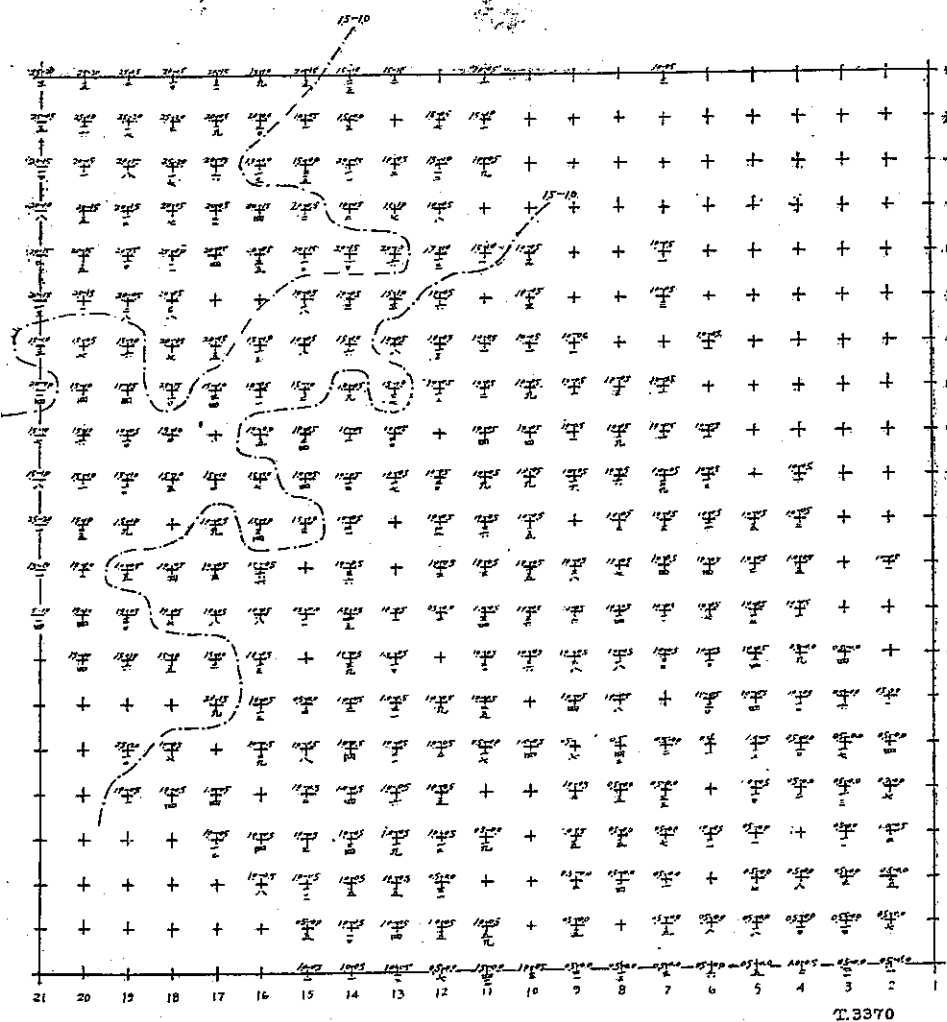
(0.2% 寒天 メチレンブルー溶液)



雨下成績圖 1:5000

第56回 昭和14年7月22日 16時¹³/₂₇分H:1000, 曇 to 22.0°C, P₀ 80%, B₀ 743.5 mmHg

(フタシン水溶液)



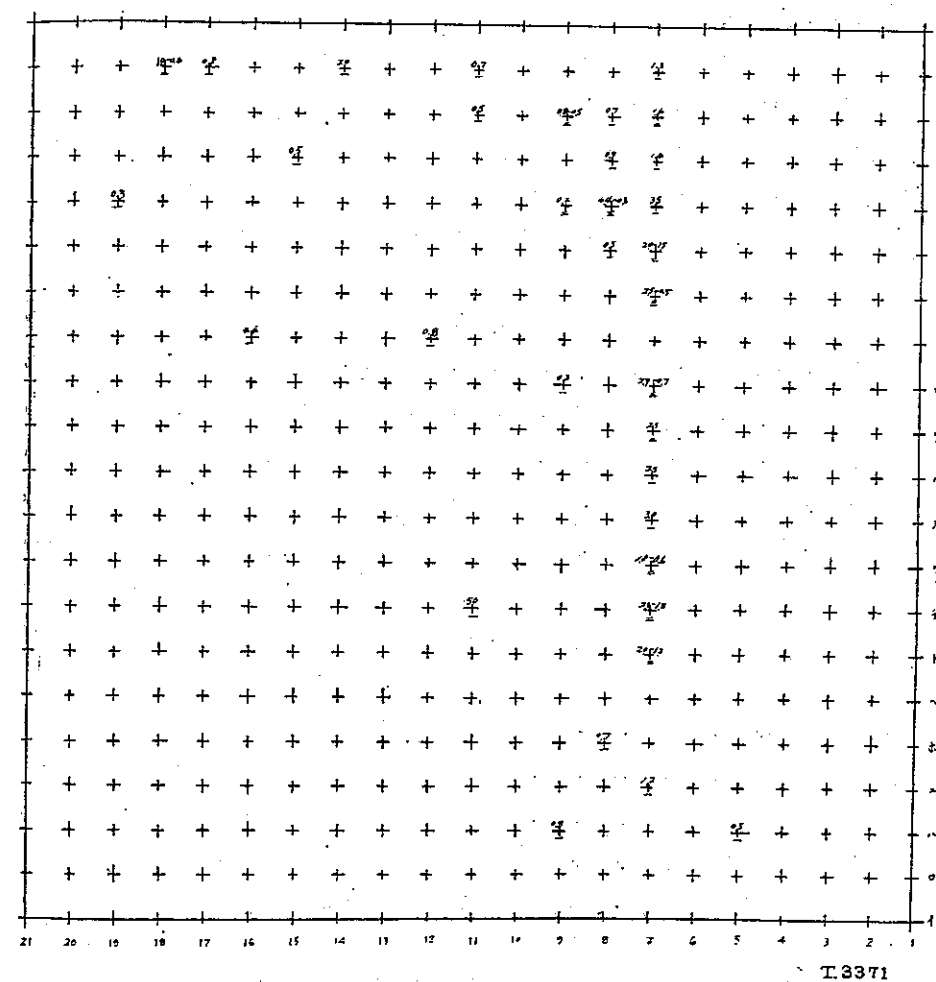
雨下成績圖 1:5000

第61回 昭和14年8月2日 17時09分

18時06分

H:3000, 晴 to 31.1°C, P₀ 43%, B₀ 739.8 mmHg

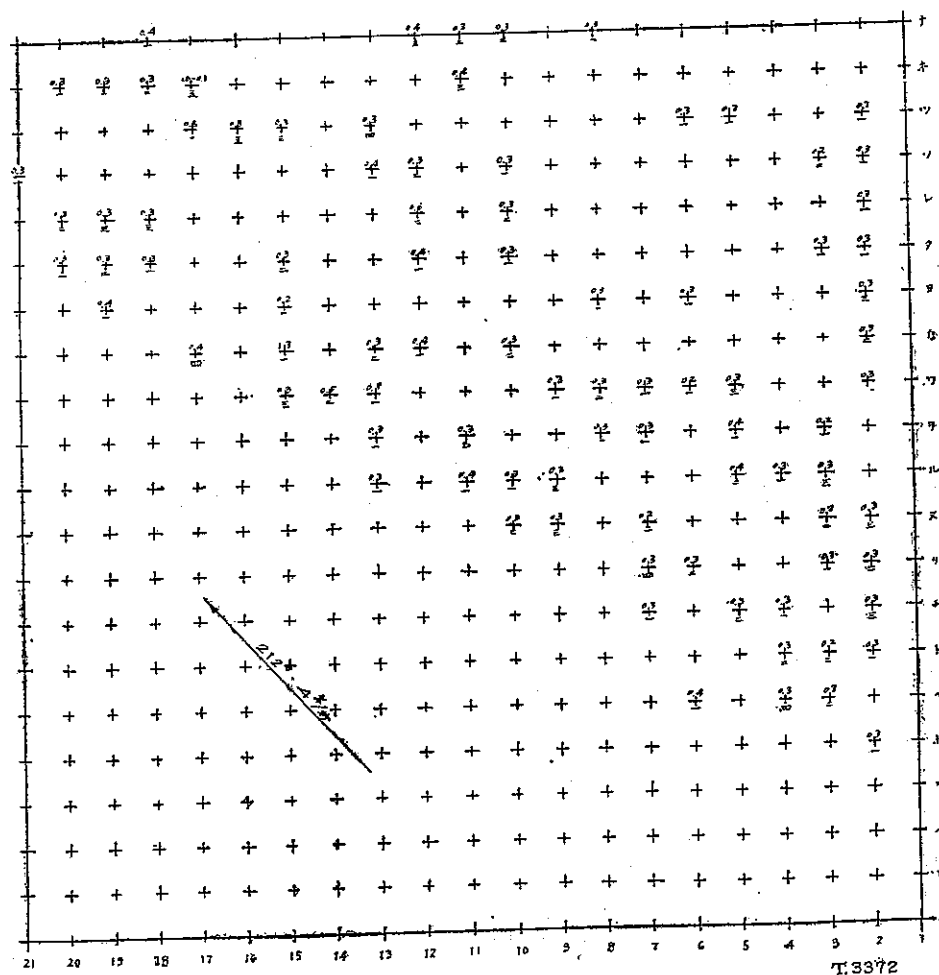
(フタシン水溶液)



雨下成績圖 1:5000

第62回 昭和14年8月2日 18時 $\frac{26}{50}$ 分H:1000, 晴 to 31.0°C, P₀ 43%, B₀ 739.8 mmHg

(寒天 0.5% メチレンブルー水溶液)

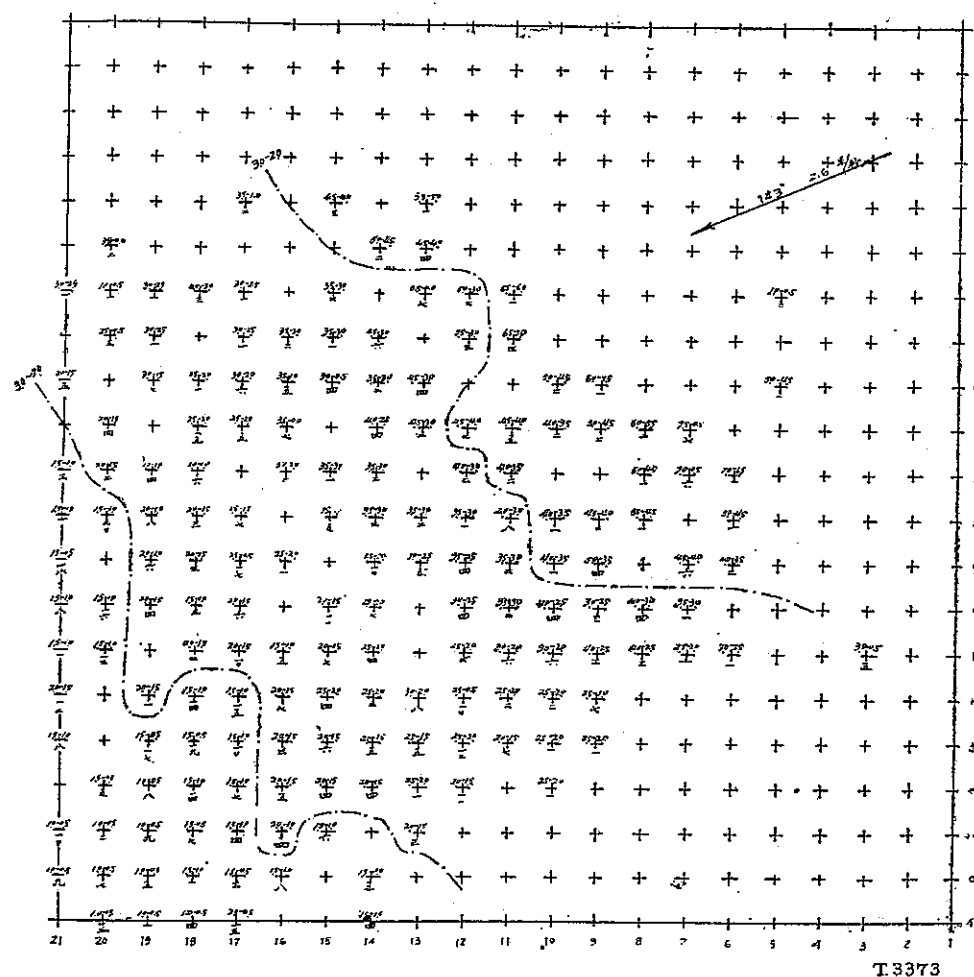


T3372

雨下成績圖 1:5000

第65回 昭和14年8月16日 12時 $\frac{35}{53}$ 分H:1000, 曇 to 22.5°C, P₀ 73%, B₀ 743.1 mmHg

(メチレンブルー水溶液)



T3373

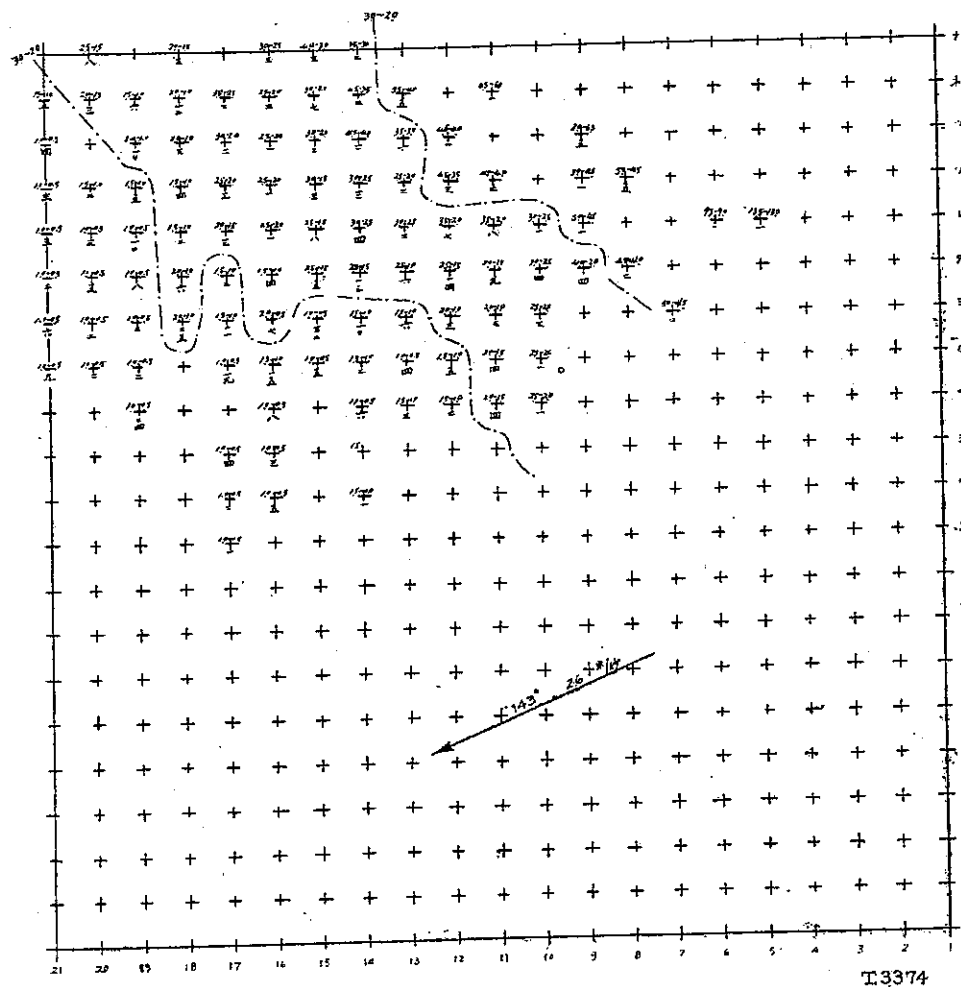
雨下成績圖 1:5000

第66回 昭和14年8月16日

13時⁰⁵分

H:1000. 雲 25.4°C. P:63% B:742.3 mmHg

(寒天0.5% オーラミン水溶液)



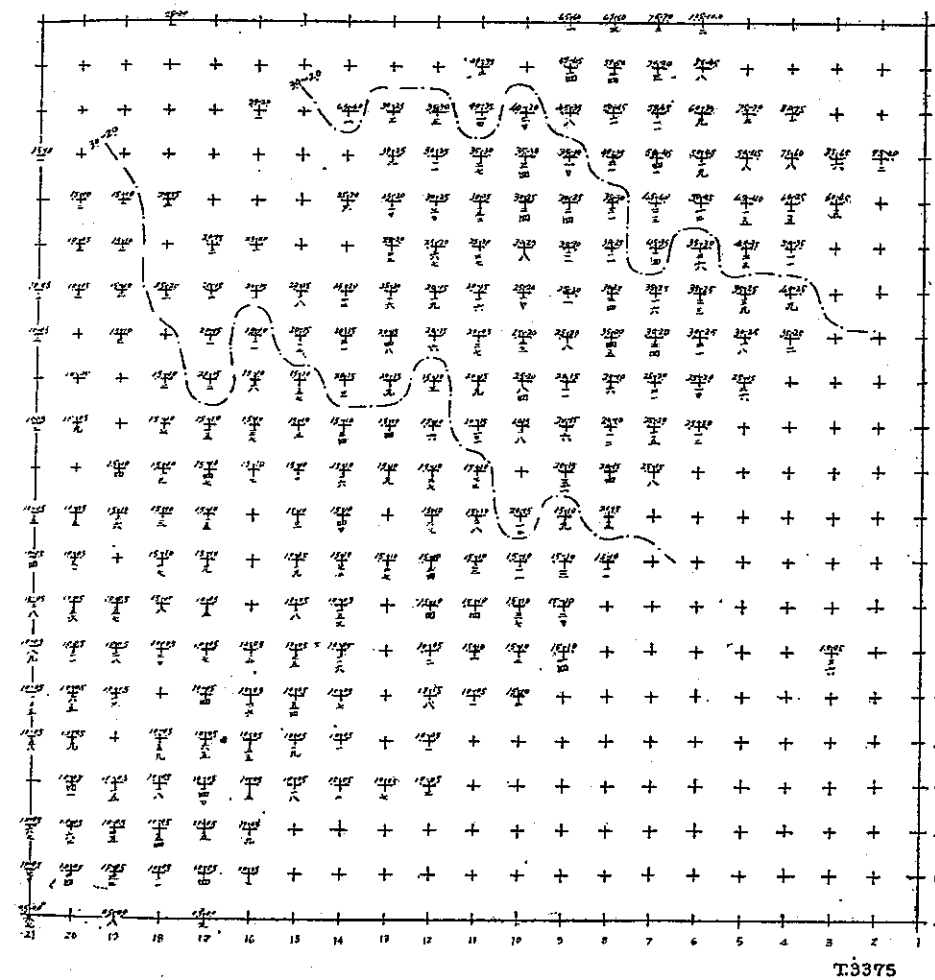
雨下成績圖 1:5000

第67回 昭和14年8月16日

13時²⁶分

H:1000. 雲 25.4°C. P:63% B:742.3 mmHg

(グリセリン-フクシン着色)



Ⅶ 雨 下 液

& 29

雨下液ノ成分ハ細菌學的ノ條件ヲ充シ、其ノ性狀ハ雨下ニ必要ナ理學的條件ヲ満足サセネバ
ラナイ。然ルニ後者ニ關シテハ尙全ク不明ナル點ガ多イノデ、僅カニ粘稠度ヲ可及的高メル
言フ點以外ハ主トシテ細菌學的條件ヲ充スベキ雨下液ガ採用サレテ居ル。然モ此ノ條件ハ單
内ニ於テ細菌ノ生活ニ有利ナルノミデハナク、良ク雨下後ノ氣象交感ニ對抗シ得ル事ヲ必要
スル。此ノ見地ヨリスレバ細菌學的條件ナルモノモ多クハ尙推察ノ程度ヲ出デナイ様デアツテ
加フルニ雨下後細菌ヲ被攻撃體ニ傳搬スルヲ絶對ニ必要トスルノデアルカラ此ノ方面モ更ニ研
ノ餘地アルモノト信ズル。雨下セラレタ細菌ヲ確實ニ地上ニ到達セシメル事ハ或ル程度可能
ナルガ、地上ニ細菌ノ存在スル事實ト之ガ進デ効果ヲ現スベク適當ナ媒體ヲ通ジテ被攻撃體
入スル事實トハ決シテ平行デハナイ。

吾人ハ現在迄ニ使用シタ雨下液ハスカル點ニ大キナ缺陷ノアツタ事ヲ信ジタイ。
此處デハ細菌學的條件ヲ除キ他ノ理學的ナ見地カラ見タ從來ノ雨下液ヲ述ベヨウ。

& 30

從來用ヒラレタ雨下液ハ概ネ次ノ如キモノデアル。

1. 肉 エ キ ス	0.5%
ペ プ ト ン	0.5%
食 鹽	0.1%
2. グ リ セ リ ン	3~5%
3. ゲ ラ チ ン	1.0%
4. 全 卵	10~100%

1. ハ材料デアツテ、之ニ2~4ヲ適當ニ加ヘル。普通ハ發臭劑ハ加ヘナイ。

普通ノ培養基ニ比シ肉エキス、「ペプトン」及食鹽ヲ減量シテ居ル。之ハ蒸發ニ對スル影響
顧慮シテ居ルノデアツテ、此等ノ物質ハ雨下液ノ理學的性狀ニ影響スル所ガ少ク、細菌學的
カラノミ添加サレタモノデアルガ、更ニ減量シテモ良イノデハナイカト考ヘテ居ル。即チ地上
落達スレバ大部分ノ滴粒ハ乾燥シテ來ルノデ、此等ノ物質ノ營養的性質ヨリムシロ殺菌の性質
著明ニナツテ來ルカラデアル。

「グリセリン」及「ゲラチン」ハ雨下液ノ粘稠度ヲ高メル目的デ用ヒラレテ居ル。

全卵ヲ加ヘルノ粘稠度ノ點以外ニ細菌學的意味ヲ多分ニ含ンデ居ル。

基材ノ性狀ハ次ノ様デアル。

(肉エキス)1%、「ペプトン」1%、食鹽0.5%ノ型ノ如ク調製セル普通ノモノヲ用フ。pH7
ス)。

左表ハ15°Cノ蒸餾水ヲ標準トシタ比粘度ヲ求メタノ
デアルガ、比重ト共ニ水ト大差ナイ。

温度°C	比 重	比 度	比 重 比 度 に 依 ず
15	1.017	1.0271	
20	1.015	1.0116	
25	1.013	1.0100	
30	1.010	1.0030	

T3928

「グリセリン」ハ(79)ノ成績ノ様ニ30%程度ニ加ヘルト
粘稠度ヲ稍々増スケレドモ、資材ノ關係カラモ更ニ細菌
學的ニモスカル濃度デ加ヘルノハ許サレナイ。5%ノ程
度デハ何レノ方面デモ差支ナイガ粘稠度ハ加ヘザルニ勝
ルトイフ程度デアルカラ、雨下液トシテハ大シク意味ハ

ナイト考ヘル。(此ノ程度デハ氷點ノ降
下モ著シクナイ)。

「ゲラチン」ハ雨下液ノ様ニ多量ニ使
用スル際ニハ高級品ハ用ヒ得ナイ。(昨
今殊ニ優良品ハ手ニ入ラナイ)從ツテ
吾人ノ試験デハ稍々大量ニ得ラレル國
産ノ2,3級品ヲ用ヒタ。細菌學的ニ特
ニ嚴密ニ鑑別ニ用ヒル場合デナケレバ
何レモ細菌ノ性狀ニ影響ヲ及ボサナイ

ノデ、比較的廉價デ粘度ノ高い3級品ヲ特ニ多ク使用シタ。以下ノ基礎試験ハ何レモ該品ニ依ル
モノデアル。粘稠性ヲ得ル目的デ寒天ヲ用ヒナカツタノハ寒天ノ粘度ノ高い「ゾル」ヲ得ラレル濃
度ト「ゲル」ニナル濃度ガ接近シテ居テ實用ニ不便ナルノト、比較的稀イ濃度デハ調製ヲ餘程慎
重ニシナイト平等均一ナ「ゾル」ニナラズニ絮狀部分ノ見ラレル惧ガ多イ爲ニ雨下液トシテハ適當
デナイト考ヘタ故デアル。(絮狀ニ折出シタ部分ヲ含ム寒天液ヲ用ヒルト滴粒ガ極メテ細クナル
事ヲ經驗シテ居ルガ更ニ回数ヲ重ネテ決定シタイ。)

「ゲラチン」ノ膠質狀態及之ニ對スル諸種ノ影響ニ關シテハ古來莫大ナ研究ガ行ハレテ居リ、又
「ゲラチン」ノ純度ニ關シテモ論議セラレル所ガ多イ。從ツテ吾人ハ今此ノ一見極メテ不純ナ材料
ヲ用ヒテ斯様ナ方面ニ深入リスルノ不適當デアリ又目的ニ副ハヌ事ヲ考ヘテ、直接雨下液ノ性狀
トシテ必要ナ粘稠度ノ方面ノミヲ試験シタ。雨下液トシテハ「ゲラチン」ノ他ニ種々ノ物質ノ種類
性狀ニ依ツテモ異ル成績ノ出ル事ヲ考ヘ主トシテ「ゲラチン」ノミニ就テ考ヘル事ニシタ。吾人ノ
用ヒル雨下液トシテノ性狀ハ種々ノ混合物ヲ加ヘテモ尙此ノ程度カラ多クハ偏スル處ノナイ事ヲ
推定シテ居ル。

「ゲラチン」ノ膠質狀態ハ調製法ト經歷ニヨツテ異ル。實際ノ雨下液デハ滅菌ノタメ加温セラレ
ルガ唯時間ガ餘リ長クハナイノデ影響ガ少イト考ヘラレル。試験ニハスカル加熱膠液ヲ使用シタ
方ガ合目的ナルガ調製ヲ一定ニシ得ナイ惧ガ多イノデ、試験用トシテハ次ノ方法ニ依ツタモノ
ヲ用ヒテ居ル。

所要量ノ「ゲラチン」ヲ細斷シ調製容器(300コルベン)ニ入レ約10倍量ノ餾水ヲ加ヘ一晝夜放置

温度°C	グリセリン 水 溶 液							
	30%	20%	10%	5%	30%	20%	10%	5%
15	1.073	1.050	1.025	1.022	1.2651	1.1664	1.0794	1.0593
20	1.071	1.048	1.023	1.022	1.2687	1.1684	1.0641	1.0391
25	1.061	1.046	1.022	1.021	1.2312	1.12514	1.0572	1.0386
30	1.058	1.045	1.021	1.020	1.1949	1.1071	1.0107	1.0200

T3927

後之=約40°C=加温セル微温溜水ヲ水量ガ所望量ニナル迄加ヘ輕ク攪拌シツツ(必要ニ應ジ湯煎上デ輕ク加温シ)丁度完全ニ溶解セシメ、之ヲ室温ニ置キ所望温度迄降下セシメテ試験用トスル。温度ヲ高メル必要ナル時ハ之ヲ湯煎上デ振盪シツツ加温シ所要温度ニ達シタ時ニ使用スル。

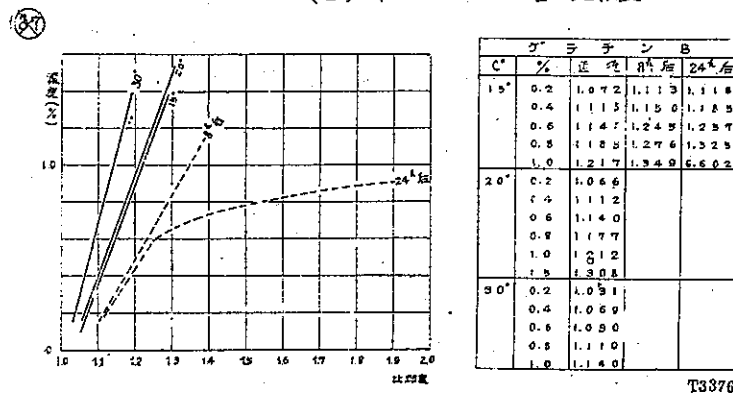
以下ノ試験成績中比重ハ比重計ニ依リ、比粘度ハ「エングラ型」ヲ用ヒ15°Cノ餾水ヲ標準トシタ。(ゲラチンBトハ使用シタ品ニ附イタ名稱デアロ)

(1) 「ゲラチンゾル」ノ比重

ゲラチンB	濃度	比重 (15°C)	(30°C)
	0.2%	1.002	1.001
	0.4	1.003	1.002
	0.6	1.004	1.002
	0.8	1.005	1.003
	1.0	1.006	1.004
	1.5	1.007	—

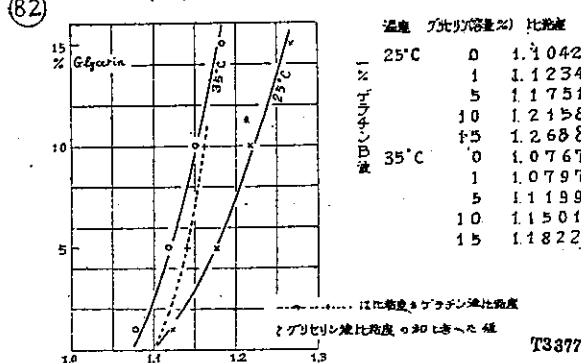
T3329

(2) 「ゲラチンゾル」ノ比粘度



T3376

(3) 「ゲラチン」、「グリセリン液」



T3377

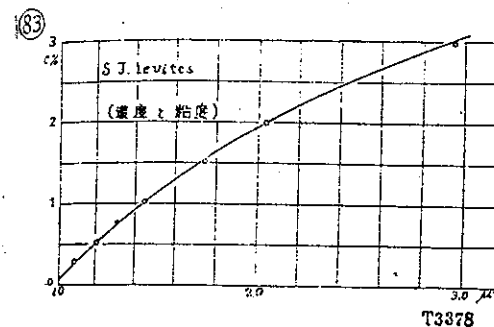
「グリセリン」(局方)ハ調製中ニ加ヘル。

即チ「グリセリン」ノ添加ハ兩者ヲ單獨ニ用ヒタ場合ヨリモ比粘度ヲ高クスル。恐ラク「グリセリン」ノ脱水作用ノ及ボス「ミツエル状態」ノ變化デアラウ。此ノ程度ハ Bechhold ノ成績ヨリモ稍ニ高イ様ニ思ハレル。

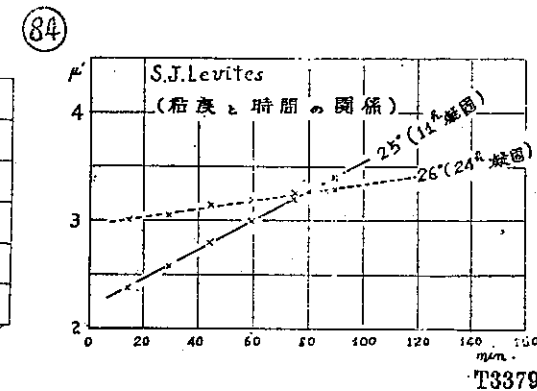
以上ハ主トシテ「エングラ型」ノ粘稠計ノ成績デアルガ、一般膠質ノ場合ノ注意ノ如クニスカ方法ハ「ゾル」ノ粘度ノミナラズ其ノ剛性ガ加ハツテ來ルノデ高壓粘度計ヲ使フノガ至當デアラウ。然シ乍ラ雨下ノ分裂ニ於テハ恐ラク粘度ノミデナク其ノ剛性モ共ニ作用スルト考ヘラレルノデ特ニ兩者ヲ區別スル事ノ要ハアルマイ。

雨下ノ場合ニハ瞬間的ニ大キナ振盪作用ガ働クノデ或ハ搖變(Thixotropy)ノ現象ノ起ル濃度帯ガ見ラレルカト考ヘタガ、吾人ノ用ヒル濃度ノ温度ノ範圍デハ遭遇出來ナカツタ。

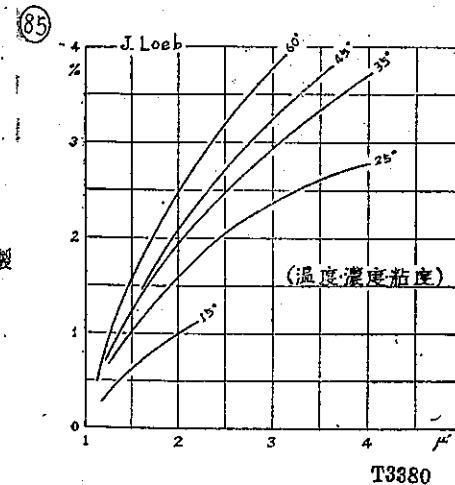
次ニ「ゲラチン」ニ關シ吾人ノ目的範圍デ特ニ必要ト思ハレル事項若干ヲ文献カラ摘録シテ見ヤ



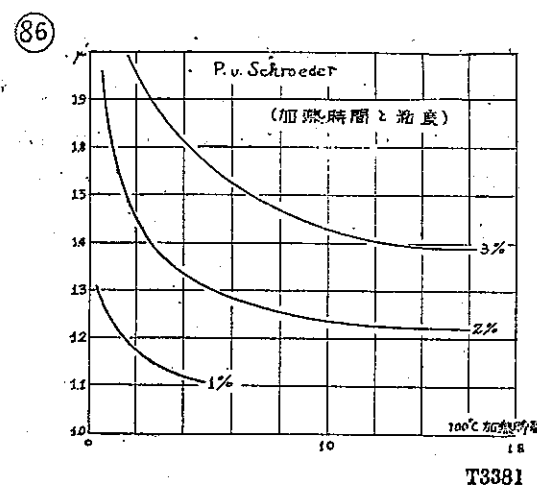
T3378



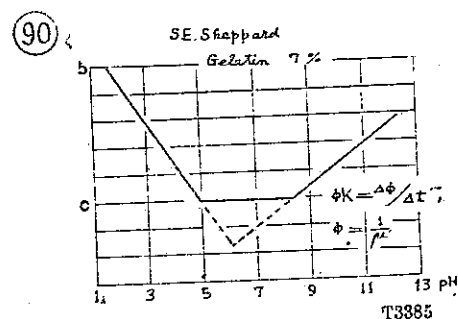
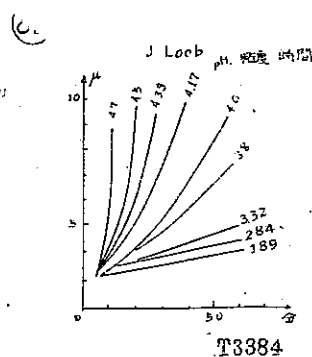
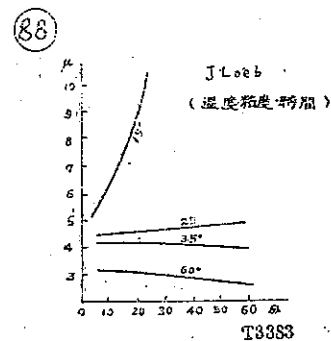
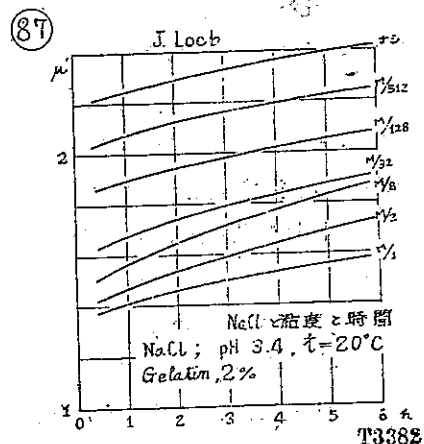
T3379



T3380

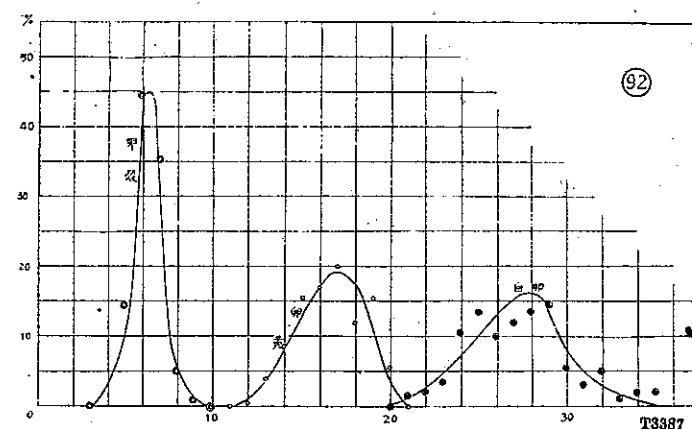
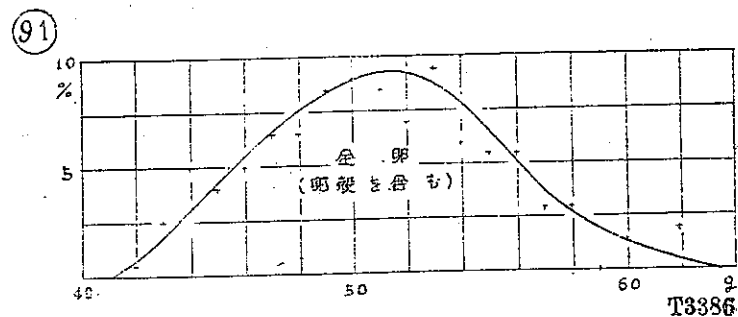


T3381



卵ハ雨下液ニハ通常外殻ヲ酒精消毒シタ程度デ全卵ノママ混合サレル。

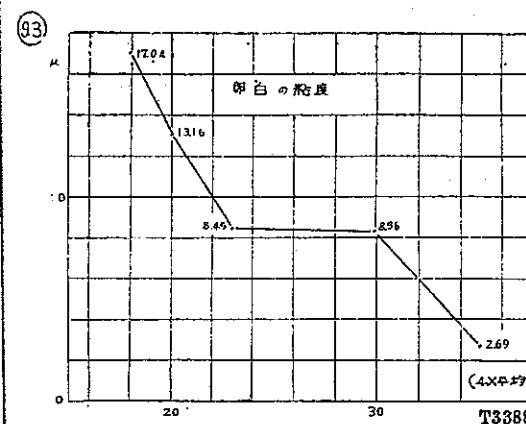
卵ノ性状ハ産地、殊ニ産卵カラ試験マデノ経過日数ト保存ノ状態ニヨツテ異ル。雨下液ニハサレルモノハ特ニ新鮮ナ事ヲ要求スル譯ニハ行カナシ。次ノ試験ハ市場ニ於テ無差別的ニ購買2, 3日室温ニ保存シタモノカラ隨意ニ摘出シタ材料ニ就テ行ツタモノデアアル。(賓江省産) 次ハ約200箇ニ就テノ分布及平均ヲ示ス。



前記ノ中卵黄及卵白ノ分離ハ通常ノ方法デ殻内デ行ツタモノデ、從ツテ卵白量ガ最も實際ヨリモ減少シテ居ル筈デアアル。

之等ノ分離物ハ各ニ構造ヲ有シテ居テ其ノ儘デハ比重モ粘度モ測定シ難イカラ之ヲ「ガーゼ」2枚ヲ通シテ壓出シ(泡ヲ立テテ緩徐ニ)卵黄膜ヲ除去シ又ハ卵黄周邊ノ濃厚部ト殻膜部ノ稀薄部ヲ可及的平均シ又「カラザ」ヲ除イタモノニ就テ次ノ試験成績ヲ得タ。

比 重		
卵 黄		1.034
卵 白		1.045
(平均温度20.6: 各10箇宛20回平均)		
1個平均容量(cc)		
卵 黄		15.67
卵 白		25.41
(分離後ノ操作ヲ行ハズ)		



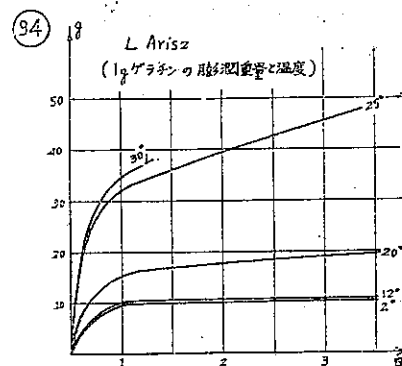
卵黄膜ヲ除去シタ 卵黄ハ 極メテ Plasticデアツテ毛細管式ノ粘度計ヲ通過シナイ。

卵白ニ就テノ試験成績ハ左ノ様デアアル。即チ 30°C ト 20°C ノ間ニ大キイ 差ガアルガ、之ニ關シテハ、更ニ異ツタ狀件ノ卵ヲ用ヒテ追試スル必要ガアル。

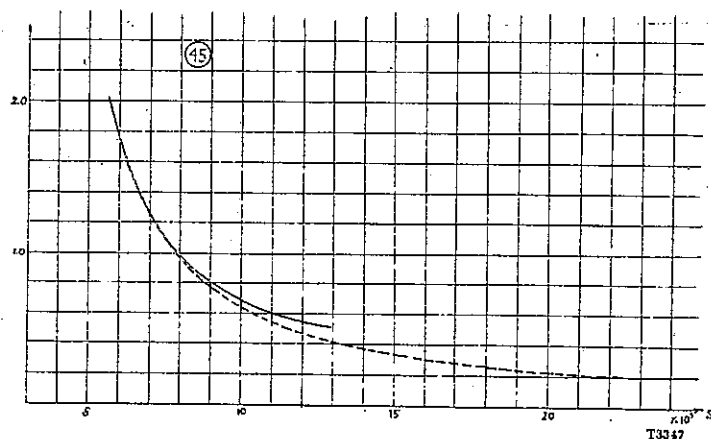
& 31

雨下液ノ性状トシテ必要ナノハ落達後ノ菌ノ運命ヲ支配スル因子デアル。蒸發乾燥ハ當然ノ歸結デアリ、之ニ關スル細菌學的研究モ行ハレテ居ルシ更ニ落達土壤ノ性状ト雨下液ノ緩衝作用ニ就テモ考慮サレテ居ル様デアルガ、吾人ノ此處ニ述ベタイノハ乾燥シテ細菌ヲ内ニ保有スルト見做スベキ粒子ガ爾後如何ニシテ内ノ菌ヲ放出スベキカデア。此ノ場合先ヅ問題トナルノハ水ニ對スル溶解度デア。粒子ガ可溶性ノ物質ヲ基質トスル時ハ雨其ノ他ノ水ニ依ツテ内ノ菌ガ自由ニ放出セラレケレドモ上ニ述ベ來ツタ様ナ蛋白體ヲ含有スル場合ニハ斯ク單純ニ考ヘル事ハ許サレヌ。

一般ニ蛋白質ガ「ゾルーゲル」變換ヲ行フト化學的ニ變性シテ水ニ不溶トナル場合ガアル。熱凝固ハ著明ナ例デア。吾人ガ上ニ取扱ツタ卵蛋白ニ於テハ自然乾燥ハ斯ル變化ヲ起スニシテモ著明デハナク、例ヘバ孵卵器内デ乾燥セシメタ卵白卵黃ハ室温ノ水ニ一部再ビ溶解スル。此ノ詳シイ程度ハ尙求メテ居ナイ。「ゲラチン」ノ場合ニハ再ビ文献ヲ引用スル事ガ出來ル。之ニ依レバ30°C以下ニ於テハ殆ド自然溶解ヲ起サスト考ヘラレル。之ハ「ゲラチンゲル」自身デアツテ、吾人ノ取扱フ様ナ各種ノ混合物ヲ有スルモノニ於テハ「ゲラチンゲル」ノ網狀體ガ出來テ居ルトモ考ヘラレルノデアツテ、「ゲラチン」1%、(肉エキス)1%ノ「ゾル」ヲ作り之ニ「コンゴ赤」ヲ加ヘ



T3389



テ置キ「ペトリ皿」ニ噴霧シ室温デ乾燥サセ。後之ニ室温ノ水ヲ加ヘルト僅時間中ニ「コンゴ赤」モ殆ド水中ヘ出テ了フヲ見ル。細菌ヲ用ヒテ其ノ何分ガ出得ルカハ實驗ガナイ。

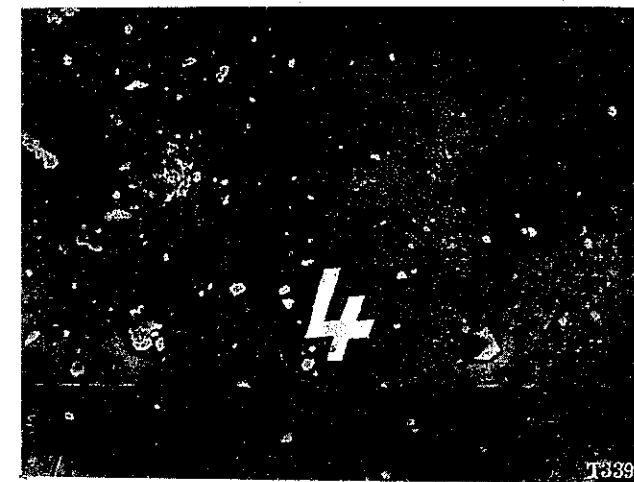
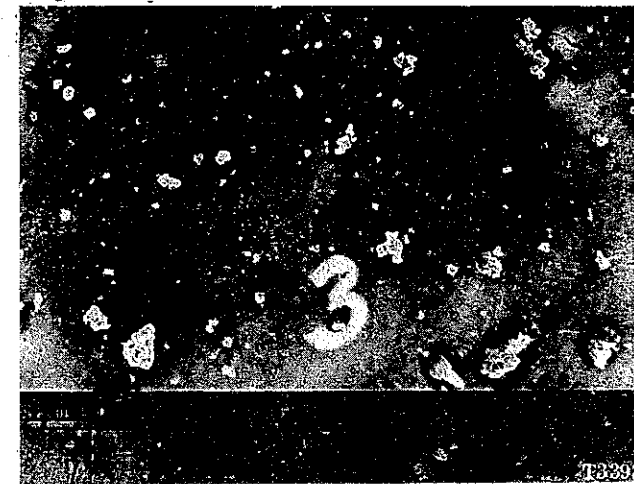
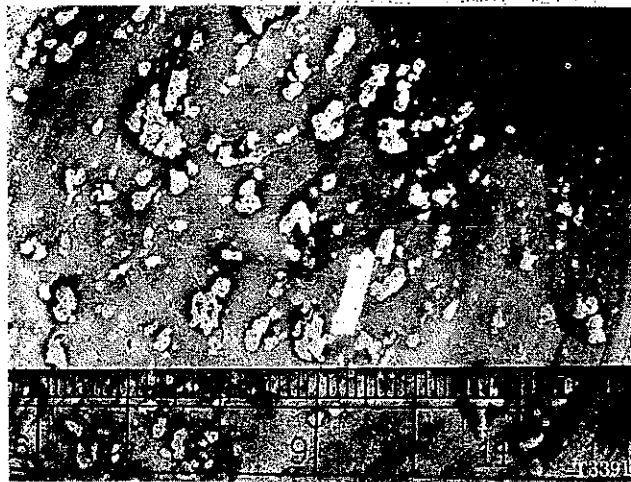
從ツテ實際ハ「ゲラチン」ヲ含ンダ雨下液デアツテモ中ノ細菌ハ雨水ニ遇ヘバ外ヘ出ル事ハ確實アシイガ、極メテ冷イ雨デハ餘リ良イ結果デハアルマイト想像サレル。

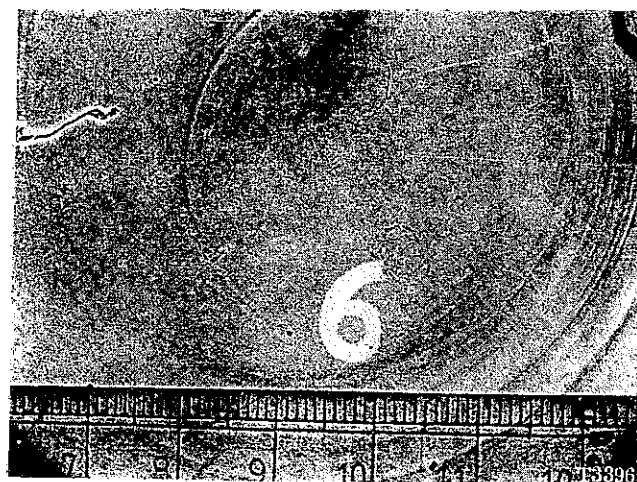
& 32

實際ニ用ヒル場合ノ雨下液ハ決シテ均一ナモノデハナイ。室内デ注意シテ良ク振盪スレバ外見ハ均一ナル様ナ全卵混合液デハ實際上ハ可及的振盪スルニ拘ラズ量ヲ多ク一時ニ調製スルノデ卵ノ部分ガ他ノ溶液ニ混合セズニ存スル事ガ多イ。又「ゲラチン」ヲ用ヒル場合豫メ調製シテ置クト水温ノ變化デ凝固ヲ起シテ來ル事ガアリ之ヲ雨下液槽ニ注入スル際ハ細ク割レテ「ゲラチンゲル」ノ細片ガ間ニ凝固水ヲ含ンデ居ル状態デア。從ツテ斯様ナ雨下液デハ室内ノ實驗デ見ラレル性状トハ異ル狀況ヲ呈スル事ヲ考慮ゼネバナラナイ。

次ニ斯様ナ見地カラ行ツタ試験ノ一部ヲ示ス。餾水100ccニ全卵筒ヲ加ヘ之ニ硝子小球筒100箇ヲ入レ「エルレンマイエルコルベン」内デ手ニテ良ク振盪シ、一定時間毎ニ10cc宛取り出シ「ペトリ皿」上ニ擴ゲ、「エビヂヤスコフ」ノ透視板上ニ置イテ壁面ノ投影ヲ撮影シテ見ル。(肉眼的ニハ卵白部ノ構造ガヨク見エルガ寫眞デハハツキリシナイ。白ク寫ツテ居ルノハ卵黃部デア。)

No. 1	5分振盪
No. 2	7分 "
No. 3	9分 "
No. 4	11分 "
No. 5	13分 "
No. 6	pH7.2, 0.2%寒天(調製後室温ニテ放冷セルママ構造ナシ。)

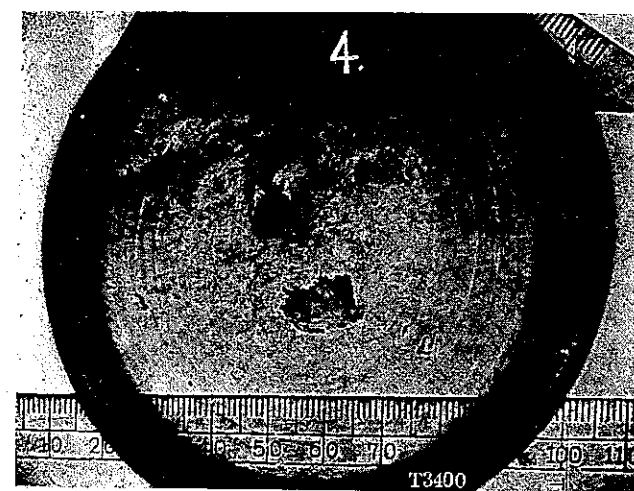
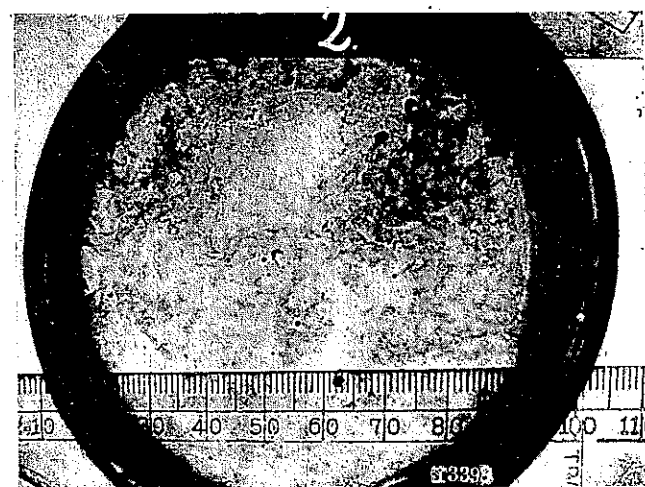
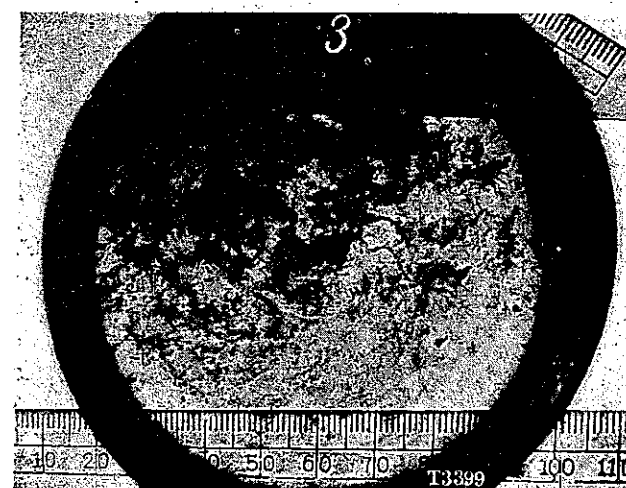
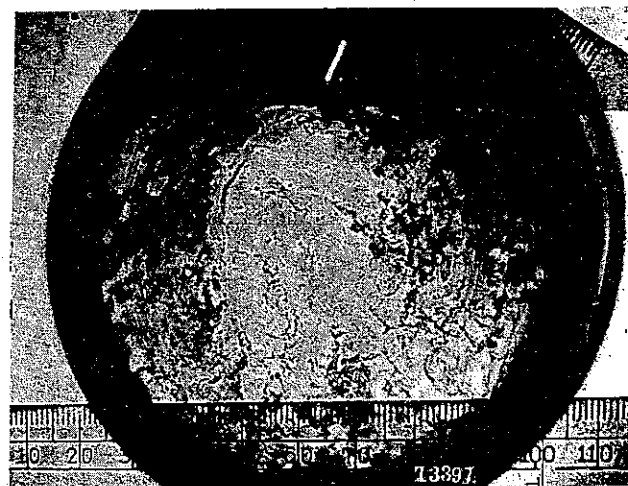


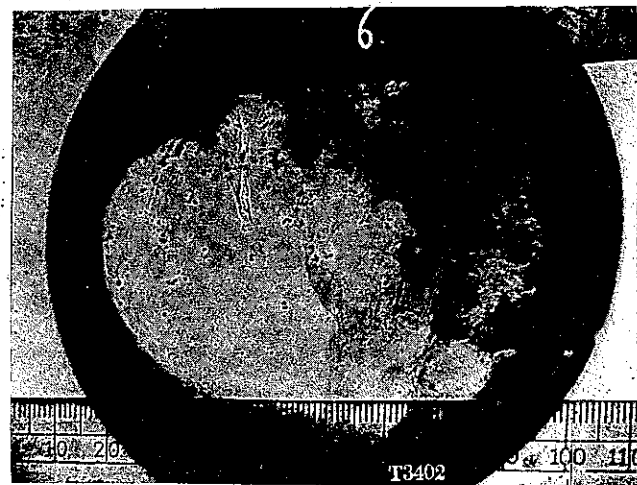
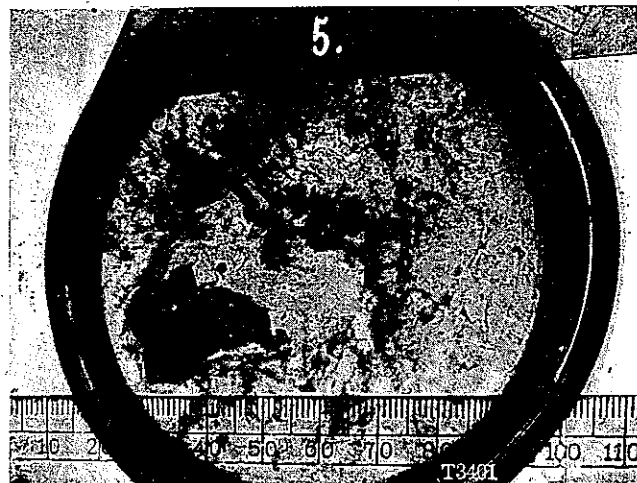


次ニ卵白ノミニテ試験ヲ行ツタ。

溜水100ccニ卵白3個分ヲ加ヘ硝子球50個ヲ入レテ「コルベン内デ、手ニテ1分間100回位ノ振盪ヲナシ、「コンゴローート」ノ飽和液5ccヲ注ギ染色液ノ均等ニナル迄振盪ヲ行ヒ、一定時間毎ニ10cc宛「ペトリ皿ニ分注シ全卵ノ時同様ニ「エビデヤスコープ」ニ掛ケ投影シ撮影セル寫眞ハ次ノ如クデアル。(寫眞ニ見エル白ク寫ツテ居ル部分ハ卵白部デ黒ク見エル部分ハ「コンゴローート」ニテ染色セラレタ水ノ部分デアル。)

No. 1	5分振盪
No. 2	6分 "
No. 3	7分 "
No. 4	8分 "
No. 5	9分 "
No. 6	10分 "





Ⅷ 雨 下 氣 象

& 33

斯カル問題ハ之ヲ廣義ニ解釋スレバ殆ト全氣象學竝ニ一部ノ氣候學ヲ含ムモノトナリ。嚴密ニ解釋スレバ特ニ雨下氣象ト名附ケル項目ハ殆ト皆無トナル。即チ雨下氣象トハ強ヒテ言ヘバ所謂軍用中航空氣象ニ屬シ、而モ特ニ雨下（又ハ撒布）セラレタ粒子ノ落下経路及途中ノ變化ヲ考察スルモノデアルト定義出來ル。勿論軍用氣象ノ一部トシテ疫學氣象ノ確立サレル事ハ急務デアツテ、此ノ中ニハ一分科トシテ今問題ニスル部分ガ含有サレネバナラス。即チ雨下氣象ガ當然包含スベキ細菌自體ノ氣象交感、更ニ効果ニ對スル影響ハ雨下氣象ノ含マルベキ疫學氣象ニ於テ取扱ハレネバナラナイ。

斯様ナ見地ヨリスレバ、此處ニ此ノ項ヲ舉ゲルノハ必ズシモ妥當トハ言ヘナイガ、過渡期ニ於ケル現象トシテ吾人ハ從來獨自ノ立場カラ此ノ方面ニ關心シテ居ツタガ故ニ極メテテ簡單ニ粒子ノ経路ニ關スル部分ヲ述ベル。最モ重要ナ細菌ニ對スル氣象交感ニ關シテハ他ノ専門ノ部門ニ委セヤウ。

此處ニ雨下氣象ト稱スルモノノ定義ハ後章『雨下氣象ノ判定』中ニ考ヘテ居ルノデ敢テ重複ヲ避ケル。

& 34

雨下高度ヨリ地上迄ノ風力分布及其ノ間ノ溫度、濕度、密度ハ粒子ノ流下量ヲ決定スル。即チ斯ル見地ヨリスル途中ノ空氣ノ狀態ガ命中精度ト効果ノ一部ヲ準定シ之ヲ以テ雨下氣象デアルト見做ス事モ出來ル。

之ヲ粒子ノ流下量ヲ中心トシテ考慮シタモノガ雨下風ナル概念的ナモノデアル。即チ雨下風トハ粒子ノ流下ヲ來ス空氣ノ狀態ノ量的表現デアツテ、風力、濕濕及密度ヲ含ミ之ヲ端的ニ表現スル事ハ出來ナイ。之ハ合成の風力ト空氣ノ理學の狀態ノ合成及之等ノ相關カラ成立スルカラデアル。

先ツ空氣ノ移動ニ對シテ其ノ抵抗ガ無視セラレル場合ヲ考ヘル。氣壓傾度ガ地球ノ偏向力ト釣合ツテ居ル場合、即チ地衡風ニ於テハ次ノ式ガ與ヘラレテ居ル。

$$U = \frac{1}{2\omega\sigma\sin\lambda} \cdot \frac{\partial p}{\partial y}$$

但シ ω : 地球自轉ノ角速度

σ : 空氣密度

λ : 重力緯度

$\frac{\partial p}{\partial y}$: 氣壓傾度

又風ガ曲率半径 r ヲ描イテ吹ク時ハ氣壓傾度ハ地球偏向力並遠心力ト釣合ツタ傾度風トナル。

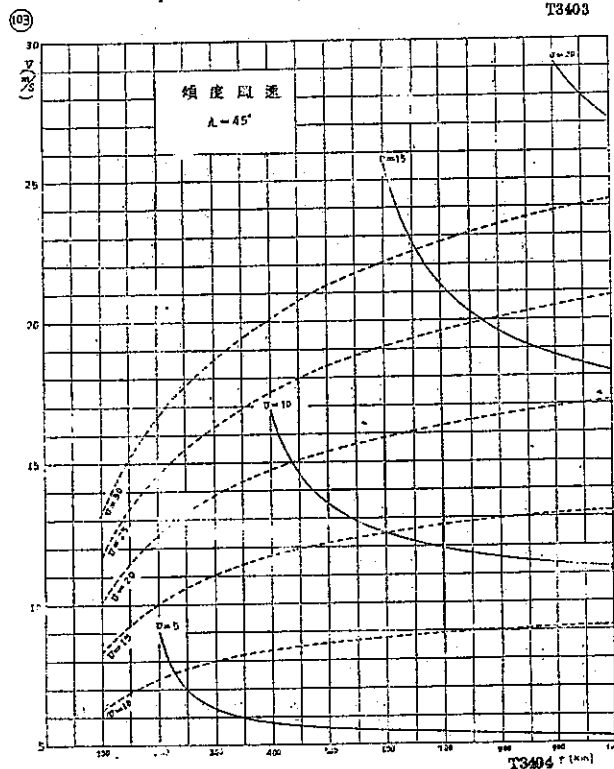
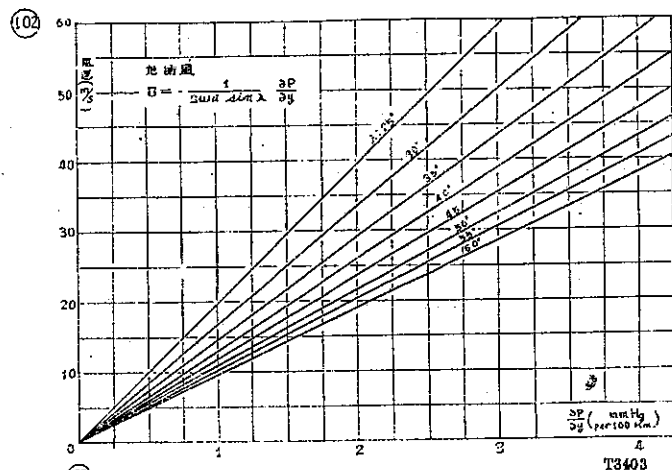
即チ

$$v = r\omega \sin\lambda \left(\pm \sqrt{1 \pm \frac{2U}{r\omega \sin\lambda}} \mp 1 \right)$$

複號ハ同順ニ對應シ、上ハ低氣壓、下ハ高氣壓ノ場合デアル。

今 σ トシテ $h=1000$ ノ値(0.0011)ヲ取ツク地衡風ヲ計算スルト(102)ノ様ニナル。

更ニ傾度風ノ大イサハ(103)ノ様ニナル。之ヨリ明デアル様ニ低氣壓ノ場合ニハ r ガ小サイ風速ハ地衡風ヨリ小サクナルガ、高氣壓デハ r ノ小サイ時ハ成立シナクナリ、高氣壓ヲ巡ツテ吹風ガ無いノガ判ル。 $\left(r > \frac{\partial p}{\partial y} \frac{1}{\sigma\omega^2 \sin^2\lambda} \right)$



抵抗ヲ考ヘナイ場合上層風ハ各高度ノ氣壓傾度ト空氣密度カラ求メレバヨイ。今地上ノ氣壓傾度ト溫度傾度トカラ上層風ヲ求メテ見ヤウ。

$$\left. \begin{aligned} \frac{u}{T} &= \frac{u_0}{T_0} - \frac{g}{2\omega \sin\lambda} \int_{z_0}^z \frac{1}{T^2} \frac{\partial T}{\partial y} dz \\ \frac{v}{T} &= \frac{v_0}{T_0} + \frac{g}{2\omega \sin\lambda} \int_{z_0}^z \frac{1}{T^2} \frac{\partial T}{\partial x} dz \end{aligned} \right\}$$

u_0, v_0, T_0 及 u, v, T ハ高サ z_0 及 z 於ル地衡風ノ x, y 成分及溫度デアル。

今氣溫ノ遞減率ヲ各地一定ト假定スル、即チ

$$T = T_0 + \gamma z$$

$$\text{故ニ} \quad \frac{\partial T}{\partial x} = \frac{\partial T_0}{\partial x} = \text{const}; \quad \frac{\partial T}{\partial y} = \frac{\partial T_0}{\partial y} = \text{const}$$

今 $v_0 = 0$ トスルト

$$\left. \begin{aligned} u &= \left(1 + \frac{\gamma z}{T_0} \right) u_0 - \frac{g}{2\omega \sin\lambda} \cdot \frac{z}{T_0} \cdot \frac{\partial T_0}{\partial y} \\ v &= \frac{g}{2\omega \sin\lambda} \cdot \frac{z}{T_0} \cdot \frac{\partial T_0}{\partial x} \end{aligned} \right\}$$

更ニ $\frac{\partial T}{\partial x} = 0, \frac{\partial T}{\partial y} > 0$ 即チ氣壓傾度ト氣溫傾度ヲ逆方向ニ取ルト

$$u = \left(1 + \frac{\gamma z}{T_0} \right) u_0 - \frac{g}{2\omega \sin\lambda} \cdot \frac{z}{T_0} \cdot \frac{\partial T_0}{\partial y}$$

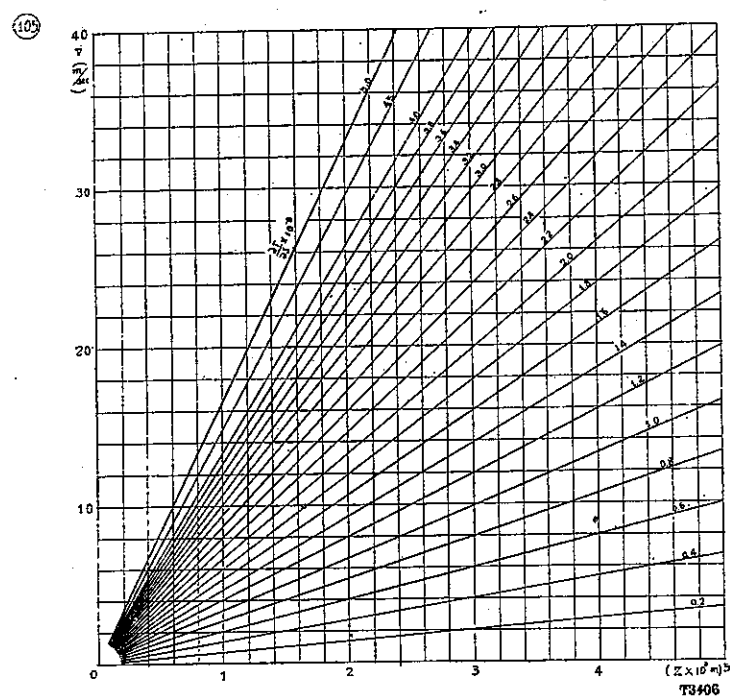
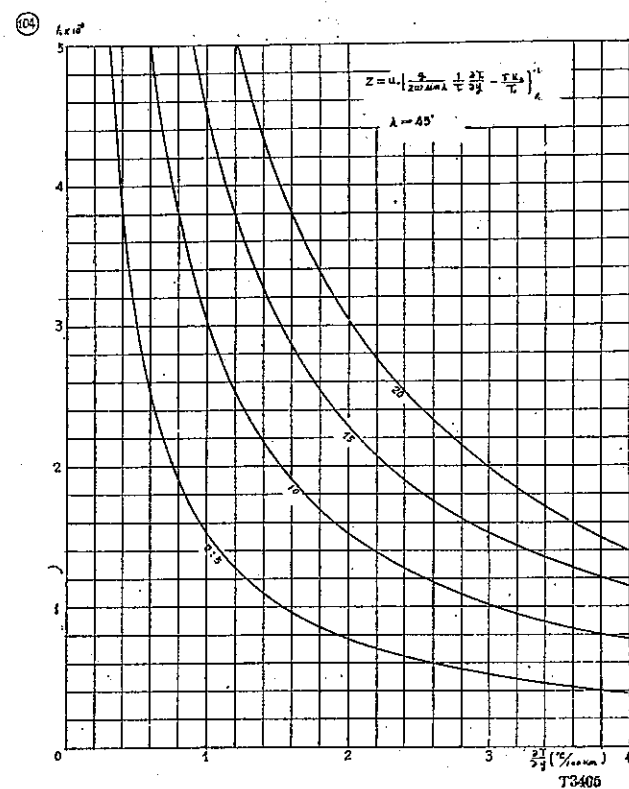
即チ $z = u_0 \left\{ \left(\frac{g}{2\omega \sin\lambda} \cdot \frac{1}{T_0} \cdot \frac{\partial T_0}{\partial y} \right) - \frac{\gamma u_0}{T_0} \right\}^{-1}$ 於テ $u = 0$ トナル。今此ノ高度ヲ λ ,

$\frac{\partial T}{\partial y}$ ノ各値ニ就テ計算スルト次圖ノ様ニナル。(分母ノ第2項ハ第1項ニ比シ省略シ、 $T_0 = 288$ トス)。(104)

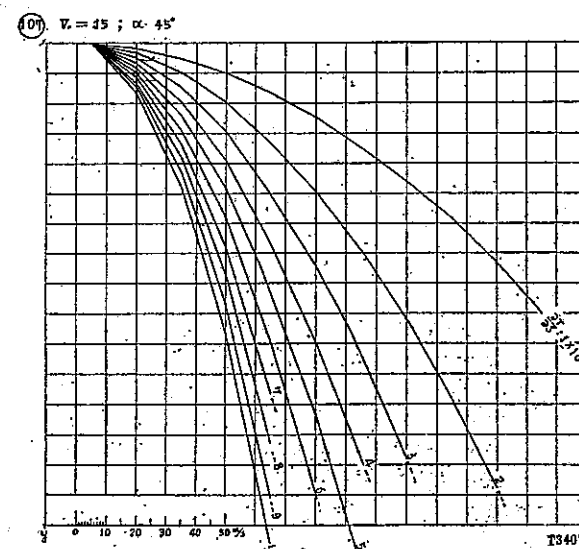
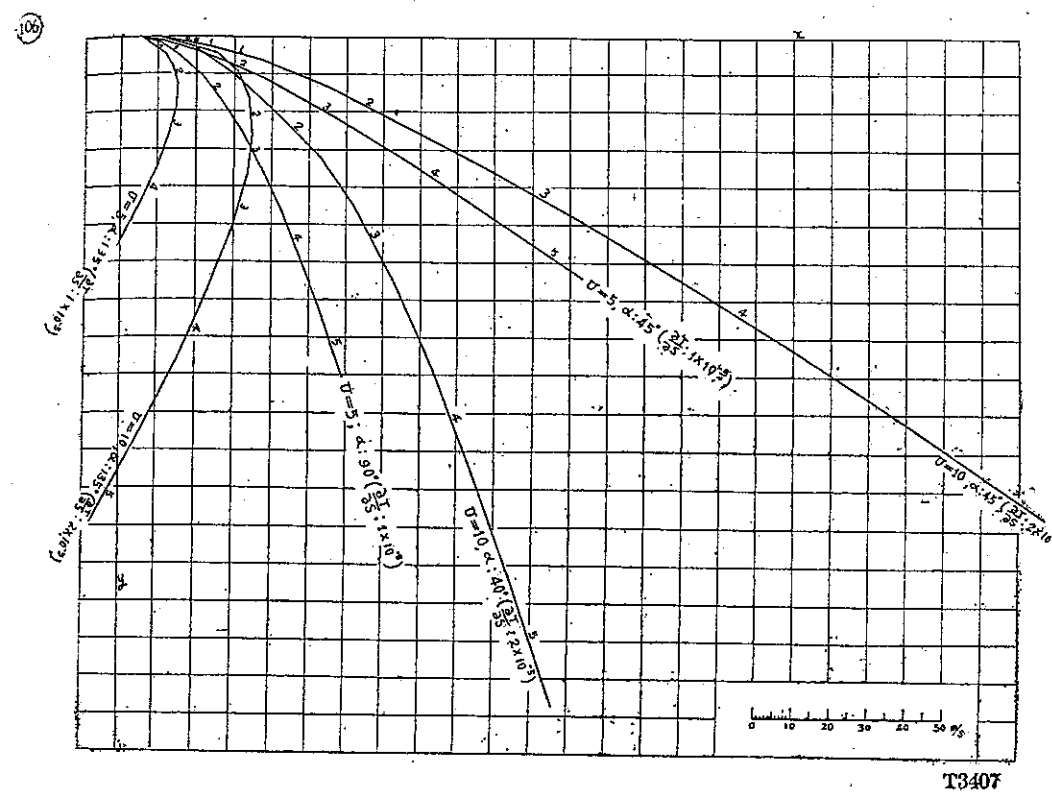
此ノ式ノ内 $\frac{g}{2\omega \sin\lambda} \cdot \frac{z}{T_0} \cdot \frac{\partial T_0}{\partial s}$ ハ即チ溫度風デアツテ氣壓傾度トハ關係ナク溫度傾度ノミニ從ツテ吹ク風ヲ示ス。 u 成分式第1項ニ於ル $\frac{\gamma z}{T_0}$ ヲ1ニ比シ省略スルト。風速ハ次ノ様ニ表ハサレル。

$$\left. \begin{aligned} u &= u_0 - W_T \cos a \\ v &= W_T \sin a \end{aligned} \right\}$$

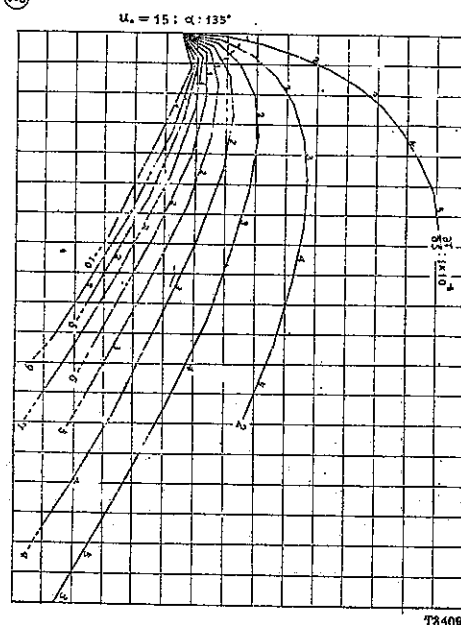
但シ W_T ハ溫度風ヲ、 a ハ溫度傾度ノ方向ヲ示ス。今此ノ溫度風ヲ計算スルト次圖ノ様ニナル。(105)



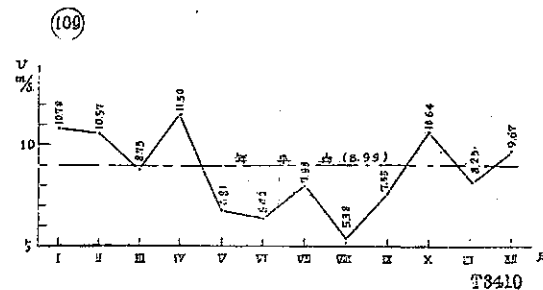
次 = u_0 , $a \times 2, 3$ の値ニツキ上記ノ假定ニ依ル上層風ノ狀況ヲ描クト次ノ様ニナル。(106, 107, 108)



108



(1) 1000m風速ノ月別平均 $\left(\frac{\sum v}{n} \right)$



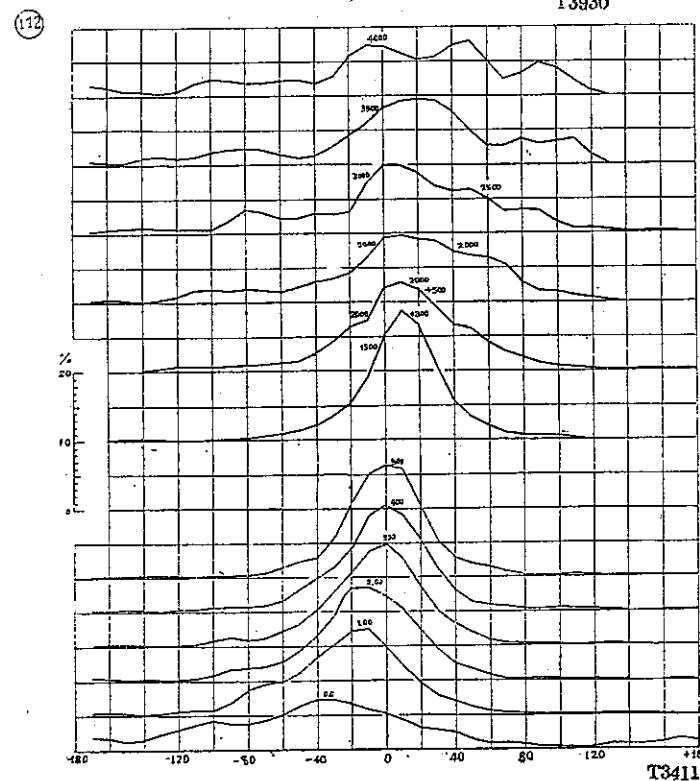
& 35

實際ノ風速分布ノ狀況ヲ例ヘバ1938年ノ哈爾濱ニ於ル氣流觀測ノ結果ニツイテ調べテ見ル。此處ハ周圍ガ比較ノ平坦開潤デアツテ渦動粘着係數ハ地形的ニハ餘リ大キクナイト考ヘラル。然モ地上風ヲ基準ニ取ルト此ノ影響ガ大キイト考ヘ、1000mノ風向ト風速ヲ基準トシ、之ニ對スル各高度ノ風向ノ變化ト1000m風速ニ對スル各高度風速ヲ%デ示シタモノヲ同年間ノ全觀測ニ就テ見ルト次ノ様ニナル。(勿論地上風向ハ16方位デ出シテアルガ、之ヲ該方位ノ中央ト見做シタモ多數ノ觀測デハ誤差ハ少イト見ル)。

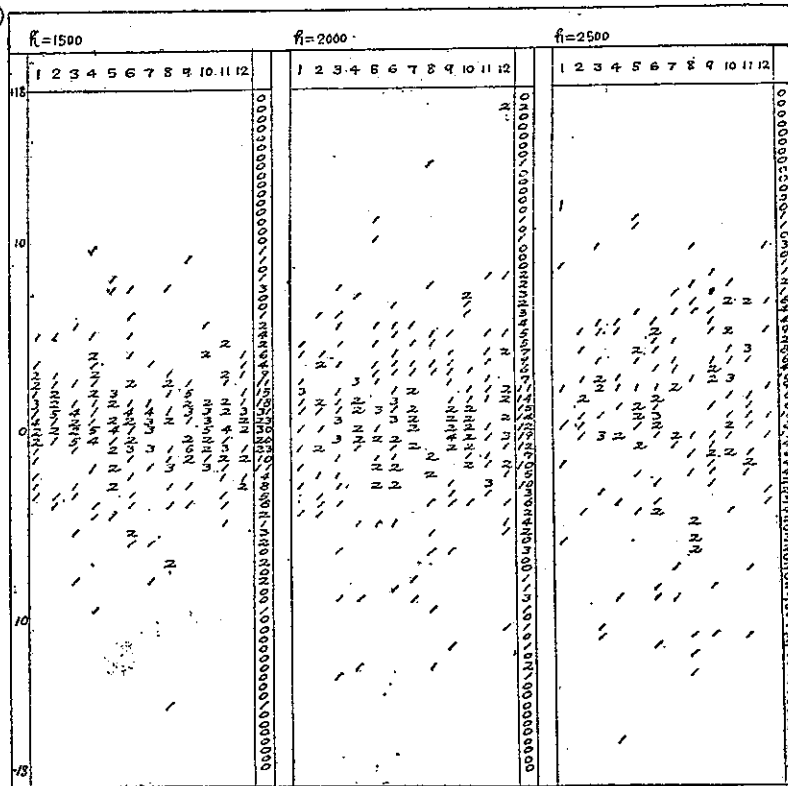
No	K ₁₀₀	20° 1700 22							
		0	0.1	0.3	0.5	1.5	2.0	2.5	3.0
50	D	1.0	0.3	—	0.3	—	—	—	—
		12.4	1.7	—	0.3	—	—	—	—
		12.8	3.8	1.4	1.4	1.1	—	—	—
		17.5	11.2	4.6	1.4	0.7	1.3	0.6	—
		16.5	13.3	6.4	2.4	1.8	1.8	5.7	1
		13.8	10.9	0.5	3.8	3.0	2.3	3.2	1
		8.7	9.9	10.9	3.5	3.7	1.8	4.5	3
		4.7	8.2	16.5	19.8	5.9	9.0	5.8	3
		2.7	6.4	8.6	15.6	6.0	6.1	5.1	2
		3.0	6.5	9.8	10.9	11.5	9.4	8.3	3
100		1.0	0.3	—	0.3	14.5	12.1	2.6	4
		1.0	4.1	7.1	4.5	10.8	7.2	7.6	11
		0.3	2.4	5.1	5.8	9.1	6.8	5.1	7
		0.3	1.4	2.7	3.7	7.1	6.5	6.4	4
		0.3	1.7	4.4	5.6	6.1	5.4	3.2	3
		0.7	0.7	2.7	2.7	4.8	4.5	2.5	1
		0.3	0.7	2.9	3.4	3.8	4.9	5.1	5
		0.7	1.0	1.8	1.4	2.6	1.4	9.7	5
			1.0	0.5	1.0	1.5	4.7	3.8	7
			0.3	0.3	0.7	0.3	2.2	2.5	8
200			0.3	1.7	0.3	1.5	0.9	1.3	7
		0.3		0.5	1.0		0.9	0.6	5
		0.3	0.3	1.0	1.0	0.7	1.3	0.6	5
		0.3	0.3		2.3	0.3	0.0	0.6	6
		0.3		0.3	0.7		0.5	0.6	6
			0.3	0.5			0.9	0.6	0
		0.3		0.7	0.3	0.3	0.9	1.9	2
			0.7				0.5	1.3	2
								0.6	5
								0.6	5
300		0.3	0.3				2.5		7
			0.3			4.7			7
				0.3					7
							0.5		7
					0.5				7
					0.3				7
								0.6	7
									7
									7
									7
400		0.3	1.0	0.7	1.7	1.5	4.0	7.0	7
	觀狀	2.98	2.94	2.96	2.98	2.67	2.23	1.57	7
	平均	4.9.07	53.13	101.9	102.9	125.9	169.1	195.5	21

(3) 高度別風向變化

L	C	20	200	500	1200	503	1500	2005	2500	3000	3500	4000
160	12	01	01	02	03	02	00	04	00	00	00	00
170	16	02	02	02	02	02	00	02	00	02	00	00
180	12	01	01	01	00	02	00	02	00	03	00	00
190	08	02	00	00	00	02	00	04	00	02	00	00
140	09	02	00	04	01	01	00	02	00	02	00	00
130	09	01	01	04	01	01	00	02	01	03	00	00
120	03	01	03	02	02	07	00	02	03	07	14	06
110	00	02	02	01	03	03	02	03	08	07	37	22
100	03	02	07	03	05	02	05	06	13	16	34	40
90	04	02	03	04	03	00	07	10	14	32	29	47
80	04	03	02	03	04	02	08	20	27	32	36	31
70	11	04	02	04	07	00	10	28	54	54	27	51
60	01	06	07	08	04	15	20	41	65	50	27	53
50	15	12	16	13	14	14	30	61	68	63	49	01
40	25	20	24	33	31	29	57	68	73	61	76	74
30	29	28	24	51	64	56	103	92	81	69	93	56
20	31	47	74	87	105	109	160	117	91	89	95	53
+10	43	70	120	129	141	153	188	128	97	88	93	62
10	51	102	121	146	156	167	182	120	93	100	81	71
20	56	125	133	127	140	150	172	140	85	108	59	74
30	66	122	134	103	14	108	54	64	41	31	42	37
40	71	104	104	81	65	58	25	44	33	26	25	28
50	72	85	70	54	49	29	21	26	30	20	13	10
60	63	63	45	37	37	24	14	15	21	21	10	24
70	50	49	28	21	17	15	39	12	14	21	13	23
80	33	36	20	12	10	06	07	10	16	20	22	13
90	38	38	10	08	09	04	03	05	10	34	24	19
100	38	10	16	13	08	03	02	08	15	10	22	23
110	42	07	07	09	07	02	01	03	19	05	18	23
120	37	06	02	03	02	00	07	17	05	10	13	10
130	29	06	01	00	02	04	30	07	07	05	08	04
140	22	04	01	01	00	03	01	02	01	03	12	05
150	13	03	02	02	02	03	02	00	00	08	10	04
160	12	04	01	03	03	07	01	00	01	05	7	00
170	10	05	03	03	02	02	00	00	03	05	02	13
+180	15	04	05	02	01	02	00	00	01	02	05	15

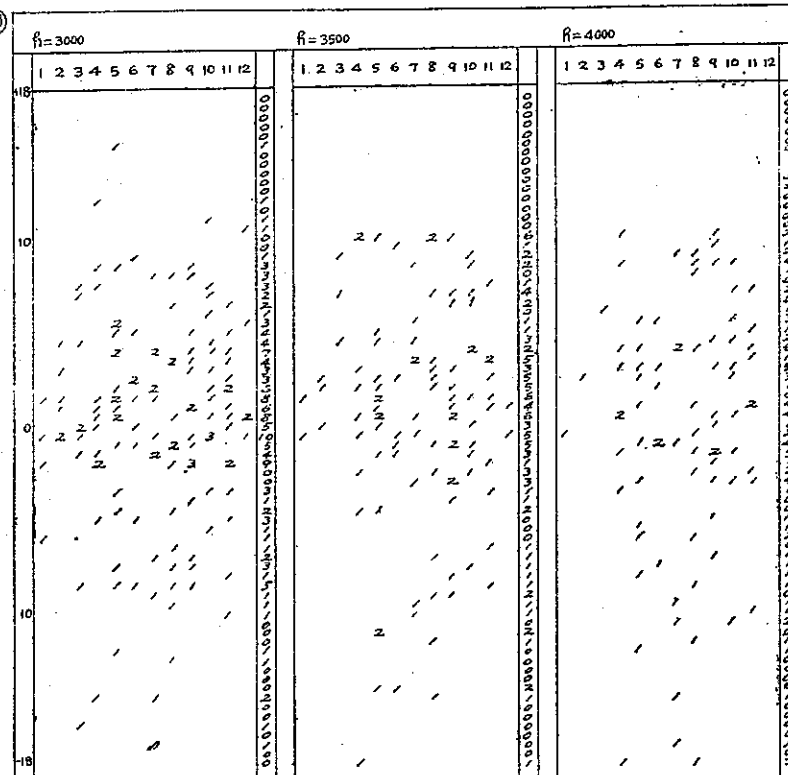


(117)



T3415

(118)



T3416

此等ノ成績ヲ見ル場合ハ次ノ點ヲ注意セネバナラナイ。

1) 缺測又ハ或ル高度デ入雲ノタメ観測中止スル場合ノ中ニハ不連続面ノ發達シタ場合ガ多ク含マレテ居テ、此等ノ場合ヲ考慮スル風向風速ノ變化ハモウ少シ著シイモノデハナカラウカ。

2) 比較的大キイ高度デ視力外トシテ観測中止スル場合ノ中ニハ高度ニヨル風速變化ガ普通ノモノノ他ニ特ニ高空デ風速ノ大トナル場合ガアル筈デアル。即チ良ク高空迄観測サレテ居ル場合ハ逆ニ高度變化ガ少イ場合ガ比較的多イト考ヘネバナラナイ。故ニ高空ノ風速變化率ハ此等ノ成績ヨリ若干多イ筈デハナカラウカ。

3) 比較的高空迄見ラレル場合ノ中ニハ途中ニ不連続面ガアツテ氣球ガ側行逆行スルニ依ル場合ガ含マレテ居ル筈デ、此等ノ場合ヲ考ヘルト風速變化ノ尋常ナ場合デモ風向變化ガ著シク現レテ居ル場合ガアツテ、之ハ(1)ト相反スル現象デアル。經驗的ニハ(1)ノ場合ノ方ガ多イノデ、從ツテ高度ト風向風速ノ變化ノ割合ハ此等ノ成績デ見ルヨリモ稍々著シイノガ實際デアラウ。之ハ將來 Sonde-Tracking ノ發達ニ依ツテ決定サルベキ問題デアル。

上ノ成績デハ風速變化ト風向變化ノ關聯ヲ省略シテアル。實際求メク成績デハ此ニ關シ特ニ認メ得ル關聯ハナカツタカラデアル。

& 36

地上附近デハ空氣ノ抵抗ノ爲ニ傾度風ト風向及風速ガ異ツテ居ル。此ノ場合ノ式ヲ省略シテ、上ノ成績カラ地上風ト傾度風ノ關係ヲ求メテ見ヤウ。傾度風ヲ V_G 、地上風ヲ V_S トスルト

$$V_S = V_G(\cos \alpha - \sin \alpha)$$

ナル關係ガ導カレル。今上記ノ成績デ 1000m ノ風ハ既ニ傾度風ニ達シテ居ルト考ヘルト、 α ノ平均ハ 37.95° デアル。

之ハ傾度風ニ對シテ左側カラ吹クノデ正ノ記號ヲ取ル。即チ

$$\alpha = +38^\circ$$

$$\text{又 } V_S = V_G(\cos \alpha - \sin \alpha) \quad \text{カラ}$$

$$V_S = V_G \times 0.172$$

又風速ノ實測値ハ $V_S = V_G \times 0.49$ デアツテ、之ハ

$$\alpha' = +25.7^\circ$$

ニ相當シテ居ル。此等ハ實際ハ風速ト一定ノ關係ガアル筈デアルガ、上記ノ様ニ此ノ僅ナ調査デハ見出サナカツタ。

今傾度風向ニ達スル高度ヲ H_1 トスルト

$$\tan BH_1 = \tan \left(\alpha - \frac{\pi}{4} \right)$$

$\alpha > 0$ デ $\frac{\pi}{4}$ ヨリ小サイカラ之ヲ満足スル最小ノ値ハ

$$BH_1 = \frac{3}{4}\pi + \alpha$$

$$(B^2 = \frac{\omega \sigma \sin \lambda}{\mu})$$

實際ハ此ハ渦動粘性係數 μ/σ ヲ求メル式デアアルガ、假ニ之ヲ 50×10^3 (c. g. s)

(Taylor) トスルト、 $B \approx 3.21 \times 10^{-5}$ トナル。故ニ

$$3.21 \times 10^{-5} H_1 = \frac{3}{4}\pi + \alpha \text{ (or } \alpha') = 2.35 + 0.66 \text{ (or } 0.45)$$

$$\therefore H_1 = 0.938 \text{ (or } 0.872) \times 10^3 \text{ m}$$

又傾度風速ニ達スル高度ヲ H_2 トスルト、

$$e^{-BH_2} = \frac{(1 + \tan \alpha) \cos BH_2 - (1 - \tan \alpha) \sin BH_2}{\tan \alpha}$$

デ與ヘラレル。 $BH_1 = 3.01$ (or 2.80) ヲ取ルト $H_2 = 0.403$ (or 0.399) $\times 10^3$ m ヲ得ル。故ニ Taylor

値ヲ取ルト H_1 トシテ 1000 ヲ用ヒテ得タ α ノ方ガ、 H_2 トシテ 1000 m ヲ用ヒテ得タ α' ヲリモ現

的デハナイカト思ハレル。

& 37

前記ノ風速ノ變化率ヲ從來ノ式ト比較シテ見ル。

對流圈內デハ風速ニ對シテエニユル氏法則ガ略々成立スルト云ハレテ居ル。

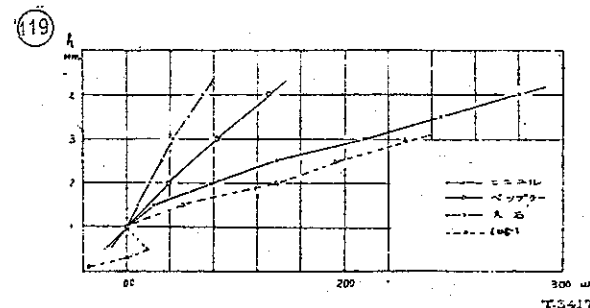
$h=1000$ ノ空氣密度ヲ標準トスレバ各高度ノ風速率ハ次ノ様デアルト云フコトニナル。

h	w	h	w
500	95.2	2500	116.1
1000	100.0	3000	121.2
1500	105.0	3500	128.7
2000	110.5	4000	135.6

又館野ノ1923~4年ノ成績(W_2)及ビベツブラー氏(W_3)ニ依ルト次ノ様ニナル。

h	w_2	w_3	h	w_2	w_3
500	92	—	2500	169	—
1000	100	100	3000	209	142
1500	113	—	3500	244	—
2000	139	119	4000	280	165

此等ト前記ノ成績ヲ比ベルト次圖ノ様デアアル。大體ニ於テ館野ニ於ケル値ト似テ居ルガ、500
邊リノ平均ノ方ガ 1000 m ヲリモ大キイノガ奇異デアアル。

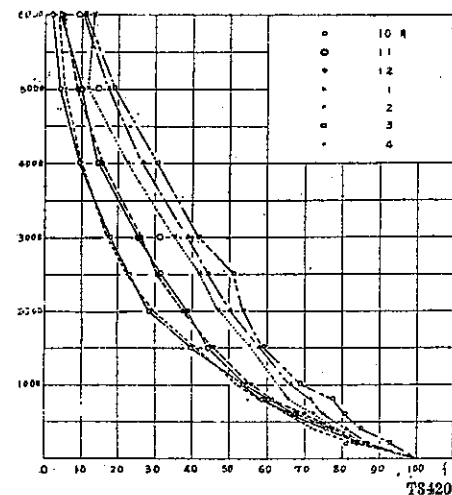
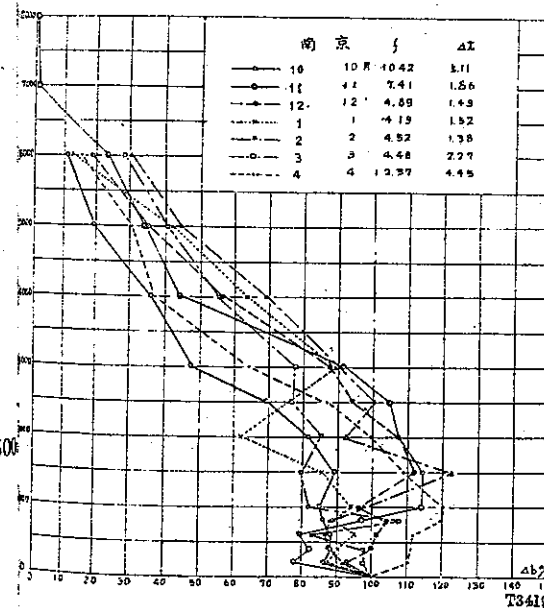
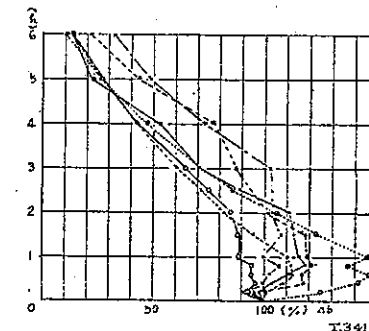
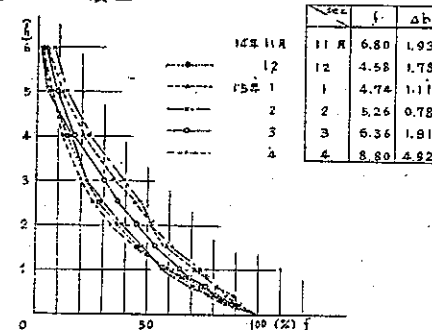


& 38

次ニ飽差ニ關スル調査ヲ掲ゲル。前ノ滴粒ノ蒸發ノ場合ニハ關係溫度ノ高度變化ガ少イモノトシテ蒸氣張力ノ式ニ Hann ノモノヲ用ヒテ $f_h = f_0 \times 10^{-\frac{h}{6800}}$ ト置イタ。此處デハ中支ノ高層氣象觀測ノ結果ヲ用ヒル。前ニ述ベタ通り蒸發ヲ決定スル因子ハ飽差デアアルノデ、蒸氣張力ノ他ニ地上飽差ヲ求メ、何レモ地上値ヲ 100 ト置イテ之ノ高度變化率ヲ求メタ。之ガ詳細ハ航空班研究月報ニ譲リ次ニ成績ヲ擧ゲル。

(120)

漢口



& 39

自由大氣中ノ溫度ノ變化ニ就テ從來ノ統計ヲ参照スルト次ノ様ニ概ネ $\alpha=0.55$ ト考ヘテ置イ
モヨイ様デアル。シカシ之ハ年變化ヲ示シ場所ニ依ツテモ異ルノデ高層氣象觀測値ヲ更ニ集メ
此ノ附近ニ就テ算出シタイト考ヘテ居ル。

(122) $\alpha (-^{\circ}) / \text{Km}$

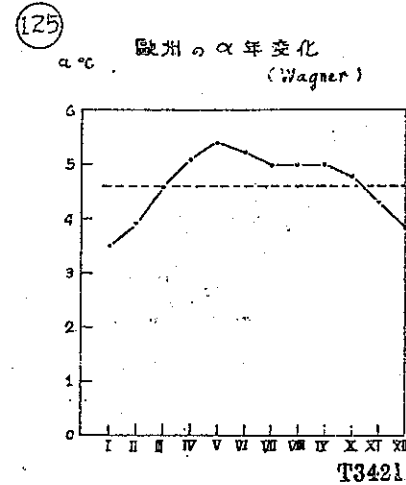
Km	ベルリン	ハノー	ウー	ハノー	ミ	ハノー
0~1	3.3	2.2	3.4	3.9	3.9	6.1
1~2	5.1	4.0	4.6	4.6	5.6	5.8
2~3	4.8	4.7	5.4	5.4	5.9	4.4
3~4	5.9	5.5	5.7	5.6	6.3	6.3
4~5	6.0	6.2	6.3	5.9	6.7	5.4

T3987

(124)

Km	ハノー $52^{\circ}20'E, 48^{\circ}50'N$	ハノーセル(北) $40^{\circ}N$
0~1	2.1 1.7 2.7 1.6 2.2	1.0 6.0 3.5
1~2	3.3 6.0 5.0 4.1 4.6	2.0 6.0 4.0
2~3	4.5 4.8 5.1 4.5 4.7	4.0 6.0 3.0
3~4	5.4 5.6 6.1 5.3 5.4	5.5 6.5 6.0

T3940



(123)

ベネチス	13°44'E	55°36'N											
Km	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	年
0~1	1.9	2.1	3.8	6.1	5.3	7.2	6.9	6.9	5.3	3.2	2.1	2.5	4.53
1~2	3.1	3.6	4.3	5.2	5.8	5.8	5.5	4.6	5.2	3.6	3.0	4.04	
2~3	5.7	4.2	3.9	3.8	5.4	4.5	4.5	5.1	4.8	3.2	4.0	4.2	4.44

T3988

& 40

攻撃ノ成果ヲ擧ゲル第一歩ハ目標地區ヘノ命中デアル。元來雨下撒布ニ對スル否定的批判ノ主
要部分ハ雨下氣象判定ノ困難ニ基ク命中精度ノ不良ト云フ點デアル。現在吾人モ敢テ此ヲ否定ス
ルモノデハナイガ、如何ニセバ精度ヲ向上シ得ルカガ吾人ニ與ヘラレタ命課デナケレバナラナイ。
然レ作ラ此ノ問題ハ極メテ重且大デアツテ、吾人ノ今尙最大ノ努力ヲ以テ歩々研鑽ニ努メツツア
ルモノデアル。從ツテ現在ハ此ノ方面ニ對シテ所謂『勘』ヲ用フル事ガ極メテ多ク、經驗ガ最高
ノ要素トナツテ居ル憾ガアルガ、此處ニ現在ノ吾人ノ研究ノ方向ヲ僅カ作ラ述ベテ將來ノ參考
トシタイ。

& 41

飽差積分ノ及ボス影響即チ蒸發ハ小サイ粒ニハ徹底的ニ作用スルガ比較的大キイ粒ヘノ作用ハ
輕ク此ノ限界ハ積分ノ値ニ依ツテ明瞭デアル。蒸發ニ依ツテ起ル流下量ノ増加ハ Δb 及風速ノ
各分布ニ依ツテ異リ、又比較的低空ノ風ガ影響ヲ多ク及ボスノデアル。今假ニ落達時ノ大サガ推
定シ得ルモノト考ヘ、此ノ大サト初期ノ大サトノ平均大ノ粒子ガ蒸發ナシニ移動シタト考ヘルト、
前ニ述ベク地上滴野ノ濃度計算ヲ再ビ應用シテ次ノ様ニ關係ヲ得ル。

(126) W の C , ($W_0 = 10$)

λ or r	r	$S(r=0)$	$S(r=200, p_0=10)$	$S(r=100, p_0=10)$	$\delta r=0$ の δS	$\delta r=0$ の δS
1.4	1.35	6618	6652	6661	-0.51%	+0.13%
1.3	1.25	6858	6878	6882	-0.62%	+0.06%
1.2	1.15	7079	7154	7129	-2.73%	+0.67%
1.1	1.04	7356	7429	7454	-0.38%	+0.33%
1.0	0.93	7681	7781	7810	-1.28%	+0.37%
0.9	0.82	8097	8244	8301	-1.78%	+0.69%
0.8	0.70	8598	8814	8934	-2.45%	+1.36%
0.7	0.58	9267	9609	9772	-3.56%	+1.70%
0.6	0.45	10110	10749	10997	-5.87%	+1.55%
0.5	0.27	11249	12775	13389	-11.95%	+4.21%
0.4	0.19	13020	17602	18401	-26.03%	+6.82%
0.3	0.14	16401	27789	28597	-41.90%	+10.41%

T3983

(127) $W = C = 10$

λ or r	r	$S(r=0)$	$S(r=200, p_0=10)$	$S(r=100, p_0=10)$	$\delta r=0$ の δS	$\delta r=0$ の δS
1.4	1.35	5420	5437	5455	-0.51%	+0.33%
1.3	1.25	5595	5612	5635	-0.59%	+0.52%
1.2	1.15	5795	5831	5841	-0.67%	+0.17%
1.1	1.04	6025	6096	6106	-1.15%	+0.16%
1.0	0.93	6285	6376	6387	-1.43%	+0.09%
0.9	0.82	6625	6775	6793	-1.93%	+0.16%
0.8	0.70	7045	7280	7315	-3.24%	+0.48%
0.7	0.58	7585	7960	7999	-5.71%	+0.54%
0.6	0.45	8275	8715	8723	-5.70%	+1.64%
0.5	0.27	9260	10605	10742	-13.05%	+3.18%
0.4	0.19	10665	14762	15430	-27.79%	+9.02%
0.3	0.14	13430	23411	24630	-42.61%	+20.41%

T3984

最大濃度地帯ヲ形成スル粒ノ径ガ大キイモノデハ蒸發ニ依ル流下距離ノ影響ハ少イガ、徑ナルニ從ツテ殊ニ下層ノ風速ノ大キイ程著シク、此ノ場合ニハ飽差積分ヲ考慮スル必要ガ多アル。飽差積分ソノ物ハ流下距離ニ絶對的影響ヲ與ヘルノデハナクテ、風速ト飽差ノ相關ガ重ナノデアルカラ、一々其ノ場合ニ應ジテ之ヲ判定スル事ハ不可能ニ近イ。然シテ流下距離モ別ニ述ベル様ニ精確ニハ求メ得ナイモノデアルカラ、飽差積分ハ單ニ近似的ニ無限大ノ流下起ス粒ノ大サヲ判定スルニ有用ナ程度デアル。斯ル考カラ云ヘバ總テノ大サノ粒ガ落達ニ至ルニ依ツテ縮小シタ徑ト原徑トノ平均徑ヲ以テ蒸發スル事ナシニ流下スルモノト想定シタ方ガ善デアル。之ニ依ツテ蒸發ノ影響ニヨル流下距離ノ誤差ヲ或ル程度減少セシメ得ル。

或ル任意ノ落達距離ニ於ケル飽差積分ヲ事前ニ判定スル事ハ容易ナモノデハナイガ、吾人處ニ氣團ノ性狀ヲ導入スル。氣團ニ關スル調査ハ今後益々發展スルト考ヘラレルガ、少クモニ於テサヘ各地ノ高層氣象觀測ノ結果ニ基イテ當時ノ氣團ノ解析ハ必ズ試ミラレテ居ルノデ、ヲ利用スル事ハサシテ困難デハナイト考ヘル。

氣團ノ性狀ノ中デ吾人ノ着眼スルノハ所謂比濕ガ變化セズ相當恒一ニ保タレト云フ點ル。從ツテ吾人ハ之ヲ飽差判定ニ取入レヤウ。

今或ル氣團ニ於テ比濕 S ガ決定セラレトスル。(此ノ方法ハ一般氣象學ニ詳デアル。)

$$\text{然ル時ハ } S = \frac{0.623f}{B - 0.377f} \quad (\text{g/kg}) \quad \text{ヨリ}$$

$$f = \frac{SB}{623 + 0.377S}$$

水蒸氣最大張力ノ式トシテ Magnus = 依レバ

$$F = 4.58 \times 10^{\frac{7.53t}{235+t}}$$

S ノ誤差ノ程度ヲ考ヘテ t ヲ 235 = 比シ小サイト見做シ、

$$F = 4.58 \times 10^{0.0293t}$$

今當時ノ氣溫遞減率 γ ヲ想定スルト

$$t = t_0 + \gamma h$$

$$\therefore F = 4.58 \times 10^{0.0293t_0} \times 10^{0.0293\gamma h}$$

又 Laplace 式ノ濕度項ヲ省略スルト

$$B = B_0 \times 10^{-0.544 \times 10^{-4} h} \left(1 + \frac{t'}{273}\right)^{-1} \quad (2t' = t_0 + t)$$

前ト同様 $1 = \text{比シ } t'/273 \text{ ヲ省略スルト}$

$$B = B_0 \times 10^{-0.544 \times 10^{-4} h};$$

從ツテ高度 $h (=1000H)$ ニ於ル飽差 Δb ハ

$$\Delta b = 4.58 \times 10^{0.0293t_0} \times 10^{0.0293\gamma h} - \frac{S}{623 + 0.377S} B_0 \times 10^{-0.544 \times 10^{-4} h}$$

今 $0.377S$ ヲ 623 = 比ベテ省略スルト

$$\Delta b = 4.58 \times 10^{0.0293t_0} \times 10^{0.0293\gamma h} - \frac{S}{623} \times B_0 \times 10^{-0.544 \times 10^{-4} h}$$

從ツテ h カラ落達迄ノ飽差積分 I ハ、

$$\begin{aligned} I &= \int_0^h \Delta b \, dh \\ &= 4.58 \times 10^{0.0293t_0} \int_0^h 10^{0.0293\gamma h} \, dh - \frac{S}{623} B_0 \int_0^h 10^{0.544 \times 10^{-4} h} \, dh \\ &= 6.79 \times \frac{1}{\gamma} \times 10^{0.0293t_0} [10^{0.0293\gamma h} - 1] + \frac{S}{623} \times 0.80 \times 10.4 B_0 [10^{0.544 \times 10^{-4} h} - 1] \end{aligned}$$

然ルニ B_0 ヲ 760 ト見做シテモ前ト同程度ノ誤差ヲ生ズルニ過ギナイカラ

$$I = 6.79 \times \frac{1}{\gamma} \times 10^{0.0293t_0} [10^{0.0293\gamma h} - 1] - 0.978S \times 10^4 [1 - 10^{0.544 \times 10^{-4} h}]$$

積分中第 1 項ハ最大張力成分デアツテ、一定高度デハ γ ト t_0 即チ t ノ函數デアリ、第 2 項ハ現在張力成分デ S ノ函數デアル。今例ヘバ $\gamma = -0.005$ トスルト

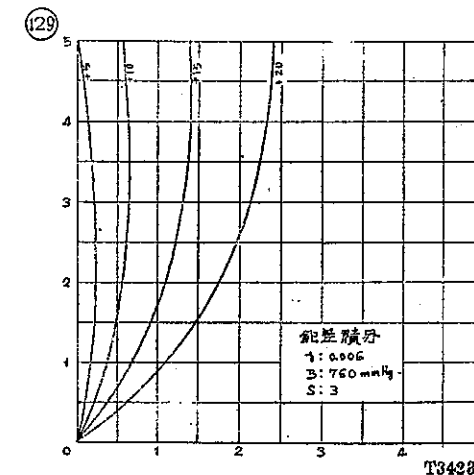
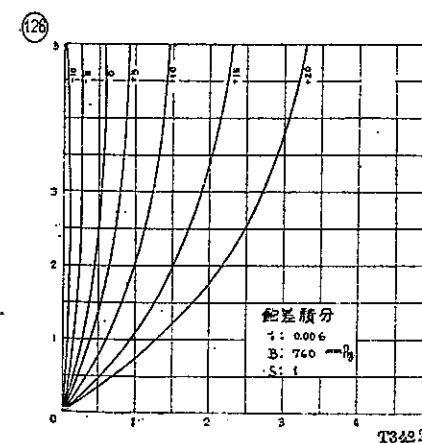
$$I = \{1.36 \times 10^{0.0293t_0} [1 - 10^{-0.1465H}] - 0.978S [1 - 10^{0.544 \times 10^{-4} h}]\} \times 10^4$$

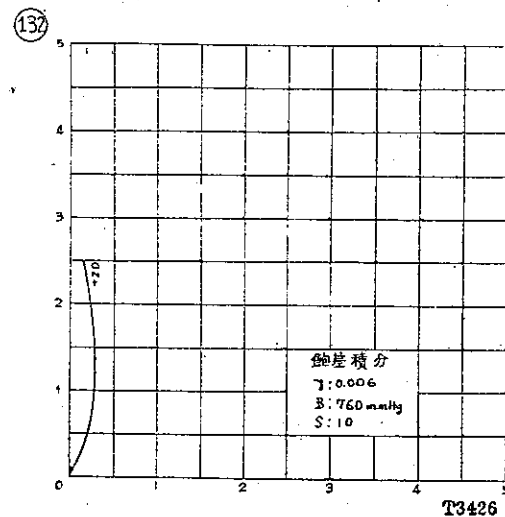
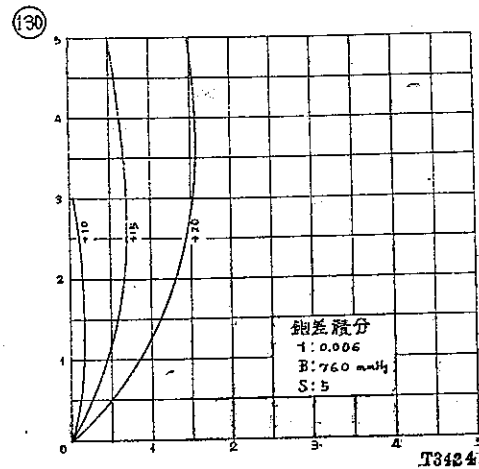
デアル。 $t_0 = 15^\circ\text{C}$; $H = 4.0$; $S = 5.0$ トスルト $I = 2.05 \times 10^4$ ヲ得ル。今 S 及 t_0 ノ各値ニ就テ各高度ノ I ヲ求メルト次圖ノ様ニナル。ステ求メタ I ヨリ前記『滴粒ノ蒸發』ノ項ニ記シタ $\phi(r)$ ヲ利用シテ落達時ノ r_t ヲ求メ得ル。

二ツノ氣團ノ重疊セル場合ニハ其ノ不連續面ノ高さ (h) ガ判レバ

$$I = I_h^I - I_{(h)}^I + I_{(h)}^{II}$$

ニヨツテ I ヲ求メ得ル。





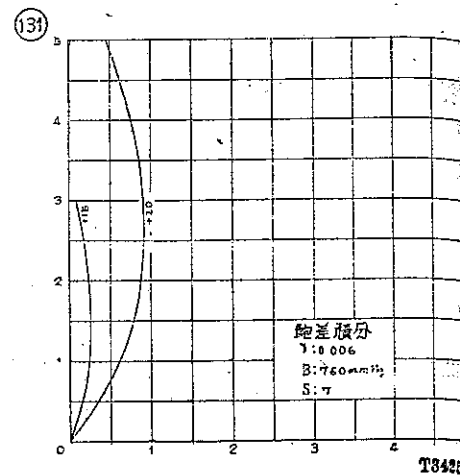
組合セテ想定シテ其ノ場合 $v_h = v_0$ トシタ爲ニ生ズル誤差ヲ考ヘテ見ヤウ。

1) $w = \text{const}$ ノ場合

$$S = - \int_0^h w_c \times \frac{1}{v} dh$$

$$= - \frac{w_c}{v_0} \int_0^h \left(\frac{\sigma}{\sigma_0} \right)^{\frac{1}{2}} dh$$

空氣密度トシテ標準大氣ニ依ルト



& 42

粒子ノ落速ハ各高度ニ於テ異ルタメ流下距離ハ各高度ノ風速ノ分布ニ支配セラレル。實際問題トシテハ各高度ノ風速ノ分布ヲ詳ニ知ル事ハ困難デアツテ其ノ總和ガ判定サレルニ過ギナイノデ、流下距離ヲ精確ニ知ル事ハ出来ナイ。從ツテ或ル基準落速ヲ定メテ之ニ依ツテ流下距離ヲ求メル事ニナルガ、此ノ場合ニ生ズル誤差ノ程度ヲ承知スル必要ガアル。

粒子ノ落速ハ空氣密度ノ $\frac{1}{2}$ 乗ニ逆比例シテ來ル。即チ $v_h = v_0 \times \left(\frac{\sigma_0}{\sigma} \right)^{\frac{1}{2}}$ デアル。故ニ流下距離ハ $S = - \sum w_h \times \frac{1}{v_h} \delta h$ デ表ハサル。此ノ時 $v_h = v_0$ ト見做スト、

$S' = - \frac{1}{v_0} \sum w_h \delta h$ トナル。次ニ w_h ノ簡單ナ

$$S = \frac{w_c}{v_0} \int_0^h (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{2.126} dh$$

$$= \frac{w_c}{v_0} \times 1.40 \times \{1 - (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{2.126}\} \times 10^4$$

$$S' = \frac{w_c}{v_0} \int_0^h dh$$

$$= \frac{w_c}{v_0} h$$

故ニ $S'/S = h / [1.40 \times \{1 - (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{2.126}\} \times 10^4]$

之ハ次ノ様ニナル。

h	S'/S
500	1.03
1000	1.03
1500	1.04
2000	1.04
2500	1.07
3000	1.09
3500	1.10
4000	1.11
4500	1.13
5000	1.14

2) $w_h = w_0 \times \frac{\sigma_0}{\sigma_h}$ ノ場合

$$S = \frac{w_0}{v_0} \int_0^h (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-2.126} dh$$

$$= \frac{w_0}{v_0} \times 3.93 \times \{(1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-1.126} - 1\} \times 10^4$$

$$S' = \frac{w_0}{v_0} \int_0^h (1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-4.253} dh$$

$$= \frac{w_0}{v_0} \times 1.36 \times \{(1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-3.253} - 1\} \times 10^4$$

$$S'/S = 0.346 \times \frac{(1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-3.253} - 1}{(1 - 0.226 \times 10^{-4} h)^{-1.126} - 1}$$

h	S'/S
500	0.96
1000	0.94
1500	0.93
2000	0.94
2500	1.00
3000	1.03
3500	1.04
4000	1.05
4500	1.06
5000	1.10

3) $w_h = w_0 \times \left(\frac{\sigma_0}{\sigma_h}\right)^2$ の場合

$$S = \frac{w_0}{v_0} \int_0^h (1 - 0.226 \times 10^{-4}h)^{-6.379} dh$$

$$= \frac{w_0}{v_0} \times 7.53 \times \{(1 - 0.226 \times 10^{-4}h)^{-5.379} - 1\} \times 10^4$$

$$S' = \frac{w_0}{v_0} \int_0^h (1 - 0.226 \times 10^{-4}h)^{-8.506} dh$$

$$= \frac{w_0}{v_0} \times 5.90 \times \{(1 - 0.226 \times 10^{-4}h)^{-7.506} - 1\} \times 10^4$$

$$S'/S = 0.734 \times \frac{(1 - 0.226 \times 10^{-4}h)^{-7.506} - 1}{(1 - 0.226 \times 10^{-4}h)^{-5.379} - 1}$$

h	S'/S
500	1.06
1000	1.01
1500	1.04
2000	1.06
2500	1.08
3000	1.10
3500	1.11
4000	1.12
4500	1.15
5000	1.18

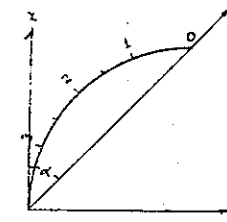
上ノ計算デ見ラレル様ニ誤差ノ率ハ風速分布ニ依ツテ異リ4000m デハ10%程度ニ達スル。又雨下高度ト地上ノ落速ノ平均値ヲ取ツテ考ヘルト此ノ率ハ餘程減ジテ來ル。

h	S''/S(1)	S''/S(2)	S''/S(3)
500	1.02	0.95	1.05
1000	1.01	0.92	0.99
1500	1.00	0.90	1.00
2000	0.99	0.90	1.01
2500	1.00	0.94	1.01
3000	1.01	0.95	1.02
3500	1.01	0.95	1.01
4000	1.00	0.95	1.01
4500	1.00	0.94	1.02
5000	1.00	0.96	1.03

然シ乍ラ絶對ニ之ヲ排除スルノハ容易デハナイ。風速分布ガ明ナ時ハ高度風速ヲ空氣密度ノ $\frac{1}{2}$ 乗「スケール」デ表ハスト地上落速ヲ用ヒテ眞ノ流下距離ヲ求メル事ガ出來ルガ、一般ニハ不可能デアラウ。故ニ概シテ雨下高度ト地上ノ落速ノ平均ヲ考ヘル程度デ満足シナケレバナラナイ。然シ他方風力判定ノ誤差ヲ考ヘルト之デ充分デアルト云ヘルノデアル。

蒸發ノナイ時ニハ粒子ハ平均風ノ方向ニ排列サレル。蒸發ノアル場合ニハ高度ノ低イ所ノ風力ノ影響ガ大トナツテ、滴ノ排列ガ曲線的ニナツテ來ル事ガ考ヘラレル。前ノ地上滴野ノ濃度計算ニ用ヒタ想定ニ基イテ其ノ風力ヲ偏向サセタ時各大サノ粒ノ流下角（雨下高度風方向ト流下方向トノ爲ス角）ヲ計算シテ見ヤウ。風向ガ4000mカラ地上迄連續的ニ變化シテ結局90°ノ偏向ヲ示ス様ナ場合ヲ考ヘル。然ル時ハ計算ノ結果ハ次ノ様ニナリ蒸發ノ極メテ著シイ部分ノ他ハ此ノ偏差ヲ重要視スル必要ノナイ事ガ判ル。

(133)



r	Sx	Sy	α
1.4	4280	4170	44°19'
1.2	4600	4480	44°12'
1.0	5000	4890	44°24'
0.8	5640	5550	44°36'
0.6	6740	6620	44°27'
0.4	7770	8390	47°12'
0.4	9970	12200	50°48'
0.3	15900	19700	51°03'

T8427

& 43

實際ニ雨下ヲ行フ場合ニハ風力判定ガ最も重要ナ部分ヲ占メル。現在之ニ對シテ尙決定的ナ方法ハ存在シナイ。何レモ或ル程度ノ、時ニハ著明ノ誤差ヲ生ズルノデアル。然シ乍ラ演習場ニ於テ測風氣球ヲ以テ氣流ヲ測定シ乍ラ行フ場合ニ於テモ時ニ相當ナ誤差ヲ認メルノデアツテ、之ハ例ヘバ次ノ様ナ試験カラ結論スル事ガ出來ル。

氣球ヲ以テ風力ヲ測定シツツ、氣球ガ所望高度ノ約半バニ達シタ時ニ對空連絡ヲ行ツテ傘ヲ投下シ、傘ノ落速カラ割出シタ流下狀態ト風力ヲ比較スル。落速ノ高サニ依ル異同ニヨル誤差ヲ少クスル爲ニ高度ハ1000mトシ三點觀測ノ結果カラ投下地點ヲ決定スル。落速ハ測秒時計ニ依ツテ得タ落達時間ト高サカラ平均ノ値ヲ求メタ。之ハ即チ氣球ノ表ハス風力ヲ眞ナリト假定シ傘ニヨル風力決定ノ精度ヲ求メタモノデアアル。其ノ成績ノ一例ハ次ノ様デアツテ風向角最大偏差17.0°風速ノ最大偏差22%ニ及ブ。之ハ勿論傘ノミノ誤デアルトハ信ゼラレズ、氣球自身ノ側ニモ風力ノ表現ニ誤差ガアルモノデアラウ。然シテラ現在ハ尙此ノ何レナルカラ判別スル事ハ出來ナイ。

(134)

回	高度	傘名	風向角	傘ノ風向角 対風向角	風速	傘ノ風速 対風速	傘ノ風速 誤差率
2	870	代リ 風球	2885	-4.5	7.5	-0.5	-6.3
2	870	代ニ 風球	2875	-5.5	7.6	-0.4	-5.0
3	700	代ト 風球	2880	+8.0	8.2	-2.3	-2.19
5	840	代ニ 風球	2840	+3.0	8.9	+0.3	+3.5
14	900	代ニ 風球	2880	-9.5	8.6	-0.5	-5.5
14	500	代ニ 風球	2750	-0.0	7.0	-1.7	-12.5
11	930	代ニ 風球	2720	-15.5	8.2	-0.5	-5.7
12	980	代ニ 風球	2740	-17.0	9.0	+0.3	+3.4

T3985

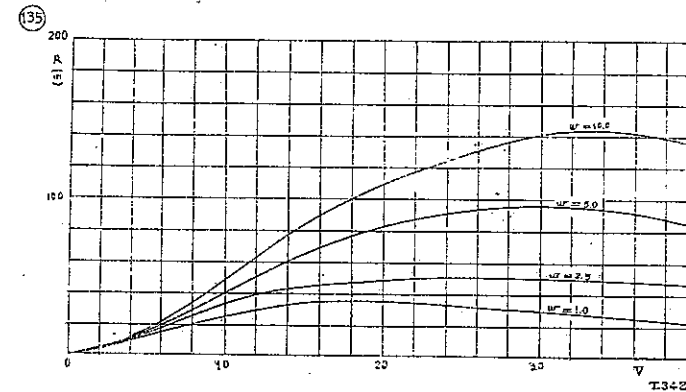
(昭14. 12)

結局現在ハ如何ナル方法ニ依ツテモ此ノ程度ノ誤差ヲ含ム可能性ノアル事ヲ承知セネバナラナイ。

現在ノ所デハ目標ノ附近ニ於テ傘ヲ投下シテ其ノ流下カラ合成風力ヲ判定スル方法ヲ標準トセネバナラナイ。(勿論他ノ要求カラ之ガ行ヒ得ラレヌ場合モアル。)此ノ時ニハ傘ノ投下ト雨下地點ノ地理的及時間的關係カラ種々程度ノ誤差ヲ生ズルノハ避ケラレナイ。

之ヲ度外視シテ傘ニ依ル風力判定ヲ考察シテ見ヤウ。

傘ノ落下ニ際シテハ重力ノ主要作働點ハ重錘デアリ、抵抗カノ作働點ハ傘體デアアル。垂直落下ニ際シテハ此ノ二カガ垂直線上ニ在ツテ粒子ノ落下ヲ模倣シ得ルガ、一般ニハ傘ノ旋廻運動ト空氣ノ傘後渦流ノ結果トシテ傘ノ落下運動ハ複雑トナツテ來ル。傘ノ運動ノ理論的解釋ハ從來行ハレテ居ラズ、吾人ノ目的ニ對シ殆ド應用シ得ルモノハ無イ。實際ニ使用スル場合ハ傘ノ落速ノ小サイ程上空デ待期スル時間ガ長クナリ危險デアアル。他方落速ヲ大トスレバ風力ノ表現精度ヲ不良トスルノデ、或ル限度ガ存在スル譯デアアル。此ノ表現精度ニ關シテハ簡單ニ傘ノ終末速度 V ヲ想定シテ粒子ノ自然擴散ニ於テ述べタト同様ニシテ解ク事ガ出來ル。之ノ考デハ最大濃度地帯ヲ與ヘル粒子ト同ジ落速ヲ有スルモノハ同ジ運動ヲ呈スルノデ之ノ大サノ傘ヲ用ヒルノガ理想的トナルガ、現實ハ之デハ觀測時間ガ過大トナル事トナル。今 V ニ種々値ヲ與ヘ風速 w ノ異ル高度層ヲ1000m落下スル中ニ生ズル移動ノ後レ R ヲ計算シテミルト次ノ様デアアル。



又終末速度ノ大キイ傘ハ投下後飛行機ノ速サノ影響ノ實際的ニ消失スル迄ノ時間ガ大キクナリ此ノ方面カラモ誤差ガ加ハル。理想的ニハ投下後直ニ前進ヲ停止スルモノヲ望ム譯デアアルガ、簡單ニ考ヘテ水平方向ノ移動グケヲ問題ニスルト投下後 t 秒内ニ傘ハ

$$S = \frac{V^2}{g} \log \left(\frac{g \times V_F t + 1}{V} \right)$$

移動スル。(V_Fハ投下機ノ對氣速度) 此ノ間ノ落高ハ

$$\eta = -\frac{V^2}{g} \log \cosh \left(\frac{g}{V} t \right)$$

デアアル。飛行方向ト平均風方向ノナス角ヲ α トスルト、之ニ依ル誤差ノ大サハ風ノ方向及ビ之ニ直角ノ方向ニ其 $\times S \cos \alpha$ 及 $S \sin \alpha$ トナル。 $\alpha=0$ ノ場合ニ於テハ此ノ間ニ流下スベキ距離ハ $w \times t$ デアアルノデ誤差率ハ $S / (w \times t)$ デ、投下高度ガ H デアレバ $H = \left| \eta \right| = -\frac{V^2}{g} \log \cosh \left(\frac{g}{V} t \right)$ デアリ、理想的ニハ之ヲ通過スルニ要スル時間ハ H/V デアアルカラ、誤差率ハ

$$E = \frac{S \times V}{wH}$$

デアハサレル。(Sハ $\frac{V^2}{g} \log \cosh \left(\frac{g}{V} t \right) = H$ ヲ満足スル t 對スルモノデアアル。)

今 $V_F=80$ トシ $H=1000$ トスルト E ハ次ノ様ニナル。

V	5	10	15	20
E	0.0132	0.0235	0.286	0.616

即チ斯様ナ場合ニハ $V > 10$ ノモノハ用ヒ難イ。實際上ノ經驗デハ高度ガ1000m程度デハ $V=5$ 程度ノモノモ充分觀測シ得ルガ、4000m程度ニナルト $V=10$ デモ7分位空中デ旋廻シテ期待セネバナラズ、之以下ノ落速ノモノヲ使用スルノハ不可デアアル。觀測時ハ所望高度デ投傘シ爾後若干高度ヲ低下シテ傘ノ落達ヲ待テ後投傘點カラ落傘點ヘノ方位ト距離ヲ測定スルノデアアルガ、此ノ間傘體ノミヲ觀測スルトナルト傘ノ半径ガ2~4m程度(3000m觀測)デナケレバナラス。而モ $V=10$ トスルニハ重錘ト傘徑トノ關係ハ次ノ様ニ推算サレル(抵抗係數ヲ1.0トス)

V=10	r _m	Mkg
	1.5	19.6
	2.0	78.5

斯カル重量ト大サハ傘體自身ニ依ル觀測ヲ斷念セシメル。從ツテ吾人ハ發煙傘ノ使用ニ傾キメ
ノデ、之ニヨレバ傘ノ大サデハナク發煙量ト其ノ持續時間ガ問題トナル。現在ハ東研デ特ニ試
シテ貰ツタ約5kgノ物ヲ用ヒテ居ルガ之デ充分目的ヲ達シテ居ル。(積雪時及霧雲ヲ通シテ落
サセル時ノタメ着色煙ノ物ヲ必要トスルガ現在出來テ居ナイ。)現在用ヒテ居ル物ハ發煙ニ依ル
量減少毎100秒5%ノ程度デ高度3000mニ於テ地上ノ發煙ヲ約4000m以內デ充分觀測シ得ル。此
ノ重量輕減ハ各高度殆ド一様デアツテ滴粒ノ蒸發ニハ比較シ得ナイ。

傘ニ依レバ豫定高度ヨリ地上迄ノ全風力ヲ測定シ得、又、地上風向及時ニハ風速ノ程度モ推定
シ得ルガ、之ノ方法ノ大ナル缺點ハ途中ノ風力分布ヲ全ク示サナイ事デアル。從ツテ雨下高度ガ
豫定高度ト異ル時ニハ傘ニ依ツテ得タ値ヲ單ニ高度ノミニ依ツテ修正スル時ニハ大キナ誤差ヲ
生ズル事ガアル。特ニ不連續續面ノ存在スル時ニ於テ然リトスル。從ツテ實際ノ場合ニハ投下高
度ヲ異ニシテ之ヲ繰返スカ、或ハ他ノ補助手段例ヘバ數高度層ノ風力ノ飛行速度ニ依ル測定ヲ併
用セネバナラナイ。

發煙點ト投下點トノ方位及距離ノ測定法ニ關シテハ省略スル。

& 44

數高度層ノ風力ヲ飛行速度ノ測定カラ求メテ風力分布ヲ決定スルノハ實際的ニモ屢ニ利用サレ
ル。此ノ場合地上風力ノ測定モ屢ニ參考ニ供サレルガ、特ニ注意セネバナラヌ事ハ渦動粘性係數
ガ風速ニ依ツテ異ル他ニ地形的ニモ大キナ影響ヲ受ケル事デアル。之ニ關スル一般考察ハ平均値
的ニ哈爾濱ニ於ル成績カラ既ニ論ジタガ、測定ニ豫猶ノ少イ場合之ガ有力ナ手懸トサレル事ハ勿
論デアル。之ノ地形的及氣壓溫度配置型トノ關係ハ更ニ研究サレネバナラヌ問題デアラウ。

& 45

以上述ベタ事カラ天氣圖ノ檢討ガ實際問題ニ上ツテ來ル。然シ乍ラ戰時ニ於ケル氣象管制ノ實
情ハ之ガ漠然ト考ヘラレル程容易デハナイ事ヲ示ス。又此ノ檢討ニ時間ヲ費シテ攻撃ノ好機ヲ逸
スルガ如キハ嚴ニ戒メネバナラヌ事デアル。斯カル問題ヲ別トシテ、單ニ天氣圖ヨリ大略ノ風ノ
狀態ヲ承知シ置ク事ガ極メテ有利デアルト云フ立場カラ、前ニ掲ゲタ傾度風ト溫度風ノ考ヲ利用
シテ見ヤウ。

座標軸トシテNトEヲ用ヒルト

$$u_0 = \frac{-1}{2\omega\sigma\sin\lambda} \frac{\partial p}{\partial N}$$

$$v_0 = \frac{1}{2\omega\sigma\sin\lambda} \frac{\partial p}{\partial N}$$

$$u = \left(1 + \frac{r}{T_0} z\right) u_0 - \frac{g}{2\omega\sin\lambda} \frac{1}{T_0} \frac{\partial T}{\partial N} \times z$$

$$v = \left(1 + \frac{r}{T_0} z\right) v_0 + \frac{g}{2\omega\sin\lambda} \frac{1}{T_0} \frac{\partial T}{\partial N} \times z$$

今落速Vナル粒ノZカラノ流下距離ハ

$$S = \int w \times \frac{dz}{V} \quad \text{トシテ}$$

$$-S_E = -\frac{u_0}{V} \left\{ z + \frac{r}{2T_0} z^2 \right\} - \frac{g}{2\omega\sin\lambda} \frac{1}{T_0} \frac{\partial T}{\partial N} \frac{z^2}{2}$$

$$\therefore S_E = \frac{1}{2\omega\sin\lambda} \times \frac{1}{V} \left\{ \frac{1}{\sigma} \frac{\partial p}{\partial N} \left(z + \frac{r}{2T_0} z^2 \right) + \frac{g}{2T_0} \frac{\partial T}{\partial N} z^2 \right\}$$

又

$$S_N = -\frac{1}{2\omega\sin\lambda} \times \frac{1}{V} \left\{ \frac{g}{2V_0} \frac{\partial T}{\partial N} z^2 - \frac{1}{\sigma} \frac{\partial p}{\partial N} \left(z + \frac{r}{2T_0} z^2 \right) \right\}$$

$$S = (S_E^2 + S_N^2)^{\frac{1}{2}}, \quad \alpha = \tan^{-1}(S_E/S_N)$$

デ與ヘラレル。

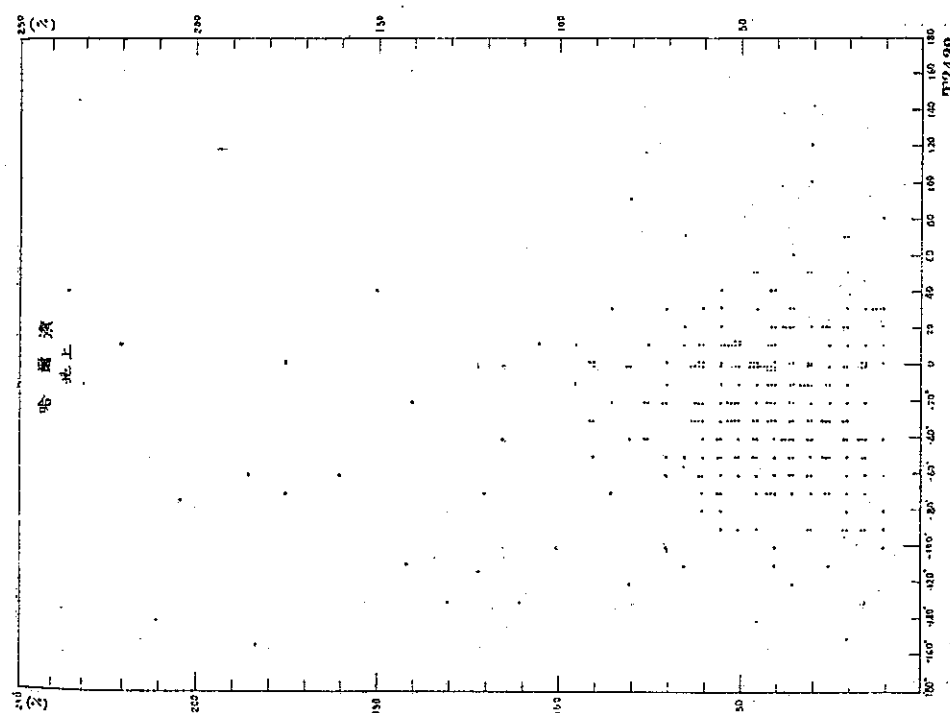
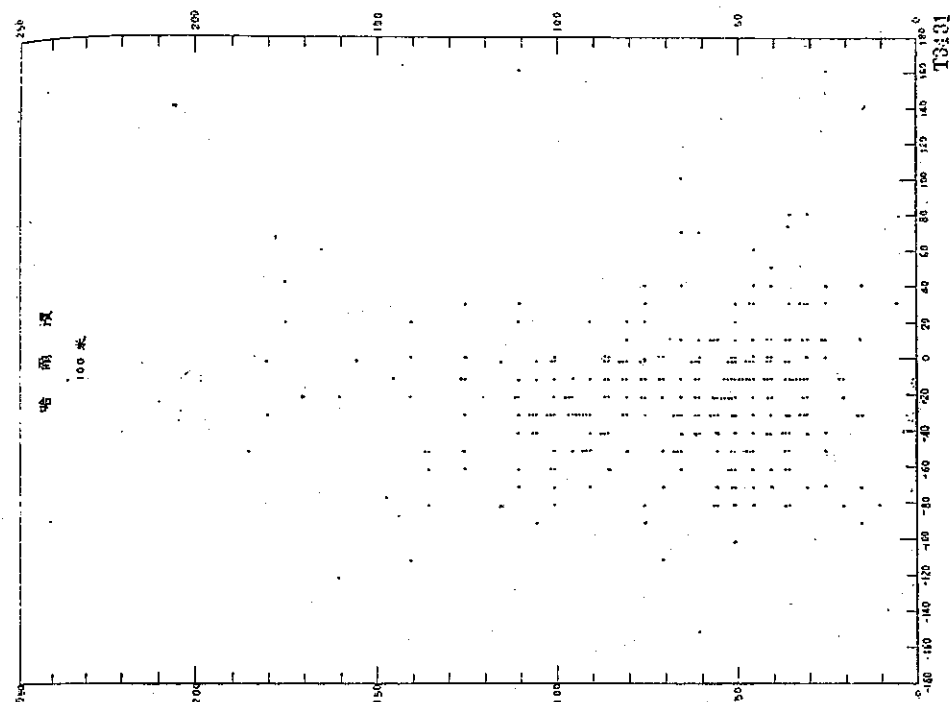
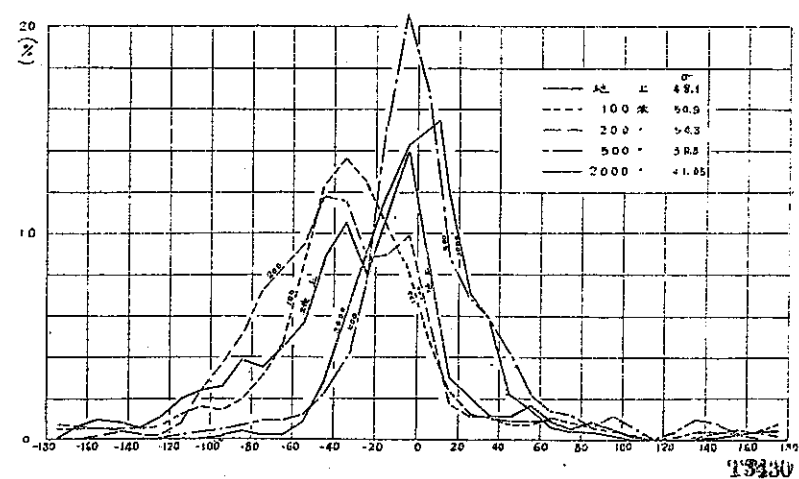
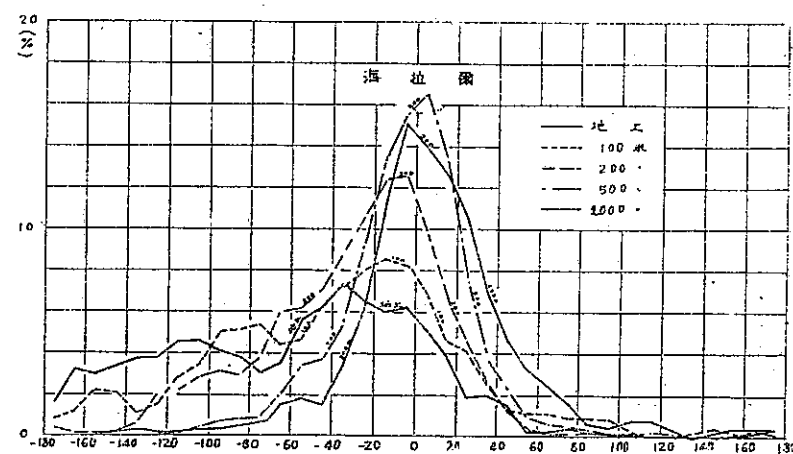
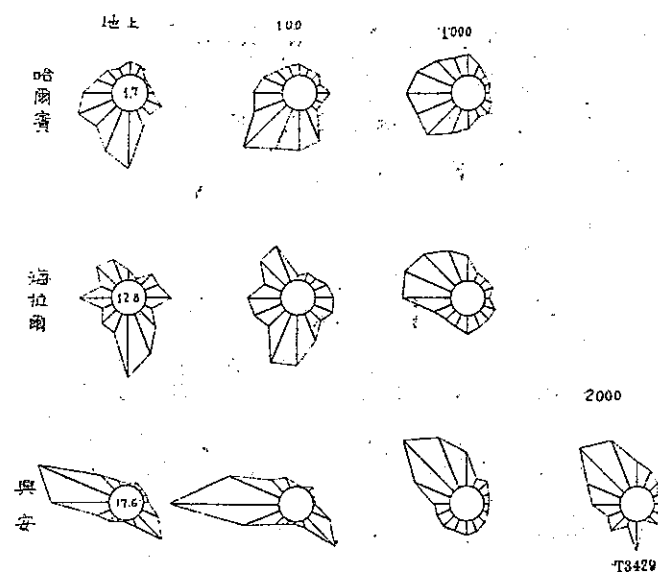
$$\text{例ヘバ } T_0: 288, \quad p_0: 760, \quad r=0.0057, \quad \frac{\partial p}{\partial N} = -2(/111\text{km}), \quad \frac{\partial p}{\partial E} = 1(/111\text{km}); \quad \frac{\partial T}{\partial N} = +2,$$

$$\frac{\partial T}{\partial N} = +2(/111\text{km}), \quad V=4.0; \quad \text{トスルト}$$

h	S _N	S _E	α	S
1000	-4497	-1877	247°	4850
2000	-6790	-1910	254°	7040
3000	-8020	-670	265°	8050
4000	-8000	+1980	284°	8240

之等ノ關係ハ實際ト比較シテ更ニ檢討サレネバナラナイ。

1938	年内八熟量%
風向	(1mm以上)



K 雨 下 器

& 43

雨下器(或ハ撒布器)ノ設計上特ニ困難ナノハ何レモ既成ノ機體ニ之ヲ適合セシメネバナラナイト云フ點デアル。蓋シ將來ニ於テモ雨下或ハ撒布攻撃用トシテ新ニ機體ヲ設計製作スル事ハ機體整備上モ極メテ不利デアルノデ、爆撃機又ハ襲撃機ニ對シテ必要ナ最少限度ノ改修ヲ施シテ用セネバナラナイ。勿論此等ノ飛行機ニ依ツテ尙充分ニ攻撃目的ヲ達成スル様ニ雨下(撒布)ノ方法ノ改良ガ行ハレネバナラスシ、又却ツテ此ノ方ガ合目的デアルト考ヘル。

從來雨下法ハ雨下彈ニ比シテ塔載量ノ點デ有利デアルト考ヘラレ來ツタ様デアル。然シ現在人ノ有スル次ノ様ナ數値ヲ擧ゲルト、此ノ問題ハ稍ミ制限シテ解スベキ事ガ判ル。

	九七重式二型	同左改二型	雨下彈
空 重 量	250K	370K	12K
塔 載 量	720 L	1300 L	28 L
有 效 率	74%	78%	70%

有利デアルノハ全塔載量デアル。例ヘバ九七式重爆撃機デハ雨下彈ニ依ツテ約 200 L デアル九七重式二型雨下器ニ依レバ 720 L トナル。然シ 攻撃距離ヲ問題トスル時ハ或ハ塔載量ヲ自由ニ變シ得ル雨下彈ノ型式ガ良イト考ヘラレル場合モ在リ得ル。即チ九七重式雨下器デハ充填液量ハ無關係ニ常ニ 250~370K ノ重量ヲ負荷サレテ居ル事ニナル故デアル。

雨下器ノ具備スベキ條件トシテハ次ノ様ナ事ガ考ヘラレル。

- 1) 流量比ヲ小トスル事。即チ單位時間内ノ流出液量ノ大キイ事。
- 2) 機體内外ノ汚染ヲ防グ事
- 2) 適當ニ消毒裝置ヲ附隨スル事
- 4) 操作ノ簡單且確實デアル事
- 5) 準備ニ要スル時間ノ短キ事
- 6) 有効率ノ大ナル事。即チ諸裝置ノ重量ノ少イ事。
- 6) 使用攻撃材料ニ依ル腐蝕ノ少イ事

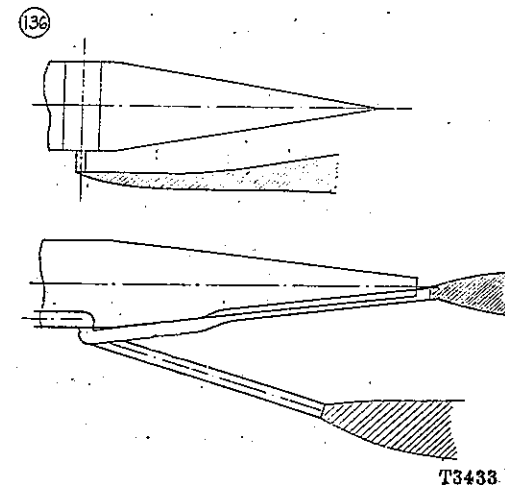
等ヲ擧ゲル事ガ出來ヤウ。之等ニ對シテハ、適當ニ動源ヲ選定シ之ヲ損失少ク使用シ、又排液ヲ適當ニシテ機體外ノ汚染ヲ防グト共ニ彈丸ニ依ル穿孔ニ對シ機體内汚染ヲ少クスル爲「防弾ム」被ノ裝着ヲ行ヒ、消毒裝置ハ排液後ノミナラズ液ヲ充填シタ儘之ヲ消毒シ得ル能力ヲ持タセバナラナイ。操作ノ簡單デアル事ハ極メテ肝要デ、之ハ準備時間ノ短縮ト相反スル事ヲ許サズ又之ガ爲裝置ノ重量ヲ大ニスル事ハ避ケネバナラスガ、少ク共 1 回ノ操作ニ依ツテ必要ニ機體順次自動的ニ作動シテユキ、然モ常ニ故障ノ容易ニ發見ト共ニ之ニ對シテ採ルベキ副操作手段設ケラレテ居ラネバナラナイ。腐蝕ヲ防グ事ハ現時ノ輕合金ヲ用ヒテモ加工塗料等ニ依ツテ其程度可能デアルガ、常ニ點檢ヲ嚴ニシ且部分品ノ交換モ簡單容易ニ行ハレル様ニ豫メ考慮シカネバナラナイ。

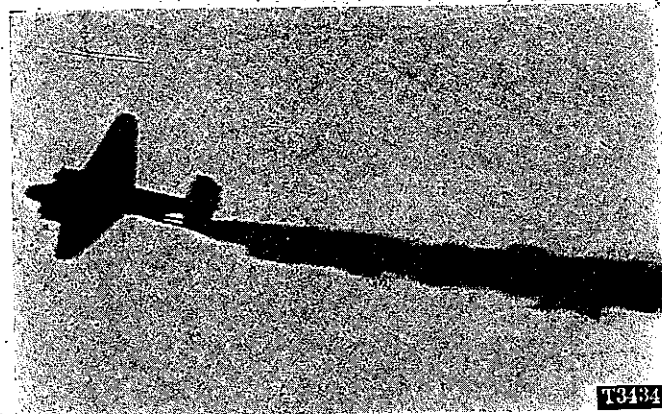
此等ノ諸點ニ關シテハ九七重式雨下器ノ説明ヲ行ヘバ明トナルト考ヘルガ、之ヲ此處ニ述ベルハ不適當デアルノデ別ニ、『九七重式二型及改二型雨下器説明書』ニ譲ル。

此處デハ雨下器ノ理學的方面ノ原理特ニ其ノ排液機構ニ關シテノミ僅ニ述ベル事トスル。

& 44

機體汚染セヌ爲ニ雨下器カラ排出管ヲ以テ通常ハ機體ニ直接接スル周邊氣流ノ外ニ雨下液ヲ導キ、排出管ノ大サハ機體ノ構造ト所要ノ液ノ設計ニ影響サレル事ノ方ガ多ク、普通ハ任意ニ選定シ得ルノデハナイ。後述ノ排液機構ニ明デアル通り液ノ流出量ハ此ノ管ノ斷面積ノ大サニ直接比例シテ來ルノデ、ナルベク之ヲ大キクスル事ガ希望サレル。勿論此處ニ云フ大サトハ排出管ノ最小斷面部位ニ於ケル値ヲ意味スル。機體ノ何ノ點デ之ト如何ニ距レバ機體汚染セズニ済ムカハ、直ニ決メル事ハ出來ナイ。之ハ更ニ排出管ノ大サト形狀ニモ關係シテ來ル。理想的ニ云ヘバ機體ニ近ク更ニ後方ヘ若干離レタ點デ排出スレバヨイケレドモ之ハ設計上困難デアリ、又水平飛行位ニ於テ排出管口ガ雨下器液槽最低位ヨリ少シデモ高イ事ハ必然的ニ排出管内ノ殘液ヲ來シ、機體ニ之ヲ避ケルタメ排出口ト液槽底ヲ少クモ同一高ナラシメルベク上舵ヲ取ツタ飛行位ヲ保タネバナラナクナル。之ヲ除クタメ雨下液槽底ヨリ高位ヲ通ル事ヲ避ケルト胴體下面カラ管ヲ外ヘ出シテ、操作時ニハ之ヲ垂下スル形ヲ執ル事トナル。此ノ時ノ管ノ長サト角度ハ何レモ經驗的ニ定メナレバナラナイ。時ニハ八八輕式デ見ル通り雨下口附近ニ小サナ遮風板ヲ附ケル事ニ依ツテ比較的容易ニ目的ヲ達シタ事モアル。





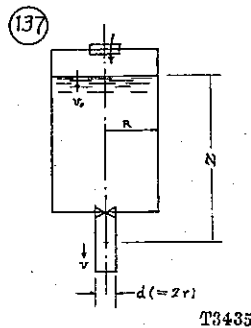
管内ノ亂流狀況ノ影響ハ尙不明デハアルケレドモ之ヲ可及的少クシ、又流出抵抗ヲ減少シ、爲メ排出管ノ屈曲ヘルナベク少ク、然モ緩徐ニシタイガ實際的ニ機體ニ適合サセル爲メ、ノ屈曲ハ止ムヲ得ナイ。唯之ニ依ツテ流量ガ相當犠牲ニナツテ居ル事ハ殆ド確實デアル。

& 45

次ニ雨下器ノ放出機構ニ關シテ考察シテ見ヤウ。從來考察セラレタ雨下器ニ於テハ放出ハ 1) 重力或ハ 2) 空氣壓力デアツタガ、將來ハ緩燃火藥類(液態空氣ヲモ含ム)ガ取入レデアラウ。

八八輕型雨下器ハ重力式デアル。此ノ特徴ハ雨下器液槽ノ垂直長ノ大キイ事デアル。此ノ機構ハ次ノ様デアル。

液槽液面ト流出液栓ノ間ノ平衡ヲ考ヘテ、次ノ式ガ成立スル。



$$v_0^2 + 2gz = C^2 v^2 \quad (C \geq 1)$$

$$\text{又 } R^2 v_0 = r^2 v; \text{ 然ルニ}$$

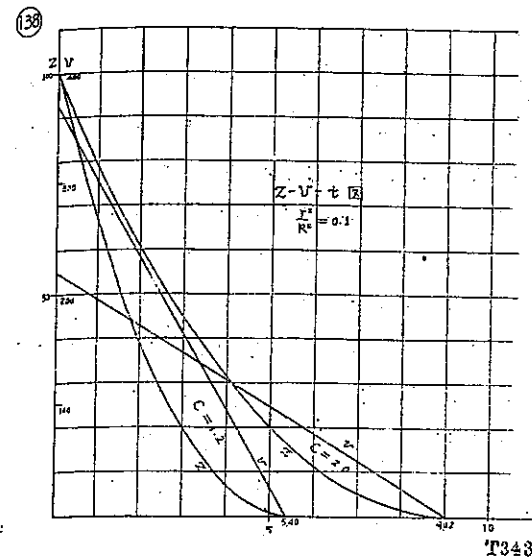
$$v_0 = -dz/dt,$$

$$\therefore (-dz/dt)^2 + 2gz = C^2 \frac{R^4}{r^4} (-dz/dt)^2,$$

$$\text{ie } (C^2 R^4 / r^4 - 1)^{1/2} \sqrt{2/g} (z_0^{1/2} - z^{1/2}) = t,$$

$$v = [2gz / (C^2 - a^2/A^2)]^{1/2}$$

今普通ニ設計セラレル程度ヲ採リ $R^2/r^2 = 10$ ト見做スト上ノ關係ハ次ノ圖ノ様ニナル。但シ $z_0 = 100\text{cm}$; $C = 1.20, 2.00$ トス。即チ v ハ t ニ對シ直線的ノ變化ヲナス。此ノ場合 v デハ流出部ノ最少斷面ヲ採ル。



重力式ノ雨下器デハ流出管ヲ大キクスル事ニ依ツテ流量比ヲ大トシ得ルガ、相對速度ノ點カラ云ヘバ雨下液槽ノ垂直長ニ依ツテ液ノ流速ガ定マルノデ、之ガ飛行機ノ機體ノ大サニ制限ヲ受ケル以上此ノ方式ニ依ル今後ノ發展ハ先ヅ望マレナイ。

八八輕式雨下器デハ飛行速度ノ空氣ヲ用ヒテ液ヲ整流スルト云フ事ガ考ヘラレテ居ル。之ハ液ヲ先ヅ低速ノ空氣ガ加速シ第1次ノ分裂ヲ起シテ後第2次ニ排出シテ高速ノ空氣流中ニ放出セントスルモノデアル。現在斯カル方面ニ關シ吾人

ハ何等ノ知識ヲ有シナイノデ斯カル考察ノ可否ニ就テハ將來ノ問題トスル。

他方飛行速度ノ空氣ヲ取入レテ液面ノ加壓ヲ計ル事ノ可能性如何ガ考ヘラレル。前項ノ計算デハ液面ト液ノ流出面トノ間ニ氣壓差ハナイト考ヘタノデアアルケレド、實際ハ飛行速度ノ空氣ノ動壓ガ流出面ニ關シテ考ヘラレルノデ、實際ニハ多少ノ壓差ヲ考ヘネバナラナイ。今空氣ガ最も有利ニ使用サレタ場合ヲ考ヘ、氣流ニヨル動壓ガ總テ有効壓トシテ用ヒラレタトシテ考ヘルト、

$$p + \frac{1}{2} \rho v^2 + \gamma z = \frac{1}{2} \rho C^2 v^2$$

今 p ヲ水頭デ示スト $z' = \frac{p}{\gamma}$ デアツテ、飛行速度ヲ V 空氣密度ヲ σ トスレバ、 $p = \frac{1}{2} \sigma V^2$ デアル。

從ツテ $p/\gamma = \frac{1}{2} \sigma V^2 \times \frac{1}{\gamma} = \frac{1}{2g} V^2 \sigma / \rho$ トナリ、 $\sigma/\rho = 0.0013$ トスルト z' ハ

$6.64 \times 10^{-6} V^2$ トナル。 V ヲ 8000cm ($=250\text{K}$) トスルト、此ノ値ハ約 4m ニ達スル。從ツテ之ヲ有利ニ用フレバ重力ニ對シテハ更ニ良キ動源トスル事ガ出來ル譯デアルガ、實際問題トシテハ此ノ4分ノ1程度モ得ル事ハ容易デハナイ。

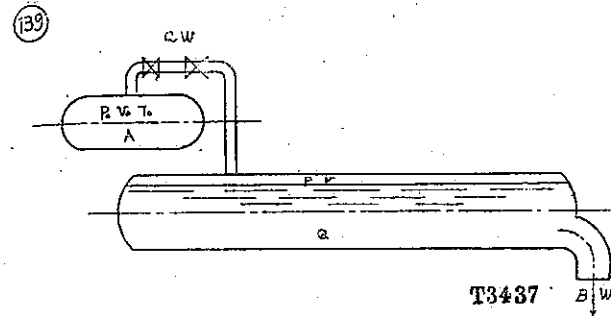
流量比ノ増加ニハ液高ヲ増ス事ハ實用的ニ 100cm 以上ハ無理デアルシ、流出管ノ大サノ限度モアリ、殊ニ前圖デ明ナ様ニ液ノ流出量ヲ一定ニ保テ得ル可能性ノナイ事ハ滴ノ分裂トイフ見地カラハ決定的ナ否定點デアルノデ、再ビ重力式ヲ正攻スル事ハ考ヘラレナイ。又現在ノ様ニ少クトモ彈倉ノ機ヲ垂直長ノ小サイ個所ヲ利用シヤウトスル場合ハ重力ノ作用ハ度外視シテ可ナル程度トナル。

& 46

雨下操作=際シテ所要ノ仕事ノ量ハ地上ニ於ル動力ニ換算スレバサシテ大キイモノデハナイ。
 九七重式二型デハ約800Lノ液ヲ5秒間ニ排出シ、之ニ4.50m/sノ速度ヲ與ヘルト考ヘルト、
 此ノ際ニ爲ス仕事ノ量ハ8100kg m デアル。從ツテ此ノ雨下器ノ動力ハ1600kg m/s 或ハ21.3HP
 ニ相當スル。斯カル動力ヲ機械力ニ依ツテ得ルノハ地上デハ容易デアルトシテモ飛行機用トシテ
 ハ困難デアル。又之ガ可能デアルトシテモ、要スルノハ操作時ダケデアルカラ、他ノ場合ハ死重
 量トナツテ居ル事ニナル。此ノ目的ニ空氣ヲ用フレバ、豫メ壓縮機ニ依ツテ壓縮セラレタ空氣ハ
 殆ド容器ノミノ重量ヲ以テ貯ヘラレテ居リ、現在使用シテ居ル様ニ80Lノ空氣槽デハ10kg/cm²
 ノ壓トシテモ原温10°Cデ巧ニ膨脹機構ヲ使用スレバ前記目的ニ對シテハ約30HPノ動源トシテ作
 用シ得ル事ニナル。空氣ヲ動源トシテ用ヒルノハ効率上決シテ得策デハナシ、又高壓空氣ノ取
 扱ハ容易デハ決シテナイガ、重量當リ馬力カラ云ツテ現在此ノ方法ニ勝ル實用的ナ物ハナイト信
 ズル。將來ハ火藥類ノ有スル化學的潛勢力ヲ有利ニ用ヒネバナラナイガ、現在ハ空氣ノ利用ガ先
 ツ動カヌ所デアラウ。

吾人ハ動源トシテ空氣ヲ用ヒルモノトシテ先ヅ九七重式一型雨下器ヲ試作試験シタノデアル
 ガ、之デハ空氣系統ノ配管及弁ノ大サノ關係カラ空氣ヲ動源トシテ液ヲ加壓シツツ排出スル事ハ
 出來ナカツタ。(管内徑8mm) 依ツテ液槽内容ヲ犠牲ニシ、液量ヲ100/188ニ減ジテ餘空間ヲ作
 リ、操作時之ニ空氣ヲ流入サセテ2.0~1.0kg/cm²ニ豫壓シ置キ、排出弁開放ト共ニ此ノ空氣壓及
 爾後ノ膨脹ニ依ツテ液ヲ排出セントシタ。此ノ爲ニハ開弁時ノ衝撃ヲ緩和スル爲ニ竝ニ排出管
 系ニ多大ノ改良ヲ加ヘタノデアル。之ヲ九七重式改一型ト稱スル。而モ既ニ明ナ様ニ空虛重量250
 Kニ比シ有効率ハ60%ニ減ジ、積載量ハ400Lニ過ギズ、然モ流出狀況ハ云ハベ衝撃的デアツテ
 又流出量dQ/dtハ急減シ滴粒配分ノ點ニ於テモ亦満足デハナカツタ。次デ空氣系統配管及弁ヲ
 改造シ(其ノ他細部ノ改良ヲ加ヘ)有効内徑18mmトセルモノガ即チ九七重式二型ト稱スルモノデ
 アル。本書ニ於テ主トシテ之ニ基イテ記述シ居ルハ、該型ガ空氣利用式トシテ理想ニハ遠シトイ
 ヘドモ、尙且此ノ式ノ典型的ノ作動ヲ行フヲ以テデアル。(更ニ配管ノ様式及規模ニ就テ改良ス
 ル餘地ノアル事ハ本書ノ到ル所ニ明デアラウ。)此ノ型ニ於テ全く同一ノ型ノ部分品ヲ利用シ搭載
 量ヲ増加シタモノガ九七重式改二型ト稱サレ、機構機能ハ殆ド同様デアアル。

空氣式ノ説明ニハ尤ヨリ九七重式改一型ノ機構ヲモ述ベネバナラヌノデアルガ、吾人ハ之ヲ既
 ニ過程中ニ忘却シタルモノトシテ省略シ、將來共ニ典型タルベキ二型ノ機構ノミニ關シテハ當
 航究班研究月報ヲ参照サレタイ。



此ノ場合ノ空氣ハ殆ド斷熱的ノ變化ヲ行フト考ヘル。

先ヅ「ノズル」カラノ噴流ヲ考ヘル。

$$(w_2^2 - w_1^2)/2g = - \int_1^2 v dP;$$

$$\text{シカル} = v = (C/P)^{\frac{1}{\gamma}} \quad \text{故ニ}$$

$$- \int_1^2 v dP = - C^{\frac{1}{\gamma}} \int_1^2 P^{-\frac{1}{\gamma}} dP \\ = C^{\frac{1}{\gamma}} \frac{\gamma}{\gamma-1} [P_1^{\frac{\gamma-1}{\gamma}} - P_2^{\frac{\gamma-1}{\gamma}}];$$

$$\text{今 } C^{\frac{1}{\gamma}} = P_1^{\frac{1}{\gamma}} v_1 \quad \text{トスル}$$

$$- \int_1^2 v dP = \frac{\gamma}{\gamma-1} \left\{ 1 - (P_2/P_1)^{\frac{\gamma-1}{\gamma}} \right\} P_1 v_1;$$

w_1 ハ w_2 ニ比シテ無視シ得ルノデ

$$w_2^2 = 2g \frac{\gamma}{\gamma-1} \left\{ 1 - (P_2/P_1)^{\frac{\gamma-1}{\gamma}} \right\} P_1 v_1$$

然ルニ「ノズル」ガ末廣デハナク普通ノ場合ニハ「ノズル」ノ出口断面デハ P_2 ハ P_1 ニ應ジテ

$P_0/P_1 = \left(\frac{2}{\gamma+1} \right)^{\frac{\gamma}{\gamma-1}}$ ナル限果壓力以下ニハ降下シ得ナイ。 $P_2 > P_0$ ノ時ニハ出口断面デ P_2 ニナル

ガ $P_2 < P_0$ ノ場合ニハ其處ニ P_0 ナル壓力ガ現ハレテ $-\int_1^2 v dP$ ノミガ速度トナリ、 P_0 カラ P_2 迄

膨脹ハ「ノズル」外デ行ハレル。故ニ噴出速度ハ此ノ時ニハ P_2 ニ關係ナク、

$$w_c^2 = 2g \frac{\gamma}{\gamma+1} P_1 v_1$$

アル。此ノ時ノ w_c ハ即チ $P_1 v_1$ ニ對スル音速ヲ表ハス。

液槽ヘノ管路ハ相當ニ長ク、途中ニ閉止弁ヲ操作弁ヲ有シ、途中ノ壓力降下ハ複雑デアアル。即

チ空氣ハ操作以前ハ操作弁迄ハ P_1 デアアルガ(= P_0)、操作中ハ此處迄ニ若干壓力ヲ降下シ、此處

ニ噴流作用及絞り作用ヲ起シ次デ更ニ管路中ヲ壓ヲ降下シ乍ラ液槽ヘ入ルノデアアルガ、現在

用ヒラレル様ナ高壓型式デハ空氣ノ流速ガ大デ管路内壓力降下モ亦著大デアル。從ツテ實際ノ下器ノ説明ヲ單ニ効率ノ不良ナ「ノズル」トシテ取扱フト何處カニ不合理ナ點ガ出テ來ル管ナル。

瓣通過後ノ流速モ極メテ大デアルカラ以後ノ管内壓力降下ハ充分大ニシテ、液槽ヘ達スル迄ハ P_2 迄、或ハ其以下ニ降下シテ居ル。(次述)此ノ時ノ壓力降下ハ流速増加ニ用ヒラレルノ損失ノ全部摩擦損失ノ形ヲ取ルノデアルガ、此等ヲ實際的ニ考察スルノハ容易デハナイ。

操作時ノ理想ハ液槽壓ヲ一定ニ保持シ從ツテ流出流量ヲ一定ニ保ツ事デアル。從ツテ操作時液槽壓ヲ監視シ作ラ加減スル譯デアルガ、此ニ關スル數式ハ後述スルトシテモ此ノ時ノ液槽壓標準ハ如何ナルモノデアラウカ。之ハ液槽容積及空氣槽容積ニヨツテ定マル。

液槽容積ヲ L 空氣槽容積ヲ A トスル。今 A 内空氣ヲ先ツ P_0, v_0, T_0 デ表ハスト、之ガ最も理想的ニ作用シタ場合ニハ液ノ排出終了時ニ占ムル空氣體積ハ $A+L$ デアリ、此ノ時之ガ總テ所望 P ノ空氣ヲ滿サレテ居ル事ニナルカラ、

$$PV^\gamma = P_0 V_0^\gamma; \quad \text{即チ}$$

$$P(L+A)^\gamma = P_0 A^\gamma$$

$$\therefore P = P_0 \times [A/(L+A)]^{1/\gamma}$$

九七重式二型デハ $L=0.72$; $A=0.08$ デアルカラ $A/(L+A)=0.10$ 從ツテ $P=P_0 \times 0.04$ ノ程度デアル。即チ $P_0=31 \text{ kg/cm}^2$ トシタ場合ニハ液槽保持壓ハ $P=1.25 \text{ kg/cm}^2$ デアリ、實際的 $P_0=26 \text{ kg/cm}^2$ 程度デハ理想的ノ液槽内壓(「ゲージ壓」)ハ 0.04 kg/cm^2 トナツテ來ル。勿論斯ノ理想的操作ハ上記デ明ナ様ニ全然空氣動力ヲ利用シ得ヌ事ニナル事モアリ($P_0 < 26$)實際ハ斯カノ操作ヲ行ハナイデ(理論トハ離レテ)液槽指示壓ヲ 0.5 kg/cm^2 程度ニ保ツ。而モ空氣ノ場合ハ $P_0/P_1=0.528$ デアルカラ、 P_1 ガ「ゲージ壓」 2 kg/cm^2 位ニナル迄ハ噴流ハ常ニ P_C ニ對スルノヲ用ヒテヨク又、實際問題トシテハ或時間以上ハ液内壓ハ「ゲージ」デ 0 ニナルノデアルガ P_1 ガ「ゲージ」デ 1 トナル迄之ヲ用ヒテヨク、又斯カル場合ハ終末狀況デアツテ、液槽ノ構造空氣ト液トノ混流ノ關係ヲ研究シテカラ始メテ問題ニナリ、本書ノ範圍デハ殆ド此ノ P_C ノ際ヲ常ニ適用シテ生ズル誤ハ考ヘル必要ガナイノデアル。

高速ノ空氣流ノ管内抵抗ニ關シ例ヘバ次ノ近似式ヲ用ヒルト w ガ 300 位デハ成立シナイ程降下ヲ來ス。

$$\frac{P_1^2 - P_2^2}{P_1^2} = \left\{ \frac{10^4 \beta w_1^2}{D} + \frac{h_2 - h_1}{l} \right\} \frac{2l}{P_1 v_1}$$

或ハ管内ノ速度密度變化ヲ無視シテ、

$$\Delta P = \beta \gamma w^2 l / D$$

ヲ用ヒタトシテモ、 $\Delta P=3 \sim 4 \text{ kg/cm}^2$ 程度ニナル。即チ吾人ノ今扱フ様ナ w ガ大キクテ D ガサイモノデハ l ガ左程長クナクテモ壓力降下ガ著シク「ノズル」トシテ取扱フニハ益々困難スル。

然作ラ差當ツテ簡便ナ然モ合理的ナ代法モナイノデ、極メテ効率ノ惡イ「ノズル」系トシ

扱ツテユク。此處デ九七重式二型ノ配管ニ關スル流量實測値ト夫ニ基イタ流量係數ヲ求メル事ヲ試ミヤウ。

噴流ノ式ニ於テ P_2 ノ代リニ P_C ヲ用ヒルト次ノ様ニナル。

$$w_C = \left[2g \frac{\gamma}{\gamma-1} \left\{ 1 - \left(\frac{P_C}{P_1} \right)^{\frac{\gamma-1}{\gamma}} \right\} P_1 v_1 \right]^{\frac{1}{2}};$$

$$G_C = a w_C / v_C$$

$$= a \left[2g \frac{\gamma}{\gamma-1} \left\{ \left(\frac{P_C}{P_1} \right)^{\frac{2}{\gamma}} - \left(\frac{P_C}{P_1} \right)^{\frac{\gamma+1}{\gamma}} \right\} \frac{P_1}{v_1} \right]^{\frac{1}{2}}$$

$$\text{今 } P_C/P_1 = \left(\frac{2}{\gamma+1} \right)^{\frac{\gamma}{\gamma-1}} = 0.528 \text{ トシテ}$$

$$G_C = 2.15 \times a \times \left(\frac{P_1}{v_1} \right)^{\frac{1}{2}}$$

空氣槽内ノ空氣量ヲ G デ表ハスト、

$$G = \frac{A}{v_1}$$

$$= AC^{-\frac{1}{\gamma}} P_1^{\frac{1}{\gamma}} \quad (C = P v^\gamma)$$

$$dG = \frac{A}{\gamma} C^{-\frac{1}{\gamma}} P_1^{\frac{1}{\gamma}-1} dP_1$$

シカルニ

$$\frac{dG}{dt} = -2.15a \times \left(\frac{P_1}{v_1} \right)^{\frac{1}{2}}$$

$$\therefore P_1^{\frac{1-\gamma}{2\gamma}} dP_1 = -2.15a \frac{\gamma}{A} C^{\frac{1}{\gamma}} dt$$

此處デ九七重式二型ノ常數値ヲ用ヒルト、

$$a = 0.00025 (= \text{const})$$

$$A = 0.021;$$

$$P_0 = 292000; T_0 = 288 \text{ 從ツテ } v_0 = 0.0288 \text{ 又ハ}$$

$$C = 202.0$$

故ニ此ノ式ハ次ノ様ニナル。

$$P_1^{-1.144} dP_1 = -0.723 dt;$$

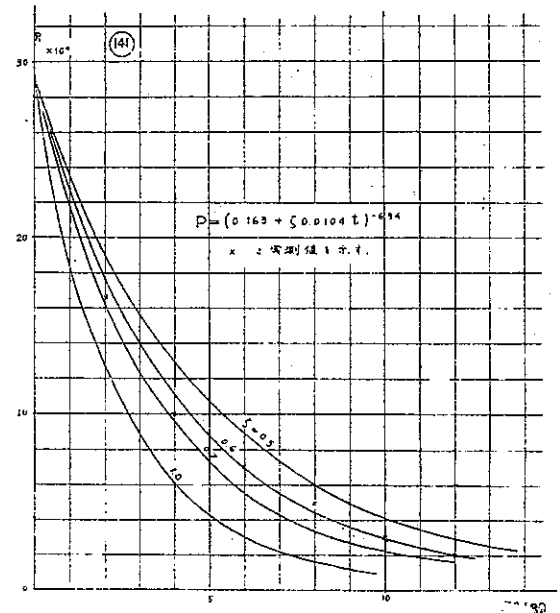
$$P_1 = (0.163 + 0.0104t)^{-0.94}$$

更ニ流量係數ヲ ζ トシ、 $\frac{dG}{dt} = -\zeta G_C$ デ表スト

$$P_1 = (0.163 + 0.0104\zeta t)^{-0.94}$$

此ノ式デ示サレル曲線ヲ ζ ノ異ル値ニ就テ示スト次ノ様ニナル。(141) \times ハ九七重式二型ノ實測値デアル。注意スベキノハ此ノ雨下器ノ空氣系統「ゲージ」ガ配管ノ途中ニアツテ操作時ハ流走空氣ノ壓ヲ示ス事ニナツテ居リ、又「ゲージ」ニ多少ノ遅レノ現象ノ在ル事デアル。之ヲ考慮

=入レルト、 $P_0=292000$ 、操作弁全開($a=0.00025$)ノ時ノ流量係數 ζ ハ0.65附近デアルト考ヘ
レル。



實際ノ場合ハ P_2 ガ一定デアル様 $=a$ ヲ加減スルカラ、 a ハ次第ニ大キクナルノデアツテ(後述) ζ ハ此ノ各場合ニ種々變ルノデアラウ。後述ノ様ニ、然ウ考ヘナイト實際ノ説明ガツカナ
ナル。

& 48

操作時ハ 1)液槽ノ排出弁開放、2)操作弁ヨリ空氣ヲ流出液槽ニ送ル、3)液槽内壓ガ一定トナル様ニ操作弁ノ開口面積ヲ大キクシテユク。壓ハ液ノ殆下全部出終ル迄ハ一定度ニ保ツ事ガ望ミシイ。(之ガ九七重式二型デハ不能ナノハ前述ノ如ク、又次ニ述ベル專カラモ明デアル。)之等ハ相當ニ演練ヲ要スル作業デアル。之ガ順調ニ行ハレタト假定シテ、液ノ流出ト操作弁ノ開口面積トノ關係ヲ考ヘテ見ヤウ。

液槽内絶對壓ヲ P_2 トスレバ P_2-P_A (「ゲージ壓」)ニ比シテ液高ハ無視シ得ル故次ノ關係式ガ成立スル。

$$W_L = a \{ 2g(P_2 - P_A) \times 10^{-4} \times 10.0 \}^{\frac{1}{2}}$$

流量ヲ Q デ表ハスト

$$-\frac{dQ}{dt} = aB \{ 2g(P_2 - P_A) \times 10^{-4} \times 10.0 \}^{\frac{1}{2}}$$

然ルニ假定ニヨリ P_2 ハ一定デアルカラ、 δQ ノ排出ニ伴ツテ δG ノ空氣ガ空槽氣カラ液管内ニ入シ、然モ $\delta Q = v_2 \delta G$ ナル關係ガ成立セネバナラナイ。然ルニ空氣槽デハ前述ノ様ニ關係式ガ

立スルノデ、

$$\begin{aligned} -\frac{A}{r} C^{-\frac{1}{r}} P_1^{\frac{1-r}{r}} \delta P_1 &= aB \{ 2g(P_2 - P_A) \times 10^{-4} \}^{\frac{1}{2}} \times \frac{1}{v_2} \delta t \\ &= aB (2g \times 10^{-4})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{r}} C^{-\frac{1}{r}} \delta t \\ (C &= P_0 v_0^r = P_0^{1-r} (RT_0)^r) \end{aligned}$$

$$\therefore -P_1^{\frac{1-r}{r}} \delta P_1 = r a \frac{B}{A} (2g \times 10^{-4})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{r}} \delta t$$

$$-P_1^{\frac{1}{r}} = a \frac{B}{A} (2g \times 10^{-4})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{r}} t + C$$

$t=0, P_1=P_0$ ナル故

$$P_1^{\frac{1}{r}} = P_0^{\frac{1}{r}} - a \frac{B}{A} (2g \times 10^{-4})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{r}} t$$

他方空氣管系統デハ前記ノ通り

$$-\delta G = \zeta 2.15 a' \times \left(\frac{P_1}{v_1} \right)^{\frac{1}{2}} \delta t$$

$$= \zeta 2.15 a' \times P_1^{\frac{r+1}{2r}} C^{-\frac{1}{2r}} \delta t$$

$$a' = \frac{aB}{\zeta 2.15} C^{-\frac{1}{2r}} (2g \times 10^{-4})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{r}} P_1^{-\frac{r+1}{2r}}$$

$$= \frac{aB}{\zeta 2.15} C^{-\frac{1}{2r}} (2g \times 10^{-4})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{r}}$$

$$\times \left\{ P_0^{\frac{1}{r}} - a \frac{B}{A} (2g \times 10^{-4})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{r}} t \right\}^{-\frac{r+1}{2}}$$

今 $(2g \times 10^{-4})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{r}} = \phi(P_2)$ トスレバ

$$P_1 = \left\{ P_0^{\frac{1}{r}} - a \frac{B}{A} \phi(P_2) t \right\}^r \quad \text{及}$$

$$a' = \frac{aB}{\zeta 2.15} C^{-\frac{1}{2r}} \phi(P_2) \left\{ P_0^{\frac{1}{r}} - a \frac{B}{A} \phi(P_2) t \right\}^{-\frac{r+1}{2}}$$

即チ P_1 及 a' ハ C, P_2, t ニ依ツテ定ツテ來ル。

此ノ時操作上ニ液槽内ニハ始カラ少量ノ空氣ガ存スル事ガ必要デアツテ、之ハ充液時ノ殘存或ハ排出弁開放カラ操作弁開放迄ノ遅レノ間ニ外部(排出管ヲ通ジテ)カラ入ルノデ之ハ明 $=P_2, v_2$ トハ異ツク注質デアルガ、計算上ハ之ヲ無視シテモ差支ナイ。

先ヅ排出管系統ノ流量係數 a ノ程度ヲ求メテ見ル。之ハ亦 W_L ト共ニ變ルモノデアルガ使用範圍内デ一定ト假定シナイト取扱ガ面倒ニナル。

$$\text{今 } B = \frac{1}{2} \pi (0.055)^2 = 0.0047 \quad \text{トスレバ}$$

$$-\frac{dQ}{dt} = 0.00066 a (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}}$$

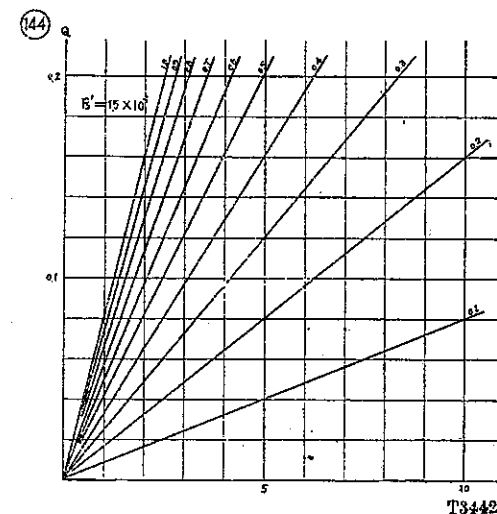
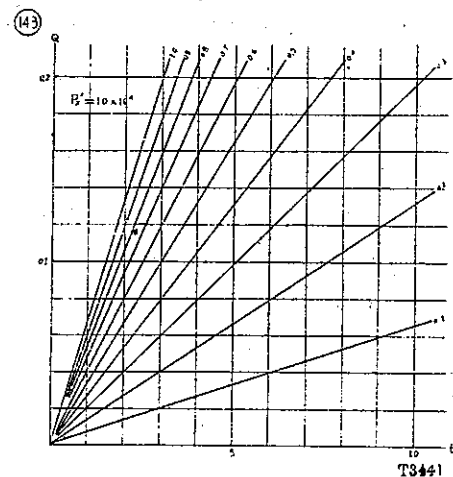
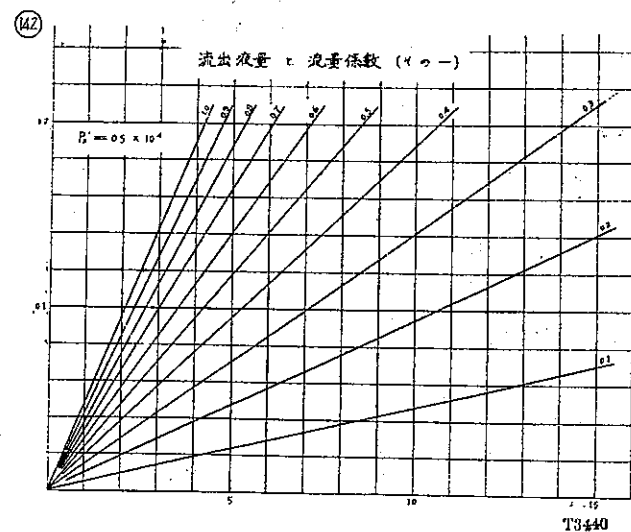
液出量ヲ Q_A トスルト

$$Q_A = 0.00066a(P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} t$$

此ノ式ヲ計算スルト次圖ノ様デアル。此ノ時Bハ二又排出管ノ単位雨下器配當面積ヲ取ツタ、之ハ単位雨下器ニヨツテ流量關係ガ變ラストイフ實驗カラ推シタノデアル。果シテBトシテ此ノ値デ良イカ液槽出口面積ヲ選ズベキカハ別ノ問題トシヤウ。此ノBノ値ヲ採ルト、×デ示シタ測値ニ見ル様ニ

$$a = 0.45$$

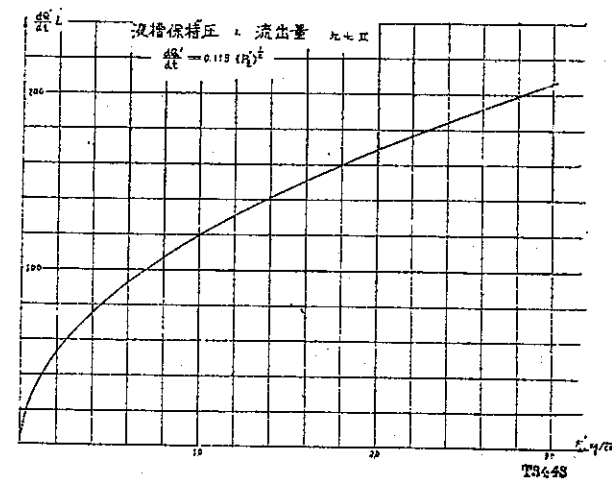
程度トナル。



$a = 0.45$ トシ流量ニヨツテ不變デアルト假定スルト此ノ雨下器ノ排出液量ト液槽保持壓トノ關係ハ次ノ様ニナル。

$$\begin{aligned} \frac{dQ}{dt} &= 4 \times 0.00066 \times 0.45 (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} \\ &= 0.00119 (P_2 - P_A)^{\frac{1}{2}} \\ &= 0.119 (P_2')^{\frac{1}{2}} \quad (P_2': \text{「ゲージ壓 kg/cm}^2\text{」}) \end{aligned}$$

此ノ P_2' ト dQ/dt ノ關係ハ次圖ノ様デアル。



次デ $(P_2 - P_A)$ ヲ 0.25; 0.5 及 1.0×10^4 トシタ時ノ P_1 及 a' ヲ求メテ見ヤウ。 P_0 ハ標準ハ 26×10^4 デアルガ、實際ハ 21×10^4 位ノ事ガ多イカラ之ヲ用ヒル。常數値ハ全體ノ雨下器ヲ考ヘテ次ノ様ニ採ル。

$$A=0.084 ;$$

$$B=0.0118 ;$$

$$a=0.45 ;$$

$$\zeta=0.65 ;$$

$$\phi(P_2) = (2g \times 10^{-3})^{\frac{1}{2}} (P_2 - P_A)^{-\frac{1}{2}} P_2^{\frac{1}{2}} \quad \text{ノ値}$$

$P_2 - P_A$	$\phi(P_2)$
0.25×10^4	5850
0.50	9440
0.75	13000
1.00	16450
1.25	20800

$$C = P_0 v_0^{\frac{1}{2}} = P_0^{1-\frac{1}{2\tau}} (RT_0)^{\frac{1}{2}} \quad \text{ノ値}$$

P_0	C	$C^{-\frac{1}{2\tau}}$
21×10^4	2300	0.0632
26	2130	0.0650
31	1980	0.0667

$$P_0 = 21 \times 10^4 \text{ ノ場合}$$

$$\begin{cases} P_1 = (6310 - 589 t)^{\tau} & (P_2': 0.25) \\ = (6310 - 950 t)^{\tau} & (: 0.50) \\ = (6310 - 1656 t)^{\tau} & (: 1.00) \end{cases}$$

$$\begin{cases} a' = 2.23 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (P_2': 0.25) \\ = 3.60 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (: 0.50) \\ = 6.28 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (: 1.00) \end{cases}$$

$$P_0 = 26 \times 10^4 \text{ ノ場合}$$

$$\begin{cases} P_1 = (7330 - 589 t)^{\tau} & (P_2': 0.25) \\ = (7330 - 950 t)^{\tau} & (: 0.50) \\ = (7330 - 1656 t)^{\tau} & (: 1.00) \end{cases}$$

$$\begin{cases} a' = 2.30 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (P_2': 0.25) \\ = 3.71 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (: 0.50) \\ = 6.46 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (: 1.00) \end{cases}$$

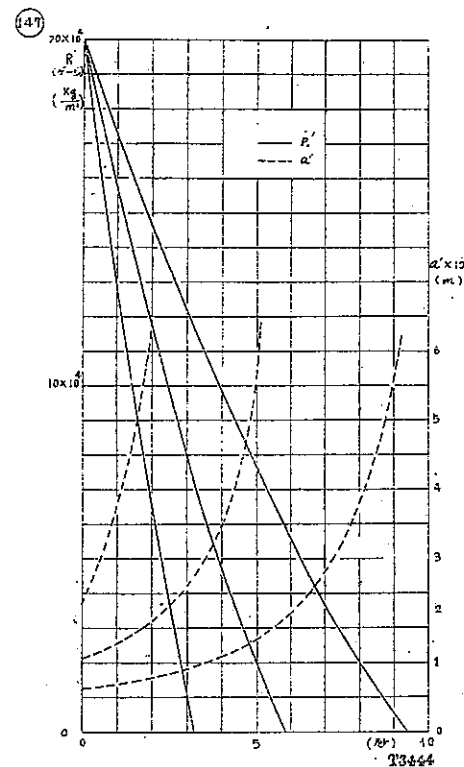
$$P_0 = 31 \times 10^4 \text{ ノ場合}$$

$$\begin{aligned} P_1 &= (8320 - 589 t)^{\tau} & (P_2': 0.25) \\ &= (8320 - 950 t)^{\tau} & (: 0.50) \\ &= (8320 - 1656 t)^{\tau} & (: 1.00) \\ a' &= 2.36 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (P_2': 0.25) \\ &= 3.80 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (: 0.50) \\ &= 6.63 \times (P_1^{\frac{1}{\tau}})^{-1.2} & (: 1.00) \end{aligned}$$

之は依ツテ計算シタ P_1 及 a' ハ次ノ様デアル。

R	$P_1 \times 10^4 \text{ kg/m}^2$									$a' \times 10^{-2} \text{ m}^2$								
	21×10^4			26×10^4			31×10^4			21×10^4			26×10^4			31×10^4		
P_2'	0.25	0.5	1.0	0.25	0.5	1.0	0.25	0.5	1.0	0.25	0.5	1.0	0.25	0.5	1.0	0.25	0.5	1.0
0	21.0	21.0	21.0	26.0	26.0	26.0	31.0	31.0	31.0	0.65	1.04	1.80	0.93	0.63	1.47	0.47	0.75	1.30
1	10.4	16.0	13.7	22.3	21.1	18.1	27.5	25.7	22.5	0.69	1.20	3.34	0.91	1.01	2.62	0.52	0.85	1.73
2	15.0	12.8	7.4	20.3	17.1	11.2	24.0	21.2	15.2	0.79	1.53	4.25	0.66	1.22	3.06	0.56	1.03	2.41
3	13.2	9.0	2.3	17.7	13.0	8.7	21.9	17.2	8.6	0.91	2.05	1.12	0.74	1.54	5.45	0.62	1.24	3.52
4	10.9	5.0	475.1	15.1	9.3	475.1	19.0	13.2	3.3	1.00	3.00	x	0.84	2.06	x	0.70	1.56	8.97
5	8.7	2.9	475.1	12.6	6.0	475.1	16.6	9.4	475.1	1.20	5.30	x	0.90	2.87	x	0.77	2.06	x
6	6.6	4.0	475.1	10.3	3.1	475.1	14.6	6.2	475.1	1.70	x	x	1.17	5.20	x	0.91	3.02	x
7	4.8	x	475.1	8.1	475.1	475.1	10.9	3.2	475.1	2.09	x	x	1.43	x	x	1.10	5.14	x
8	3.0	x	475.1	6.2	475.1	475.1	9.5	475.1	475.1	3.21	x	x	1.82	x	x	1.20	x	x
9	1.5	x	475.1	4.3	x	475.1	7.4	x	475.1	5.54	x	x	2.47	x	x	1.30	x	x
10	475.1	x	x	2.6	x	x	6.3	x	x	x	x	x	3.75	x	x	2.10	x	x
11	x	x	x	1.2	x	x	3.2	x	x	x	x	x	7.00	x	x	3.44	x	x
12	x	x	x	475.1	x	x	1.9	x	x	x	x	x	x	x	x	5.00	x	x
13	x	x	x	475.1	x	x	475.1	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

T3936



a' の最大値へ $4 \times 0.00025 = 0.001$ デアルガ、 a' ガ之ニ達セヌ内ニ既ニ空氣槽内壓ガ液槽保持壓ニ達シテ了ノガ殆ト全部ノ場合デアル。

前ニモ述ベタ通り空氣ガ斷熱變化ヲ行フトキ、 A ヲ占メル P_0 壓ノ空氣ガ液ヲ排出シ終ツテ $A+L$ ノ容積ヲ占メ終壓ガ P_2 保持壓ヲ示ストスレバ

$$P_0 A^\gamma = P_2 (A+L)^\gamma$$

$$\therefore P_0 = P_2 \times \left(\frac{A+L}{A} \right)^\gamma$$

九七重式ノ様ニ $(A+L)/A = 10$ デアル時ニハ

$$P_0 = 25.2 \times P_2$$

P_2 ハ液量ト所望排出時間ニ依テ決定サレルガ、今 P_2 ヲ各 2.0; 1.5; 及ビ 1.25×10^4 トスル P_0 ハ夫々 50.4; 37.8 及 31.5×10^4 トナリ、少クトモ最終壓ガ大氣ト等シクナル事ヲ豫期スル P_0 ハ 25.2×10^4 以上デアル事が必要デアル。

P_0 ヲ 25.2×10^4 トスルト、初期ニハ一定ノ液槽壓トスル場合、或時間以後ハ空氣槽ト液槽ノ壓ガ等シクナリ、其以後ハ液槽内ノ P_2 壓ノ空氣ガ膨脹シテ液ヲ排出スル譯デアル。然シテ實際ハ嚴ニ斷熱的トハ云ヘナイトシテモ、他方極メテ大キナ値ヲ取ル摩擦損失ヲ無視シテ上記ノ

果ヲ得ルノデアル。

上ノ計算デ明デアル様ニ、流出量ヲ一定ニ保ツ事が必要デアルトスレバ P_0 ガ與ヘラレタ時 $P_2 = P_0 \times \left(\frac{A}{A+L} \right)^\gamma$ デ與ヘラレル。

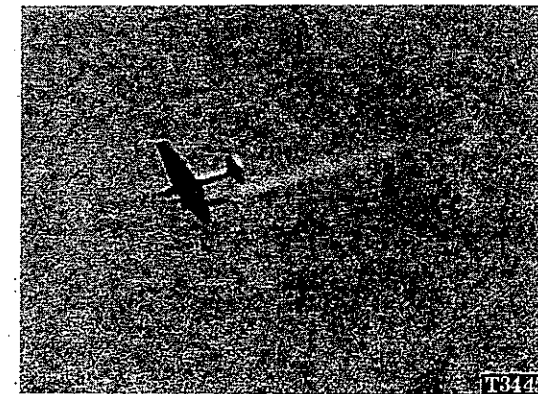
P_2 ヲ無視シテ之ヨリ高イ P_2 ヲ保持セントスルト結局ハ流出量ヲ途中デ變ヘネバナラヌ事ニナツテ來ル。例ヘバ P_0 ガ 26×10^4 デアル時、 P_2 ヲ 0.25 トスルト良ク全流出間流量ヲ一定ニシ得ルガ之ヨリ高イ時ハ途中デ之ガ變化スル事ニナル。

現在吾人ハ尙流量比ト滴粒ノ關係ニ關シ決定的ナ觀念ヲ有シナイ。從ツテ雨下操作ニ當ツテモ如上ノ點ヲ尙嚴ニ規正スルノ可否ヲ述べル譯ニハニカナイノデハアルガ、少ク共將來流量比ヲ一定ニ保ツ事ガ絶對必要デアレバ直ニ上記ノ結論ガ更ニ含味サレルモノト信ズル。

更ニ斯ル空氣量ノ問題ヲ解決セントスレバ上記ノ結果ヨリ直ニ二ツノ改良途ヲ述べル事が出來ル。即チ P_0 ヲ大トスル事、及 A ヲ大ニシテ $A/(A+L)$ ヲ更ニ大トスル事デアル。然シテ現在ノ標準壓 $P_0 = 26 \times 10^4$ 以上ヲ採用スル事ハ工作上竝ニ危險防止上モ良策トハ云ヘヌ。即チ空席ヲ利シテ A ヲ大トスル方法ガ採ラレネバナラズ、之ハ充分ニ可能性ノアル問題デアル。

之ニモ増シテ必要ナノ空氣以外ノ適當ナ動源ヲ研究スル事デアル。緩燃火藥類ノ利用ハ此ノ方面ニ殘サレタ唯一ノ途デハナカラウカ。然ラズンバムシロ液ヲ壓出スル考慮ヲ拋棄シテ液槽自身ヲ空中ヘ抛出シ此處デ液槽壁ヲ一舉ニ分裂セシムル途、換言スレバ雨下彈ノ規模ノ大ナルモノヲ採用スベキデハアルマイカ。

尙殘サレタ小サナ問題トシテ果シテ a' ヲ上ノ計算ノ様ニ巧ニ操ル事が出來ルカガ考ヘラレル。經驗ニ依レバ充分ナル演練ハ概ネ充分ニ此ノ目的ヲ達成セシムルノデアルガ、流量比ノ嚴重ナ保持ヲ問題トシ、且雨下攻撃ヲ稍々大規模ニ行ハントスルナラバ、之ヲ決シテ巧緻ナ『演練』ノ手段ニ俟ツベキデハナイ。從來所謂減壓機ガ此ノ目的ニ使用サレントシク事ガアル。併シ之ハ瞬間的ノ平衡ヲ可能ナラシメル物デハナク、又 a' ノ調制ニ P_2 ノ壓力自身ヲ動源トシテ使用スル事ハ嚴密ナ補正ガ不可能デアル。故ニ此處ニ P_2 ニヨツテ作動スル變位ヲ他ノ動源ニ變換シ、之ニヨツテ P_1 ニ無關係ニ a' ヲ調制スル方法ヲ執ルベキ事ヲ示唆スル。



X 撒 布 器

& 49

撒布器が雨下器と異ルノハ充填物ノ理學性狀ノ差違ニ基ク、即チ雨下器デ取扱ツタ液態材料ニ於テハ空氣ニ依ル加壓ト之ヲ導管ヲ通ジテ自由ニ導ク事ノ出來ル特徴ガアツタ。今此處ニ問題トナル粒子デハ斯カル事ハ望ミ得ナイ。流動スル砂ノ如キハ或意味デ流體的ノ性質ヲ帶ビテ來ルガ、然モ垂直流出ノ時ニ於テスラ其ノ全高ニ無關係ニ單ニ流出孔ノ大サノミニ依ツテ流量ガ規定サレル。一般ニ迅速ニ流動スル粒子ハ流體的ノ性質ノ一部、例ヘバ摩擦狀況ヲ呈シテ來ルケレドモ、概シテ粒子ノ集合ヲ内部摩擦ノ多イ液體ト考ヘル事ハ不可能デアル。從ツテ雨下器ニ於テ述ベタ理學特性ハ此ノ場合ニハ全然適合サレナイ。

粉末體ノ運動ニ關シテハ從來餘リ研究サレテ居ナイ。又吾人モ雨下器ニ關スル程ニハ實驗ヲ行ツテ居ナイノデ特ニ擧グベキ成績ハナイ。何レモ今後ノ問題トシテ保留スル。

問題トスル粒子ハ前項『粒子ノ落下』デ取扱ツタ様ナ範圍ニ止ラナイ。此等個々ノ性狀ヲ特ニ定量的ニ研究スルノハ容易ナ問題デハナイト考ヘテ居ル。

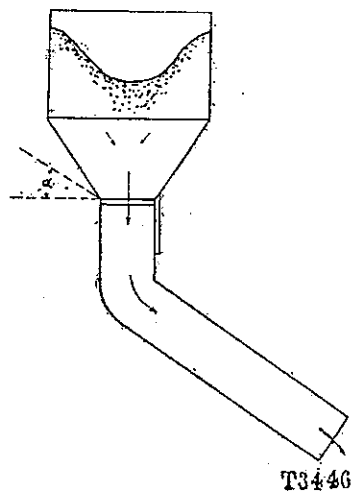
粒體ヲ重力ニ依テ排出スルニハ其ノ息角ガ先ヅ問題デアル。一般ニ一旦移動ヲ開始シタ粒體ハ移動開始時ヨリモツノ息角ハ小サイ。排出経路ヲ常ニ此ノ息角ヨリ大キナ傾斜面デ形成スレバ重力ノミニヨツテ排出サセル事ガ可能デアル。此ノ場合排出量ハ主トシテ粒體槽ノ出口面積ノミニ比例シテ増加スルコト考ヘラレル。粒體ノ運動ニハ普通三種ノ狀況ガアル。(固態狀、液體狀及氣體狀)。一般ニ静止ノ狀態カラ運動ヲ起サセルト此ノ三段ヲ通ツテ遂ニ各粒子ガ別々ニ重力ノ作用ニヨツテ移動スル狀況ニナル。撒布器ノ場合ニハ必ズシモ此ノ段階ヲ通ル事ヲ必要トシナイ。全體ガ固ツテ(個々ノ粒子間ノ移動ガ殆ド無クテ)排出サレテモ差支ヘナイ譯デアル。然シ固體狀又

ハ流體狀ノ移動ノ場合ニハ出口カラノ流出ガ之ニヨル影響ヲ受ケルカラ、特ニ導管ヲ長クシタイ場合ニハ出口カラ以後ハ斷面積ヲ更ニ大トスルカ何等カノ方法ニヨツテ出口ヲ出ル時ノ流體狀況ヲ變化サセネバナラナイ。

粒體ヲ空氣ニヨツテ排出サセル場合、空氣ハ壓力源トシテデハナクテ其ノ速度ニヨル勢力ノ一部ヲ以テ粒子ヲ加速シ之ヲ空氣ト共ニ移動サセルノデアル。從ツテ之ニ要スル空氣量ハ粒體ノ總質量ニ比例スル譯デアル。

從來粒體ノ空氣輸送ニ關シテハ殆ド其ノ定常狀態ヲ扱ツテ居ルノデ、吾人ノ今問題ニスル様ナ輸送ノ初動ニ關シテハ特ニ參考ニナル事モナイ。又風ニ依ル砂ノ移動ノ研究ニ於テ

(148)



T3446

ハ砂層ノ表面ノ粒ノ運動ヲ觀察スルノデ、今考ヘル様ナ粒子層全體ガ至短時間ニ移動シ盡ス様ナ場合ノ機構ハ相當トハ異ツテ居ルト考ヘラレル。

粒體層ニ氣流ヲ作用サセテ之ヲ移動サセル時ハ流速ガ小サイ時ハ粒子ハ移動セズ、更ニ大キナルト粒子ハ飛躍ノ移動ヲナシテ時ニハ飛躍距離ニ應ズル波狀痕ヲナシ、更ニ速度ガ或ル程度増スト粒子ガ雲狀ニ卷上ツテ移動スル。即チ粒子ノ移動ノ狀態ニハ或ル限界 Re ノ如キモノガアルト考ヘラレル。今問題ニスル様ナ場合ハ勿論風速ノ極メテ早イ場合デ空氣中ニハ無數ノ渦流ガ出來テ居ルト想像サレル。粒子ガ移動スル爲ニハ之ヲ垂直ニ上方ヘ押上ゲル力ト之ヲ水平ニ運搬スル力ガ働カネバナラナイ。實際ノ場合ニハ此ノ兩者ガ同時ニ起ツテ來ルガ、垂直運動ノ場合ト異ツテ風速ノ方向ガ重力ト垂直デアル爲ニ、氣流ハ強イ亂流ヲ呈シテ層テ垂直成分ガ粒子ヲ揚擧シ水平成分ガ之ヲ運搬スルト假定スルト、水平方向ノ風速ヲ考ヘル場合ニハ粒子ノ揚擧ノ過程ハ省略出來テ始メカラ空中ニ浮游シテ居ルト考ヘテモヨイノデハナイカト思ハレル。然シ此ノ様ナ考ヘ方デハ粒體ノ全排出時間ノ問題ヲ解決出來ナイ。

粉末ノ空氣輸送ノ場合ニハ水平管中ノ粒子速度 U_h ト氣流ノ速サ U_a トヲ大體ニ於テ

$$U_h/U_a = 0.47$$

ト考ヘテ居ル。

今極メテ非實際的デアルガ次ノ様ナ計算ヲシテ見ル。

斷面 A ノ粒子ニ V ナル風ガ當リ抵抗係數ガ C_x デアル場合ノ粒子ノ移動ヲ考ヘル。

$$m \frac{d^2x}{dt^2} = \frac{1}{2} \sigma \left(V - \frac{dx}{dt} \right)^2 C_x A;$$

$$\frac{1}{2} \sigma C_x \frac{A}{m} = K \quad \text{トオキ}$$

$$\frac{dx}{dt} = K(V-v)^2;$$

$$\text{ie } (V-v)^{-2} dv = K dt,$$

$$(V-v)^{-1} = Kt + C; t=0, v=0; \text{ ie } C = V^{-1}$$

$$\therefore \frac{1}{V-v} = \frac{KVt+1}{V}, \quad \text{又ハ}$$

$$V-v = \frac{V}{KVt+1};$$

$$\text{ie } V - \frac{dx}{dt} = \frac{V}{KVt+1}$$

$$\therefore Vt - x = \frac{1}{K} \log(KVt+1) + C$$

$$t=0, x=0; \text{ ie } C=0$$

$$\therefore x = Vt - \frac{1}{K} \log(KVt+1)$$

今床面積ヲ F 有効斷面積ヲ ϕ トスルト

$$V = V_a \times \frac{\phi}{F};$$

$$V_a = 80; \phi/F = \frac{1}{20} \quad \text{トスルト}$$

$$V = 80 \times \frac{1}{20} = 4$$

$$\text{又} \quad K = \frac{1}{2} \sigma C_x \frac{A}{m} = \frac{1}{2} \times \frac{1}{8} \times 1.0 \times 0.1 \quad (\text{即チ } A = (0.001)^2; m = (0.001)^3 \times 1000/9.8 \text{ トスル})$$

$$\text{即チ } K = \frac{1}{160} \text{ トスル。然ル時ハ}$$

$$x = 4t - 160 \times 2.3 \times \log_{10} \left(\frac{t}{80} + 1 \right)$$

今 $t = 2.0; 3.0; 4.0; 5.0$ トスルト $x = 0.2; 0.3; 0.5; 1.2$ 等トナリ全長 1m ノ撒布器ヲ出ル均時間ハ 4 秒トナル。

如斯省略算ハ撒布ノ機構ヲ全然無視シタモノデアルケレドモ、1)全排出時間ハ充填量ノ多少ヨツテ殆ド影響サレナイ、2)空気取入面積ノ減少(前扉ノ開放不全)ハ之ニ比例シテ流出時間ヲ短クスル、3)上ニ舉ゲタ様ナ實驗例デハ流出時間ハ何レモ $2 \sim 4$ 秒程度デアル事等カラ推シテ、斯ル算式ヲ改良シテ實際ニ用ヒ得ルモノヲ得ル事ガ出来ナイカト考ヘテ居ル。

上ニ述ベタ數値ハ概ネ九七輕式撒布器ニ準據シタモノデアル。

& 50

九七輕式撒布器ハ翼下ニ裝着スルノデ、自然氣流ヲ利用シテ粒體ヲ抛出シタガ、斯様ナ取付置ハ機體汚染ヲ考ヘル必要ガナイノハ誠ニ具合ガヨイ。(同器ニ關シテハ詳細ハ述ベラレヌ。同器説明書及航究班月報ヲ参照サレタイ)

然シ抵抗ガ大デアル事及ビ將來双發モノガ重用セラレル傾向ノアル事ハ現況ニ固着スルヲサナシ。如何ニシテ彈倉ヲ利用スルカ、彈倉ニ粒體槽ヲ入レタ時ノ空氣源ヲ如何ニシテ得ルカ又此ノ場合直ニ問題トナル機體汚染ヲ如何ニシテ防グカハ尙研究中デアルノデ、此處ニ述ベルヲ保留スル。

特ニ機體汚染防止ト遮風板ノ關係ハ重要デアツテ速ニ解決ヲ要スル問題デナルト信ズル。

& 51

次ニ撒布器ノ設計上必要ナ二三ノ實驗成績ヲ示ス。

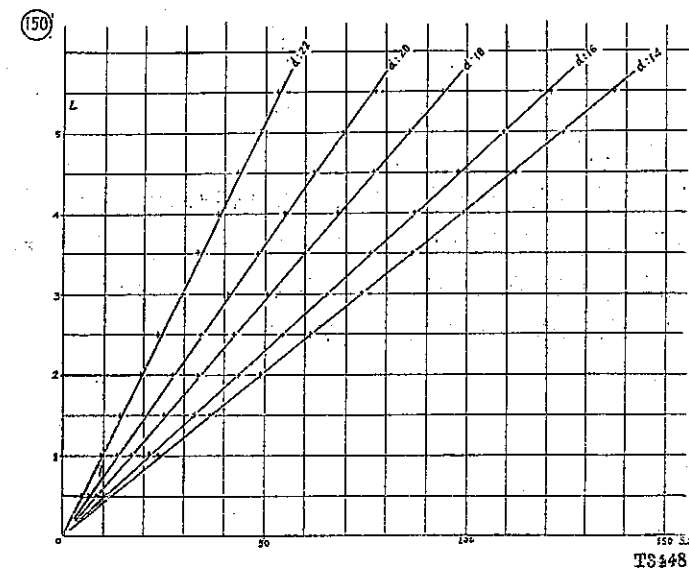
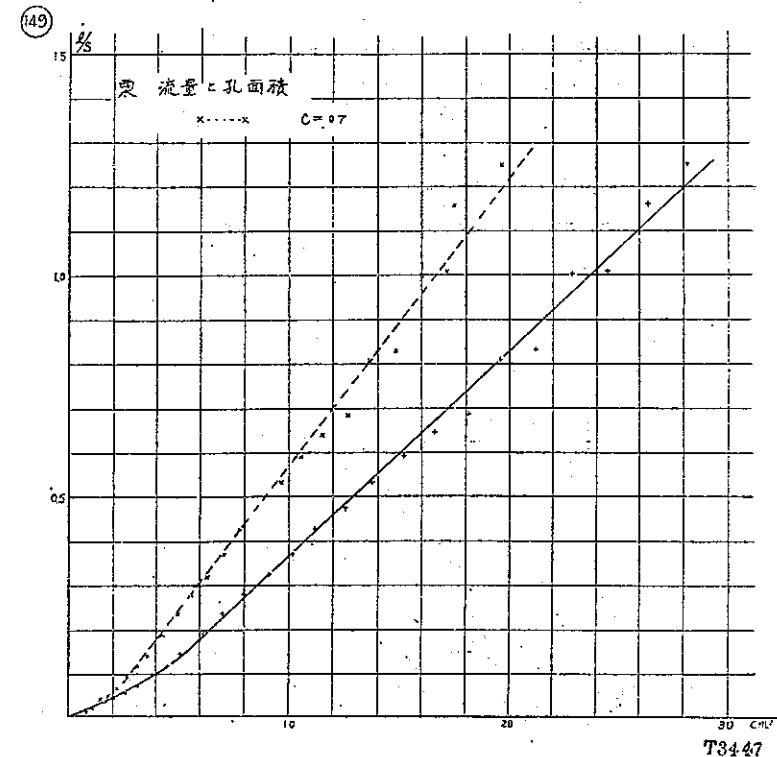
(1) 粒子ノ落下流出量ニ及ボス流出孔ノ大サト粒子ノ高サノ關係

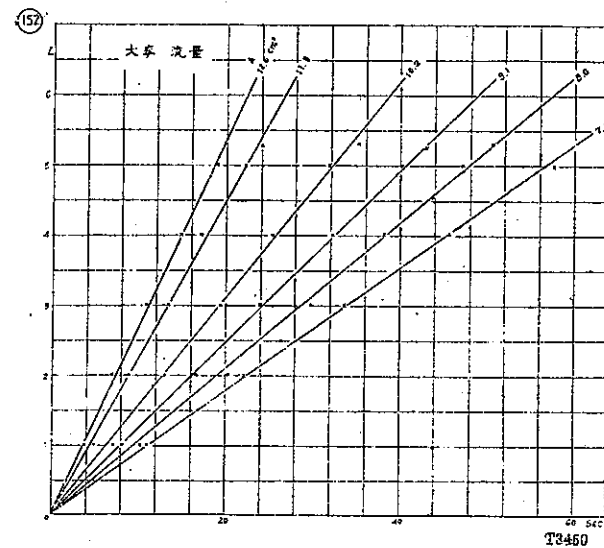
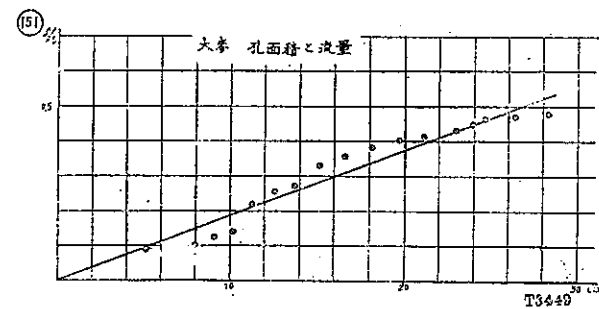
材料トシテハ粒子ノ大キサノ比較的一致シタ粟(市販ノモノ)ヲ用ヒタ。次ノ實驗ニ於テモ同様デアル。

粟ヲ徑 40mm ノ硝子同筒ニ入レ下底ニ種々ノ大サノ徑ノ圓孔ヲ有スル蓋ヲ取附ケ、時間ト流量ノ關係ヲ粟ノ高サカラ判定スル。圓筒ノ徑ガ比較的小サイノデ上面ハ略ニ一樣ニ低下スル。

之ニ依ルト流出量ハ粟ノ高サニハ關係セズ孔ノ面積ニ比例スルト考ヘラレルガ、流量ガ孔ノ

サイ部ト大キイ部ト異ルノハ縮流係數デハ解カレズ、粒子ノ移動狀態ニ歸スベキモノデアラウカ。孔ノ大キナ時ハ粒ハ明ニ或ル高サ迄ハ所謂液狀移動ヲ呈スルモノデアル。

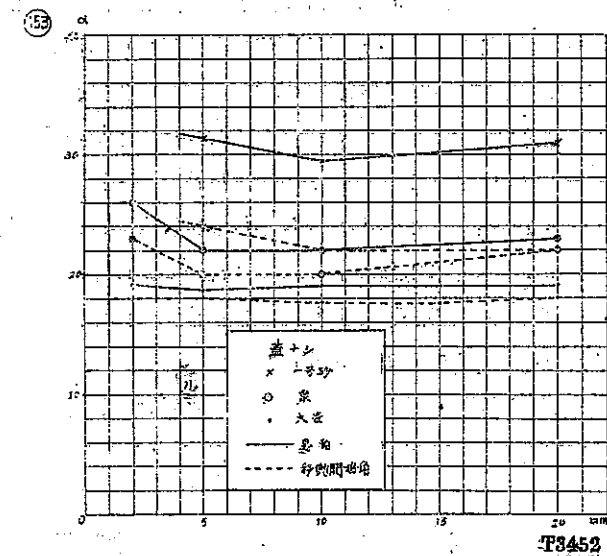




(2) 粒子ノ息角

深サ30mm、幅40mm長サ800mmノ一號アルミ板ノ溝ヲ作り之ニ粟ヲ一列乃至25mm厚ニキ下方ニ蓋ヲ施シ場合ト然ラザル場合ニ就テ粒ノ全部滑リ落ちル最少ノ角度ヲ求メタ。之ハノ移動状態ト深イ關係ガアリ今尙試験ヲ續ケテ居ルガ、得タ成績ヲ次ニ示ス。

之ニ依ルト粒子槽底ハ排出管方向ニ約35°傾斜サセバ良イ様デアル(粟)。



雨下用法

第1 用法原則

& 52

雨下用法ノ主體ガ細菌デアル以上、用法ハ終始疫學ヲ基本トシテ連鎖デナケレバナラナイ。然シテ用法上ノ手段トシテ飛行機ヲ採ル以上、疫學ノ要求ガ全面的ニ飛行機ノ運用ヲ制肘シ、或ハ逆ニ飛行機運用上ノ條件ガ全ク疫學ノ要求ト離反スルガ如キ事ヲ戒メネバナラス。

現在ノ進歩ノ狀況ニ於テハ、特ニ疫學ニ全然不利デナイ限り、多クノ場合ニ於テハ飛行機運用上ノ要求ニ基イテ作戦疫學ノ條件ハムシロ從ニ取扱ハネバナラヌ様ナ事モ多イ。之ハ主トシテ疫學ノ發達程度ガ尙全ク初步ノ階段ニアリ、特ニ純疫學ノ要求ニ基イテ飛行機ノ運用ヲ行フニ足ル基礎的研究ノ不足ト、他方飛行機運用上ノ要求ハ、氣象、器材、人員等ニ基ク全ク客觀的ノモノデアリ、且判然トシテ限界ヲ形成シテキルカラデアル。

從ツテ雨下用法ハ此ノ飛行機運用上ノ制限内ニ於テ疫學ノ要求ヲ考慮シツツ其ノ原則ヲ樹立セネバナラナイ事ニナル。

主體ガ比較的保存シ難キ事(少クとも雨下ニ用ヒ得ル状態ニ於テ)ハ必然的ニ運用ヲ制限スル。細菌自體ヲ用フル時ハ製造ヨリノ許容期限ハ旬日ヲ見當トシ、或ハ之ノ期間内ニ於テモ可及的速カニ使用スル事ヲ要求スル。

乾燥状態ニ於ケル菌ニ於テ、或ハ特殊ノモノ(例ヘバ芽胞形成菌又ハPノミ)ニ於テハ此ノ期間ハ實用範圍ニ於テ(少クモ一期ノ作戦行動期間又ハ其ノ内若干ハ)問題ニナラナイ事モアル。

然シ何レノ場合ニ於テモ(上記特殊ノ場合ヲ除キ)雨下攻撃ニ用ヒ得ル状態トシ整備サレタルハ、之ガ雨下液ノ形式ニセヨ粉末ノ形式ニセヨ(乾燥菌ヲ直接フレバ別トシ)其ノ使用期限ハ短キ數日程度ニ過ギナイ。(此ノ點ハ更ニ將來ノ問題デアツテ、使用状態トシテモ尙細菌ノ代謝機能ヲ抑制シテ使用期限ヲ延長スル如クセネバナラスノデアルガ、例ヘバ温度ヲ降下セシムルキ手段ヲ採ルトシテモ一般ニ莫大ナ施設ヲ要シ、殆ド實戰的價值ヲ喪フニ到ル。)從ツテ飛行機ノ運用ガ天候器材ニヨツテ絶對的制限ヲ受クルナラバ、菌ノ生産、貯藏及補給ヲ圓滑適切ニスル共ニ、他方補給ト使用トノ間隙ヲ可及的長時間ニ涉ツテ任意ニ調節シ得ル能力ヲ保有スル事ガ要ナル。之ハ原則トシテ少クモ使用量ノ過半量ヲ乾燥状態ニ於テ補給スルトセバ、飛行機用上ノ制御ニヨツテ製造サレタル菌ヲ無効化スル機會ヲ大ニ少クスルモノデアル。

但シ乾燥操作ニ於ケル損耗ヲ考量スル時ハ、斯カル結論ハ容易ニ引キ得ルモノデナク、要ハ大ノ生産能力ヲ有シ、之ヲ如何ニシテ飛行機運用ニ巧ニ連續セシムルカノ研究並ニ經驗ヲ得ルトナル。

製造ト補給ノ地點ハ狀況ニ應ジ變化セネバナライ。補給地點ハ作戰目標ニヨツテ定ツテ來ル場合ガ多ク、其ノ他ニ兵器ノ特性ニ鑑ミ特ニ保機上ノ見地カラモ考察サレネバナライ。何レニセヨ、一旦攻撃ノタメノ準備ヲ行ツタ時ハ其ノ使用期限ガ極メテ短イトイフ特性ヲ有スル事ヲ思ヘバ、補給地點ハ作戰目標ニ對シ一氣ニ攻撃ニ移リ得ルガ如キ地點デナケレバナライカラ、多クノ場合ハ製造地點トハ異ツテ選定セラレルモノデアル。從ツテ此等ノ兩地點間ノ輸送ヲ考慮セネバナラス事ニナルガ、之ハ兵器ノ状態ニ基イテ決定セラレルモノデアツテ、若シ濕菌ヲ輸送スルモノトスレバ、兩地點間ノ交通關係ガ極メテ良好ナル關係ニアル場合以外ハ輸送機ニ依ルヲ前トセネバナラス。

使用状態ニ調製セル兵器ヲ其ノママ輸送スル事ハ特別ノ場合(例ヘバPノミ)以外ニハ無いデアルカラ菌ノ容器ヲ適當ニ選定スレバ輸送機ノ搭載量ノ問題ハサシテ重要デナクナル。但シ輸送機ノ運用上ノ制限ヲ以テ攻撃機ノ運用ヲ制肘セヌ様ニ、補給ハ常ニ餘裕ヲ以テ行ハレネバナス事ハ前述ノ通りデアル。

補給ガ順調ニ行ハレル時ハ、飛行機ノ運用ト疫學的要求トノ連鎖ノ最モ困難ナル部分ハ概ネ成サレタ事ニナル。

補給地點ハ通常攻撃基地ニ設定サルベキデアルガ、此處ニハ前述ノ如ク貯藏並ニ攻撃材料調製ノ設備ヲ有セネバナライ故、狀況ニ依ツテハ若干基地ト離隔スル事モアリ得ル。

何レニセヨ基地ニ極メテ近接シテ居ル事ハ第一ノ具備條件デアル。

補給地點ニ要スル施設ノ種類並ニ量ハ作戰ノ豫定期間及用フル菌ノ種類ニ應ジテ區々デアル。細菌貯藏設備及材料調製ノ施設ハ不可缺デアルガ、其ノ規模ハ一ニ飛行機ノ運用狀況ニ基イテマル。既ニ調製セル材料ガ短イ使用期限ニヨツテ制限サレル以上、此ノ施設ハ一時ニ最大使用ヲ調製シテ尙餘裕アル程度デナケレバナラス。其ノ他ノ補助施設ハ概ネ作戰期間ニヨツテ定マリ最小限度ノ細菌檢定設備モ亦必ズ作ラネバナライ。

飛行基地ハ作戰目標ニ應ジテ變動スルガ、要ハ使用機ノ性能ニアル。即チ目標ヲ行動範圍内ニ含ミ得ル地點中デ補給地點ヲ兼行シ得ル様ナ所ヲ選定スレバヨイ。雨下撒布器材ノ構造機能ハ複雜デハナイ迄モ故障個所ノ生ジ易イ物デアルカラ此處ニハ使用器材ノ修理能力ノアル事ガ必要デアル。更ニ攻撃材料ノ充填乃至攻撃後ノ消毒等ハ一般整備作業ト趣ヲ異ニシ、屋内ニ於テ行フヲ至當ト考ヘラレル作業デアツテ飛行基地ニ於テ特ニ此ノ作業ニ適シタ隔離的ノ格納庫ヲ使用シ得レバ極メテ好都合デアル。

攻撃發起ノ時期ハ使用ヲ企圖スル細菌ノ種類ト攻撃ノ方法、目標ニ於ケル疫學的气象學的諸條件ニヨツテ定リ、逆ニ一定ノ目標ト一定ノ時期ガ限定サレルナラバ之ニ從ツテ細菌ノ種類ト方法ガ定ツテ來ル。一般ニ目標ニ於ケル疫學的諸條件ハ明白デハナイ事ガ多イ。從ツテ任意ノ時期ニ於ケル此ノ條件ヲ類推スルニ足ルベキ疫學的兵要地誌ハ平時ヨリ常ニ各方面ニ對シテ準備シテ置カネバナラスガ、更ニ不利ナ條件ニ於テモ尙其ノ偉力ヲ發揮スベキ細菌株ノ準備モ亦極メテ重要デアル。或ル地區ニ於テ一定ノ流行病ノ起ル時期ノ明白ナ場合ニ此ノ流行期ニ先立ツテ該病原菌ヲ使用スレバ概ネ効果アリトハ考ヘ得ル事デハアルガ、更ニ流行期ニ入ツテ行ツタ場合ノ効果或ハ斯カル時期ニ他ノ細菌ヲ以テ攻撃セル場合ノ効果ニ關シテハ一概ニ論ズル事ハ不可能デアラウ。一般的ニ言ヘバ、任意ノ細菌ニ對シテ極メテ不利ナ外的條件ノ存スル場合以外ハ何等高カノ形式ヲ以テ何レカノ種類ノ菌ヲ用ヒ得ルモノデアル。

問題ヲ液體雨下ニ限定スレバ、勿論上記ノ諸件モ考慮セネバナラスガ、其ノ取ルベキ高度ト目標ノ種類ニ依ツテ外的制限ガ非常ニ異ツテ來ル。例ヘバ、4000m以上ノ高度ヲ限定セラレル場合ニハ氣温ノ高低ガ地上ニ到達スル有効菌量ニ對シ致命的ナ要素デアリ又目標ノ種類トシテ直接人畜ヲ汚染スル事ハ概ネ其ノ機會ガ少クテ結局ハ二次的感染ヲ目途トセネバナラスモノデアリ、地上ノ氣象諸因ニヨル細菌ノ抵抗ガ重要ナ因子トナル。シカルニ液體雨下ニ於テモ超低空攻撃ヲ行フ場合ハ落下空間ノ状態ノ影響モ少ク、又目標トシテ直接ニ人畜ヲ選定シ得ルヲ以テ、地上ノ氣象諸因ノ交感ハ餘程少クナル。之ハ粉末ノ形式ニヨル攻撃ニ於テモ殆ド同様デアル。然シ乍ラ超低空雨下ヲ行ヒ得ル目標及條件ハ高空雨下ニ比シテ異ツテ居ルシ、且用フル飛行機ノ種類モ異ツテ居ルカラ、當時ノ氣象ノ狀況ヲ検討スル事ハ目標及菌種方法ヲ決定スル上ニ極メテ必要デアル。

攻撃時間ハ特ニ疫學的要求ト飛行機運用上ノ要求ニ依テ決定サレル。人畜ノ直接汚染ヲ目途スル時ハ此ノ爲ニ最モ良イ時間ヲ選バネバナラス。超低空雨下ニ於テハ直接人畜ノ集團ヲ照準シテ攻撃ヲ行フヲ主眼トスルモノデアルカラ此ノ照準ノ可能ナ限り(狀況ニ依ツテハ夜間ニ於テモ)時間的制限ハ無いト考ヘラレル。此ノ場合ハ隨時隨所ニ目標ヲ捕促シテ攻撃ヲ行ヘバヨイ。高空雨下ニ在テハ人畜ヲ直接捕促スルコトハ困難デアリ、且照準ノ精度モ集團セル人畜ヲ攻撃シ得ル程良好ナモノデハナイ。從ツテ此ノ場合ニハ當時ノ目標ノ狀況ニ應ジ比較的人畜ヲ直接汚染シ得ル機會ノ多イ時刻ヲ選バネバナライ。然ルニ高空雨下ノ企圖スル所ハ主トシテ二次的感染デアル事ハ斯カル制限以上ニ地上ノ氣象的要因ヲ重要視セネバナラナクナル。(但シ蚤ノ如ク運動性ヲ有

シ必然的ニ一次感染ヲ起スモノハ別デアルガ、之トシテモ其ノ生活力ヲ失フ如キ地上氣象ニ曝ス
コトノ無イ様ニ考慮セネバナライ。時ニ気温、湿度、日照ニ敏感ナ菌種程其ノ程度ガ高イワケデ
アル。即チ疫學的要求ハ菌ノ種類特ニ其ノ二次感染ニ期待シ得ル程度及抵抗性ニヨツテ嚴緩種
デアル。他方飛行機運用上ノ要求ニ於テハ精到ナル訓練ノモトニ多少ノ不便ヲ忍ベバ極メテ惡
候ノ場合以外概ネ飛行機ノ運用ハ時間的制限ガ少クナルガ、攻撃ヲ稍々大ナル編隊ヲ以テ行ハ
トスル時ハ天候氣象ノ制限ヲ受クル事ハ餘程多イ。極端ニ言ヘバ飛行ニ適スル時ハ湿度低ク且
日照多ク疫學的要求ニハ不利ナ時デアルトサヘ云ヒ得ル。從ツテ實際ノ攻撃ニ際シテハ兩者ノ要求ヲ
ル程度緩和シタ中間的状況ニ於テ行ハネバナラヌ事ガ多イ。現在ニ於テハ飛行機運用上ノ要求ノ
絶對性ニ比シテ疫學的要求ノ比較性ガ多イ故、最初ニ記シタ如ク疫學的要求ハムシロ從テニ取扱
ハレテキル状態ニ過ギナイ。

照準ノ爲ノ雨下風判定ニ對シテハ特ニ時間的制限ハナイノデアルガ此ノ爲ニ天氣圖或ハ某地
測風成績ヲ参照スル事ヲ必要トスルナラバ之ニヨツテ時間的ニ多大ノ制肘ヲ受ケル。又雨下風判
定ノ爲ニ地面ニ對スル飛行機ノ運動ヲ測定シ、或ハ煙ヲ利用スルナラバ之等ハ晝間ニ限ラレ、夜
間ニ於テハ照明劑ヲ利用シナケレバナライ。(照明双傘測風ニ關シテハ省略スル。)此等ノ方法
ノウチ或者ガ特殊ノ事情(例ヘバ企圖秘匿ノ關係上)ニヨツテ使用シ得ナイ時ハ之ニ從ツテ時間
的ノ制限ガ起ツテ來ル。

使用機種ハ高空雨下ト超低空雨下ニ於テ異ニスルヲ有利トスル。高空雨下ニ在テハ主トシテ搭
載量、超低空雨下ニ於テハ若干ノ搭載量ト運動性ヲ目途トシテ定マルモノデアル。

使用機數ハ主トシテ生産量ニ補給ノ能力ニヨリ又所望スル地上ノ濃度量ニ範圍ニヨツテ定
ラレル。同時ニ使用スル機數ノ増加ハ高空雨下ニ於テハ主トシテ濃度ノ増加、超低空雨下ニ在
テハ主トシテ範圍ノ擴大ヲ意味スルモノデアル。然シ乍ラ生産量ニ補給ガ如何ニ順調ニ行ハレ
トモ使用スル機數ニハ自ラ制限ガアル。全使用機數ハ作戰當時ノ状況ニヨツテ一定デハナイガ、又
目標ノ種類及距離、其ノ状況ニヨツテ一時ニ使用スベキ機數、換言スレバ同一目標ニ對シテ繰返
シ行フベキ攻撃回数ハ區々デアル。

原則トシテハ同一目標ニ對シテハ唯一回ノ攻撃ニヨツテ確實ナ効果ヲ獲ネバナラヌ。從ツテ確實
ニ効果ヲ得ベキ地上濃度ヨリ算定シテ使用スベキ細菌全量ヲ判定シ、實際上最適濃度ノ攻撃
材料ノ量ガ一時ニ使用スベキ機數ガ定マル。(又超低空攻撃ニ於テハムシロ地上濃度ヨリ直接所
要材料濃度ヲ判定シ使用機數ハ二次的ニ目標ノ範圍ニヨツテ定メル。)高空雨下ニ於テハ斯カル方
法ニヨツテ算定シタ機數ハ多クハ極メテ莫大ナモノトナル。即チ機數ハ細菌ノ感染力ノ函數ト
ツテ來ル。

例ヘバ特ニ「ベスト蛋等ニ於テハ斯カル方法ニヨツテ算定シテモ餘リ多イ機數ニハナラヌ。

從ツテ實際問題トシテ最小必要地上濃度ノ減少(細菌株ノ淘汰ニヨリ)ト最適使用濃度ノ増加
ニヨツテ尙機數ニ不足ヲ來ス場合ハ攻撃回数ヲ増加スル事ガ必要トナル。

此ノ回数ノ増加ハ尙高空雨下ニ於ケル命中精度ノ問題カラ考ヘデモ尙若干ノ豫備的増加ヲ許

ナラバ更ニ良好デアル。

同一目標ニ對シテ繰返シ行フ場合ノ攻撃ノ間隔ハ生産ト補給ガ順調ニ行ハレ又飛行機ノ整備狀
況ノ許ス限り短縮スルヲ可トスルガ、目標ノ防空施設ノ状況ニヨツテ一概ニ論ズル事ハ出來ス。
但シ斯カル波狀攻撃ノ爲ノ最短必要間隔ハ實際的ニハ問題トスル要ハナイ。

即チ編隊ガ相繼イデ同一經路ヲ通ル場合以外ハ、特ニ高度差ヲ豫定セズトモ同一目標ニ對シ
攻撃ヲ行ツテ實際的ノ危険ノ程度ハ極メテ少イモノデアル。超低空攻撃ニ於テハ同一目標ニ對ス
ル波狀攻撃ノ危険ハ少イガ、併列セル目標ヲ順次攻撃スル場合ハ風下ニ近キモノヨリ順次ニ行ヒ、
止ムヲ得ザル場合ハ若干ノ高度差ヲ指定スルヲ有利トスル。

然シ乍ラ編隊ヲ以テ行フ攻撃ニアツテハ常ニ編隊隊形ヲ以テ目標ニ進入シ得ザル場合ヲ考慮ス
ル要アリ、此ノ爲ニハ若干ノ副目標ヲ選定スルヲ常トスルガ、止ムヲ得ズシテ編隊ヲ解散シテ單
機攻撃ヲ行ハシムル場合ノ目標選定ニハ此等相互ノ地點的及時間的關係ヲ綿密ニ考量セネバナラ
ナイ。

編隊隊形ハ某機ニヨル雨下乃至撒布圈内ニ他機ノ入ラヌ限り自由デアル。即チ某機ノ直後方ニ
於テ該機高以下及該機幅ヲ避クナラバ、如何ニ接近スルトモ他機ニ及ボス危険ハナイト見做シ得
ル。攻撃操作實施後若干時間以内ハ殘留スル少量ノ材料ニヨル危険ガアルノデ上記區域ハ避クル
ヲ可トスル。自機ニヨル汚染ノ危険ハ殆ド無視シ得ル。但シ何等カノ故障ニ依ツテ機體ニ直接接
スル氣流内ニ攻撃材料ノ流出スル事ガアレバ機體内外ヲ汚染スルニ至ル。斯カル時ハ速カニ其ノ
徴候ヲ求メテ適當ノ處置ヲ講ゼネバナラヌガ、此ノ場合ニモ他機ニ及ボス危険ハ無イノデアル故
特ニ編隊隊形ヲ改變スルノ要ハナイ。

攻撃後ノ着陸ニアツテハ、機體外部ノ輕度ノ汚染ヲ伴フコトアルヲ顧慮シ、一般ニ速カニ機體
外部及滑走經路ヲ消毒スルヲ可トスル。

然シ前機ノ滑走路ヲ踏襲スル事ニヨル後機ノ危険ハ實際上顧慮ノ要ナク、又特ニ故障ニ依リ滑
走路ノ汚染著シト考ヘラレル場合以外ハ状況ニ應ジ滑走路ノ消毒ハ省略シテモ可デアル。(一般
ニ撒水消毒車ハ極メテ綿密ニ同一經路ヲ往復スル時以外ハ消毒ハ甚ダ完全トハ云ヒ難イ)

雨下乃至撒布器ノ使用後ノ消毒法ハ爾後ノ使用企圖ニヨツテ其ノ程度ヲ異ニスル。一般ニ消毒
ニ用ヒタ薬剤ヲ除去スルニハ消毒ニ要スル時間ノ數倍ノ時間ヲ必要トスルモノデアル故ニ、爾後
直ニ使用スベキ場合ニ於テハ要部ノ消毒ノミニ止メル場合モ多イ。

以上ヲ要スルニ雨下乃至撒布攻撃ニ於テハ飛行機ノ運用ノ條件ト疫學の條件ノ一致點ヲ企圖ス
ル攻撃時期ニ先立ツテ判斷シ適當ナル準備ヲ開始スル要アリ、常ニ兩條件ニ關スル着眼研究ヲ要
スルモノデアル。

第2 雨下氣象ノ判定

& 53

雨下氣象ノ判定ハ攻撃ノ成果ニ及ボス影響ガ至大デアル事ニ鑑ミ極メテ慎重ニ行ハネバナラナ

イ。

敵地=於ケル氣象ハ平時=於テスラ不明デアル事ガ多ク、特=戰時=於テハ氣象管制ガ先ツ行ハレルト見做サネバナラヌノデ、氣象情報ノ入手ノ困難ハ當然デアル。從ツテ吾人ハ豫想攻撃目標地區ノ諸地誌中特=氣象關係ハ總ニル機會ヲ利シテ調査シテ置カネバナラナイ。

敵地=於ケル氣象トシテ特=地誌的=取扱ハレルノハ氣候要素トシテノ氣象デアル事ガ多い。之ノ調査ハ攻撃ノ成果ヲ大ナラシムル爲不可缺デハアルガ、吾人ハ實際=攻撃=當ツテ必要ナルハ氣候要素の氣象デハナクシテ、攻撃當時ノ氣象デアル。疫學的ナ成果判斷=ハ此ノ兩者共ニ必要デアルガ、單=飛行機ヲ以テスル攻撃ノ見地カラハ氣候要素の方面ハムシロ從デアツテ、特=攻撃=當ツテハ此ノ方面ハ問題デハナイ。從來氣象トシテ主トシテ氣候要素の方面ノミガ注目サレテ來タノデ、將來ハ更=攻撃當時ノ雨下氣象ヲ如何ニシテ判定スルカラ研究シテユカネバナラナイ。

雨下氣象トハ略言スレバ地上氣象ト高層氣象ノ綜合デアル。地上氣象ハ攻撃=用ヒタ菌ノ地上=於ケル運命=對シテ絶對的ノ影響ヲ有スルノデアルガ、攻撃=際シテハ先ヅ目標地區=菌ヲ輸中セシメル事ガ先決問題デアルノデ、ムシロ高層氣象ノ研究ガ第一義デアルト考ヘテ差支ナイ。

高層氣象學ハ比較的近年ノ發達=關リ、從來ノ統計モ亦多クハナイ。又前言ノ如ク攻撃=特=必要ナルハ當時ノ狀況デアツテ、統計ノ價值ガ大=減殺サレテ了フノデアル。

特=雨下氣象ヲ一般ノ航空氣象ト分ケルノハ、之ガ特=當時ノ各高度層ノ風速ト飽差ノ綜合ヲ重視スルカラデアル。

一般=高層氣象=於テ氣團分析ガ重要視サレルノハ之ガ天氣=及ボス影響ノ大ナルガ故デアリガ、特=雨下氣象デハ之ノ結果ヲ利用シタ天氣ノ判斷ヨリモ、氣團分析=利用スル資料ソノモノガ重要ナルノデアル。雨下攻撃=ハ從ツテ斯カル高層氣象ノ資料ソノモノト、之カラ導イタ結果ノ兩者ヲ同時=必要トスルト考ヘタイ。

攻撃地區ノ雨下氣象ノ判定=利用シ得ルノハ從ツテ

- 1) 從來ノ統計
- 2) 當時ノ友軍占領地域内ノ地上及高層氣象
- 3) 攻撃飛行當時ノ某高度層ノ氣象諸元 デアル。

從來ノ統計ハ之ヲ統計其ノモノトシテ考ヘズニ、之ヲ其ノ各要素=分析シテ某地點間ノ相互ノ關係ノ狀況ヲ調査シ、又一定ノ型=於ケル目標地區ノ氣象ノ狀況ヲ判定スルノ資料タラシメネバナラス。

友軍占領地域内ノ氣象ハ割合迅速=綜合スル事ガ出來ル。之=ヨツテ攻撃當時ノ氣象ノ型ヲ豫知シ、又 3) ノ諸元ヲ適確=處理シ攻撃目標ノ雨下氣象判定ノ資料トシテ有効=使用スルノ基礎=ナルノデアルカラ絶エズ之ヲ怠ツテハナラズ、場合=ヨツテハ之ノミ=ヨツテ判定ヲ行ハネバナラス事ノアル事ヲ承知シテオカネバナラナイ。

攻撃當時=行フ氣象ノ觀測ハ極メテ重要デアル。之ノ手段及意義=關シテハ他=述ベタ通り

アル。

目標地區ノ雨下氣象判定ノタメ=ハ原則トシテ氣象偵察機ヲ先行セシメ、之ノ判定ノ結果=基イテ進入スル。之ガ爲=ハ氣象偵察機ト雨下攻撃機ノ運用ノ圓滑ヲ圖ルト共=氣象偵察者ノ判定=ハ一點ノ疑義ナキ事ヲ要スルノデアルガ、不測ノ事態ヲ考慮シテ雨下攻撃機=於テモ萬全ヲ期シテ雨下氣象判定ヲ怠ツテハナラナイ。

氣象偵察機ハ行動ノ輕快性ヲ利用シテ適時適所=判定ノ資料ヲ蒐集シ之ヲ綜合スル。トキ=得タル資料ハ速カ=攻撃機=通報シ置クヲ要スル。

氣象偵察ノ爲=ハ時=傘ヲ投下シ合成風ヲ測定スルガ、之ガ爲=攻撃ノ企圖ヲ敵=察知サレザル如ク其ノ地點=關シ深甚ノ考慮ヲ必要トスル。

氣象偵察ノ基準トナルノハ當時ノ氣團ノ狀況デアリ、之ヲ豫メ天氣圖及各地ノ高層氣象=ヨツテ豫知シ置カナケレバ得タル資料ノ判定=誤ヲ來ス惧ガアル。又飽差ノ判定ハ至難デアツテ、飛行高度=於テハ之ヲ測定シ得ルモ之ガ綜合ハ容易ナラズ、僅カ=當時ノ空中水蒸氣ノ凝結ノ狀況カラ推定スル=過ギナイ。

從ツテ此ノ點=於テハ氣團ノ狀況=基ク考察ガ是非必要トナル。飽差ノ綜合ヲ判決スルノハ之以上=出ナイ。止ムヲ得ヌ場合ハ一般ノ遞減率ヲ用ヒネバナラナイ。

目標地區ト離隔シタ數地點デ氣象觀測ヲ行ヒ、之等ヲ綜合シテ目標地區ノ雨下氣象ヲ判定スル=際シ、最モ留意スベキハ不連續面ノ存在ト之ガ傾斜狀況、即チ高度ノ變化デアル。目標地區=於ケル不連續面ノ高度ノ判定ヲ誤ルト攻撃ノ精度ヲ極メテ低下サセル=到ル。

雨下攻撃機ハ概シテ傘ヲ投下シテ合成風ヲ測定スルノ豫知ハナイ。原則トシテハ氣象偵察機ノ通報=依存スルノデアルガ、前=述ベタ様ニ、飛行高度層ノ狀況ノ變化ヲ常=測定シ、又水蒸氣ノ狀況、地上風ノ景況ヲ考慮シ、通報ヲ得ズトモ進入シ得ル程度=概略ノ雨下風ヲ判斷シテオカネバナラス。

雨下氣象ノ概要ハ別=記シタ通りデ、其ノ判定法モ既=示シタ所デアルガ、特=強調スベキハ地形ト地上風ノ狀況デアツテ、豫想攻撃地區=對シテハ常=研究調査ヲ怠ルベカラザル所デアル。

第3. 雨下高度=就テ

& 34

從來雨下攻撃ハ1000m以上カラハ不可能デアルト考ヘラレテ居タ様デアル。之ハ明カ=毒瓦斯雨下ノ場合=就テデアツテ、既存ノ化學物質ノ有効量ガ5~10gr/m²等ノ如ク莫大ノ量ヲ要シ然モ實際的=之ヲ満足スル=ハ理學的性狀ノ限定カラ巨大數ノ雨下機ヲ必要トスル故デアル。吾人ノ問題トスル新範圍=於テハ事情ヲ異ニシ、之ハ總ニル條件=制限ヲ受ケタ場合ノ事デアルノハ現在明カデアル。即チ雨下ノ理論的研究ノ不足ト、使用材料並=機數ノ不足=主因シテ居ルト考ヘラレル。滴粒ノ配分ノ研究、成形粒野ノ研究ハヨク雨下高度ヲ向上セシメル。(成形粒野=關シ

テハ尙着想ノ程度ニ止マリ此處ニハ省略シタ。

現在ハ尙不完全デハアルガ、近キ將來ニ於テハ高度ソノモノハ大シテ問題ニナラヌト推定スル。雨下高度ヲ大ニスル事ハ主トシテ飛行機ノ行動上ノ制時ト、時ニハ企圖ノ秘匿上カモ要セラレ、極メテ妥當ナ考慮デアル。然シ乍ラ、昨今ノ飛行機ノ性能ノ向上ハ状況ニヨツテ特ニ第一線ノ附近、或ハ更ニ敵地深ク入ツテサヘ極メテ低空ノ攻撃行動ヲ許スニ到ツテキルト考ヘイ。我々ハ此處ニ雨下攻撃ノ意義ヲ再検討シテ進ムベキニツノ、相當ニ距離隔シタ方向ヲ認メルノデアル。即チ高空雨下攻撃ト超低空雨下攻撃ノ兩法デアル。此ノ兩者ノ特徴ヲ考ヘテ見ル。

高空攻撃ニ於テハ、地上ニ到達スル有効量ヲ増大スルタメ、粒子ノ大サハ或限度以上ニ大キコトガ要求セラレル。之ハ攻撃ニ用フル種類ヲ比較的限制シテ了ヒ、人畜ノ氣道或ハ直接口腔、眼等ニ對スル有効攻撃ヲ斷念セシメルニ到ル。更ニ高空雨下攻撃ノ命中精度ノ低下ハ必然的ニ被攻撃物ヲ含ム比較的大地域ヲ目標トシテ選定セシメ、被攻撃物ニ對スル攻撃効果ハ蓋然性ニ委スルノ止ムナキニ到ルモノデアル。斯カル方法モ抵抗ノ大キイ或種類ノ兵器ニ對シテハ有効デアリ、或ハ企圖ヲ既ニ察知セラレタ場合ニ於テモ目標區域ノ廣大サカラ的確ナ處置ヲ講ズルノ途ヲ奪フ點ニ於テハ其ノ目的ヲ達成セルモノト考ヘラレル。

然ルニ被攻撃物ノ明瞭ナ集團、或ハ一定ノ限局サレタ小地帯ニ對シテ有効ナ攻撃ヲ實施セントスル時、更ニ之ニ對シテ有効ナ氣道攻撃ヲ行ハントスル時ハ既ニ高空雨下デハ其ノ目的ヲ達スル事ハ出來ナイ。此ノ目的ニ對シテ使用シ得ルモノハ投下彈及ビ超低空雨下攻撃ノ二者デアル。

投下彈ハ投下後低空ニテ噴射シ低空雨下ノ形式ヲ採ルモノト着發シテ噴射スルモノニ大別シ得ルガ、空中ニテ噴射スルモノハ其ノ高度規正ガ容易デハナイ。何レニ於テモ炸藥ノ力ニヨルカ或ハ大ナル落速ニヨツテ微細ナ粒子ヲ形成シ得ルノデ、着發ノ形式ニヨツテモ前記ノ目的ヲ達シ得ルモノデアル。シカシ場合ニヨツテハムシロ大キナ滴ノ要求セラレル事モアリ、炸藥量及ソノ位置彈肉ノ厚サノ分布ト滴ノ分裂ノ關係ガ更ニ検討サルベキデアル。投下彈ニヨル場合ノ不發ノ問題ハ信管數ノ増加ニヨツテ概ネ解決シ得ルモノデ敢テ之ニヨツテ投下彈ノ使用ヲ制限スベキモノデハナイト考ヘタイ。空中ニ於ケル噴射ハ高度規正ガ問題デアルノデ、粒子ノ流下距離ヲ豫定シテ豫メ目標ノ風上ノ某點ヲ照準シテモ、命中精度ハ或程度ノ制限内ニアル。殊ニ投下彈ノ一般性トシテノ粒子ノ微細ナル點ヲ考ヘル時ハ、高度ガ稍々過高ニナルト有効量ガ著シク減少スル事ノアルヲ考ヘテオカネバナラナイ。

此ノ噴射彈ハ形式トシテハ低空雨下ニ類似シテキルガ、兩者ノ特徴ヲ少シク考慮シテ見ル。

今簡單ノ爲ニ初發粒野ヲ爾後ノ自然擴散ヲ考慮ニ入レテ垂直及水平ナ半径 r ナル圓筒形ト考ヘ、其ノ平均高度ヲ H 長サヲ各々 L トスル。又全粒野ガ殆ド同一ノ大サノ粒子ヨリ成リ、其ノ落速ヲ v 全量ヲ A トシ、風速ヲ一様ニ w トスル。

水平粒野ノ風向ト成ス角ヲ x トスル。然ルトキハ地上粒野ハ次ノ様ニナル。

(風向ノ方向ヲ x 軸)

1) 垂直滴野ノ場合

$$x = \frac{\left(H - \frac{L}{2}\right)}{v} w \quad \text{ヨリ}$$

$$x = \frac{\left(H + \frac{L}{2}\right)}{v} w \quad \text{ニ涉ツテ存シ}$$

其ノ濃度ハ端末部以外ニ於テハ

$$C_v = 2\sqrt{r^2 - y^2} \times \frac{v}{w} \times \frac{A}{\pi r^2 L}$$

2) 水平滴野ノ場合

$x = \frac{H}{v} w$ ヲ中心トシテ、軸ト a ヲナス方向ニ長サ L ニ涉ツテ存シ、其ノ濃度ハ端末部以外ニ

$$C_h = 2\sqrt{r^2(v^2 + w^2 \sin^2 a) - (x \sin a + y \cos a)^2} \times \frac{v}{v^2 + w^2 \sin^2 a} \times \frac{A}{\pi r^2 L}$$

$$\text{但 } x = \left(X - \frac{H}{v} w\right)$$

特ニ $a=0$ ナレバ

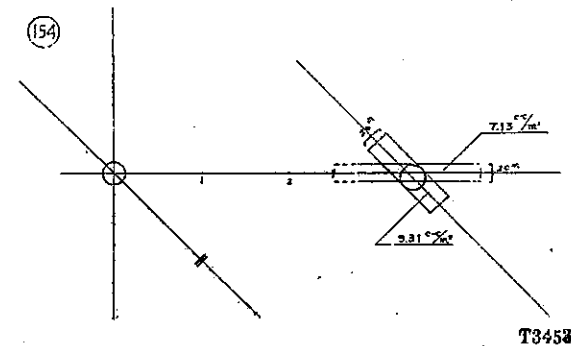
$$C_h = 2\sqrt{r^2 - y^2} \times \frac{A}{\pi r^2 L}$$

又

$$a = \frac{\pi}{2} \quad \text{ナレバ}$$

$$C_h = \sqrt{r^2 - x^2 \left(\frac{v^2}{v^2 + w^2}\right)} \times \frac{v^2}{\sqrt{v^2 + w^2}} \times \frac{A}{\pi r^2 L}$$

今 $\frac{A}{\pi r^2 L} = a$ トシ $v=3.0$, $w=5.0$, $H=200$, $L=100$, $a=45^\circ$ ノ場合ノ地上滴野ヲ例示スルバ次ノ様デアル。



即チ垂直粒野=ヨツテハ常ニ風ノ方向ニ地上粒野ヲ生ズルガ、水平粒野デハ風下ニ流下スルヲレド概ネ飛行方向ニ一致シテ地上粒野ヲ生ズルコトガ主ナル差異デアアル。特ニ氣道感染ヲ考フル場合ノ如ク、極メテ微少ナ粒ヲ作ル時ハ($v=1.0$ 程度)垂直粒野ノ生ズル地上粒野ハ極メテ長ク、且地上ノ一點ノ通過時間ガ極メテ短イコトヲ考ヘネバナラナイ。

水平粒野ノ a ガ小サイ時ハ此ノ時間ハ相當長イ事ガ期待サレル。特ニ上記ノ様ニ粒子ガ殆ト同一ノ大サデアアル時ハ地上粒野ガ飛行方向ニ一致スル事ニ着眼サレネバナラナイ。即チ目標ガアル方向ニ長ク配列シタモノデアアル時ハ飛行ハ概ネソノ長軸方向ニ一致セシメ必要ナル修正ヲ行ヘヨイノデアアル。

斯ノ如ク状況ニヨツテハ水平粒野ヲ作ル事ガ攻撃ノ成果ヲ上ゲルニ極メテ必要デアアル事ガアル。

勿論斯ル超低空雨下攻撃ハ其ノ直接人畜ニ對スル成果ヲノミ目途トスルノデアツテ、且同一目標ニ對シテハ1回ノ攻撃(數機ニヨル1回ノ波狀攻撃モ可能ナリ)ヲ以テ確實ナ効果ヲ得ネバナラヌ。企圖ノ秘匿ハ全ク不可能デアアル。攻撃機ノ危険モ若干増加スルデアラウ。

高空雨下ニ於テハ主トシテ量ヲ多クスル爲ニ重爆撃機級ヲ用ヒネバナラナカツタガ、超低空雨下ニ對シテハ斯カル攻撃行動ヲ許容スベキ輕快ニシテ多少ノ搭載量アル機種ヲ選定セネバナラナイ。又高空雨下ニ於ケル如ク單ニ濃厚ナ汚染地帯ヲ作ルノミデナク、時ニハ人畜ニ對スル直接汚染ヲ目途トスルモノデアリ從ツテ用フル菌種ニヨリ又攻撃ノ目標ノ種類ニヨツテ、生ズル粒子ノ大サヲ自由ニ加減シ得ベキ雨下器ノ構造ヲ有セネバナラナイ。之ハ又イササカモ飛行速度乃至機體性能ニ制シテ加フル如キモノデアツテハナラヌ事ハ勿論デアアル。

超低空攻撃ノ爲ニハ現地ノ地上風ヲ知り、尙附近ノ空氣運動ノ抵抗狀況ヲ概知シテオケバヨイ。又之ハ狀況ニヨツテハ第一線附近ニテモ行ハレ、斯カル時ハ友軍線内ノ氣象諸元ヲ利用シタル場合モ多イト思ハレル。

高空ト超低空ノ間ニ位スル攻撃ハ原則トシテハ存シナイ。之ハ唯狀況ニヨリ高空攻撃ノ變化ヲタモノトシテ行ハレ得ル。

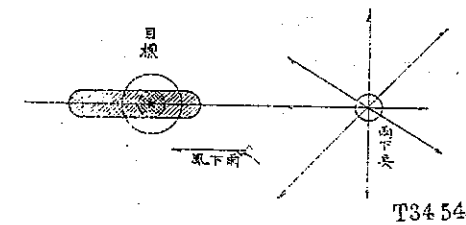
超低空攻撃ニ關シテハ我々ハ殆ト的確ナ實驗ヲ有シテ居ラナイ。特ニ空中濃度ノ時間的變化ニ關シテハ全然未知デアアル。然シ乍ラ特ニ將來進ムベキ方向ノ一ツトシテ此處ニ示唆スルモノデアアル。

第4 雨下進攻

& 55

雨下氣象ヲ判定シ攻撃ノ爲ノ雨下風ヲ決定シ終ラバ、一目標ニ對シ一定ノ高度ニ於ケル雨下布點ハ唯一デアアル。從ツテ該目標ヲ攻撃センガ爲ノ飛行航路ハ此ノ點ヲ通ル限リ任意デアアル。之ハ雨下経路ノ長サト自然擴散圈ノ幅ノ比ガ一ニ近い場合デアツテ、此ノ時ニハ地上滴野ハ該雨下點ト目標ヲ連スル方向ニ延長シ、最大濃度地帯ガ目標ニ一致スルコトトナル。雨下経路ノ長サ

自然擴散圈ノ幅ノ比ガ大ナル場合ニハ、地上濃度ハ雨下経路ト雨下風ノ爲ス角度ノ小ナル程大デアアル。



以下ハ前ノ場合ニ就テ検討シテ見ル。

雨下點ノ標示ハ

- 1) 獨立セル地上點
- 2) 目標トノ相對位置
- 3) 目標以外ノ地上點トノ相對位置 = 依リ

相對位置ハ

a) 幾何學的座標系

ニヨリ示サレルガ時ニハ

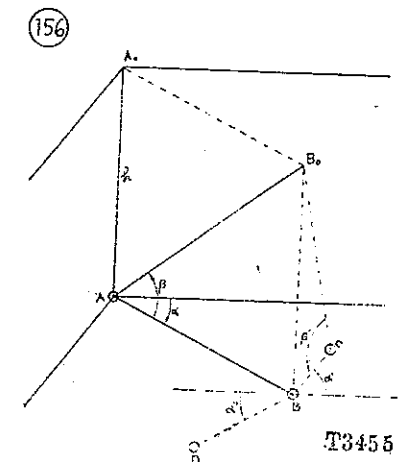
b) 長サガ時間ノ函數

トシテ表ハサレル。

今雨下高度 h 目標 A ナルトキ雨下風ヲ判定シテ雨下點 B_0 ヲ決定セルトキハ B_0 ハ次ノ如クニシテ表ハサレル。

(B ヲ B_0 ノ直下ノ地上點トスル。)

1. h, B
2. h, a, β
3. $h, a, AB (=tv)$
4. h, a', β'
5. $h, a'', DB (=t'v)$



上記各種ノ標示法ヲソノ得失ニツイテ考ヘテミル。著シイ風向漸變又ハ不連續面ノアノ場合ノ外ハ、落下粒ノ經路ハ近似的ニ B_0A ト考ヘラレル。

h ガ一定デアルト、 B_0 ノ直下ニ B ノ様ナ適當ナ獨立目標ヲ得ル事ハ先ヅ困難デアル。即チ演習場ニ於ケル如ク平素熟知ノ區域デ而モ精密ナ測地圖ノ在ル場合ニ於テモ、求メタ圖上點ヲ遠カラ識別シテ之ニ雨下機ヲ誘導スル事ハ容易デハナイノデアルカラ實際問題トシテ斯カル點ヲ利用シ得ル機會ハ少イトセネバナラス。

場合ニヨツテハ B ガ AB 線ト線ノ交點トシテ表ハサレル事モアル。

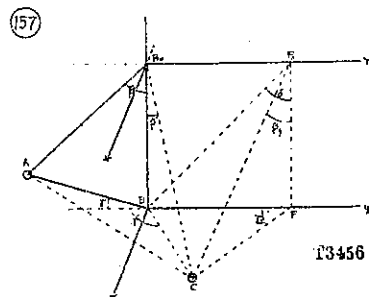
何レノ場合ニ於テモ 1) ノ標示法ヲ原則的ニ使用シ得ルトハ考ヘラレナイ。

D 又ハ C ノ如ク A 又ハ B トノ相對位置ノ明瞭ナ著明目標ヲ選定スル事ハ敢テ困難デハナイ。從ツテ 4) 又ハ 5) ノ方法ハ時ニヨツテ使用セラレ、殊ニ A ガ直視出來ヌ時、又ハ遠隔シテ隙ニ認メ難キ時ハ適宜 D 又ハ C ヲ選定シテ始メテ攻撃ガ可能トナル。一般ニ β ガ 20° 位ニナル目標ヲ精確ニ捕捉スルノハ困難デアツテ β' ノ様ニ大キイ角ヲ利用スル方ガ容易デアル。

4) 又ハ 5) ニ於テハ適當ナ D、C ノアル事ヲ前提トシ、且 A トコレノ點トノ關係位置ガ明デアル事ヲ前提トスルノデアルガ、場合ニヨツテハ兩條件、殊ニ後ノ條件ガ不充分ナ事モアリ、特ニ敵地ニ於テ然リトスル。

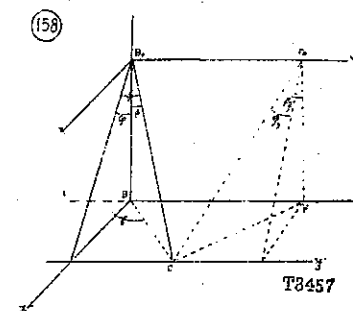
原則トシテハ 2) 又ハ 3) ヲ選定セネバナラナイ。

進攻ノ方法ハ B_0 ノ表現法ニ依ツテ異ル。一般ニ a ハ飛行針路ト一致シナイ。進入方法ハ航路ニ應ジテ任意ニ選定セラレルノデアルカラ、 B_0 ヲ通ズル航路ノ方向ヲ軸ノ方向トスル直交點ヲ採ル。



航路 YB 、ニ於テハ上記ノ如ク B ヲ直接照準セズ A 又ハ C ヲ照準スル事ニナルガ、航路ヲ斷シタ點ヲ基準トシテ進入スル事ハ普通ノ爆撃照準眼鏡デハ不可能ニ近イ。從ツテ、現制デハ「特一照準眼鏡」ノ型式ノ様ニ三方向ノ廻轉軸ヲ有スルモノヲ用ヒネバナラナクナル。特ニ此場合ニハ可動範圍ハ各軸間共ニ $+90^\circ \rightarrow -90^\circ$ ナル事ヲ便トスル。之ニ依レバ照準面ハ航路ト標(又ハ照準點)ヲ含ミ垂直面ト $\phi_r = \tan^{-1}(\tan \beta \sin \gamma)$ ナル角ヲナス平面デアツテ、航路上ノ點 F ニ於ル照準角ハ此ノ面内ニ於テ

$$\phi_r = \cos^{-1}(\cos \beta_r \sec \phi) \text{ デ表サレル。}$$



γ ハ任意ニ變ジ得ル量デアツテ、一般ニハ航路ヲ各種ノ要約ニヨリ決定スル時、之ト雨下點ノ目標ノ定方向ニヨツテ二次的ニ定マツテ來ル。航路ハ或ハ最短進入路ニ一致シ、或ハ γ ヲ特ニ選定スル事モ出來ル。此ノ時ニハ $\gamma=0$ トシタ方ガ進入ニハ最も便デアル。攻撃編隊ノ大キイ時ニハ γ ノ程度ハ方向變換運動ノ程度ノ大小ニ應ジテ決定セネバナラナイ。

高空雨下ニ在テハ氣象狀況ニヨリ攻撃目標ヲ直接照準シ得ヌ場合モ少クナイ。此ノ場合ヲ考慮シテ攻撃ニ當ツテハ爲シ得ル限り適當ニ副照準目標ヲ準備スルヲ要スル。副照準目標トシテ著明ナ獨立目標ヲ得ヌ時ハ線狀地物ノ交點又ハ線狀地物ト航路ノ交點等モ有効ニ利用セネバナラス。何レノ場合ニ於テモ精確ナ地形圖ハ特ニ敵地ニ對シテハ入手シ難イモノデアル故、豫想攻撃目標ノ附近ニ對シテハ機會アル毎ニ地點標定ヲ繰返シテ可及的精密ナ副目標網ヲ周圍ニ構成シ置ク様ニ努メネバナラナイ。

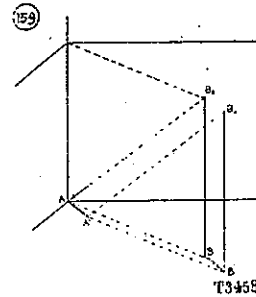
攻撃ニアツテハ特ニ地上ヨリ目視セラレズニ實施スルヲ有利トスル事ガ多イ。即チ雲ヲ利用スル場合デアル。勿論雲ノ利用ヲ唯一ノ條件トスル事ハ出來ナイガ、之ヲ利用シ得ル場合ハ飽差比較的小ニシテ、又攻撃高度ヲ概ネ雲高ニマデ低下シ得ルノ利ガアル。斯カル場合ニ於テ進入點ノ規準トシテハ勿論雲ニ被ハレザル地上點ヲ取ラネバナラズ、規準點ト攻撃目標トノ距離ハ雲ノ狀況ニヨツテ區々デアル。

一般的ニハ雲ニ被ハレザル地區ニ於テ飛行高度層ノ氣流ノ對地運動ヲ測定シ、之ト飛行機ノ對氣運動トノ合成經路ヲ判定シテ雨下點ニ到達スルモノデアル。斯カル方法ハ雨下點ト攻撃目標ガ甚ダ遠隔シ、然モ適當ナ副目標ヲ得ラヌ場合ニモ採用サレル。

& 56

以上ノ如キ各種ノ場合ニ於テ、其ノ根本トナルノ雨下點判定ノ方法ト時期デアル。攻撃目標ニ到ル前ニ充分ノ豫想ヲ以テ雨下點ヲ判定シ得タル場合ニハ各種ノ方法中最モ狀況ニ適シタルモノヲ選定シ得ルガ、豫メ各場合ニ於テ生ズル誤差ノ程度ヲ承知セネバナラス。

誤差 E ハ目標ト到達點ト距離ト AB ノ比ニヨツテ示サレル。次ニ各場合ニ於ケル最大誤差ノ程度ヲ考ヘテ見ル。



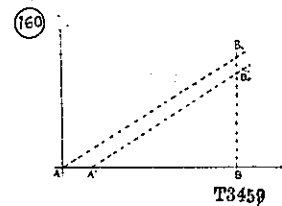
1) $h, B = \text{ヨル進入}$ (160)

此ノ場合、誤差ハ h ノミヨツテ起ル。高度計ノ誤差ヲ高度 $h = \text{於テ}$ a トスレバ

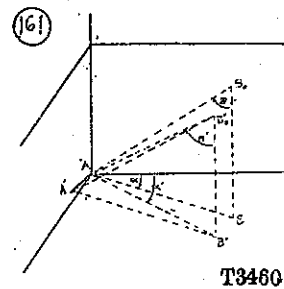
$$E = \frac{AA'}{AB}$$

$$= \frac{B_0 B_0' \times \frac{AB}{B_0 B}}{AB}$$

$$= \frac{B_0 B_0'}{B_0 B} = a$$



2) $h, a, \beta = \text{ヨル進入}$ (161)



今 $a' \sim a = \gamma'$ トスレバ

$$\overline{AA'}^2 = h'^2 (\tan^2 \beta' + \tan^2 \beta) - 2h'^2 \tan \beta' \tan \beta \cos \gamma'$$

今 $\beta' - \beta = \delta'$ トスレバ

$$\tan \beta' = \tan \beta + \delta' \sec^2 \beta + \delta'^2 \sec^2 \beta \tan \beta$$

$$\tan^2 \beta' = \tan^2 \beta + \delta'^2 \sec^4 \beta + \delta'^4 \sec^4 \beta \tan^2 \beta + 2\delta' \tan \beta \sec^2 \beta$$

$$+ 2\delta'^2 \sec^4 \beta \tan \beta + 2\delta'^3 \sec^4 \beta \tan^2 \beta$$

シカル $= \delta'$ ハ通常小サイノデ 3 乗以上ノ項ヲ省略スルト

$$\overline{AA'}^2 = h'^2 \{ \tan^2 \beta (1 - \cos \gamma') + 2\delta' \tan \beta \sec^2 \beta (1 - \cos \gamma')$$

$$+ 2\delta'^2 \sec^2 \beta \tan^2 \beta (1 - \cos \gamma') + \delta'^2 \sec^4 \beta \}$$

$$\overline{AB} = h \tan \beta;$$

$$\left(\frac{AA'}{AB} \right)^2 = \left(\frac{h'}{h} \right)^2 \{ (1 - \cos \gamma') + 2\delta' \sec \beta \cos \beta (-\cos \gamma')$$

$$+ 2\delta'^2 \sec^2 \beta (1 - \cos \gamma') + \delta'^2 \sec^2 \beta \csc^2 \beta \}$$

$$h' = h + ah$$

$$\therefore E^2 = (1+a)^2 \left(\frac{\gamma'^2}{2} + \delta'^2 \sec^2 \beta \csc^2 \beta \right)$$

$$= (1+2a+a^2) \left(\frac{\gamma'^2}{2} + \delta'^2 \sec^2 \beta \csc^2 \beta \right)$$

$$= \frac{\gamma'^2}{2} + \delta'^2 \sec^2 \beta \csc^2 \beta$$

即チ a ガ γ', δ' ト同程度ノ誤差デアル限り問題トナラナクナル。

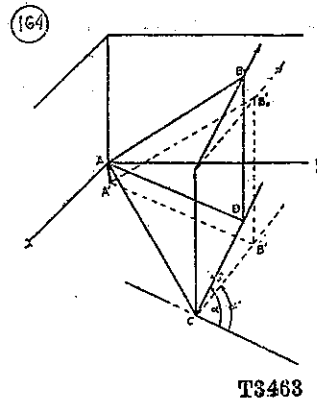
3) $h, a, AB (=f(t)) = \text{ヨル進入}$

$f(t)$ ハ一般ニ、 a 方向ノ對地速度ヲ V_G トシ $t = \frac{AB}{V_G}$ デ現ハサレル。

飛行層ノ氣流ヲ \vec{w} , 對氣速度ヲ \vec{v}_a デ現スト、 $\vec{v}_G = \vec{v}_a + \vec{w}$ デアル。 \vec{v}_a ラ一定ニ保ツ場合ニ、 \vec{v}_G ガ一定トナルカ否カハ \vec{w} ガ一定カ否カニヨツテ定マル。 \vec{w} ノ測定地點ト A 及 B ガ近接シテキル場合ニハ \vec{v}_G ノ誤差ハ測定誤差ノ範圍ニアルガ、之ガ稍々遠イ場合、或ハ氣流ノ旋衝運動ノ著シイ場合、或ハ不連續運動ノアル場合ニハ \vec{v}_G ノ誤差ハ \vec{w} ノ測定誤差ヨリ相當ニ大トナル事ヲ考ヘネバナラス。

故ニ \vec{w} ハナルベク AB ノ平均ニ近キモノヲ得ル様ニ測定結果ヲ多少修正シテオク必要ガアル。

\vec{v}_G ノ誤差ハ之ヲ $|v_G|$ ノ誤差ト a ノ誤差トニ分解シ得ルノデ、此處デハ a 及 v_G ニ各獨立ニ誤差ヲ生ズルモノト考ヘル



T3463

以上ノ運算ヲ行フ場合、各要素ノ誤差ハ獨立ニ變化スルト見做シタガ、實際ノ場合ハ或程度ノ關聯ヲ以テ變化スルモノデアル。

シカシ此ノ誤差ハ個人的ニモ、又其ノ時ノ條件ニヨツテモ異ルモノデアル故、一概ニ論ズルハ適當デハナイ。

次ニ此等ノ誤差率ニ實際ニ數値ヲ入レテ計算シテ見ル。此等ノ場合注意スベキハ、 γ 又ハ β ノ誤差ニ比シテ β ノ誤差ハ常ニ小イ事デアルガ、問題ガ略近ノデアルカラ、全部一樣ノ率ニ於テルト考ヘヤウ。

今各誤差ガ0.1デアルトスルト次ノ様ニナル。

$$1) \quad E^2 = a^2 \quad E = 0.1$$

$$2) \quad E^2 = \frac{1}{2} \gamma'^2 + \delta^2 \sec^2 \beta \operatorname{cosec}^2 \beta$$

β	0	10	20	30	40	45	50	60	70	80	90
E	∞	0.59	0.32	0.24	0.22	0.21	0.22	0.24	0.32	0.59	∞

$$3) \quad E^2 = (a+b)^2 + \delta^2 \quad E = 0.22$$

$$4) \quad E^2 = a^2 + 2a \frac{h}{D} \gamma' \sec^2 \beta \cos r + \left(\frac{h}{D}\right)^2 \delta^2 \tan^2 \beta$$

β	$\gamma = 0^\circ$				45°				90°			
	2.0	1.0	0.5	0.25	2.0	1.0	0.5	0.25	2.0	1.0	0.5	0.25
0	0.22	0.17	0.14	0.12	0.20	0.16	0.13	0.12	0.10	0.10	0.10	0.10
10	0.23	0.18	0.14	0.12	0.20	0.16	0.13	0.12	0.10	0.10	0.10	0.10
20	0.24	0.18	0.15	0.13	0.23	0.18	0.14	0.12	0.11	0.11	0.10	0.10
30	0.26	0.20	0.16	0.13	0.25	0.19	0.15	0.12	0.12	0.12	0.12	0.10
40	0.30	0.22	0.17	0.14	0.27	0.20	0.16	0.13	0.16	0.13	0.13	0.11
45	0.33	0.24	0.19	0.15	0.29	0.22	0.17	0.14	0.17	0.14	0.14	0.11
50	0.37	0.27	0.20	0.16	0.33	0.24	0.18	0.15	0.20	0.16	0.15	0.12
60	0.48	0.34	0.25	0.19	0.43	0.31	0.23	0.18	0.26	0.20	0.18	0.15
70	0.79	0.46	0.34	0.24	0.64	0.42	0.30	0.22	0.59	0.28	0.22	0.17
80	1.40	0.92	0.72	0.51	1.26	0.80	0.55	0.46	0.80	0.57	0.46	0.30
90												

T3939

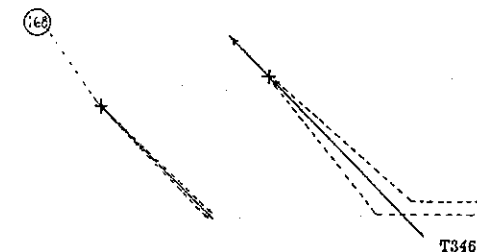
$$5) \quad E^2 = a^2 + 2\left(\frac{vt}{D}\right)ab \cos r + \left(\frac{vt}{D}\right)^2 (b^2 + \delta^2 \cos^2 r + b\delta \sin r \cos r)$$

γ	0	10	20	30	40	45	50	60	70	80	90
0.5	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16
1.0	0.22	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23
2.5	0.44	0.44	0.44	0.43	0.42	0.41	0.40	0.37	0.34	0.31	0.27
5.0	0.78	0.80	0.81	0.80	0.78	0.76	0.74	0.68	0.63	0.57	0.51
7.5	1.13	1.17	1.18	1.17	1.14	1.11	1.09	1.01	0.93	0.84	0.76
10.0	1.49	1.50	1.53	1.54	1.50	1.47	1.43	1.30	1.23	1.11	1.00
15.0	2.49	2.57	2.59	2.58	2.52	2.47	2.40	2.18	1.98	1.64	1.50
20.0	2.90	3.00	3.04	3.02	2.94	2.88	2.80	2.48	2.22	1.81	1.69
30.0	4.31	4.45	4.52	4.50	4.36	4.24	4.10	3.64	3.20	2.50	2.30
40.0	5.73	5.93	6.01	5.98	5.83	5.71	5.57	5.00	4.43	3.50	3.20
50.0	7.14	7.40	7.50	7.46	7.26	7.12	6.94	6.25	5.69	4.50	4.00
100.0	14.4	14.7	14.9	14.8	14.5	14.2	13.9	13.0	12.0	11.0	10.0
200.0	28.8	29.4	29.8	29.6	29.1	28.4	27.7	26.0	24.0	22.0	20.0

T3941

以上ハ各要素ノ誤差ヲ0.1ト見做シタ場合ノ最大誤差ノ程度デアル。此ノ内 a ノ範圍ハ修正ヲ適度ニ加フル事ニヨツテ概ネ器差ノ範圍ニ止ルト考ヘラレル。

β ノ誤差ハ極メテ小サイ範圍ニ止メ得ル。 a 又ハ γ ノ誤差ハ各狀況ニヨツテ異ルガ、特ニ個人ノ差違ガ大デアル。又進入ノ方法ニヨツテ異ル。 a ヲ一定トシタ場合ハ、或ル目標又ハ副目標ヲ通過シテ後此ノ方向ニ向フ場合ハ誤差ハ少イガ、或ル目標ニ對シ一定ノ a ヲ進入セントスル場合ハ一般ニ誤差ハ相當ニ大デアル。殊ニ編隊運動ヲ伴フ場合ハ此ノ誤差ヲ少クスル事ハ容易デナイ。此ノ場合ハ視程トノ關係及個人ノ差異ガ殊ニ著シイ。

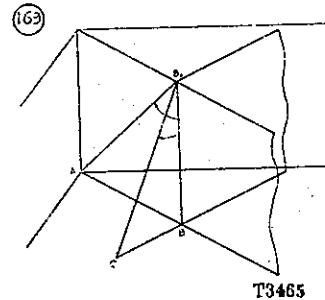


T3464

距離ヲ角度ノ代リニ時間函數デ示スノハ、 β ガ大トナリ照準點トノ距離大ニシテ明確ナ照準ノ不能ナ場合及 β ヲ以テ照準元ノトスル如キ適當ナ照準點ノナイ場合デアツテ、天候ノ關係ニヨリ目標地域ガ雲ニ被ハレル時雲ヲ利用シテ攻撃セントスル時ノ如キハ後者ニ屬スル。

此ノ場合對地速度ノ測定誤差ガ最大ノ要素トナルノデアツテ、爲シ得ル限り之ヲ頻回ニ修正シテ進入セネバナラナイノデアルガ、測定點ト進入基點(副目標C)ノ離レルホド或ル程度ノ誤差ハ免レナイ。理想的ニ云ヘバ測定點、進入基點及雨下點間ノ距離ガナルベク近イ事ガ望マシイケレド、實際問題トシテハ斯カル事ヲ原則トスル譯ニハユカナイ。

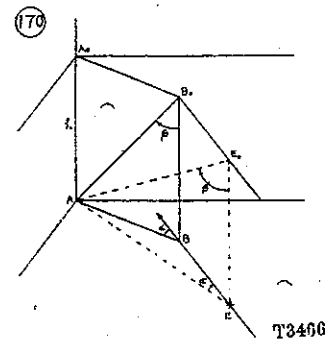
二軸系ノ照準眼鏡ヲ使用スル場合ニ直接目標又ハ副目標ヲ照準シテ雨下點ヲ決定スルニハ照準面ハ略々航路ヲ含ム垂直面デアルカラ航路ハ目標又ハ副目標ト雨下點ヲ結ブ方向デナケレバナシ。任意ノ方向カラ進入スルニハ雨下點ガ h, α, β デ示サレルト進入路上ニ於テハ $\tan \beta' \sin \alpha' = \tan \beta' \sin \alpha$ 即チ $\tan \beta' \sin \alpha' = \text{const}$ デアル様ニ誘導シテユカネバナラナイガ、之ハ極メ困難デアル。



從ツテ斯カル照準眼鏡ヲ用ヒル場合ニハ

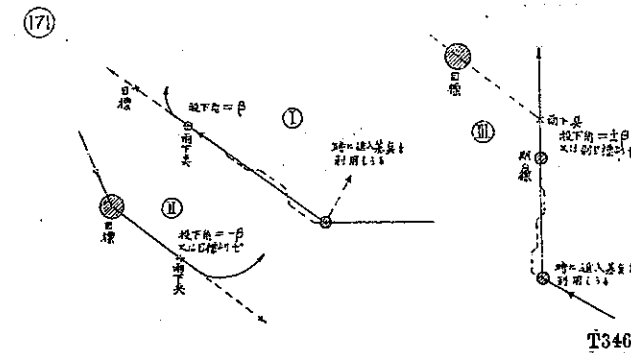
- 1) 雨下風方向(又ハ逆方向)=進入シ攻撃目標ヲ直接照準スル。
- 2) 副目標ト雨下點ヲ結ブ方向(又ハ逆方向)=進入シ副目標ヲ照準スル。

事が可能デアルノミデアル。故ニ適當ナル副目標ガナケレバ 1) = ヨリ、風床ニ入ラネバナ
ラナイガ、何レノ場合ニモ眼鏡ハ從來ハ $+90^{\circ} \rightarrow -5^{\circ}$ ノ範圍デアルノデ、時ニハ之ヲ逆ニ向
テ使用セネバナラナイカ或ハ時間的ノ表現ヲ加ヘネバナラナイ。



風床=進入スル時ハ雨下點ガ目標ヨリ相當ニ離レテ居ナイ限り風上ヨリ進入シテモ目標ノ上ニ
ヲ通過スル譯ニナルノハ止ムヲ得ナイ。

以上ノ進入法ヲ略示スルト次圖ノ様デアル。



氣象測定點、進入點及雨下點、目標點ノ氣象ノ相違ガ及ボス攻撃ノ精度ヲ考ヘテミル。

今飛行高度カテ地上ニ到ル間ニ風向變化ナク、風速ノ變化率モ一様デアル様ナ最モ簡單ナ場合ヲ考ヘ、雨下風ヲ風力ノミノ函數トシ、機軸方向ト之ニ直角ナ方向トニ風速ヲ分ケテ考ヘル。

W ヲ以テ進攻高度ノ風

W ヲ以テ雨下風

ヲ表セバ

氣象測定點	$w_x, w_y, W_x, W_y,$	} w_{3x}, w_{3y}
進入點	$w_{1x}, w_{1y},$	
攻擊點	$w_{2x}, w_{2y}, W_{2x}, W_{2y}$	
判定進入點	w_x'', w_y''	} $w_{x'''}, w_{y'''}$
判定攻擊點	w_x', w_y', W_x', W_y'	

實際ハ氣象測定點ノ氣象カラ w, W ヲ求メ、之カラ攻撃點ニ於ケル w', W' 及進入點ニ於ケル w'' ヲ判定スルノデアルガ、氣象測定點ト進入點ガ近ク、又ハ判定ニ充分豫猶ノナイ場合ニハ w, W ヲ以テ攻撃ノ基準トセネバナラナイ。

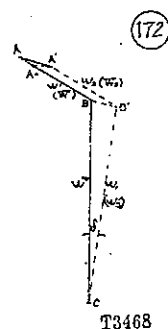
今 w, W カラ w' 及 w'', W' ノ判定シクトシ之ニ基イテ進入スル事ヲ考ヘヤウ。即チ 進入ニ當ツテハ $\frac{1}{2}(w' + w'')$ 及 W' ノ利用スルノデアルガ、多クノ場合ニハ $w' = w''$ ト判定スル事ガ多イ。〔攻撃點トハ雨下點ト 攻撃目標ノ平均ヲ以テ表ハサレル 如キ點ヲ意味シ、實際ハ此ノ間ノ距離ガ大キクナイノデ何レノ點カラ特ニ明ニ區別スル必要ハナイ。〕

進入基點カラ雨下點迄ノ距離ヲ V_G''/t デ表ハシ、之ニ從ツテ進入スル。此ノ場合ノ豫想偏流 a''' ハ

$$a''' = \tan^{-1} \frac{W'''_y}{V_a + W'''_x} \quad \text{又} \quad V_G''' = \left\{ (V_a + W_x''')^2 + W_y'''^2 \right\}^{\frac{1}{2}}$$

然ルニ眞ノ偏流及ビ對地速度ハ

$$\alpha_3 = \tan^{-1} \frac{W_{3y}}{V_a + W_{3x}} \text{ 及 } V_{3G} = \{(V_a + W_{3x})^2 + W_{3y}^2\}^{\frac{1}{2}}$$



故=真ノ到達點ト豫想到達點(即チ雨下點)ノ距離 $\overline{BB'}$ ハ

$$\overline{BB'}^2 = \overline{CB}^2 + \overline{CB'}^2 - 2\overline{CB} \overline{CB'} \cos \delta \quad (\delta = \alpha''' \sim \alpha_3)$$

$$\overline{CB}^2 = V_{3G}^2 t^2 = [(V_a + W_{3x})^2 + W_{3y}^2] t^2$$

$$\overline{CB'}^2 = V_{G'}^2 t^2 = [(V_a + W_{x''})^2 + W_{y''}^2] t^2$$

α''' 又ハ α_3 ハ一般ニ大シテ大キクハナイノデ、 $\alpha_3 = \tan^{-1} \frac{W_{3y}}{V_a + W_{3x}}$; $\alpha''' = \tan^{-1} \frac{W_{y''}}{V_a + W_{x''}}$ トシ、

δ モ從ツテ小サイカラ $\overline{BB'}^2 = (\overline{CB} - \overline{CB'})^2 + \overline{CB} \overline{CB'} \delta^2$ ト考ヘ、又 $w_s = (1 + \eta) w'''$ トシ、 η ノ自乗以上ヲ省略、更ニ $\frac{x}{V_a}$ 又ハ $\frac{y}{V_a}$ ノ自乗ヲ η ノ階級デアルト假定シテ上式ニ省略算ヲ

行フト

$$\overline{BB'}^2 / t^2 = \eta W_y V_a + \eta^2 W_x^2 + \eta^2 W_x W_y + \frac{2\eta^2 W_x W_y}{V_a + W_x} + \frac{\eta W_y^3 V_a + \eta W_y^2}{2(V_a + W_x)^2}$$

シカシ、例ヘバ $V_a = 100$, $w_x, w_y = 10$ ノ程度デアルト、 $\frac{W}{V_a}$ ノ程度ト η ノ程度ハ略ニ同様デアルノデ、上式ヲ更ニ省略シテ

$$\overline{BB'}^2 / t^2 = \eta W_y V_a + \eta^2 W_x^2 - \eta^2 W_x W_y$$

トモ考ヘラレル。(上式ノ w ハ w_s ノ意味デアル。)

然ルニ、Aヲ基點トシテ照準スル場合ニハ生ズル誤差 AA_s ハ $W_s \sim W'''$ デアリ、之ハ假定ヨリ $AB \times \eta$ = 相當スル。從ツテAヲ基點トシテ照準スル時ノ誤差率ハ η ノ範圍内ニアルガ、他ノCヲ基點トシテCBヲ $V_{G'}/t$ デ表ハシテ進入スル時ノ誤差ノ範圍ハ $AA' = AA_s + BB'$ デアツテ

$$AA' = AB\eta + (\eta W_y V_a + \eta^2 W_x^2 - \eta^2 W_x W_y)^{\frac{1}{2}} t$$

ノ範圍内ニアルカラ、地上點ヲ直接照準スル場合ニ比シテ

$$(\eta W_y V_a + \eta^2 W_x^2 - \eta^2 W_x W_y)^{\frac{1}{2}} \times \frac{t}{x} \quad \text{ダケ範圍が大キイ。}$$

η ノ程度ハ注意スレバ或ル程度ハ減少スルケレドモ、之ハ測定誤差ノ他ニ判斷ニ基ク誤差ト

ノ構造ニ基ク誤差ガ加ハリ必然的ナモノデアルノデ、吾人ハ前ニ述ベタ誤差ノ範圍ニ關スル考察ト併セテ、特ニ必要ノナイ限リ此ノ方法ヲ原則トハ出來ナイ。但シ例ヘバ高度低下、企圖秘匿ノ點ニ於テ攻撃精度ノ不良ヲ補ツテ餘リアル程度ノ利益ガアリ、且目標地區ナルモノヲ充分大キク取り得、材料豊富デアル場合ニハ大イニ推賞サルル進入法デアル。

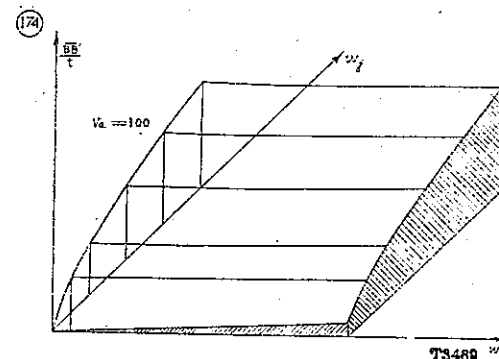
前ノ場合ニハ $\frac{V_t}{x}$ ノ變化ニ應ジテEヲ省略算シテ見タガ、此處デハ $\eta = 0.1$ トシ V_a, W_x, W_y

ノ異ル値ニツキ $\frac{\overline{BB'}}{t}$ ヲ算出シテ見ルト次ノ様ニナル。

(173) $V_a = 100$

$\frac{W}{V_a}$	0	2.5	5.0	7.5	10.0	15.0	20.0
0.0	0.00	0.25	0.50	0.75	1.00	1.50	2.00
2.5	5.00	5.00	5.01	5.03	5.07	5.18	5.34
5.0	7.07	7.06	7.07	7.08	7.10	7.17	7.28
10.0	10.00	9.99	9.98	9.99	10.00	10.03	10.10
15.0	12.25	12.24	12.23	12.22	12.23	12.25	12.29
20.0	14.14	14.13	14.11	14.10	14.10	14.11	14.13

T3942



之ニヨツテ見ル如ク、一般ニ w ハ V ニ比シテ小サイノデ、 V ガ最モ大キナ役割ヲ演ジテ居ルケレドモ、之ハ攻撃スル機ニトツテハ略ニ一樣ノ値ヲトルカラ誤差ヲ生ズル主ナ原因ハ w_y ノ大ニナルト云ヘル。

t ハ一般ニ $100''$ 位デアレバ氣象ノ相異ニヨル誤差モ少イケレド、雲ヲ利用シテ攻撃スル場合ノ様ニ之ガ大キクナツテクルト之ニヨル誤差ノミモ相當ニ大キクナツテクルノヲ免レナイ。

& 57

以上ヲ以テ各種ノ進入方法ノ標示ト其等ノ場合ノ誤差ノ程度ニツイテノ考察ヲ終ル。特ニ精度ヲ要求セラレタ場合ハ地上ノ目標又ハ副目標ニ對シテ照準シ、地上カラ目視サレヌ事ヲ第一條件トスルトキハ精度ヲ犠牲トシテモ某基點ヲ求メテ雲上又ハ雲中ヲ飛行シテ雨下點ニ到ラネバナリ。

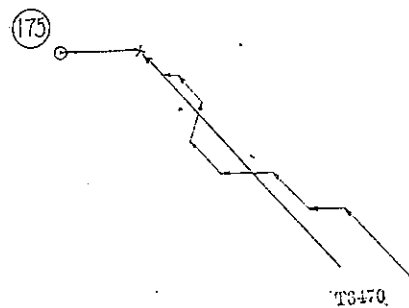
然シ實際ノ攻撃ハ上ノ様ニ單ナル理想ノミニヨツテ進捗スルモノデハナイ。時ニ目標ヲ捕捉シテ攻撃ノ精確ヲ期セントシテモ偶ニ目標地帯ガ雲ニ被ハレ、此ノ下層ニ出デ又ハ間隙カラ地上ヲ標定スルコトモ出來ズ、雲界以外ニ於テ地上ヲ再確認シテ進入ヲ再起セネバナラス事モ起リ、或ハ雲上(中)ヲ飛行シテ攻撃點ニ近迫シタ時偶ニ雲ノ間隙ニ遭遇シ再ビ地上ノ標定ヲ行フ事モアル。

要ハ敵地ノ天候ガ正確ニ知リ得ザル事ニ基クノデハアルガ、何レノ場合ニ於テモ進入ハ常ニ一

ツノ方法=ノミ依存シテハナラナイ。之ガタメ雨下攻撃=當ツテハ常=攻撃地區=於ケル雨下
象ノ判斷ヲ怠ツテハナラヌト同時=、現在地點ノ標定ヲ圖上=於テ連續的=行ヒ總ニル進入方
=對シ常=進入諸元ヲ準備シ、且地上點ノ標定ハ目標地區=近接スル=從ヒ任意ノ時期=任意
地點ヲ基準トシテ進入シ得ル如ク特=精密正確ナルヲ要スルノデアル。

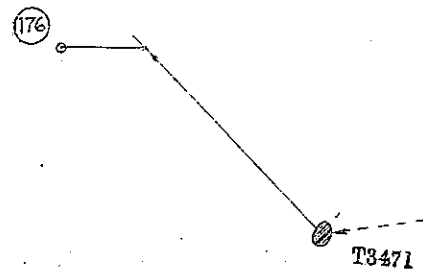
雨下點ヲ通ズル任意ノ方向ノ航路=於テ、直接目標ヲ照準シツツ進入スル事ハ一般ノ爆撃進入
=比シテ容易デハナイ。之ハ雨下風ト航路ノナス角が大ナル程困難デアル。又雨下點ト目標
連スル線上=航路ヲ求メントスル事、即チ前記ノ角度ヲ0ナラシムル事サヘモ簡單デハナイ。此
ノタメ、雨下進入ハ一般ノ爆撃進入=比シテ比較的遠カラスル事ガ必要デ、漸次補正シツツ雨
下點ヲ通過スル様=シナケレバナラナイ。

雨下攻撃デハ爆撃ト異リ操作時ノ機ノ運動ハ影響ガナイノデアルカラ、雨下點=近接シテ機
誘導スル事ハ差支ナイ。此ノ場合方向指導ハ爆撃ノ場合ト異リ操縦者ハ方向指導=ヨリ進路ヲ變
ジテモ又直チ=豫定ノ方位=復サネバナラズ、雨下ノ進入經路ハ一般=階段狀ヲ呈シテ來ル。之
ハ照準者ガ羅針儀=ヨツテ現在ノ位置カラ直=雨下點=對スル方位ヲ判定スル事ガ不可能=近
故デアル。進入以前=豫定方位=對スル偏流=對シテハ修正シ置クラ要スルハ勿論デアル。



此ノタメ豫定進入路=對シ豫メ進入ノ基點トナル副目標ヲ選定スル事ガ出來レバ極メテ便
ル。即チ先ヅ此ノ副目標=向ヒ進入シ此ノ直上=於テ變針シテ雨下點=向ヒ進入スル。

進入經路ヲ時間ノ函數トシテ表ハシタ時ハ勿論此ノ方法=依ルヲ便トスル。直上通過=際
測秒時計ヲ作働スル。



最も重要ナルハ攻撃點=於ケル雨下風判定ノ時期デアル。之ヲ過早=行ヘバ進入ハ豫猶ヲ以テ
行ヒ得ルガ、攻撃ノ精度ヲ不良トスル=到ル。併シ之ヲ進入直前=マデ延引スル事ハ周到ナ進入
行ヒ得ザル事トナルノデ、決定ハ之ヲ進入直前マデ保留スルトシテモ、常=漸定的=雨下風ノ
判定ヲ行ツテキナケレバナラズ、進入準備行動=就クベキ時期以後=於テハ特=重大ナ訂正ヲ行
ハザル限リ進入諸元=大ナル改變ヲ行フベキデハナイ。

進入諸元ノ決定及改變=當ツテハ特=操縦者ト爆撃者トノ連繫ノ緊密ヲ必要トシ、之ガタメ雨
下攻撃者ハ攻撃動作=關シ以心傳心相互ノ意圖ヲ了解シ得ル程度ノ一致セル精神ヲ平素ヨリ養成
シ置ク必要ガアル。

雨下操作ハ照準以外=各種ノ辨ノ操作ヲ含ミ若干時間ノ豫猶ヲ必要トスル。此ノ時間ハ操作
(爆撃)者ノ慣熟ト操縦者トノ連繫ノ緊密=ヨツテ極メテ短縮セラレル。

雨下=當ツテハ流出時間ヲ考慮シ、流出時間ノ中央ヲ雨下點=一致セシムル如ク工夫セネバナ
ラナイ。

雨下終了後ノ攻撃地區ヨリノ離脱=當リ特=考慮スベキハ殘存材料=ヨル僚機ノ汚染デアル。
殘存材料=ヨル危險ハ消毒操作終了迄ハ持續スルノデアルカラ、雨下後直=之ヲ行ヘバヨイノデ
アルガ、稍々複雑ナ操作=屬スルノデ之ヲ攻撃地區ヲ離脱シテカラ行ハントスル場合ガ多イ。從
ツテ雨下終了後ノ旋回時ハ特=僚機ノ直後方=入ラス様=注意セネバナラナイ。併シ零機長幅程
度ノ編隊デアツテモ特=機幅ヲ大ニスルノ必要ハ認メラレナイ。又雨下點附近ヲ再度通過スル場
合、同一編隊ガ復行シテ通過シタトシテモ高度ヲ特=低下スル場合以外ハ實際的=危險ハナイ。
編隊ガ他ノ編隊ト同一ノ進入諸元ヲ以テ攻撃スル場合、原則的=ハ同一ノ雨下點ヲ通過スル譯デ
アルカラ前編隊ノ作ツタ空中粒野中ヲ飛行スル可能性ハアリ得ルガ、粒野ノ性狀ト進入ノ誤差
ノ兩點ヨリ考慮スレバ後ノ編隊ガ特=高度ヲ低下シテ至短時間後=攻撃ヲ繰返ス場合デナケレ
バ、即チ實際的=同一高度デ攻撃スル場合=ハ之ヲ考慮スル必要ハナイト信ズル。

超低空雨下=於テ同一目標=對シ單機ガ波狀攻撃ヲ行フ場合、原則=記シタ如ク若干此ノ點=
關シ注意セネバナラナイノデアルガ、高度ト經路ヲ若干ヅツ變フル如ク(實際=ハ同一經路ヲ通
ル事ハ却ツテ困難デアラウト考ヘラレルガ)區處シ得レバ此ノ場合=於テモ特=前機ノ粒野ノ危
險ヲ過大=評價スル要ハナイモノト考ヘタイ。

XII 考 按

& 58

以上ヲ以テ吾人ノ從來踏ミ來ツタ方向ト將來特=必要ト感ジタ研究方針=對スル若干ノ示唆ト
ヲ終ル。此處=吾人ガ現在雨下撒布=對シテ抱イテ居ル私見ノ僅カラ披瀝スルヲ適當ト考ヘル
ガ、苟モ事ノ極メテ重大ナ機密事項デアル關係上雨下撒布ノ現況トハ全く別箇=、而モ全く實驗
的根據ナシ=、即チ從來各國ノ文獻=見ラルル所ヲ綜合シテ語ル程度ノ自由ヲ有スルノミデアル。

從來所謂 BK =關シテ述ベラレタ文獻=徵スル=必ズ航空機ヲ以テスル細菌ノ雨下乃至撒布

ガ論ゼラレテ居ル。之ヲ比較的具體的ナ立場デ若干ノ實驗的根據ヲ以テ書イタモノハ（少クトモ現在ニ於テ防研内藤良一少佐ノ好意ニヨリ參考トスルヲ得ル限リデハ）1937年 Helmut Klotzニ依ル „Der neue Deutsche Krieg” 中ノ細菌學の兵器ナル項ニ見ラレル程度デアル。之ニ對シテ判斷サルル限リ該雨下器ハ極メテ優秀ナ性能ヲ具ヘテ居ル様デアルガ、而モ尙風ニ依ル該ノ大キナ事ヲ論ジ、雨下法ヲ臨機的ナ兵器(Gelegenhitswaffe)デアルト斷ジテ居ル。

他ノ文献ニ到ツテハ單ニ雨下撒布攻撃法ノ存在ヲ認メル程度デアツテ特ニ參考トスベキ物ハナシ。各國ニ於ケル現況ガ如何ナルモノデアルカ全然不明デアル。

概シテ兵器ニハ一定ノ效果ヲ豫期スル事ガ必要デアツテ效果ノ動搖スル限リニ於テハ之ヲ定量的ト考ヘル譯ニハユカナシ。細菌兵器トシテノ最後ノ目標ハ流行ヲ惹起スル事デアル。之ニ對シテ現在ノ細菌學乃至流行病學ノ知識ハ何等決定的ナ事項ヲ示スモノデハナシ。或ル細菌ガ如何ニシテ感染ヲ起シ更ニ流行ニ迄發展スルカ、之ガ爲ニハ如何ナル外的及内的ノ條件ガ必要デアルカハ全ク未知ノ領域デアル。

例ヘバ或ル細菌ガ吾人ノ身邊ニ如何ニ多數ニ存在スル場合ニ於テモ、此ノ存在自身ハ何等ノ意味ヲ持ツテ居ラナイ。之ガ吾人ノ體內ニ侵入スル経路ガ存在シ得ル場合ニ始メテ細菌ノ存在ノ危險性ガ現レル。而モ尙問題ハ之ノミニ止ラナイ。此ノ媒介ノ経路ニ依ツテ侵入ヲ可能ナラシメラレル細菌ノ量ト毒力ガ吾人ヲ發病サセル程度ニ達到ルカ、（之ハ勿論當時ノ吾人ノ素因ニ從ツテ變化スル量デハアルガ）否カガ考ヘラレル。更ニ之ガ流行病ニ迄發達スルニハ當時ノ一般人ノ素因ノ綜合、細菌ニ及ス外因ノ條件ノ綜合及ビ社會的環境ガ極メテ適當ニ組合ハサレタ事ガ必要デアル。現在ノ細菌學ガ之ニ對シテ果シテ何物ヲ提示シテ呉レルデアラウカ。之等ノ諸條件ヲ越シ得ル場合ニ始メテ細菌ハ定常的ナ兵器デアリ、此等ノ或ル條件ヲ有利ニ利用シ得レバ其ノ時ニ於テハ臨機的ナ兵器デアル。各國ノ目標ハ果シテ何レニ向ツテ居ルモノデアラウカ。吾ガ國民ノ將來性ヲ熟考スル時、斯カル諸外國ノ動向ニ對シ全ク無關心タリ得ヌノデアル。

雨下乃至撒布ニ依ツテ吾人ハ細菌ヲ正ニ地上ニ到達セシメル事ガ出來ル。場合ニ依ツテハ自ラ媒介者タリ得ルモノモ在ルデハアラウガ、少クトモ吾人ノ次ノ目標ハ地上ニ置ク事ノ出來タ細菌ヲ一般的ニ體內ニ侵入セシメルノ方策デナケレバナラナイ。此處ニ大イナル飛躍ノ必要ヲ認メル。之ニ關シテハ此處ニ述ベキ範圍ヲ超越スルノデ省略シヤウ。

雨下乃至撒布ノ長所ト短所ハ上ニ述ベタ各章ニ於テ明カデアルト信ズル。吾人ハ之等ヲシテ定常的ナ效果ヲ發揮セシムベキ研究方向（極メテ廣汎多岐デハアルガ）ヲ認識シテ之ヲ等閑ニ附セラン事ヲ望ムモノデアル。

以上ニ於テ吾人ハ之ニ對スル防禦ノ手段ヲ全ク考察シナカツタ。之ハ皇國多難ナル時何時カ大ニ問題トナルモノデアル。吾人ハ之ニ關スル何等ノ知識ヲ有シナイ。雨下乃至撒布自身ニ對シテ防禦手段ハ積極的ナ制空權ノ獲得以外ニハ無イト信ズル。併シ乍ラ時ニ少數ノ敵機ガ侵入シテ防禦手段ヲ行使スル事ヲ全ク念頭外ニ置ク事ハ出來ナイ。斯カル手段ハ多クハ認ムベキ何等ノ微ナシニ執ラレルデアラウ。即チ吾人ハ常ニ斯ル可能性ノ存在ヲ考慮シ、第一微候ノ發スルト共

直チニ之ガ防遏手段ヲ講ジ得ベキ大ナル防疫編制ト裝備、更ニ大ナル資材ノ準備ヲ等閑ニスル事ノ如何ニ危險デアルカラ想念シ、世界情勢多端ナルト共ニ一日モ早く此等ノ整備ヲ完了サレン事ヲ切望スルモノデアル。

（最後ニ御多忙中ニ拘ラズ御閱讀ノ勞ヲ賜ツタ増田美保大尉殿ニ深謝スル。）

陸軍軍醫學校防疫研究報告
第2部 第791號

活 動 報 告

しろねずみヨリ分離セル「ゲルトネル菌」ノ菌型

陸軍軍醫學校防疫研究室（部長 石井少將）

陸軍軍醫少佐 淺 見 淳
同 金 子 順 一
丸 山 正 夫



第 2 部
原 著
分 類 434—8 381—3
受附 昭和 19. 1. 17

1. 緒 言

鼠類ニ由來スル「サルモネラ屬菌」ニ就テノ研究ハ極メテ多ク、本邦ニ於テモ飯豐、添川、大坪、井手、八田、中黒、溝上等々枚舉ニ違ノナイ程デアル。例ヘバ野鼠カラハ *S. ent. 1.* (中島)⁽¹⁾ 八田、井手)、*S. ent. var. chaco* (井手)、*S. ent. var. danysz* (八田、井手)、*S. mikawasima* (八田)、*S. typhi murium* (溝上) 等又しろねずみヨリハ添川、大坪及井手等ハ *S. ent. var. chaco* ヲ記載シテ居ル如キデアル。

余等ハ昭和18年初夏當研究室デしろねずみカラ得タ菌株ニ就テ若干検査シタノデ次ニ報告スル。

註：上記しろねずみトハだいこくねずみヲ指スガ、野鼠ハのねずみノコトデハナク、いへずみ、どぶねず等ヲ指シテ居ル。

2. 材 料

防疫研究室デ保管中ノしろねずみノ斃死スルモノヲ連日細菌學的、病理組織學的ニ検査シタ、昭和18年5月1日カラ7月下旬ノ間ニ取扱ツタ366匹ニ就テ、心血、肝、脾、腸(主ニ小腸下部)ヲ「カウフマン増菌法以下型ノ通り」處置シ、中106匹カラ分離シ得タ「サルモネラ屬」ト思ヘルモノ169株デアル。

對照株ニハ「サルモネラ」委員會分與ノモノヲ用ヒタ。

3. 試 験 方 法

小島、八田「食物中毒菌」(昭和15年)ニ準據シタ。但シ粘液堤形成ハ中黒・淺見法ニヨリ、又因子血清ハ防疫學教室調製ノ乾燥血清ニヨリ行ツタ。食餌試験ハ「パン」ノ代リニ麩ヲ用ヒタ。

4. 試 験 成 績

第1表乃至第4表ノ様デアル。

169株ハ生物學的及血清學的の性状ガ全ク一致スルノデ、表ニハ内20株ノミヲ記シテアル。

抗原構造決定ヲ目的トスレバ、本菌ニヨル免疫血清ヲ更ニ試験スベキデアルガ、別表ノ成績ニ依ツテ本菌ガ總テ *S. enteritidis 1.* ニ一致スルト認メタノデ、之ヲ省略シタ。

第 1 表 培 養 性 状 表

菌株名	形 (單染色) 態	運 動	グ ラ ム 染 色	イ ン ド ー ル 反 應	ラッセル培地		中 性 紅 寒 天	ラ ク ム ス モ ル ケ	醋 酸 鉛 寒 天	牛 乳 培 地	粘 液 堤	糖 加 ペ プ ト ン 水														
					斜 面	高 層						グ ル コ ー ゼ	マ ン ニ ツ ト	ズ ル ヂ ツ ト	ソ ル ビ ツ ト	イ ノ ヂ ツ ト	マ ル ト ー ゼ	ア ラ ビ ノ ー ゼ	ラ ム ノ ー ゼ	キ シ ロ ー ゼ	ト レ ハ ロ ー ゼ	デ キ ス ト リ ン	ア ド ニ ツ ト	ザ リ チ ン	サ ツ カ ロ ー ゼ	ラ ク ト ー ゼ
84 D	短小ナル桿菌	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
131 D	僅ニ短型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
413 L	短型太シ	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
413 D	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
414 D	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
417 L	短型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
418 D	短型僅ニ太シ	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
418 L	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
419 D	短型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
419 L	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
420 D	短型僅ニ太シ	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
421 L	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
424 L	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
425 D	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	±	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
426 D	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
427 L	僅ニ太シ	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
430 L	僅ニ短型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
431 D	僅ニ長型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
435 L	短型太シ	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
436 D	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S64	enteritidis	長型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S65	dublin	僅ニ長型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S66	rostock	僅ニ短型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	±	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S67	moscow	長型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S68	dlegdam	//	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	±	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S69	berta	短型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S70	eastbourne	僅ニ短型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S 1	paratyphi A	僅ニ長型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S 3	// B	短型太シ	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
S33	// C	長型	+	-	-	-/⊕	⊕	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-

備考 表中 D ハ腸、L ハ肝臓ヨリ検出セルモノヲ示ス。

第3表 凝集反應

	定 量 的 凝 集 反 應				因 子 血 清 = 依 ル 坑 原 分 析																					
	PA (×)	PB (×)	PC (×)	G (×)	O 一 血 清								H 一 血 清													
					I	II	IV	V	VI	VII	IX	I 一 相											II-相			
												a	b	e	h	f	g	m	t	c	p	u	q	1.2	1.5	
D	100	200	200	3200							+						+	+								
D	400	200	200	3200							+							+	+							
L	800	200	200	6400							+							+	+							
D	800	200	200	6400							+							+	+							
D	800	100	100	6400							+							+	+							
D	800	200	—	6400							+							+	+							
L	800	200	200	6400							+							+	+							
D	400	200	100	3200							+							+	+							
L	800	100	—	6400							+							+	+							
L	800	200	100	6400							+							+	+							
D	800	200	200	6400							+							+	+							
L	400	100	100	3200							+							+	+							
L	400	400	100	6400							+							+	+							
D	200	800	—	6400							+							+	+							
D	200	800	—	6400							+							+	+							
L	200	800	—	3200							+							+	+							
L	100	800	—	6400							+							+	+							
D	100	800	—	6400							+							+	+							
D	200	800	—	6400							+							+	+							
D	100	800	—	6400							+							+	+							
64	200	800	—	6400							+							+	+							
65	400	800	—	6400							+							+				+				
66	200	400	—	3200							+							+				+	+			
67	400	800	—	3200							+							+						+		
68	200	800	—	6400							+							+	+						+	
69	100	800	—	6400							+						+	+			+					
70	200	400	—	6400							+						+	+								
71	3200	400	400	200	+	+							+													
73	200	3200	200	1600			+	+						+											+	
73	200	200	6400	100						+	+										+					+

第2表 鑑別培養表 (「ビッター・シモンズ」)

菌 株 名	ビッター培地				シモンズ培地			
	アラ ビ ノ ー ゼ	ツ ル デ ツ ト	グ ル コ ー ゼ	ラ ム ノ ー ゼ	アラ ビ ノ ー ゼ	ツ ル デ ツ ト	グ ル コ ー ゼ	ラ ム ノ ー ゼ
84 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₁
131 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₁
413 L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
// D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
414 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₁
417 L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
418 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₁
// L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₁
419 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
// L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
420 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
421 L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
424 L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
425 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
426 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
427 L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
430 L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
431 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
435 L	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
436 D	+	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₂
對 照	S 64	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₁
	S 65	-	-	-	- ₈	- ₈	- ₈	- ₈
	S 66	-	-	-	- ₈	- ₈	- ₈	- ₈
	S 67	+	-	+	+ ₁	+ ₄	+ ₁	+ ₂
	S 68	-	-	-	- ₈	- ₈	- ₈	- ₈
	S 69	+	+	+	+ ₁	+ ₁	+ ₁	+ ₁
	S 70	+	±	+	+ ₁	+ ₁	+ ₂	+ ₂
	S 1	-	-	-	- ₈	- ₈	- ₈	- ₈
照	S 3	+	-	+	+ ₁	+ ₂	+ ₁	+ ₂
	S 33	-	-	+	- ₈	- ₈	- ₈	- ₈

第4表 食餌試験表

菌株番號	115D	153D	213D	272D	291L	406L	434D	439L	455L	462L	對 S 64	健康 シヤ
動物數 日次	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	10	5
1												
2					1							
3	1	1		1		1	2	1				
4			2			3	2	1	2			
5	3	2	2	1	1	2	1	2	6	3		
6	3	3	2		7		2		4	6		
7	2	4	5	5	4	9	3	2	4	5	2	
8	6	3	3	3		3	1	8	3	2	1	
9	2	2	1	6	2			1		3	1	
10		2	2	1	2				1			
11	2	1		2	1	1	1	1			1	
12	1	1	1	1			1	1		1	2	
13			1				2	2			1	
14		1						1				
總死數	20	20	19	20	18	19	15	20	20	20	8	0

5. 結論及考按

1. 余等ハ當研究室ニ於テしろねずみヨリ分離シタルサルモネラ屬菌169株ヲ檢シ、總テS. enteritidis 1.ニ一致スルコトヲ認メタ。

2. 當研究室カラ出シタルしろねずみニ就テ、南方軍防疫給水部デハ他ニ鼠ちふす菌ヲ、中支那防疫給水部デハ Rostock 型ヲ分離シテ居ルガ、余等ノ検査デハ之等ヲ發見シナカツタ。

3. 余等ノ株ガ總テ ent. 1. デアル事ハ之ガ動物舍内感染ニヨルモノデアル事ヲ疑ハセル。勿論余等ハ之ヲ否定スルモノデハナイ。

他方當時ハ舍内流行ノ徴トシテノ大量死亡ハ認メズ、該期間内ニ取扱ツタしろねずみノ全數ニ對シ斃死率ハ約5%、(内検査シタルモノハ約30%)、其ノ内ノ約29%(106/366)ニ本菌ヲ證明シタルモノデ、之ノ事ハ特ニ本型ガ健康しろねずみニ屢々見ラレルト云フ事實ト、之ガ一般狀況ノ理想的デハナイ大量飼育ノ様ナ場合ニ發病致死因ニナル事ノアルト云フ事實ヲ再認識セシメルモノデアル事ヲ強調シタイ。

4. しねずみノ斯様ナ減耗防止ノ爲豫防接種ヲ實施シヤウトスル考ハ立場ニヨツテハ種々議論モアルト考ヘルガ、兎ニ角實施スルトスレバ、「ゲルトネル屬中デ特ニ ent. 1. 型ヲ重視スベキ事ヲ本成績カラ推論シタイ。

5. しねずみノ飼育地ニ於テモ健康ナルモノニ「サルモネラ屬菌ノ存スル事ヲ顧慮シ、昭和18年7月下旬、代表的飼育地デ廣汎ナ地域ニ涉リ抽出的ニ飼育箱内ノ新鮮糞便檢索ヲ計約200月

ニ於テ實施シタル結果ガ案外ニモ全部陰性ニ終リ、本成績ト何等ノ聯關モ求メ得ナカツタ事ヲ茲ニ記シタイ。

文 献

- 1) 飯豊勝三郎：細菌誌、第382號、第695頁、昭和2年
- 2) 添川正夫、大坪太郎：同上、第490號、第683頁、昭和11年
- 3) 井手正典：日本醫事新報、第744號、第4285頁、昭和11年
- 4) 八田貞義：實驗醫誌、第21卷、第335頁、第878頁、第1205頁、昭和12年
- 5) 中黒秀外之：軍醫誌、第283號、第1695頁、昭和11年
- 6) 溝上三郎：同上、第357號、第161頁、昭和18年
- 7) 内藤良一：Salmonella 屬因子血清、昭和15年
- 8) 小島、八田：動物中毒菌、昭和15年